浜松市民文芸

65

浜　松　市

浜松市民文芸

第65集

浜松市

令和２年度　浜松文芸館の催事と講座

（内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください）

●講　座

講座名	講師	開催時等	受講料円
文学講座（春） ―ようこそ『春雨物語』の世界へ―	松平和久	4/8,15,22,29,5/6,13　毎週水曜日（全６回） 9:30～11:30	3,000 （別途テキスト代900+税）
古文書読解講座Ⅰ ―古文書はお宝の山!!―	小木　香	4/9,16,23,30 5/7　毎週木曜日（全５回） 9:30～11:30	2,500
川柳入門講座 ―風刺やユーモアのセンスを磨こう―	今田久帆	4/26, 5/24, 6/28, 7/26,8/23　第4日曜日（全5回） 9:30～11:30	2,500
短歌入門講座 ―想いをみそひともじで詠う―	村松建彦	5/30 6/6,13,20,27　毎週土曜日（全５回） 9:30～11:30	2,500
俳句入門講座Ⅰ ―十七音の自分詩に挑戦―	笹瀬節子	5/30 6/6,13,20,27　毎週土曜日（全５回） 13:30～15:30	2,500
平家物語講座 ―祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり―	大石嘉美	5/31 6/7,14,21,28 7/5,12　毎週日曜日（全７回） 13:30～15:30	3,500 （別途テキスト代2,000+税）
朗読教室 ―声であらわす文学の世界―	堤腰和余	6/9 7/14 8/11 9/8 10/13 11/10　第2火曜日（全6回） ①13:00～14:30②15：00～16：30	3,000
夏休み読書感想文講座Ⅰ ―今年は読書感想文で鼻高に―	林　容子	7/25㈯　9:00～12:00　４～６年生対象 付添不要	500
夏休み絵本づくり講座 ―ジャバラに折った自分だけの絵本に挑戦―	井口恭子	7/25㈯　13:30～16:00　４～６年生対象 付添不要	500
夏休み読書感想文講座Ⅱ ―今年は読書感想文で鼻高に―	林　容子	8/1㈯　9:00～12:00　４～６年生対象 付添不要	500
篆刻入門講座 ―世界で一つだけの自分印―	下石哲幸	9/5,1219,26 10/3　毎週土曜日（全５回） 9:30～11:30	2,500 （別途材料費2,000）
文学と歴史講座 ―近代詩を学ぶ―	折金紀男	9/6,13,20,27 10/4　毎週日曜日（全５回） 9:30～11:30	2,500
文学講座（秋） ―『万葉集』に親しむ―	松平和久	9/7,14,21 10/5,12,19　毎週月曜日（全６回） 9:30～11:30	3,000
俳句入門講座Ⅱ ―十七音の自分詩に挑戦―	村松二本	9/19,26 10/3,10,17　毎週土曜日（全５回） 13:30～15:30	2,500
古文書読解講座Ⅱ ―古文書はお宝の山!!―	小木　香	10/10,17,24,31 11/7　毎週土曜日（全５回） 9:30～11:30	2,500
古典和歌講座 ―古今和歌集に親しむ―	松平和久	2/10,17,24 3/3,10,17　毎週水曜日（全６回） 9:30～11:30	3,000 （別途テキスト代900+税）

展示　9：00～17：00　５階　展示室

●企画展　収蔵展

特別収蔵展Ⅰ「『今再び・藤枝静男の文学と人』～浜松にすごい作家がいた～」3月1日㈫～6月21日㈰

特別収蔵展Ⅱ「小百合葉子『劇団たんぽぽ』とともに」　7月1日㈫～10月20日㈫

※　以降の企画展、収蔵展は計画中

●講演会

「第二次世界大戦はなぜ起こったのか～ベルサイユ条約のもたらしたもの～」

金原増吉　5月10日㈰13：30～15：30　500円

「森鷗外と浜松」　和久田雅之　8月9日㈰13：30～15：30　500円

「芭蕉に学ぶ俳句の作り方－〝軽み〟ならぬ〝重み〟の時代へ」髙柳克弘 11月8日㈯13：30～15：30　500円

●朗読会

「菊池寛『藤十郎の恋』」堤腰和余　10月18日㈰13：30～15：00　500円

浜　松　市　民　文　芸

第　65　集

「浜松市民文芸第９集　作品募集ポスター」
俳人・相生垣瓜人作

浜　　松　　市

選者

小説	竹腰幸夫
	柳本宗春
児童文学	那須田稔
評論	中西美沙子
随筆	たかはたけいこ
詩	橋本由紀子
短歌	村木道彦
定型俳句	髙柳克弘
自由律俳句	鶴田育久
川柳	今田久帆

☆ 表紙絵

神谷　満

令和元年度　浜松市芸術祭「第67回　市展」
芸術祭浜松市長大賞受賞作品　工芸部門
題『記憶の中へ（浜松市立看護専門学校・旧校舎実習室）』

一昨年、旧校舎の取り壊しを聞き、取材をしました。実習室で学んだ生徒さんと先生方の思いを受け止め、是非、模型に残したい、という思いにかられ昨年1月より制作にかかりました。主として木製のパーツをベースに細かい作業が多く、根気がいました。

この作品を通し、旧校舎や学生さんの思いが、いつまでも皆さんの記憶に残ってくれるといいと思います。

「浜松市民文芸」第65集　市民文芸賞受賞者

部門	受賞者
小説	馬場純平
	遠藤ゆき
児童文学	住吉玲子
	河島憲代
評論	金指芙美代
	伊藤空
	木俣統裕
随筆	恩田恭子
	中津川久子
詩	竹原孝子
	山下進
	尾内以太
	深田千代子
短歌	倉見藤子
	石原新一郎
	宮澤秀子
	恩田恭子

部門	受賞者
定型俳句	堀川千代子
	鈴木やよい
	野田智恵子
	二橋記久
	鈴木和
自由律俳句	松本憲資郎
	宮本卓郎
	中津川久子
川柳	鈴木千代見
	竹山惠一郎
	竹平和枝
	内山敏子

目次

小説

市民文芸賞

約束……馬場　純平……10
足の裏の熾火……遠藤　ゆき……27

入選

最後の授業……長崎　良夫……38
きくみ（龍戸伝説）……内山　文久……55
温暖化対策……六樫　若人……70
神の末裔……田中　章博……75

選評……竹腰　幸夫……88
選評……柳本　宗春……89

児童文学

市民文芸賞

森のゆうびんポスト……住吉　玲子……90
ホタルが舞う古墳の里……河島　憲代……100
はるとくんとふしぎな仙人……金指芙美代……110

入選

みいちゃんとクロ……佃　美帆……117
ようせいだった、ぼく……かまくらゆきこ……122
すずの恩返し……松田　健……124
サラダのうた……如月はるの……131
たのしいお客さま……宮島ひでこ……132
七夕の願い事……生﨑　美雪……137
ヤンク……馬塚　典子……142
利子（りこ）……加藤　直美……149

選評……那須田　稔……157

評論

市民文芸賞

俳諧に於ける軽みと死生観……伊藤　空……158
「東方の門」と藤村の文体……木俣　統裕……164

入選

北山・東山文化とその背景……滝澤　幸一……172

選評……中西美沙子……182

随筆

市民文芸賞

おなかがすいて　すいて……恩田　恭子……185
あの日……中津川久子……188

入選

丸首とシャツ……福代　善彦……190
ラプソディ……サルルンカムイ……191
ふるさと……石山　武……191
巡り巡って……かわいあすか……194
分からないことが面しろいことかも……名倉　利男……196

ぽん坊……川島　理志……198
選　評……たかはたけいこ……201

詩

市民文芸賞

まどろむ……竹原　孝子……204
佐鳴湖……山下　進……205
そうやってみんな……尾内　以太……206
雪の朝……深田千代子……208

入　選

髪型……根本　文子……209
透明人間になった日……竹内としみ……210
お盆……大庭　拓郎……211
傍らの君……石黒　實……212
再び……内山　文久……213
選　評……橋本由紀子……214

短　歌

市民文芸賞

倉見　藤子　　石原新一郎　　宮澤　秀子
恩田　恭子

入　選

伊藤　友治　　石黒　實　　伊藤　順子
峯村友香里　　柴田千賀子　　内藤久仁茂
大檜　一郎　　宮本　惠司　　木下　文子
和久田俊文　　松浦ふみ子　　あゆのつか碧
内田　一郎　　鈴木美代子　　恩田　利子
内山　文久　　清水　紫津　　髙山　紀惠
鈴木　利定　　太田　静子　　井浪マリヱ
髙橋　幸　　桜花　ふみ　　坂口　ちせ
内山　文子　　平井　要子　　清水　孜郎
江間　得二　　手塚　みよ　　石井　泰子
加茂　智子　　川島百合子　　鈴木　賢三
山田　文好　　山下　晏義　　阪口佳寿子
守屋三千夫　　柳　光子　　後藤　とも
名倉みつ子　　近藤　茂樹　　鈴木　和子
岩城　悦子　　鴇多　健　　永井　眞澄
小笠原靖子　　安藤　圭子　　渥美　進
平野　旭　　柴谷　俊行　　大庭　拓郎
今駒　隆次　　内山　智康　　内山　正則
中津川久子　　井口　絹子　　相曽多加根
髙田　圭　　袴田　成子　　鳥井　美代
加藤貴代美　　白柳ますみ　　杉山　勝治
影山　ふみ　　田中　貞夫　　大山　啓
鈴木　弘子　　村木　幸子　　岡本　蓉子
水野佐喜恵　　寺田ひさ子　　渥美　佳子
藤原　孝志　　中村　照美　　米澤寿鶴子
畔柳　晴康　　福田美津子　　中村　淳子

太田　初恵　伊藤　美代　河田　琴栄
金取ミチ子　鈴木　壽子　野末　妙子
ストロベリー　根本　文子　東　直子
川合　妙子　木本　紀子　菅沼　祐子
鈴木　健示　すずきとしやす　尾内　以太
山本　勝彦　戸田田鶴子　伊藤　雅章
浜　美乃里　飯田　裕子　神谷　淳子
由倉　典之　河合　和子　藤生　好則
ミネルヴァの梟　寒風澤　毅　栗原　惠子
佐野実佐代　飛　天　女

選　評……村木　道彦……229

定型俳句

市民文芸賞

堀川千代子　鈴木やよい　野田智恵子
二橋　記久　鈴木　和　松本憲資郎

入　選

糟谷　修子　加藤　雅子　神谷知恵子
川上　勝　越川　都　佐久間優子
鈴木みちゑ　砂間　達也　竹田たみ子
中津川久子　松本　栖枝　宮澤　秀子
縣　裕子　井出久美子　伊藤サト江
伊藤　順子　井浪マリヱ　内山　文子
梅原　栄子　大田　勝子　大村千鶴子

小楠惠津子　小澤　幸一　河合三代子
川上　啓子　川島　泰子　北嶋　良平
す　ず　き　立花百合子　佐藤　健
鈴木　健示　竹山すず子　舘石　照子
田中美保子　ストロベリー　徳澄　英樹
根本　文子　西　周　東　直子
平野　道子　藤田　節子　藤本ち江子
山上アサ子　山口　英男　浅井　裕子
池谷　靜子　石井　泰子　伊藤アツ子
伊藤　倭夫　伊藤　久子　伊藤　好子
稲津とし子　岩城　悦子　岩崎　芳子
右崎　容子　内山　文久　浜　美乃里
太田沙知子　大平　悦子　大道くにを
大屋　智代　小川　惠子　小楠　勝代
小楠　達司　刑部　末松　尾内　以太
小野田みさ子　勝田　洋子　金子千江子
金子　典子　加茂　智子　河合千代子
川合　泰子　川口八重子　川島百合子
小　春　北村　友秀　切畠　正子
一　灯　斉藤三重子　佐野　朋旦
澤木　幸子　柴田ミドリ　清水　孜郎
清水　康成　下位　満雄　新村みち子
鈴木うた子　鈴木　和子　鈴木かや子
鈴木　利久　鈴木　利定　鈴木　智子

鈴木　嘉子
竹平　和枝
中村つぎ子
野田多満子
日比つや子
藤本　幸子
宮本　葉子
山本晏規子
あらききぬ
池谷　和廣
伊藤　空
今駒　隆次
岡本　蓉子
影山　ふみ
金原はるゑ
紺田みどり
清水よ志江
鈴木　章子
鈴木由紀子
高山　紀惠
竹田　道広
田中　貞夫
寺田ひさ子
戸塚　郁代
関野由紀子
鶴見　佳子
二橋三千代
服部　節子
平野　旭
牧　元久
森下　綾香
和田　有彦
井口　絹子
石川　照子
伊藤　美代
太田　静子
加藤貴代美
金取ミチ子
畔柳　晴康
利徳　春花
不　知　火
晴　詩
髙橋　常子
竹内　定八
竹平　安則
田畑　俊昭
鴇多　健
鳥井　美代
竹内オリエ
手塚　みよ
野島　謙司
林田　昭子
深谷とく子
峯村友香里
山田　知明
渥美　進
池田　智子
伊藤志津子
内田　一郎
栞　子
影山　久恵
川原　弘美
かりりん
佐藤たえ子
白柳ますみ
鈴木　秀子
髙橋　敏彦
竹下　勝子
田中　章博
辻村　榮市
戸田田鶴子
永井　眞澄
永田　惠子
野田　俊枝
濱本紀久代
藤原　孝志
松江佐千子
松本　重延
宮本　惠司
守屋三千夫
横井弥一郎
渡辺きぬ代
中村　寿
野中芙美子
藤井　星子
古谷　とく
松下　節子
松本ひで子
村松　和憲
山下　京子
由倉　典之
中森　結香
長谷川絹代
藤生　君江
H
松島日出子
三宅　弘子
あ　ひ　る
山下　静子
和久田俊文
選　評 …… 髙柳　克弘 …… 256

自由律俳句

市民文芸賞

宮本　卓郎　　中津川久子

入　選

源　次　郎　　伊藤千代子
尾内　以太　　中谷　則子
伊藤　美代　　岩城　悦子
大庭　拓郎　　鈴木　章子
中津川久子　　根本　文子
村松ヒサ子　　守屋三千夫
内山　文久　　太田　静子
嘉山　春夫　　ヒメ巴勢里
伊藤　有美
井手賀代子
浜　美乃里
竹内オリエ
宮本　卓郎
渡辺　憲三
小笠原靖子
畔柳　晴康

高鳥　謙三　　鴇多　　健　　戸田田鶴子
中村　淳子　　リコリス

選評……鶴田　育久……262

川柳

市民文芸賞

鈴木千代見　　竹山惠一郎　　竹平　和枝
内山　敏子

入選

伊藤　信吾　　神村　恭子　　菊川　文江
浅井　常義　　飯田　幸子　　伊熊　靖子
内山　敏子　　鈴木かおる　　鈴木千代見
高柳　龍夫　　竹山惠一郎　　寺田喜代子
中村　禎次　　中村　雅俊　　牧田　龍司
宮崎　和子　　宮澤　正人　　山口　英男
山田とく子　　足立　和代　　池田　稔
内山　文子　　岡本　蓉子　　畔柳　晴康
小島　松太　　佐野つとめ　　鈴木　碧
鈴木　勝則　　鈴木　均　　竹平　和枝
田中　恵子　　寺田　文子　　徳田美知子
浜松のよっちゃん　　渥美　進　　荒沢　博
市岡ひろみ　　伊藤　美代　　大庭　拓郎
木村　民江　　一　灯　　斉藤三重子
白柳ますみ　　鈴木　和子　　鈴木　覚
鈴木　民江　　高山　紀恵　　鶴見芙佐子
寺田ひさ子　　鴇多　健　　戸塚　忠道
中津川久子　　根本　文子　　名倉　智代
平野　旭　　あゆのつか碧　　馬塚　五朗
守屋三千夫　　池谷八重子　　どぜう
岩城　悦子　　内山　文久　　遠藤　博子
太田　静子　　太田　初恵　　加藤貴代美
加藤　典男　　浜松加藤のじい　　金取ミチ子
嘉山　和美　　後藤　とも　　浜名湖人
不知火　　鈴木　敏子　　高橋　紘一
高山　功　　竹内オリエ　　竹山　容子
手塚　美誉　　藤生　君江　　藤原　孝志
宮澤　秀子　　由倉　典之　　米澤寿鶴子
和久田俊文

選評……今田　久帆……276

「浜松市民文芸」第66集作品募集要項……278

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。
掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作品は選考順または五十音順としました。

第65集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一三	短歌	五五二
児童文学	一六	定型俳句	一、〇七一
評論	五	自由律俳句	一七九
随筆	二六	川柳	四四八
詩	二五	計	二、三三五

小説

［市民文芸賞］

約束

馬場純平

古墳のようにこんもりと盛り上がった山が田んぼに丸く縁取られている。その向こうには平野が広がっているのか、そのまま険しい山につながっているのかはよく分からない。田植えが終わったばかりで、人間の手で植えつけられたのだということを物語る細くて低くてか弱い苗が等間隔で並んでいる。苗は、本当に植えられたばかりで、五センチほどの深さの水に半分ほど身を浸し、その半数は、空中に突き出す力もなく水面にぺたりと貼り付いている。薄茶色く濁った水面は水を引いたばかりであることを語るかのように、去年の藁のかけらが無数に浮かび、水の流れにあわせてゆっくりと渦を巻いている。田んぼの中には、まだ、めだかも、ゲンゴロウも、ミズスマシも、おたまじゃくしも、ドジョウもあめんぼうも、タガメも、水かまきりも何もいない。まるで生命創造以前の地球を思い出させる、雑草さえも生えていない泥だけのあぜ道にしゃがみ込んで、目を水面に貼り付けている男は、そういった生き物の痕跡がないことにがっかりする。

田んぼと山の境界の、ぬるぬるというか、ずぶずぶ、あるいはつるつると足が取られてしまうあぜ道を、バランスを取りながら、細心の注意を払って立ち上がり、山を右手にしてまた歩き始める。山の斜面には、雑木が、落ち葉の間から、あるものは太く、あるものは血管のごとく細く絡まり合いかぶさりあいながらひしめいている。その先端からは薄緑色の若芽が吹き出し始め、命の希望を再びこの地にもたらそうとしている。

今、男は泥の中にふんだんに含まれる有機物と藁が発するガスに侵略された空気にむせ返っている。終わった命が分解していく、何日も風呂に入らなかった自分の体臭を思わせる匂いが周りの空気に充満している。すると、茶色がかったそ

の懐かしい腐れかけた匂いは、若芽の吹いた雑木の枝をほのかに揺らすかすかな薄緑色の空気に入れ替わり、新しい命の力が男の肺をわずかに侵略する。ちょうど今、自分の周りでは、去年死んでしまった生き物たちと、これから新しいサイクルを始める、生まれたばかりの、あるいはこれから生まれて来ようとしている命たちが激しくせめぎあっている。

男はラップトップの入ったメッシュのケースを必要以上にいからせた肩から下げ、あぜ道を歩くには最もふさわしくない革靴を履いて、暮れ始めたこんな人気のない場所にいる。あと三十分もすれば夕闇が襲ってきて、右にも左にも逃げることはできなくなり、せいぜい三十センチほどの幅の、それも、安全に足を乗せられるのは十五センチしかない、この心もとない足場に取り残されてしまうことになる。コンピューターの中には、やっと執筆を終えた論文の原稿が入っている。バックアップを取っていないから、田んぼに落ちて濡らしでもしたら、すべてがだめになってしまう。

男はだんだんと見分けにくくなっていく山際のあたりを、思いっきり眉間にしわを寄せて見つめている。もともと軽度の近視であり、あぜ道で片足を滑らせた時にメガネは吹っ飛んで、田んぼの柔らかい泥の中に埋もれてしまった。

「おい、いつかのお前は、まだここにいるのか」

男はそいつに声をかけようとするが、数日ぶりに声を出したせいで、自分の口から出た音が何らかの意味を持っているのかさえも自信がない。

一人暮らしの男は言葉をかける相手がいない。だから朝起きて、歯を磨いて、トーストを焼いて、インスタントコーヒーに粉末クリームを入れて匙でかき回し、カップの端に匙を沿わせて残った一滴のコーヒーを戻す時も無言だし、仕事に出かけるためにネクタイをするときも口を一文字に結んだままだ。テレビも見ない。あの四角い画面の向こうで起こっていることは全部が作り事の偽物の世界にしか思えない。

男は大学の下っ端の研究員であり、出勤するとそのまま研究室に向かい、一日中方程式を前にああでもないこうでもないとうなるだけだからネクタイなんて必要ない。共同研究も拒んで、たった一人で様々な思考実験をやっているから誰も相手にしてはくれない。それをいいことに、男は自分が興味の湧くことだけに思考を集中し続けてきた。

ネクタイはいわば初期設定だ。奇跡的に大学への採用が決まり、歓喜した母親が無理矢理男を背広の量販店に連れて行き、大枚をはたいて何着かの背広と十枚のシャツと下着やら靴下やらを買ってくれた。それが初期設定だ。それはもう十年も前の話だ。

男は目の前の現実にしか興味が湧かない。研究室の飲み会にも一度も出たことはない。誰にも顧みられることのない、猫背の肩から首にかけて脂肪の盛り上がった黒ぶちの眼鏡の男の現実とは、しかし、目の前に広がってはいるが人間の目では決して見ることのできない想像の世界なのだ。

男の心を惹きつける、男にとっての究極の現実であり想像

とは、空間であり時間であり重力なのだ。

「ついにお前にもその時が来たのか」

その、しわがれた、音と声の境目辺りの空気の振動に聞き覚えがあった。暮れ始めた山と田んぼの境目の前方からその声は聞こえていた。しかし、目を凝らして見すえてみても、ただ、細くてかったあぜ道が続いているだけで、声の主はどこにもいない。男は、コンピューターのケースを右手で抱え込み、やや前かがみになって、目を凝らしながら革靴を一歩前に進める。

すると右足は、妙に柔らかい台形のあぜ道の頂上から滑り落ち、摩擦のほとんどないかかとからのめりこんでいって、そのままあぜ道の斜面に沿ってパウダースノーを滑るスキーのように、何の抵抗もなく田んぼの中に滑り落ちた。そのはずみで、左足に力を込めた。すると左足も、当然のように、あぜ道の左の面に沿ってスライドし、ちょうどあぜ道にまたがる形で左手をついた。

右手でケースを握り締めていたおかげで、コンピューターは助かった。だが、ズボンからはじゅわじゅわと水が染みこみ、ふくらはぎから、膝の裏から、腿の辺りから陰部までも水は染み渡り、男は考えうる最も屈辱的な有様でへたり込んでいた。もうズボンは泥だらけだった。しかし、コンピューターは守らなければならかなった。そうでもしなければ、この世界から忽然と消えてしまった男の証拠が何も残らない。

この声はどこで聞いたのだろう、と、男は考える。いや、もうちょっと正確に言うと、この声の主は、覚えているあの声の主と同じものが発しているのだろうかと、まさかと言う驚きの疑念を持って考えているのだ。

「お前は、俺が記憶している、あのお前なのか?」と、ほとんど自問するようにつぶやいてみる。

「そうか、覚えていてくれたか」と、途切れそうな、しわがれた声が音節ごとに答える。

その声は、男が大股を開いて馬乗りになった右足のつま先が指している方向から聞こえていた。

目を細めると、山の端が田んぼに落ち込んで直径一メールほどの池を作っているのが最後に残った薄光の中に反射して見えた。そしてその水たまりの表面は、普通の水の何倍もの粘度で緩やかに波打っていた。

それは、男の右足のかかとから五メートルとは離れていないあたりで、ただ口だけをパクパクと動かしてあえいでいる八十センチほどの、ほとんど背景に溶け込んでしまって盛り上がった泥にしか見えない、一匹の真っ黒い鯉なのだった。

「お前は本当にあのときのお前なのか?」

「そうだ」

脂肪でまるまると膨れ上がった黒い塊が発しているのが物理的な空気の振動なのか、あるいは、このメタボな鯉がもつ特別な、心を震わす力によるものなのか、見極めようとする努力が無駄なことにすぐに気付く。

「いい時に来てくれた。ついに私の命も尽きようとしてい

る。長く生きたものだ。私はこうして、向こうの世界の門番として一生を過ごしてきた。前任者はもう何百年も前に命が尽きたが、その間際に私が向こうの世界から遣わされて後を継いだ。そして私は、この入り口を守り続けてきたが、その間にこの入り口から向こうの世界に行った人間は数知れない。ここを通りかかる男や女や子供や大人に私は声をかけ続け、貴様のように私の声が聞こえる人間の中で、向こうの世界を知りたいという勇気と、好奇心と、ちょっとした信仰心持っているか、この世界に存在する意味を見出すことの出来なくなった人間を送り出してきた」

「俺はお前のあの時の言葉を信じたのだ。お前の心臓が止まろうが、鰓が干上がろうがどうでもいい。とにかく、俺はこの世界を出てお前の言う向こうの世界とやらへ行きたいのだ。そうしなければならぬ、やむにやまれぬわけができてしまったのだ」

田んぼの向こう側の西の地平には、むくむくとシュークリームのように盛り上がった雲が何個か横並びに並んで、夕闇に向かう直前の最後の濁った赤い光を受けて、青さを失い、治りかけた痣のような濃い黄色の混じった紫色の空の中に浮かんでいる。

男の足はすでに泥だらけであるどころか、べったりとへたり込んだあぜ道からは命を持ったかのごとくに水が滲みあがり、ズボンを通して太腿の裏側や肛門の皮膚を侵し、生暖かく体の中に浸透していく。

この気持ちの悪さは一体何なのだろう。死んでいく丸太のような黒鯉の抜けかけていく魂が、そのまま俺の体の中に滲みこんで、俺をはらわたの中から支配しようとしているのではないか。男は目を凝らして鯉の姿を探すが、そこはすでに闇ばかりで何も見えない。

「俺はどうしても向こうに行く必要があるのだ」

それが男の理性がもたらした決断なのか、肛門を通して身体中に浸透していく鯉の霊から始まって、生命を持ったあらゆるものの意思に押されてのことなのか、それはわからない。しかし、狂気には違いなかった。

重力や次元や空間は幻想であって、それはただ投影されたイメージに過ぎないという最も権威のある学者たちが論じている純粋な理論の世界に、全てを捨てて身を投じて、自分の作り出した新たな方程式こそが宇宙をよりよく説明しているということを確かめたいのだ。そして、それを確かめるためには向こうの世界に行くより他に方法はない。そのために男は再びここに来たのだ。

「俺はどうしても向こうの世界を知りたいのだ」

男はケースを抱えている右手にぐっと力を入れる。すると、水を通さないはずの化学繊維のメッシュのケースの中から、尻の穴から体内に染み込んだのと同じ温かい水が染み出しては滴っている。男はその事態に驚愕し、右手にさらに力を入れる。すると、雑巾を絞ったごとく水はほとばしって、慌ててジッパーを開けコンピューターを取り出して起動す

る。

ほどなくスクリーンには青い生命が宿り、男の全ての結晶であるたった二ページに要約された数式にまでは侵略が及んでいないのを確かめて、身体中の力が抜けるのを感じる。

もちろん数式は何年もかけ、何千回となく思考実験を繰り返して作り上げたものだから、紙の上であろうと黒板であろうと、いつでもどこでも再現できる。だからコンピューターが壊れたとしても問題はない。しかし、男は、自分が作り上げた数式が正しいことを確かめるためにこの世界からいなくなろうとしているのだ。自分の唯一の業績と言えるたった二ページのこの数式は、だから、何らかの形でこの世界に残しておかなくてはならない。

「あのとき見た入口はどこにあるのだ。あの、田んぼの底に開いた透明な水のこんこんと湧き出している、底無しとも思える入口はまだあのままなのか?」

鯉は、ひとつ、深いため息をついた。そして、足元の闇の中から、まるで闇をいとおしむ声で続けた。

「ああ、ここにその入り口がある。地下水が湧き出しているように見える、ただの小さな穴だ。思い切って頭を突っ込めば、吸い込まれるようにあっという間に向こう側に出られる。そこは貴様が見たこともない世界だ」

鯉はそこでしばらく沈黙する。そしてさらに闇に溶け込む声で穏やかに、しかし明らかに体中の力を搾り出すごとく、不規則な息づかいで、単語をひとつずつ足していく。

「それだけでいい。それだけでことは足りる」

なぜか、男はほんの少しだけ、この門番の途切れ途切れの言葉に心を動かされる。物事が単純であればあるだけ、その物事は信じがたく、抗したくもなる。が、それらしい複雑な論理や常識こそ、その襞の中には嘘や誤謬が隠れているのであり、この鯉の言葉の単純さは愚かしいほどその襞の存在を排除している。それは男が作り出したもっとも単純な数式の正しさを証明しているようだった。

「おそらく、お前が向こうの世界に行く最後の人間となる。お前が向こうに行けばすべてが完結する」

「それは知っている。俺の数式がそれを証明している。俺はそれを自分の体で知りたいのだ。この世界が投影に過ぎない実態のないものであることを肉体を以って知ることができれば、俺は人類最高の幸福を得ることになる。俺が突き詰めて考え抜き、宇宙には実体はなくただの投影に過ぎないと世界の学者たちがわめいている中で、それを体験できる最初の人間になれるならば、生きてきた意味がある」

男の足元で一度、ぴしゃりと泥をたたく濡れた音がした。そして、山を覆った細い枝を吹き抜ける乾いた音だけが残された。男は立ち上がろうとしたが、尻があぜ道の泥に貼りついたように動かない。股を大きく開いたままでは足に力を込めることもできない。どうしたものかと、暗闇の中で思案していると、肛門の辺りから柔らかな痒みがじわりと周りに広がった。そこは男の体の入り口で、鯉の霊やそこいらに充満

している去年生きていた小魚やエビや虫たちの霊がその入り口から、男の体の中になだれ込んでいるかのようだった。

痒みのあたりは、あぜ道から吸い上げた水だけでなく、わけのわからぬ温かい液体でびしょびしょで、そのインテンシティーは急速に強まっていった。

「この痒みだけはどうにかしてくれ」と、男は鯉に向かって呼びかけたが、鯉は死んでしまっているらしく、答えはなかった。

強烈な痒みと重なって、痛みがじくじくと尻の穴の周りを覆っていた。男はコンピューターのケースを目の前のあぜ道に置いた。ケースからはだくだくと暗い水がこぼれ落ちていた。スクリーンは勝手に自動消灯して、男は完全に闇の中に取り残された。

とにかく立ち上がらなければならなかった。まず立ち上がって、そして次のことを考えようと、両手を突いて体を持ち上げると、その手は柔らかなあぜの泥にのめりこんで、今度は手が抜けなくなってしまった。右手に力を入れ左手を抜こうとすると、右手がさらにめり込んだ。左手に力を入れて右手を抜こうとすると、尻全体が泥の中にずるりと沈み込んだ。

そうしながらも、痒みと痛みはとめどなく力を増し、男は気が狂ったように身もだえした。

「何とかしてくれ。何とかしてくれ。お前の言う通りにするから」と叫んだ男の声は、空気にたっぷり含まれた水の分子の振動に吸収され、山の斜面に反射することはなかった。

しかし男には分かっているのだ。それは全てがお膳立てなのだ。数式が語る次の次元を、地球どころか、宇宙全体が体験するための約束の一部なのだ。

あの時男は多分五歳だった。そこは男のふるさとの田舎町で、木造の長屋の一部屋に男の家族は住んでいた。家の壁も、スレートの屋根も、家を囲む黒いタールの塗られた塀も、夕立の前の雲底のように色を失って黙って立っていた。集落全体がそうだった。集落は丘の斜面に張り付いていて、ある日男は斜面を下る道を全速力で駆け下りた。その道は斜面のふもとで途絶え、一メートルほどの段差の下には田んぼや畑が広がっていた。段差は全く突然に現れたので、五歳の男は止まることも曲がることも出来ず、なんとか体勢を保ったまま両手を横に大きく広げて飛び降りた。

着地した地面は、地面とはいえない柔らかさで、男の体重を支えるのを拒否した。初めは水をたっぷりと含んだ泥の上に着地したのかと思った。すると両足がその中にめり込み始めた。五歳の男は命の危機を感じた。右足を抜こうとすると左足がさらにめり込んでいったが、ズック靴を泥の中に残したまま右足は抜けた。次に右足を支えに左足を抜こうとすると、左の靴ものめりこんだまま足だけは何とか自由になった。

裸足の男は、めり込んだままの小さな靴を見つめながら、呆然と立っていた。男の靴は、田んぼの端に開いた直径一メートルほどの底無しの穴の端っこから三十センチほどのとこ

ろに間隔をおいて可愛く並んでいた。それが穴の真ん中だったらどうなっていたかと思うと、子供心に自分の運の強さに感謝した。

しかし、自分が命を失いかけたという認識は、五歳の男の思考や判断力や感情を鈍らせた。男の足には底無しの穴の周りの泥が得体の知れない生き物のようにべとべとと貼り付いたままで、そこからは目や鼻の粘膜をひりひりと焼き焦がす臭いが大量に拡散していた。

男は裸足のまま田んぼのあぜ道を歩き始めた。出続ける臭いはその穴を通して向こう側から湧き出してくる、すべてのものを溶かしてしまうような強い揮発性の酸の匂いであり、ゴムを焼いた匂いのようでもあった。

事件のショックと、小さな体を包んでいるまるで人格をもって男をもてあそんでいるかのような凶悪な臭いに、気を失いかけていた。

そして、ついに、男はへたばった。気が付くとあぜ道に馬乗りになってそのまま仰向けに倒れていた。目を開けると、真上を向いたままだったために、青い空ともりもりと盛り上がる白い雲が、世界の全てであるように視野を奪っていた。そして、その視野の真ん中には空の頂点に達した太陽がひりひりと輝いていた。五歳の男の華奢な体は、あぜ道から染みあがった水分と、足の先から絶え間なく湧き上がり続ける強烈な発酵臭と、体を燻り水分を飛ばそうと燃える太陽の挟間で、はあはあとせわしなく脈動していた。

その時、男の視野に割り込み、太陽の熱を遮ったものがあった。

「こんなところで何をしているの。大丈夫なの」と、その影は言った。

男は目を狭めてその影の持ち主に焦点を合わせようとした。

「ほら、手を出して」と手を差し出す声の言うとおりに右手を差し出すと、男の体は軽々と引っ張りあげられ、自分よりも何歳も年上の、長髪の先端が風に弄ばれている女の横に立っていた。

「ほら、そこで足を洗って」と女が指差すと、そこは男の靴がまだ綺麗に並んだ田んぼの一角で、その部分だけは稲が植えつけられていなかった。季節は多分初夏で、田んぼを覆うこれから花を咲かせようとする稲は、健康にまっすぐ天を指していたが、その一辺にすると五メートルほどの片隅だけがぽっかりと、田んぼの底のうす茶色い泥を覗かせていた。

「あんた、よく生きてたね。そこは危ないから。私の手につかまって、足だけ水の中に入れて洗いなさい」

男は女の言葉のままに、しっかりと手を握り締め、片足ずつ水の中に入れて汚れを落とそうとした。しかし、汚れはたやすくは剥がれなかった。

「足を泥の中に突っ込んで洗いなさい」

言葉のままに体重の半分を女の手にゆだね、半分を残った片足に乗せて踏ん張りながら、何とか足にへばりついて乾い

た泥をはがすことに成功した。
それから、二人は手をつないだまま、田んぼの片隅の沼を見つめた。そこはただの沼ではなく、地下水の湧き出し口になっているらしかった。泥の中央部には漏斗状の穴が開いていて、男の背の高さでは爪先立ってもその底は見えなかった。少なくとも五歳の男の子の頭の中では、その穴は底なしなのだった。そのすぐ横に男の真っ白いズックが並んでいた。
「何か聞こえない？」と、男よりも二十センチは背の高い、鋭い視線の女がその穴を見つめて言った。
男は、その女の真っ直ぐに通った鼻筋と、まぶたの完璧な曲線に目を奪われていた。いま自分はこの美しい年上の女と、しっかりと手を握り合い心を通い合わせているという事実に、まだ五歳でしかない男は酔いしれていた。
「ねえ。聞こえるでしょう。あそこ」
いまや女は、田んぼの中の底なしの穴を指差しながら男の同意を求めていた。そういえば、透明な水が湧きだし、その勢いで、穴の真上の水面は絶えず水がゆれていて、その不規則でありつつも規則的な動きは何を宿していても不思議ではなかった。そのうごめく水面を指した女の匂いを発散させる指先は、関節でさえもそれと思わせないほど柔らかく真っ直ぐで、その透明なわずかに血の気を映したオレンジ色を浮かばせた白い色に、目と心を奪われた。
女の指先を見つめながら、つないだ手におそるおそる力を入れた。女は、それに応えるかのように、男よりも大きい手のひらで男の手を包み込んだ。
「何が聞こえるの？」
「声みたいなもの。ほら」
そういえば、湧き出している地下水は、どこかと摩擦でもしているのか、かすかな、かすれたような音を立てていた。そして、湧き出し口には、いつの間にか黒々とした鯉がじっとこちらを見つめながら堂々と大きな体を浮かべていた。
「頼みがあるって聞こえなかった？」
「本当だ。あの鯉、僕らに頼みがあるって言った」
男は自分が声にしたその言葉を信じた。あの透明な水の中ほどに漂いながら、この女と自分を見つめている鯉は、この女と自分に頼みごとがあるのだ。
それも、その声の、もちろん女を通して男が信じるに至った声の主は、たった五歳の男に真剣に語りかけているのだ。
「どうして欲しいの？」と、か細い声で男は尋ねた。
「私は先が長くない。だから、お前に使命を授けるって言ってる」
男は、自分の耳から伝わってきた水のざわめきの中からその声を聞き分けようとしたが、聞こえてきたのは女の、静かに落ち着いた、抑揚を押さえた旋律だった。
「本当？　本当にそう言っているの？」
「ほら、耳を澄ませて、よく聞いてご覧なさい。口をぱくぱくさせながら、必死に語りかけているでしょう。ね、聞こえるでしょう。そして、あの目を見てごらん。あの目は私じゃ

なくてあなたを見つめているのよ」

男は、手を握りしめたまま女の体にすり寄った。女は手のひらを開き、男の手を振りほどいたが、すぐに男の肩に手をまわして、力を込めて引き寄せた。男の体は女の体に、寸分の隙間もなく押し付けられ、五歳の男の頭はしびれた。

その時、女と男を同じ空気が包んだ。すると、泥のにおいやら、藁のにおいやら、雑木の若葉のにおいやらはすべて消え去って、女の体から発すると確信できる、酸っぱくて甘い、母親に抱かれたときには一度も体内にうごめいたことのない、今日の太陽が外側から皮膚を焼くとすれば、内側から焼き焦がすような、五感としての嗅覚以上の刺激が男を襲い、まだ五歳だった男はこの衝撃の攻撃に身を委ねた。

男はまだあぜ道にまたがって、最も屈辱的に卑しめる肛門の痒みと戦っていた。そして男はあの女を待っていた。あの女ならなんとかしてくれるという確信と、一生で一度だけこれこそが女の匂いだと感じたあの時の恍惚をもう一度肺の中に充満させたいという欲求が交錯していた。

宇宙は全て振動なのだった。重力や磁力や、分子同士を結びつける二つの力や、その存在の理由さえも皆目答えの出ていない、日常の生活にとっては最も当たり前の様々なことを説明するのは、宇宙を支配する十次元や十一次元とやらを作り出している振動なのだ。

しかし、男はその理論が間違っているという直感がある。地球が宇宙の中心でその周りを惑星や太陽や恒星が回っているということを証明しようとして、どんどん理論が膨らみ肥満し、太りすぎた恐竜となって絶滅した。宇宙は全てが振動であるという考えも、それと同じように複雑化し巨大化した恐竜なのではないか。もっともっと単純な宇宙の姿こそがすべてを合理的に説明する真の姿なのではないか。

男のパソコンの中にはその新しい、もっと単純な、天動説を地動説に変えるほどの意味が有るたった二ページの論文が入っている。

あの女は二十軒ほどの安普請の家が丘に張り付いた男の集落には住んでいなかった。男は小学校に入るのを日々待ちわびていた。なぜか男はあの女が小学校の教員であり、自分の担任になってくれるような気がしていたのだ。だから、入学式の日、体育館で歓迎してくれる二百人ほどの在校生と教員の中にあの女の姿を真剣に探した。しかし、体育館の壇上に整列した新入生を歓迎する在校生は、みな輝きのない瞳で抑揚の少ない校歌を歌っているだけであり、両側に並んだ教員たちにも精彩はなく、男の視線が釘付けになる相手はいなかった。

学校が始まってひと月経っても、あの女はこの小学校のどこにもいなかった。男はやがてあきらめることを心に決めた。忘れることはできなかったが、あきらめるしかないと思えるようになった。

時々、教室の窓から運動場で行われている体育の授業に目をやって、これまで病気療養中でやっと復帰することができたあの女がはつらつとした表情で校門をくぐるのを想像したこともあったが、それが無駄であるのは、小学一年生にも明らかなのだった。

それから四年が経った夏休みに事件は起きた。

その日、集落がへばりついた斜面の裏山に一人で分け入り、男は砦を作っていた。砦というよりも一人で静かにすごせる空間と言った方がいいかもしれない。雑木林の中の登りやすそうな五メートルほどの高さの木を選び、その中程まで登って、大きな枝が分かれた部分に腰をかけると、集落が見下ろせた。そして、その丘の麓を流れる川と、その川が流れ込んでいる干潟が広がる入り江とその向こうに続く山並みまでもが、澄んだ空気のおかげもあって、ジオラマのように見渡すことができた。その集落で生まれその集落で育った男は、それまでその集落と学校をつなぐ町並が外の世界につながっているという実感を持ったことがなかった。しかし、今、目の前に広がっているのは、まさにそのような風景であり、男は枝の分かれ目に座ったまま、自分の世界と外側の世界の境界を目で辿った。

次の日、男は家から持ち出した鋸と金槌と釘で、枝の分かれ目に載せる、筏のような構造の台を作り始めた。辺りに散らばっている折れた枝でなるべくまっすぐなものを選んでは、これもその辺りに落ちていた太い枝を四角く組んで、それに、金槌で一本ずつ打ち付けていった。

台は三日目に完成した。思っていたよりも、ずいぶんと立派な出来栄えで、長い方が一メートルは裕にあり、これならば少し体を曲げれば横になることもできそうだった。

しかし、あまりにも立派にできすぎたせいで、一人ではとても持ち上げられない重さでもあった。両足を踏ん張って両手で引っぱりあげると片側だけは持ち上がり、それを何とか木の幹に立てかけることはできるのだが、枝が分かれた、地上から二メートルほどの高さまで押し上げるのはまるで不可能な話だった。

男は考えた。台の端にロープを結び、枝に引っ掛けて引っ張ってみてはどうか。

家に戻って丸く束ねた荷造り用の藁のロープを探し出した。そして再び木の根っこに戻り、台を持ち上げる作業に熱中した。去年の落ち葉に覆われた斜面は、足を踏ん張って台を引き上げようとするたびにずるずると滑り、それを繰り返すうちに赤く光る土が露出した。すると、ますます足が取られて、体重をかけロープを引っ張ってみても、足だけが滑るばかりで、一向に台の高さは変わらなかった。白いズック靴には赤土が張り付き、盛り上がり、泥の塊になっていた。それでも周りから落ち葉を集めて赤土の上にかぶせたり、少し長い休憩を取って力を蓄えたりして、最後の力がぎりぎり無くなってしまう直前に、台を枝の高さまで引き上げた。それから藁縄を隣の木の幹にくくり付け、余った木の棒で、ぶら

下がった台の尻の部分を最初は横に押し、水平にした上で藁縄を引っぱって枝の上に引きずり上げようとした。

タイミングとバランスが難しかった。さらに、台からはみ出た木の枝が幹に引っかかって作業は進まなかった。何度も台を押し、持ち上がったと思ったらバランスが崩れてまた縄一本でぶら下がった状態になり、押す角度を少し変えてやると斜めの足場が滑って、ある時は前に、あるときは後ろに転びそうになった。事実、数回手をついてしまって、両手と服の前半分は赤土でどろどろだった。

男の体力はもう限界だった。これで最後だ、これがだめならばあきらめよう。遠くが見たくなったらあの枝に腰掛けるだけで十分じゃないか。砦はいらない、どうせ誰かに見つかってしまう、第一あんな所に自分が座るための台を作ったにしても、かえって、上るのに邪魔になってしまう。これが、本当に最後の最後だ。

男は持ち上がらない腕に力を込め、首を亀のようにすくめて、精一杯四角い台を押し上げてみた。棒の先端が台の端に何とか到達し、最後の力で押し上げようとするが、腕にはそうする力はもう残っていなかった。だから、左足を踏ん張って体重をかけた。すると、踏ん張った左足は赤土の表面を滑った。反射的に男は体重をしゃがみかけた右足にかけた。右足は一瞬体重を支えたが、次の瞬間にはその重さに耐えられず同じように斜面を滑った。男は、両手をまっすぐに上に伸ばしたまま顔から赤土の斜面に突っ伏した。支えを失った砦の台は一本の藁縄で支えられて一度スウィングをした後、反動で藁縄を引きちぎり、勢いを保ったまま男の背中に落ちた。

そのショックを手に感じた時にはすでに頭と肩は強い衝撃を受けていて、男は、あきらめと疲労と落胆の中で眠るように目を閉じた。

目覚めたのは、右肩に乗せられた、柔らかい指を感じた時だった。

「立てる?」という声が頭の後ろで聞こえた。振り返ろうとするが、うつぶせの体勢ではクビが回転しない。両手をついて立ち上がろうとすると、今度は両手に力が入らない。だから、そのままくるりと回転すると、これは案外簡単にできてしまった。でも、そのとき、頭や肩や背中や腰や、特に首が釘を打ち込んだように痛んでしびれて、それでまた気を失いそうになってしまった。

「あら、おでこに、血が付いてる」

覗き込むシルエットは、確かにあの女のものだった。

男は震えた。体が芯から震えた。嬉しくて震えた。そして、涙が出てきた。

女にむしゃぶりつきたかった。泣きながら痛い痛いと叫びたかった。抱きしめたかった。そして、抱きしめてほしかった。女の匂いを胸いっぱいに吸い込みたかった。

女はハンカチに唾液を含ませ、男の額を拭き始めた。ハンカチが額に触れるたびに、かすり傷はぴりぴりと痛んで、心地が良かった。目が慣れてくると男を覗き込む女の髪が男の

顔を取り囲むように垂れ下がっているのが見えた。その先端は男のほおや額にむち打ちながら時折触れて、小さな刺激に過ぎないのに、体全体を瞬時に身震いさせ硬直させるに足る興奮を伝えた。女は前をボタンで留める、襟付きの、白い質素なブラウスを着ていた。その襟の辺りがたるみ、胸の奥の方まで覗けたが、そうしようとする自分の視線に耐えきれない恥ずかしさを覚えて目を閉じた。

女の唾液が額の上で乾いて熱が奪われるとごわついた感覚が残った。女は立ち上がって、男の手を取り、斜面に足を踏ん張って男を引っ張り上げた。まだ小学生の男の体は、あっけなく棒切れのように直立し、そのまま地面に突き刺さって、こわばったまま震えていた。

女は、その絡み付く指先を、男の汚れた手に這わせて力を込めた。

「泥だらけじゃないの。行くよ」

女が男の手を引くと、指先だけで繋がった二人の手はほどけそうになり、男があわてて握り直そうとする間もなく、女の手は男の手のひらを包みこんだ。二人は集落を抜け、崖の斜面を下り、田んぼの湧き水をめざし、あぜ道を進んだ。

「全部、脱いで」と、唐突に、そして静かに女は命じた。

初夏の田んぼを埋め尽くす稲はすべて直立していた。その先端には受粉が終わったばかりのまだ空っぽの穂が、真っ青な空を向いて時折山から吹き下りてくる風に波を打ってざわめいた。閉じた籾の合わせ目からは、黄色い雄蕊がだらりとはみ出し、その用途が終わったことを告げていた。

田んぼの隅にある湧き水の穴は以前ほどの勢いはなく、あのとき感じた未知の世界の入り口の薄暗い様相もなかった。そこはただ、一辺が二メートルほどの稲で四角く縁取られた泥の底で、その中心に十センチくらいの穴が開いているのみであり、確かにそこから水が涌き出していることを示すわずかな水面の揺らぎが光を反射しているだけだった。

裸になっても、少しかがみ込めば、体は稲に隠されて見えないだろうと辺りを気にする男を、二メートルも離れてはいないあぜ道のオオバコの大きな葉を、この辺りの子供がはいているのではない、輝きを放つ穏やかなベージュの大人っぽい靴で踏みつけながら、女は腕組みをして見つめていた。白いシャツと膝までかかる濃いグレイのひだスカートは、清楚でありながらも、母親には感じたことのない欲情と言う言葉で表すにはかわいそうすぎる感情で男を揺すった。男は大人になりつつあった。そして、目の前にいるのは、自分にとっては立派な大人の女だった。

「さあ、脱ごうよ」

見つめられながら、男は、開襟シャツのボタンを外し、ランニングを脱ぎ、半ズボンとパンツをずりおろした。女は、裸になった男を一度、夏の田んぼにはふさわしくない涼しい視線でなぞったあと、男のまっすぐに伸ばされた手から脱いだものを受け取ってしゃがみ込み、涌き出してわずかに盛り上がる水に浸した。

男の服を揉みながら、女は遠くを見つめているようだった。そして髪を一度揺すって裸の男に視線を向け、男が裸であることには何の意味もないかのように、言った。

「あなた、向こう側に行きたいと思わない」

男はその質問が、そこまで単純な形で女の口から発せられたことに驚いた。女はただ自分をからかっているだけなのか、何らかの真剣さが込められたものなのか、それとも以前の出来事を思い出した単なる思いつきなのか。

女の質問に、自分はまじめに答えるべきなのか、真剣に否定すべきなのか、笑って受け流せばよいのか、いや、幼い男にとっては受け流すこと言うことはとてもできることではなかったが、とにかく、とにかく、男は何をどう捉え、それにどう反応すればよいのかが分からなかった。

女の視線に捉えられた男が、数秒後に発した言葉は、だから、もちろん、考え抜かれたものではなく、その言葉しか思いつかなかったからにすぎない。

「どうやって行けばいいの」

たとえ入り口があったにしてもそれは多分作り話にすぎないのだから、答えが返ってきたとしても真剣に受け取るつもりはなかった。なのに、男の二つの目は、田んぼの一角の、たった十センチほどの、穏やかに水がわき出している柔らかそうに見える泥の中に開いた穴を、これ以上ないという真剣さで見つめていた。

裸の男は、踏み固められた畦道の、雑草が放射状に広がったその上に両足をのせ、万が一にも田んぼに滑り落ちることがないように踏ん張って穴を覗き込んでいた。真っ黒なそれは、チューブのごとく地中深くまで、そして、あちらの世界まで続いているのか、何メートルか下の地下水をたたえた地層で途切れてそれまでなのか、男の疑問に答えることなく、ただ、透明な水を音もなくあふれさせて水面を揺らしていた。

「あの向こうにあるのよ」

女は今や太陽の直射で熱くこげ始めた男の肩に息をかけながら、男にぴったり寄り添って甘く鋭い声をかける。そして、女もまた男と同じ視線を暗い穴に向けた。

「あれが入り口なの？」

「うん、ほら。」と言いながら、女は細すぎることも太すぎることもない白い左手を前にのばし、人差し指の先を穴に向け、男がその動きに促されてさらに目を凝らして二メートル先の空洞を見つめようとしているのを計ったかのように、右手で男の背中を軽く、ごく軽く、押した。

すでに男は、体重の大半を二つのつま先のみで支えており、さらに足の指先は泥の中にめり込み始めていたのをまるで観察し尽くしたかのような、完璧に無駄のない力だった。男の重心はバランスをなくし、裸の体は田んぼの水の上を飛び、その穴を狙ったかのように落ちていった。そして、男の右のつま先が水面についてさざ波をたてようかというその瞬間、男の体は空中に停止した。

気づくと、男は空中に静止している訳ではなく、左足のつ

ま先はまだかろうじて田んぼからせり上がったあぜ道の角についているのだった。そして、どのような力が働いたのか、あり得ない動きで男は体を反転させ、左の手で女の右の手首を握りしめていた。

「離しなさい」とまだ甘さが残っているのが不思議に思える声で叫びながら、女は右手をばたつかせたが、男の手はそれよりも力強く命をかけて女とつながったままだった。

男が女を道連れに田んぼに崩れ落ちそうになると、女は足を踏ん張って訴えた。

「離してちょうだい」

懇願の言葉のはずなのに、なぜか使命感をたたえた響きだった。

「そこから思い切って飛び込めばいいの。ね、あっという間なの。苦しくもないし、痛くもないから。だから、私の手を離して」

男は左手に渾身の力を込め、女から離れまいとした。しかし、体はあっという間に傾き、穴は目の前だった。

ここで女の手を離せば、女の言う通り自分は穴に吸い込まれ、次の瞬間には向こうの世界の仲間入りをしているのかもしれない。少なくとも女はそう考えているらしい。

女が男をからかっているだけだとしたら、女も覚悟して男に引きずられて田んぼに倒れ込んで泥だらけとなり、夏の空以上に輝いた声ではははとか、へへへとか笑いながら、泥だらけの男と抱き合って、ジョークの余韻を楽しんでもおかしくはないはずなのに、そんなどん返しが隠された声でないらしいことは明らかだった。

しかし、男は女の右の手首を握ったまま、十歳足らずの子供の力とは自分でも信じられない、女の手首の肉にその指先が埋もれるほどの力でしがみついていた。

女は女で、あぜ道に踏ん張った両足の力を抜こうとはしなかった。筋肉を盛り上がらせた顔に埋まった二つの目の奥の強い輝きは、女がどれほどの力を体全体に込めているのかを語っていた。しかし、不思議なことにその形相は、女というもののあらゆる魅力をはらんだものでもあった。男は、自分の体重のすべてを女の力にゆだねつつ、変貌した女の、風になびいて激しく振り乱したように見える長い黒髪に見とれた。

男は決してその手を離さなかった。空中に止まったと思えた男の体は、女の体に引き寄せられた。すると、女の顔は一瞬で聖母のそれに変わり、男をその腕の中へと迎え入れた。

「ちょっと早かったのかもね。でも、またきっとその時はくるのだから、そのときにね。約束よ」

そして、女は雑巾のように絞った男の服をぱたぱたと広げ、下着から一枚ずつ渡しては、男がはき終わるのを待って、最後に全身を眺めまわしてから言った。

「じゃあね。また私たちは会うことになっているから」

女はそのままスカートのひだをなびかせ、あぜ道をみるみる集落の方に向かって遠ざかっていった。男の横をすり抜け

るとき、一瞬熟れたような甘い匂いがしたが、それはすぐに消え去り、時々吹く青い風が男の濡れた服から熱を奪って、それまで感じたことのない寂しさを脳裏に根付かせた。

もしかしたら吸い込まれていたかもしれない、向こうの世界への入り口が呼んでいるような気がして振り向くと、穴の入り口にはアカハラが二匹はり付いて空を見上げていた。すると、浅い水底に腹を擦らせ、背びれを傾けた黒い鯉が、ゆるゆると稲の株の間から出てきて穴の周りをさらにゆるゆると一度旋回し、ちらりと男を見上げてから、また稲の間に隠れて行った。

あれから既に三十年が経つ。男はあぜ道にまたがったまま、闇の中であの女を待っている。まさか、女との約束がこういう形で成就することになるとは思ってもいなかった。

男は思いついた考えをホワイトボードに書きつけるのが習慣だった。ある部分は残し、ある部分は消して、何千回となく書き直していった。そして、何年もかかって完成させた数式は既に男の意思を離れたものとなり、独自の命を持っていた。その数式は宇宙全体をまとめる法則なのであり、男は幸運にもそれを発見しただけで、発明したものではなかった。だから、その数式は男の意思とか希望とか欲望とかそういったものとは関わりのない独自の存在であり、その数式が語ることはもっとも客観的な真実なのだ。

男は宇宙を支配する力に振動のハザマという概念を付け加えることによって、数式のそれまで曖昧だった部分がくっきりと様々な事象を説明することを発見した。時間というものは実は存在せず、それは投影に過ぎないことも説明できた。物質の質量も同じように投影であって、それは実体としては存在してはいないのだ。

ところが、どうしても説明できない、それがないと全体が成り立たない重要な項であるはずなのに、どう考えても単なる特異点を暗示するに過ぎない幾つかの特殊な変項が生じてしまうのだ。

男はその答えを出そうと悩みに悩んだ。ホワイトボードの前に立って来る日も来る日もうなり続けた。

そして、昨日、夢にあの女が登場した。

女はあの時のように白い半袖のブラウスを着て、グレイの襞スカートを風になびかせてあぜ道に立っていた。その姿が男にとってもっとも爽やかな女性のイメージであり、ヒールのないベージュの靴と見事にマッチしていた。それは夢の中であり、男の望む姿をその女はしているに違いなかった。女の顔はファッションモデルのようでもなく芸能人とかアイドルのようでもなかった。女の顔はその女しか持ち得ない、性の違いさえも忘れさせる、男が長年悪戦苦闘して作り上げようとしてきた完璧な数式と同じほど無駄がなく清らかな、いわば完全で簡潔な法則に肉体を着せたものであった。

男は三十年という時間のゆえに肉体は変化していた。しかし、女はあの時のままで何一つ変わっていなかった。夢の中

だからそれは可能なのだが、違う理由があると男は知っていた。

「久しぶりね。その時がついに来たね」

女はあの時のままの香りを放っているのかと、嗅覚を尖らせて目をつぶってみたが、風の流れが邪魔をした。

女があの時のままなのは、時間は相対的なものであって、女の時が止まっていたからなのだった。しかし、この現実世界でそれができるわけはない。

「向こうの世界から戻ってきたってこと？」

「あっという間よ。あなたには三十年も私には一瞬だった」

まるで通勤電車で往復したかのようにことも無げに女は言い放った。

「でも、なぜ俺を迎えに来たの？」

「あなたは見事に単純で、もう少し洗練すればほとんど完璧に宇宙を説明出来る数式を作ったけれど、まだ、見落としている部分がある」

女の髪は、前と同じようにその先端が風に弄ばれ、女の髪をそうやって翻弄した風はそのまま山際まで流れていって若木の青葉を揺する。

「変項の事？」

「そうよ。あなたは自分の意識に邪魔をされて、ありそうもないことをそうと知らないうちに思考から排除している」

「でも、あれは絶対に不可能であって、比喩を使えば、君と俺が一つになって向こうの世界に行かないと今の宇宙はなくなってしまうということだろう。そしてそれは初めから定められていたなんて、安定した宇宙論を語る上ではありえないことだよ」

男は女の軽い言葉に初めて違和感を覚えた。自分がこれまで苦労して作り上げた男の宇宙を否定された気持ちがしたからだ。

女はそんなことにはお構いなく、両手を横に広げてバランスを取りながらあぜ道を進んでいく。

「だって、あの鯉は今日で死ぬのよ。それも約束だったのよ」

その時、男は、確かに女が言うように、自分の常識にとらわれていたが故に真実が見えていなかったことを悟った。

「鯉が死ぬ」

数式の中に存在する複数の変項の中で、最後まで理解できていなかったことが、ついに見えたのだった。門番のいない宇宙のつなぎ目は閉じてしまうしかないではないか。

男はベッドと壁の間の二十センチほどの隙間に、祈るように手のひらをあわせて両手を突っ込み、うつぶした状態で顔もすっぽりとその隙間にはまり込んで目が覚めた。目を開くと、隙間の底には綿埃が重なり、田んぼの底のようにも見えて、自分が何を見ているのかを理解するのにわずかな時間がかかった。

身もだえしながら何とかその隙間から這い出し、夢を思い出しながら息を継いだ。呼吸をするのが辛く、息を吸い込む

たびに頭蓋骨の付け根から首にかけてびりびりと痛み、血流が戻って思考力が回復するまで、両手の親指を残りの四本で包み込み、だんだんと汗がにじんで、親指を握り締めているという感覚がなくなるほどまでの時間を耐えているしかなかった。

男はやっと立ち上がることができた。これから背広を着て出勤し、ホワイトボードの数式を全く新しい視点で、一日を費やして見直してみるつもりだ。そして、夢の中で女が語ったことが本当ならば、再びあの約束の場所を訪れ、男は女と再会し、自分の理論が正しいのを、身をもって証明することになる。それが女との約束なのだ。約束は成就されるためにあると言う強い確信が男にはある。男は入ったままだったラップトップのスイッチを切り、メッシュのケースに滑り込ませる。

（愛知県知立市）

［市民文芸賞］

足の裏の熾火

遠藤ゆき

「ガナナート・オベーセーカラって知ってる？」
私は、スリランカの古都キャンディの観光客用の劇場で、隣に座っていたガイドのアヌラに声を掛けた。
「ガナナート・オベーセーカラって確か、スリランカ出身の文化人類学者だわ。『メドゥーサの髪』っていう本を書いた人。その本の中でね、オベーセーカラは今日これから見る火渡りの儀式と個人的なね癒しの関係について書いていたと思うのよ」
「キタさん、変わったこと知っているね」
アヌラは困惑気味に、両手を広げた。
私は二日前からスリランカを旅している。大手旅行会社の企画した一人旅専用のパッケージ・ツアーを買ってしまい、専属ガイドのアヌラを頼りながら、一応一人旅をしているのだ。確かにアヌラはいるが、この旅の道程で私はまったく日本人に会わず、話し相手は何故か流暢に日本語を話すスリランカ人のガイドであるアヌラのみ。同じくスリランカ人である専用車の若いドライバーは日本語は解さない。厳密には一人と言えない専属ガイドとドライバー付きのパッケージ・ツアーだが、接する相手はスリランカ人のみで、一人で異国に来たのだという感は確かにある。
昨日は、ネボンゴの魚市場を見て、それからスリランカの旧都ポロンナルワ遺跡を見た。今日は、シギリヤ・ロックで見事な天女の壁画を見て、それからダンブッラの石窟寺院を見て来た。だけど、ガイドのアヌラに言わせると、スリランカはキャンディが一番いいそうだ。理由は、彼の故郷がキャンディの近郊だからだそうだ。実際、私たちは先ほどから、この劇場で観光客用に上演されているキャンディアン・ダンス・ショーを見ているのだ。先ほど、アヌラから、日本の連

獅子のように大きく首を振り回す男性二人の踊りを、
「僕の故郷の踊りなんだ」
と誇らしげに紹介されたばかりだ。
私は、スリランカに来て以来、この国の熱気にあてられていた。だいたい、ガイドのアヌラは、私がバンダーラナーヤカ国際空港に到着した時、
「キタ・マリさんですか？」
と確認するやいなや、
「ガイドのアヌラです」
と名乗り、かなり強引な握手をした。最初のホテル、国際空港近くのネボンゴにあるホテルへの道筋では、スリランカ人が派手な結婚式を挙げている光景も見た。きらめく電飾の中に浮かび上がる会場には、色とりどりのサリーを着た女性たちの影があり、その賑わいの熱気にあてられた。翌朝のネボンゴの魚市場でも日本とは違う、原色に塗られたカラフルな漁船をいくつも見た。南国ならではの極彩色な光景と熱気に私はあてられぱなっしであった。
しかし、そういった熱気の極みというのはこれから見る火渡りの儀式であろう。実際に熾火の上を人が歩くと言うのだから。キャンディアン・ダンス・ショーのプログラムの最後には、ここで本来土俗的宗教行事である火渡りの儀式を行うと書かれていた。
私は、そのプログラムを見ていたとき、閃光のように思い出したことがある。私がまだ心理学を学ぶ研究者の卵であったとき読んだ一冊の本に、この火渡りの儀式と個人的な癒しの関係を記したものがあったことだ。ガナナート・オベーセーカラの『メドゥーサの髪』だ。あのころの私は、自分が学ぶ心理学という学問に疑問を抱くようになっていた。それは、この心理学という学問が、人間のこころを研究対象とするにもかかわらず、調査するものと調査されるものの関係に無頓着であったと考えられたからである。他人のこころを研究対象とすれば、そこには自ずから、研究対象者と研究者である私の間に様々な精神的交流が生まれるはずだ。その交流なくして、他人のこころの理解はあり得ない。しかし、客観科学を標榜する当時の心理学は、その問題に真っ向から向かい合っていないと、私は考えていた。むしろ、その問題への認識と反省は、異文化という他者を研究する、心理学の近隣科学、文化人類学において盛んであった。私が通っていた大学の気風は、自分が専門とする学問だけではなく、周辺諸科学にも関心を持つよう促すものであった。私は心理学への疑問から、文化人類学の認識論に関心を持つようになった。
しかし、私はあくまで臆病であった。多くの人類学者のように、自分の問いに答えるため自ら積極的に異文化という他者に接するため、海外に足を運ぶということはなかった。そして、それにより自分の疑問に答えを見つけることもなかった。私の日本籠りは続き、学問上の認識論という、狭い形而上学的な問いに振り回されるばかりであった。
つまり、私は自分自身を異文化に照らし合わせてみて、自

分とは何者かというあまりに基本的なことを確認することさえなかったのだ。また、異文化に接して自己の変容や成長を経験することもなかったのだ。結局、私は研究上の疑問という茫漠たる海の中で自分を見失ってしまったのである。私は、自分の研究において何の業績を残すこともなく、むしろ研究者としての自立の失敗から、いや人間としての自立の失敗から精神を病んだのだった。そして、私は、しっぽを巻くようにして大学を去ったのであった。

大学なんて狭い世界に閉じこもっていた人間に、ましてやその結果、精神を病んだ人間にはろくな仕事なんてない。結局、私が帰郷して得ることが出来た仕事は、清掃作業員であった。私は、一清掃作業員として働くしかなかったのであった。

ある日、そんな私に、母が慰めるように言った。

「上海にでも、旅行に行こうよ」

正直、単なる娯楽として行った上海の旅は楽しかった。あんなに臆病で自分で海外を探訪することのできなかった私が、単純たる娯楽のパッケージ・ツアーの海外旅行で救われるとは思ってもみなかった。しかし、旅は不思議なものであった。異国の空気に触れることは、少し私のこころを明るくさせた。それは、日本での私の境遇をつかの間忘れさせるものであったから。それからである。私が、ときどき日常の閉塞感から逃れるように海外を旅したのは。でも、一人旅は今回が初めてである。私は、何でスリランカくだりまで一人でやってきてしまったのだろうか。

舞台では次の踊り、孔雀の踊りが始まった。孔雀はスリランカでは闘いの神だという。なぜか男性ではなく女性が舞う。ピーコック・グリーンの衣装を身にまとい、頭にきらびやかな冠状の金の飾りをつけた女性たちが、足を上げ手を折り曲げ孔雀の姿態と動作を表現する。闘いの神の踊りというが戦闘的でなくどこか優雅だ。互いの美しさを競うように彼女たちは踊る。美しさの競い合いが意気揚々として、互いのヴァイタリティーを披露しあうようだ。私は思う。闘いってほんとうはそうなんじゃないか。他人と争うこと、それは争いであって、闘いなんかじゃない。ほんとうの闘いは、お互いのヴァイタリティーを競うこと。自分のヴァイタリティーを確認すること。それが闘いなのではないか。

「キタさん、孔雀の踊りも好きみたいだね。だけど、これから、舞台上に移動するからね。最後の火渡りの儀式。キタさんが楽しみにしているもの。あれは、舞台の上から見るからね。客席と舞台の間で火を渡るんだからね。さあ、移動。移動」

アヌラに促されて私は、舞台の上に上がり、舞台のへりに腰をかけ足をぶらぶらとさせる。

舞台と客席の間に、男たちが細い絨毯のような通路をつくる。むっとする熱気があがる。その熱気は、その細い通路からたちあがっている。熾火だ。熾火の絨毯なのだ。絨毯をひ

き終わると、一人の男がその端に立ち深呼吸をする。そして、意を決したように熾火の絨毯の上を歩ききる。拍手が起こる。歩き終えると、今度は次の男だ。やはり大きく息を吸い込み、決然と熾火の上を歩く。それに、第三の男が続く。火渡りの儀式は次々と繰り返される。

いったい、熱くはないのだろうか。なんだか、見ている私の方が、足の裏に熾火の熱を感じるかのようだ。

普通、熾火の上を歩く場合、熱さを、そして痛みを感じるはずだ。しかし、彼らは現に今熾火の上を歩いているのだ。こういう時、ひとは変性意識状態に陥っているという。例えば、恐怖から逃れるとき。何か怖いものに追いかけられた時、私たちは必死に逃げる。その時、周囲の藪に引っかかれても、まずその痛みを感ずることはない。傷に気付くのは、無事逃げおおせたという安堵感をもってからだ。この火渡りをする男たちも、何か恐怖から逃れるように、振り払いたいもの、もしくは恐怖をおしてでも乗り越えたいものがあるのだろうか。

私は、いつしか、この熾火を渡る男たちの群れの中に、一人の女性の行者が、長い髪をもつれさせ、大きく深呼吸して熾火を敢然と歩いていく姿を思い浮かべた。歩き終えた彼女は、ふうっと息を吐き両手で長い髪を解いた。するとメドゥーサの髪のようにもつれていた髪が解け落ちた。女性行者は顔を上げる。何かを乗り越えたようなまっすぐなまなざしがそこにはあった。いったい、彼女は何を渡り終えたのだろうか。

「キタさん、ほら火渡り終わったよ。」

アヌラの声で、私は、女性行者の火渡りから現実に引き戻された。観光劇場の舞台と客席の間では、先ほど火渡りを行った芸人たちが、舞台上の観客に最後の挨拶を行っている。

「駐車場、混み合うからね。早く車を出してホテルに向かいたいから、ほら、キタさん、早くここを出よう」

劇場わきの駐車場は確かに混んでいた。若いドライバーが私たちの車を出そうとするが、なかなか出られない。車を待つ間、アヌラが尋ねる。

「キャンディアン・ダンス・ショーはどうだった?」

「良かったわ。特に火渡りの儀式がね」

「火渡り?」

この奇妙に興奮しているお客にアヌラは困惑気味だ。だけど、かまわず私は続ける。

「ねえ、スリランカって、日本の旅行ガイドではHealing Islandつまり癒しの島なんていわれるけれど、ほんとうの癒しって、そんなガイドブックに載っているようなソフトなイメージじゃないわ。スリランカでアーユルヴェーダして、簡単に疲れをとるとかそういうイメージじゃないのよ。ほんとうの癒しって、何かに立ち向かわなきゃいけない、何かを乗り越えていく過程なんじゃないかな。さっきの火渡りの儀式のようにね。ほんとうは癒しってすごくAggressiveな、なんというかすごく積極的な過程だと思うの」

「キタさんて、変わったこというね」
やっと車が出て来た。キャンディの街も夕闇に包まれている。私は、なんだかその暮れかけの薄紅色の空が、私をこれからへと見送ってくれるように思えた。
私たちは車に乗り込む。これから、キャンディ郊外のホテルへ向かうのだ。

ホテルへ着いたとき、日はとっぷり暮れていた。今日のホテルはコテージタイプ。初めに、ホテルのフロントがあるコテージに車で向かう。
レセプション・カードに記入をし、パスポートを提示する。少し待たされる。私は、アヌラと並んで壁際の椅子に腰かけ、部屋の鍵が用意されるのを待つ。しばらくして、フロント・スタッフが私の名を呼ぶ。
「Ms. Mari」
隣のアヌラがぷっと吹きだす。そう、間違えられたのだ。名前と名字を。私の名前は、北真理。ほんとうはここでは、
「Ms. Kita」
と呼ばれなければならないのだ。
「North Truth」
アヌラが呟いた。私の名前の意味をアヌラが英語で言い換えたのだった。なんて冷たい名前なのだろう。「北の真理」だなんて。私は、経済発展したあの北の国での現実を思う。とどのつまり、あの北の国に戻れば、私なんて、ただの精神を病んだ情けない中年女にすぎないのだ。経済格差と家庭の豊かさを利用して、このスリランカを旅行しているただの鼻持ちならない通りすがりにすぎないのだ。
このスリランカに来て以来、道すがら私は、ガイドのアヌラとおしゃべりを繰り返してきた。頭でっかちの私は、スリランカまでの飛行機の中で、スリランカについてのエリア・スタディーズの本を流し読みしてきた。スリランカの教育について紹介していた章に、スリランカの識字率が九十二パーセントを超えるという一節があった。私は、アヌラに尋ねた。
「ねえ、飛行機の中で読んできたこの本にね、スリランカの識字率は九十二パーセントを超えるって書いてあるんだけど、それはほんとう?」
「シキジリツ?」
「あの、字の読める人のパーセンテージ」
アヌラは黙る。それに関わらず、私はしゃべり続ける。
「私、失礼ながら、スリランカでは字の読める人もっと少ないと思ってた。それに、スリランカの人って、日本の人より圧倒的に英語話せるよね。英語教育は何年生から?」
「小学校の三年生からだよ」
私の一方的な質問にそう答えると、困惑気味のアヌラははぐらかすように続けた。
「だけど、今のスリランカの子どもたち、みんな頭がいいんだ。頭がいいんだ」
アヌラはそう言い押し黙った。私は、それでも無頓着に続け

た。
「ねえ、もし、子どもに戻れるなら、何を勉強したい？」
「全部」
アヌラは答えた。教育の価値。豊かな経済大国日本の中産階級の家庭に生まれた私には、想像のつかない答えであった。アヌラは、学びなおすことが出来るのなら、すべてを学びなおしたいのだ。私は、その貴重な教育の価値を結果的に浪費してきた自分を恥じた。
部屋の鍵を受け取った私たちは、車に戻った。驚いたことに、このホテルはフロントのあるコテージから、客室のあるコテージまで、車で移動するそうだ。ガイドのアヌラにも別の一室がある。アヌラを夕食に付き合わせる約束をし、私は車を降り自分の部屋に落ち着いた。

考えてみれば、スリランカ人の日本語ガイドという存在の奇妙さに、私は今まで無頓着であった。何故、アヌラはあんなに流暢に日本語を話せるのだろうか。子どもに戻れたら全部を学びなおしたいほど教育の恩恵に恵まれなかったアヌラが。そういえば、昨夜のホテル、ポロンナルワ遺跡近くのディア・パークホテルでは、私のコテージは四〇八号、アヌラの部屋は二〇三号だった。ホテルで何か不都合があった場合、アヌラに連絡しなければならない。アヌラは私に言った。
「僕の部屋は、二〇三号、ニマルさん。僕が日本に住んでいたころ、僕と同じ部屋だった人の名前。そういうと覚えやすいでしょう」
ニマルさんて誰なんだろう。それにしても、二人で一部屋なんて、アヌラはいったいどういう身分で日本に来て、どういう暮らしをしていたのだろうか。おそらく、技能実習生か何かでやってきて、二人で一室なんて狭い部屋で暮らしていたのだろう。私は、何だかアヌラに申し訳ないような気持ちになったことを思い出した。
扉をノックする音がする。アヌラだ。私は扉の外に出る。
「準備終わったよ」
「じゃあ、レストランに行きましょう」
私たちは、客室のあるコテージから少し離れた場所にあるレストランに向かった。
ライトアップされたプールに面したテラスに席を取る。ウエイターが飲み物の注文を取りに来る。ライオンビールを一本頼み、アヌラが私のグラスと自分のグラスにビールを注いだ。乾杯をして、食事を始める。食事は、ビッフェ式で、私はスリランカの赤米のご飯にカシューナッツと鶏肉のカリーとマグロのカリーを皿にのせている。私が、アヌラを食事に付き合わせているのは、この旅行が始まって以来、私がスリランカのテーブル・マナー、手でカリーを食べる体験に挑戦しているからだ。
「キタさん、だいぶうまくなったね」
「そう？」
私は、よく混ぜたご飯とカリーを一口分右手に取り、口に運

ぶ。上達した私にアヌラが微笑んでいる。

「ところで、さっきの劇場でさ、キタさん、ガナナート・オベーセーカラって言ったでしょう。ガナナート・オベーセーカラって言ったら、スリランカでは詩人なんだよ」

「そうなの？　だけど、私は文化人類学者のオベーセーカラしか知らないんだ」

「だけど、スリランカではオベーセーカラは詩人なんだ。流行歌の歌詞も書くよ。それでね、その歌はある一人の女性の歌手とある一人の男性の歌手しか歌えないんだ」

「権威のある詩人なのね」

「まあね」

「その歌も聞いてみたいわ」

「じゃあ、明日から、車の中でスリランカン・ポップスをかけるよ。運よくオベーセーカラの歌が聞けるかどうかは分からないけどね」

「ありがとう」

私は、また皿の上のご飯とカリーをかき混ぜると、それを右手で口に運んだ。そんな私に、アヌラは言った。

「あと一日だね。キタさんは、スリランカに来て、何が一番良かった？」

「そうね、シギリヤ・ロックの天女の壁画も、ポロンナルワ遺跡もすべて良かったけれど、やっぱりこのキャンディかな。さっきのキャンディアン・ダンス・ショーの最後で見た火渡りの儀式が良かった」

「ずいぶん、火渡りの儀式が気に入っているんだね」

「なんだかね。私、スリランカにきて、この国のエネルギッシュさに、熱気に気おされているの。でも、今一人でここまでやってきて良かったと思っている」

そう、確かにそうだ。一人旅と言っても、旅行会社がきちんと組んだパッケージ・ツアー。今日観光客用の劇場で見た火渡りの儀式のように、安全で守られたものには違いない。だけど、私は、この旅をすることで、何故か足の裏の熾火のような熱さを感じている。私にとって、これは一つの火渡りの儀式なのだろうか。思い切って、一歩踏み出して旅をして良かった。

アヌラは言った。

「僕は、三年前からガイドの仕事をしているんだ。僕たちの仕事は、お客さんに思い出を作ってもらうこと。キタさんが、日本に戻っても、スリランカのこと思い出してもらえるようにね」

「きっと、思い出すわ」

私は、再び足の裏の熾火のような熱さを感じた。お掃除の仕事の何が恥ずかしいものか。私だって、ほんとうは、心理学者になりたかった。でも、今はそんな過去はかなぐり捨てて、どんなに社会的地位の低い仕事でも、真剣に行っているのではないか。それを恥じることなど、どこにもない。

大学を去ったとき、私は、実は自分のこれからの未来が恐

ろしかった。心理学者になれないと分かったとき、私は、私が消えてなくなってしまうような恐怖を覚えた。私は、消えてなくなりたくなんてなかった。だから、どんな小さな仕事でもいい。この社会の一隅に、この世界の一隅に私の場所を見つけたかった。だから、雇ってくれるところならどこでも良かったのだ。そこに、私が確かに生きていられる場所があるのならば。そう思うと、私は掃除の仕事をすることで、すでに私の火渡りを始めていたのかもしれない。

私は、アヌラの国、このスリランカには、かつて内戦があったことを知っていた。まだ、その内戦の終結宣言を聞いたのはたった五年前だという。昨日のポロンナルワ遺跡では、古代の仏教遺跡を見て来た。アヌラは、この国では多数を占めるシンハラ人で仏教徒だそうだ。アヌラは、お客の私の前では、控えめにしか表現しないが、タミル人とイスラム教徒に嫌悪感を示す。

ポロンナルワ遺跡の廃墟の寺院の前には、三か国語で書かれた、説明書きがあった。一つは英語。ほかの二つは全く読めない知らない言葉。

「これは、何語？」

私は、ある文字を指さした。アヌラは、

「シンハラ語だよ」

と即答した。私は、もう一つの言語を指さし尋ねた。

「こっちは？」

アヌラの表情が険しくなった。そして、しばらく間をあけて、アヌラはしぶしぶ、

「タミル」

とポツンと言った。

そういえば、ポロンナルワ遺跡の奥の院、ティワンカ・ピリマゲ寺院の奥には、何故か顔のない仏像があった。その仏像を見上げる私に、アヌラは言った。

「こんな美しいものを壊すなんて考えられないでしょう」

私は、言葉が出なかったことを思い出す。アヌラのなかでは内戦は終わっていないのだ。

おそらく、アヌラは内戦を逃れるように日本へと来たのではないか。アヌラも生きるために日本で働いたのだ。二人で一つの部屋で暮らしながら。アヌラも、自分が消えてなくなるのは怖かったであろう。その恐怖から逃れるために、アヌラだって火渡りをしてきたのだ。そして、現に火渡りをしているのだろうと思う。平和で豊かな日本という国に生きて来た私には、想像もつかないような火渡りである。

「キタさんのスリランカの思い出の一番は、やっぱり火渡りの儀式かな？」

「そうだね。火渡りの儀式を見られたのはほんとうに良かったと思う」

私は、自分自身で改めて確認するようにその言葉をつぶやいた。アヌラは、そんな私にそっと微笑んでいた。

翌朝。私たちはキャンディにある仏教の巡礼地、仏歯寺を訪ね、そのあと一路最終目的地のコロンボへと向かった。

専用車の中は、昨日アヌラが言ったとおりスリランカン・ポップスがかかっている。ところどころ、アヌラがその歌詞の意味を日本語に訳してくれる。

「おかしいんだ。この歌。この歌ね、ラブレターを書きたいんだけど、どこからどう書き始めたらいいかわからないって歌ってるんだ」

「確かに、それは難しいね」

アヌラは私にほのかな好意を持っているのだろうか。先ほど、昼食を食べたホテルは、ピンナワラの象の孤児園の敷地の中にあった。昼食の前に、私たちは保護された子象を見て来た。アヌラは盛んに私に子象に、サトウキビのえさをやるように促した。そして、アヌラは私のカメラを取り上げると、子象にえさをやる私の姿をパチリパチリと幾度も写した。いったい子象にえさをやる私は、優しく見えるのだろうか。こんな情けない私なのに優しく見えたのだろうか。私は、そのどこからどう書いていいか分からないラブレターの歌を聴きながら、漠然と考えていた。

そんな私にアヌラが言う。

「残念だけど、ガナナート・オベーセーカラの歌はかからないね」

「仕方ないね」

ラブレターの歌は終わり、ラジオは次の歌に移った。私は、相変わらず流れるスリランカン・ポップスを聞きながら、手元のガイドブックを開いた。コロンボの地図だ。コロンボの市街に大きな書店があることに気が付く。

「歌が聞けないのならば、オベーセーカラの英語版の詩集を買って帰りたいわ。ねえ、このコロンボの地図に書店があるけれど、時間があったらここへ寄ってみたい」

「ああ、ここ。僕、ここの本屋の会員証を持っているんだ。コロンボに到着したら寄りましょう」

コロンボに向かう途中、私たちの車は、警察の交通取り締まりにあった。スリランカでも、日本と同じくこういった軽微な交通取り締まりはあるらしく、若いドライバーが追い越し禁止車線で追い越しをしたため、つかまったのだ。そうはいっても、あのスリーウィラーを追い越さなければ、いつまでも前へ進めなかったと思うのだが。しかし、この交通取り締まりのせいで、いろいろと手続きに時間がかかったのだ。ドライバーは後日、改めて警察に行かねばならないらしい。外国人客を乗せた高級車だから、目をつけられたのだろう。取り締まりにあったおかげで、私たちのコロンボ到着は遅れた。夕方のコロンボ近郊は渋滞していた。

「本屋に着くのギリギリかな。間に合わないかもしれない。本屋に着いたら、すぐに降りられるように、キタさん、左側に移って。左のドアから降りるからね」

助手席のアヌラは言った。車が本屋の前に横付けにされる。

私とアヌラは、車の左側の扉を開け、本屋の前に立った。
　ところが、本屋は今まさにしまったところ。アヌラが、シャッターを下ろしている店員と交渉する。日本から来たお客で、スリランカの詩人の本を探していると交渉してくれたのであろう。奇跡的に本屋は再度、扉を開けてくれた。
　中に滑り込み、二階の英書のフロアに上がる。アヌラが私がガナナート・オベーセーカラの英語の本を探していると伝えてくれるが、書庫にしかないと言われたという。書庫の係がすでに帰宅しており、お目当てのものは買えないらしい。
「アヌラ、いいよ。スリランカで本屋に入れただけで私は十分だから」
と言う。
　アヌラと私は、仕方なく本屋のガラス扉を出た。すでに、そこはシャッターが閉まっている。横の従業員通用口から出るしかない。だけど、そこで、アヌラが言った。
「キタさん、ちょっと待って。ほら、見て」
私は、顔を挙げて、本屋のエントランスの上部を見る。モノクロームの肖像写真がいくつか飾ってある。
「ほら、マザー・テレサ」
確かに、マザー・テレサの写真だ。更に、アヌラは指さしながら、続ける。
「トマス・ジェファーソン。エイブラハム・リンカーン。マーティン・ルーサー・キング」
　そこには、大きく伸ばしたいくつかの肖像写真が飾られていたのだ。すべて、人権や平和のために闘った偉人たちの写真であった。これは、何か偉人の伝記集の宣伝なのだろうか。しかし、コロンボの一番大きな書店のエントランスにこれらの肖像写真を見つけ出した、アヌラは誇らしげであった。私は、そのアヌラの態度に、スリランカという国の、スリランカの人々のプライドを感じた。アヌラに続いて、私も、肖像写真を指さしながら繰り返す。
「マザー・テレサ。トマス・ジェファーソン。エイブラハム・リンカーン。マーティン・ルーサー・キング」
　確かに、アヌラの中には、タミル人やイスラム教徒への嫌悪の思いがある。しかし、そんなアヌラでも、自分の国が、こういった偉人たちへの敬意を抱いていることを誇りに思うのだ。アヌラだけでなく、もちろん、私の中にも自分では気が付かない差別や偏見の思いはあるであろう。それでも、そんな私でも、今ここでアヌラと偉人たちの名を確認するのは、誇らしかった。ほんとうの闘いとはお互いのヴァイタリティーを競うこと。互いの、そして自分のヴァイタリティーを確認すること。孔雀の踊りを見たときふと思った随想を思い出す。これらの偉人も、勇気を持って、なにか乗り越えたいものの上を歩いてきたのだろう。それが非常に困難な熾火のような熱いものであったとしても。私も、再び、足の裏の熾火のような何か熱いものを感じたのであった。明日より、また、私もしっかりと歩いていかねばならないと。
「さあ、行きましょう」

アヌラが言った。書店から戻った私たちを乗せて、車はバンダーラナーヤカ国際空港へと向かった。

（西区）

［入　選］

最後の授業

長崎良夫

タナカ校長先生は、服装を整え一人、静かに校長室で大きく深呼吸をした。全校の子どもにお話をする前にする時の彼のルーティンだ。

人前で話をすることが多い仕事だ。

「さすが、慣れているね」

「いい話だね」

と仲間に言われることもある。ほめられて悪い気はしない。けれども、やはり事前の準備が大切だ。そうでなければ、よい話だってできるわけがない。

しっかり準備をして臨んだお話は、子どもたちも真剣に聞いてくれる。子どもたちは素直で正直だ。それと同時に怖いと感じる瞬間だ。

聞きかじりの浅い知識で話すお話には、重みと深みがでない。当然のことながら子どもたちは「うそだ」という視線を送る。これに耐えられずにしっかり予習する癖がついた。

特に低学年の子どもたちはするどい。つまらない話には、思いっきりあくびをされてしまう。それに、体育館の外の景色の方が彼らには魅力的だ。

大人だったら、聞きたくもない話も我慢して聞いてくれる。それに校長先生だからとちょうちん持ちの輩が、ひとまずお世辞を言ってくれる。それに乗っかってしまえば、本当に自分を見失ってしまう。先生は、やはり、子どもたちの前に立って子どもたちに「すごい」と評価されてこそ本物だ。

今日のお話は、相当時間をかけて練ってきた。自分自身のお話をしようと思っている。いつもは、大きく深呼吸をゆっくり三回する。そして、左右のほおを一回ぴしゃりとやって「よし」と気合を入れて体育館に出向く。

ところが、今日はなんだかいつもとちがう。気合が、入るというより気持ちが入り込みすぎているようだ。これでは、子どもたちの顔をよく見てお話が出来ない。そう思って再び深呼吸をした。今日のルーティンは、いつもより念入りだ。もちろんそれには理由がある。

これが、全校の子どもたちの前でする最後のお話だからだ。今日は、かもめ小学校の卒業式。そして、それはタナカ校長先生にとっても校長先生を卒業する日だ。

深呼吸をするといつも心が落ち着くのに今日はやっぱりむずかしい。目を閉じて、もう一回やってみた。

すると、今までの教員生活の思い出が、走馬灯のようにま

ぶたに浮かんできた。そして、ある場面となって止まった。そこには初めて、教壇に立ち、小学校三年生の子どもたちの前に立つ自分がいた。

あの頃の学校は、のんびりしていた。もう三十年も前のことだ。元号だって昭和だった。あの頃は、先生たちも子どもたちも成績なんて気にせず、遊んだり、けんかしたり、笑ったり、泣いたりしていた。それが、学校生活の中心だった。そして、時々まじめになって勉強していた。

タナカ先生だってそうだった。先生というよりはクラスの大きなお兄さん、それよりはガキ大将みたいなものだった。勉強を教える仕事というよりは、自分は子どもたちと深く同じようなレベルでつながっている子どものような大人だった。それが、許されていた。

朝、受け持ちの三年二組の教室へ行くと子どもたちが、何やら騒々しい。何か事件が起こっているのだろう。盛り上がっていた。

また、よからぬことを考えているなと思っていると早速ナンバーワンのいたずらっ子のケイ君が、そろそろと自分の側にニコニコニヤニヤしながら寄って来た。大体こういうときは怪しい。

「ねー、先生、イルカ浜にイルカが打ち上げられているよ」と教えてくれた。

「ふーん」

と何気なくスルーしようとした。今日は、研究授業の前日だ。いろいろ子どもたちのリクエストにばかり対応してばかりはいられない。

そんなことを考えていると子どもたちは、わたしの考えを見透かしたのだろうか。

「先生、見たい、見たい。見に行こうよ」

「海の本当のイルカ見てみたい」

いつもはあんまり話をしない志保ちゃんまでも小さな声で

「わたしも、行きたい」

と言った。すぐさま、タナカ先生は、自分の考えを変更した。

「よし、イルカ浜に理科の観察に出発だ」

と言った。子どもたちは、

「やった。やった」

大よろこびで歓声をあげた。そして、気の早いつかさ君は、もう赤白帽をかぶり、出かける準備に取り掛かっていた。みんなが、わくわくそわそわし始めた。

「みんな、ちょっと早すぎる。ちょっと待って。先生が、校長先生の許可をとって来るまで待って。それから、行こう」

そう言ってタナカ先生は、校長室に一目散に向かった。さくら小学校のやました校長先生に大きな声で

「やました校長先生、突然ですが、イルカ浜に理科の観察に行ってきます。よろしいでしょうか。子どもたちも張り切っています」

と元気よく言うと校長先生は、難しそうな本から目を上げ

「おう、行ってきな」

と言って、こう続けた。
「今日は、一昨日の嵐の後だ。いろんなものが浜に打ち揚げられているかも知れないな。もしかしたら、すごいものがあるかもよ。子どもたちといっしょになってよく観察して来てごらん。きっとすごい発見があって子どもたちうんと喜ぶぞ。タナカ先生、気をつけて行って来いよ。頼むぞ」
と言った。
タナカ先生は、やっぱり、校長先生はさすがだなと思った。ぼくが、何も言わなくてもお見通しだ。
「はい、校長先生。安全に注意して。行って来ます」
大きな声でそう言うと校長先生の
「はいよ」
という声を背中で聞き、みんなの所に戻って行った。
やました校長先生は、子どもたちといっしょになって遊んでいることが多い。そして、いつもおだやかに笑っている。子どもの前で、先生が怒っているところを今まで見たことがない。
しかし、校長室で一人の時はむずかしい本を読んでいることが多い。今日も読んでいたのは、「ソクラテスの弁明」だった。やました校長先生が、本当に理解しているのかは怪しい。けれども、いろいろむずかしいことを言わないから良しとしよう。そして、いつか自分も年をとったら、やました先生みたいな先生になりたいなとその時思った。

ところが、三十年後の今の自分はどうだろうか。つい先日、若手のヨシダ先生がタナカ校長先生のところにやって来た。
その時、自分は校長室で市の教育委員会から送られてきた教育資料を読んでいたところだった。教育委員会からの指示・伝達事項については、しっかり読み込み、自分の学校では、その内容についてもらさず、確実に実行することが大事だ。
学校のある市の教育委員会、教育長から言われたことをしっかりやることこそ大事なことだ。それが、学校経営の基本だ。そんなことを考えながら、じっくり、おもしろみのない文書を細かくていねいに読んでいた。
果たして、これが本当に子どもたちのためになるのだろうか。大人達の利権や名誉のために動いているような気もする事業も少なくない。ただ、それを言える立場ではないと自分に言い聞かせた。
しかし、子どもたちや先生たちには、学校ではこう説いている。
「これからの社会は、知識偏重社会となる。その社会を生き抜くためには自分で考え、判断して実行していく力が必要だ。そのためには自分で課題意識を持ち、判断に責任を取れる自立した人間になることが要求される。失敗してもよい。前向きに自分や社会を改革していく気概を持つ未来を切り開く人間になって欲しい」
何度も繰り返して言ってきた。しかし、当の自分はどうだ

ろうか。子どもたちもきっと見透かしているのではないだろうか。けっして口には出して言っては来ない。

しかし、いろいろな受け売りの言葉も繰り返すうちにスラスラと話せるようになってきた。あれ程、違和感を持っていた文言でさえ、言い続けるということは恐ろしい。歯の浮くような台詞だって口先から流暢に流れ出るようになってきた。

すると、それが、本当に自分自身の言葉にもなってくるように錯覚する。きっと役者や政治家はこんな気分で話しているのではないのだろうか。そんな風に自分は考えるようになってきた。

でも、自分は教育者だ。子どもたちの世界に住み、子どもたちにわかる言葉で教えなければならない仕事だ。そして、常に子どもたちの味方でなくてはならない。この両挟み(ダブルバインド)に苦しめられる。だから、無理して大きな声で子どもたちにお話をする。

しかし、低学年の子どもは、素直で正直だ。タナカ先生の言葉に「本当なの。校長先生、本当にできるの。本当のこと言っているの」と不思議そうな目をして私の顔を見つめる。

その時、何かの拍子でどこからか声が聞こえるような気がする。「せんせい、あなた、本当に自分自身は本当に出来ているんですか」という女の子の声である。

確かに、聞こえる子どもの声だ。誰の声だろう聞き覚えがあるのだが、なかなか思い出せない。教職も終わりに近づいてきてことさら、この声を聞く回数が増えてきた。

本当は聞きたくないその言葉が聞こえる時には、タナカ先生は大きく首を横に振り、心の中で「聞こえない。聞こえない。空耳、空耳」と打ち消してしまった。

つい先日のことだ。若手のヨシダ先生は、屈託ない笑顔で校長室のドアを開け、タナカ校長先生に大きな声で言った。

「校長先生、理科の観察でイルカ浜に行ってきたいのですけどよろしいでしょうか。ぼくのクラスのけい君です。あの、ちょっと落ち着かないけどにくめない子です。先生もご存知でっすよね。彼が，昨日なんとイルカ浜にイルカが打ち上げられているのを見つけたそうなんですよ。それで、もうクラスで盛り上がっちゃって。よし、それじゃー理科の時間の観察にしよう、見に行こうということにクラスでなりまして。もう子どもたちは早く行きたくてしょうがない様子です」

今時の初任の先生は、本当に大事に育てられたのだろうと思う。屈託のない笑顔と誰からも大事にされてきたのであろう無防備さと礼を失する言葉遣いやなれなれしさが共通するのが特徴だ。敬語と仲間言葉が混在し、明らかに大人の言葉を使用できない。

思ったことは正直にストレートに伝えようとする。相手に対する配慮のなさは豊かな世代ゆえの特徴だろう。いつも、やさしさと暖かさに包まれて育った人間の特徴だ。

反面、感情もストレートでいやなことがあればすぐに顔に出る。自分が受け入れられないことに対する苛立ちがすぐに

顔に出る。いわば、小学校の高学年程度のメンタリティである。しかし、メカには強く、数値化や分析力など客観的に判断する力は強い。ただ、いろいろな体験や文章をじっくり読んでいるとは思えない。

きっと、やさしい穏やかな周りの大人に囲まれた結果、それが基準になり、そうでないかかわりには想像を働かせることが難しいのであろう。けっして、彼らが悪いわけではない。だから、責められる筋合いのことではないかもしれない。

しかし、現実には他者への、配慮にいちじるしく欠ける多く事件が発生する。他人の心の機微や変化に弱く、うまく折り合いがつけられないからだ。特に経済的な弱さや発達に関する遅れをもった子どもに対するケアや保護者への配慮に欠けることが多い。保護者に対して難しい要求も当たり前のようにはっきり言う。例えば、こんなことがあった。

忘れ物が多い3年生のしんいち君にヨシダ先生は忘れ物チェックカードを作ってあげた。ここまでは、個別の配慮であり、申し分のないよいやり方だ。子ども一人一人の特性に応じた配慮（合理的配慮）を進んで取り入れようとする。今までだったら、案外、その子のせいにされ先生があまり介入しなかったことにも積極的だ。

「ヨシダ先生、なかなかやるじゃないか」

と以前ほめたことがある。すると

「タナカ校長先生、基礎的環境整備という言葉をご存知ですよね。障害に関わる合理的配慮の前段階ということです。インクルーシブ教育システム構築に向けた取り組みとして基礎的教育環境整備を図っていかねばなりません。当然のことながら、それぞれの子どもの学習権の保障は教員としての職務ですよ」

スラスラと面接試験の模範解答のような言葉が返ってきた。

「さすが」

と言うとその言葉のニュアンスは受けとらず

「ありがとうございます。でも、当然のことです。ぼくは、教育学部出身で特別支援教育専攻ですから。最新の教育に関して習ってきたわけですから」

と屈託なく言い放った。タナカ校長先生は、彼は、本当は大学の先生になればよかったのではないかと思った。しかし、首を振った。彼は、たくさんの知識を持っている。その知識を生かして子どもたちと一緒に遊んで学ぶ先生、私たちの仲間になってもらわなければならない人だと自分に言い聞かせた。

ヨシダ先生オリジナルチェックカード。なかなかの出来映えであった。どうやら、大学の研究室の先輩から指導を受けたらしい。本人曰く、応用行動分析のインリアルアプローチをバックボーンとして作成したらしい。タナカ校長先生は、同じ学年部のスギタ先生から教わった。

スギタ先生はスペシャリストで実践家だ。特に発達に遅れのある子や生活苦の家庭に対する指導が上手だ。困ったこと

があると保護者は、大体スギタ先生を訪ねて来る。それは、もちろんスギタ先生を信用して頼りにしているからだ。

先生は、家が貧しく新聞配達のアルバイトをしながら、苦学の末やっと教員になった。そのせいからか困っている家庭に対する眼差しはあったかい。これは、先生にとって大きな資質である。決して要求を突きつけるだけでなく、保護者を労り、認め関わっていく。

見てくれは野暮な感じがするが、タナカ校長先生が最も信頼する先生の一人だ。クラスにどんな問題が起ころうともスギタ先生のクラスなら任せておいて大丈夫と思える先生だ。一つの小学校にそうはいない本当に信頼のおける先生だ。だから、その学年部に新任のヨシダ先生を配属した。今回の人事では、最もうまくいくであろうと考えた配置であった。スギタ先生なら、どんな新採用教員だって一人前にしてくれるはずだ。そうタナカ校長先生は踏んでいた。しかし、スギタ先生は

「今の新任の先生は、昔と違ってむずかしいですよ。なかなか私の言葉を聞こうとしないし、話し合いの途中、スマホで何か調べはじめたので注意したんですよ。

すると

『だって、不確かな事実で議論するより、確実な情報を用いてやった方が科学的だし、よいでしょ』

ですよ。さらに

『私が、先日、ごみステーションに一緒にごみ出しに行くか』

と誘ってみました。

『今、授業の準備中です。手が離せないので後にしてください』

『わかった。一人でやるよ』

と言うと

『ありがとうございます』

ですよ。しかも、パソコンの画面を見ながらです。もう何がなんだかわからなくなってきました。

確かにもう、私が時代遅れなんでしょうかね」

タナカ校長先生もうなってしまった。確かにむずかしい時代に差し掛かっていることには違いない。しかし、先生としての大事なものを若手に伝えなければならないという我々に課せられたミッションがある。

肝いりのヨシダ先生作成のカードであるが、家庭ではうまく利用されない。しんいち君のお母さんは、自分の親の介護もあり、どうしても十分にしんいちくんを見てあげることは出来ないからだ。そういう、それぞれの家庭の持つむずかしさを慮ることが出来ない。子どもは単独な存在というわけではない。その後ろにそれぞれの家庭があり、地域がある。

ある時、ヨシダ先生が、職員室で電話をかけていた。どうやら、しんいち君のお母さんに電話をしているようすだった。

「お母さん、せっかく私がしんいちくんのために特別に作ったチェックカードを使ってください。そうでないとしんいち

くんの忘れ物はいつまでたってもなくなりません。学校の指導に協力してください。おねがいします」
と用件だけ言って電話を切ってしまった。
　職員室にその瞬間に入ってきた学年主任のスギタ先生が、ヨシダ先生に
「おい、まさか、今の電話、保護者に対する電話じゃないだろうな」
「そうです。しんいちくんの家に電話をかけました。学年会でも話題にしていた忘れ物に関する件です。ちっとも家庭が協力的にならないものですから、ちょっと喝を入れようかと思って電話しました」
と何食わぬ顔で応じた。
「保護者に電話連絡するときは、主任に聞いてからするように言ったよな」
「はい。しかし、軽い連絡程度のことなら、かまわないとこの前おっしゃいました」
スギタ先生は、確かにこの前の会議でそう言った記憶がある。
「しかし、一方的な要求やお願いが、軽い連絡程度ではないだろう。」
と強めに言った。すると、もう涙ぐんだ目で
「具体的に軽い連絡程度とはどういうことか書面で示してください。そうしないと私には理解できません。」
とはっきりとした口調で言った。スギタ先生はやれやれといった顔で
「わかった。俺の説明のしかたが悪かったようだ。今度、書面で知らせる。だから、今後は俺にまず話をしろ」
と言った。すると、自分が悪くないと感じ取ったのだろう。一瞬で顔色は晴れやかになった。スギタ先生は、これからは学級での子どもの指導より、職員室での先生の指導の方がはるかにむずかしくなるだろうと思った。
　そう考えると漠然とした不安に駆られ、暗い気持ちになった。少し気分を変えようと視線を横に向けるとタナカ校長先生がいた。
（おれも同感）という顔を校長先生がしていた。スギタ先生もこれが、自分だけの感覚ではないという事実に少し救われたような気がした。けれども、それでは何も解決したわけではない。やりきれない気持ちに覆われた。なんだか、学校は本当にむずかしくなってきているような気がしてならなかった。

　タナカ校長先生は考える。新規採用教員に対しては、できるだけ落ち着いて話さなければならない。そして、こちらの常識と思われることも細かく説明しないと即座に
「聞いてない。指導されていない。私は悪くない」
と切り返される。全部が全部、他人から指導されるわけがないだろう。そんなこともわからないかと腹を立てそうになるが、それでは、この仕事は務まらない。子ども同様に職員に話をわかるように伝えるのが校長の務めだ。

タナカ校長は少し間を置いてゆっくり新任のヨシダ先生に言った。

「校外学習届けは、事前に出ていますか。計画的に教育課程を確実に進めていくのが教員の仕事です。思いつきでいろいろやることが子どもたちのためになるとは思えませんよ」と言った。

できるだけ淡々と根拠に基づき無機質に話した。昔の自分だったらこんなことは絶対に言わなかった。きっとこう言っただろう。

「おう、行ってきな。今日は、昨日の嵐の後だ。いろんなものが打ち揚げられているかもな。きっとびっくりするものがあるぞ。子どもたちといっしょになってよく見てきなよ。気をつけて行って来いよ」

その言葉を素直な気持ちで聞くだろう。そして、ヨシダ先生は、やっぱり、校長先生はさすがだな。何も言わなくてもお見通しだと思うだろう。

教員は、子どもたちを指導するばかりでなく腕白なガキ大将的な一面ももち合わせている。そして、それが子どもたちにとっても魅力的な先生となる。いつも、子どもたちは先生という監督に見張られているわけではない。先生のクラスの一員的な振る舞いがクラスの凝集力を高めるのだ。しかし、政治家や行政マンはこの先生の特殊な仕事と役割を理解しているといいがたい。と言うよりわかっていない。勉強を教えることにばかり目がいきがちであるが、本当に大事なのはクラスに仲間意識を芽生えさせ、良好な人間関係作りの基礎を作ることにある。

仲間といることのよさと大切さをそれぞれの子どもたちが思えるように仕向けることが先生にとって大きな役割である。しかし、これは数値化や客観的に測ることがむずかしい。

大事なこととはわかりつつ、おのずとそこには、スポットは当たらず見逃されていってしまっている。

そして、いつの間にか大人社会のルールやテストの成績という一面のみで子どもはとらえられるようになる。いわゆる、決まりきった解答に対し、正確に早く処理できる力だ。

しかし、人間社会においては決りきった答はないという方が、正しいかもしれない。ようするに完全な正しい答は少ないというより存在しない。生きている人間たちが、それぞれの立場やこだわり、考えを尊重しあい答を作り出していくしかない。それが、本当の答というしかないのだ。

お互いが理解しようとする心とそれぞれを認める心を持たなければ問題の解決はありえない。そのトレーニングをする大切な時間を過ごす空間であり、場所が学校である。泣いたり、笑ったり、けんかをして生きていくための問題を考え、少しずつ解決し生活する時間と空間である。その経験をつませることが大事なのに少子化の中、怪我をさせず、けんかをさせず問題回避をした結果が、今の世相や人間を象徴している。

事故の起こらないように、失敗が起きないように作られた

空間は、いつの間にか子どものために作られたはずの空間なのに大人の都合のよい空間作りに変わってしまった。その中で作られた教科学習の課題を上手にクリアーしてきたであろう学生が、教職員となり、教育現場は混乱しているのが現実である。

大人たちが一所懸命考えた学習課題や問題も大切である。しかし、いろいろな人間が生活する中で起こる問題は教科書の想定を超えている。想定外のことが起こって、計画通りに進まないことの方が多いのが現実である。

今まで何となくうまくいっていたことだって、そのままで、これからうまくいくわけではないと考えなければいけないだろう。

「子どもたちの気持ちを大事にしよう」「子どもの気持ちに寄り添った指導をしよう」タナカ校長先生は、先生たちに常日頃言っている。それは、学校においては、こう置き換えることができるだろう。「先生たちの気持ちを大事にしよう」「先生の気持ちに寄り添った指導をしよう」

校外に出ようという気持ちが高まった時に杓子定規に決まりごとを持ち出すことが大事であろうか。実際、そんなことを言われらどうだろうか。ヨシダ先生はどんな気持ちだろうか。現場の先生たちはやる気を出して子どもの指導に取り組むだろうか。ましてや、校長先生のことをさすがだと思うだろうか。確かにこの三十年の間に何かが変わって何かが狂ってしまったことには間違いない。

子どもの事故が大きく取り上げられ、学校の管理体制に対する世間の目は厳しくなってきた。どうしても、その責任者である校長は、守りに行く。大多数の校長がそう考えるようになればそれが学校の常識になってしまう。

それは、確かに社会の変化である。そうかも知れないが、それに抵抗できずに迎合した自分自身の責任であることも間違いない。三十年という時の移ろいが、一瞬にして自分の心の中で動く感じがした。

いったい自分は何をやってきたのだろうか。子どもたちの前でたいそう立派なことを言ってきた。しかし、何一つ自分が出来ていないではないか。有名人や偉人の言葉を子どもたちに説いてきた。確かに子どもたちにわかりやすくと心を砕き一生懸命調べて話した。

しかし、果たしてそんなレベルに到達できる人間はどれだけいるのだろうか。ほんのわずかな一握りの人たちが到達できる世界の話である。それをあたかも努力すればできるなどという言葉で語っていた。それは、よく考えてみれば、いやよく考えなくてもわかる。本当は、多くの人の手の届かない世界である。

もしかしたら、若さゆえの傲慢さゆえの言葉だったのかもしれない。努力だけで報われない。多くの人たちにとっての現実である。

甘い夢のような話とは違い厳しいものである。その現実を

知っていながら、いや、理解しながら話す内容であっただろうか。それは、詭弁であろう。

退職の年、最後の卒業式にむけて書いてきた言葉を今一度読み直した。推敲に推敲を重ねた原稿だ。

平成三十年度　第百回卒業証書授与式　～学校長式辞～

厳しい冬を乗り越え、優しく柔らかな日差しと共に、校庭の桜の蕾が膨らみ始めました。

木々にも新芽が伸び、春の息吹が感じられるこの良き日に、サクラ市のカワサキ市長をはじめ、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、平成三十年度第百回サクラ町立サクラ小学校の卒業証書授与式を挙行できますことを、心より御礼申し上げます。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。先ほど、一人ひとりに卒業証書を手渡しました。卒業証書を受け取る皆さんの姿は、希望に溢れキラキラと輝き、とても立派な姿でした。

きっと皆さんの心の中には、入学の時から今日までの様々な思い出が、たくさん浮かんでいることと思います。

本日、ここに百二十名が六年間の小学校生活を見事に終え、このような素晴らしい卒業の日を迎えました。今日の卒業は、小学校生活を最後まで自分が全力で頑張り通した結果です。全員が大いに胸を張ってください。

今日は、卒業に際して「巣立ち」にちなんだお話を紹介します。

鷲は他の鳥とは異なり、断崖絶壁に巣を作るといわれています。その巣は、まず野バラなどのトゲのある枝をしっかりと組み合わせて外枠を作ります。

その内側に木の葉などを敷き詰め、最後には自分の柔らかく暖かい羽毛を重ねて敷き詰めるそうです。そして雛がかえると、親鳥は精一杯の努力をしながら、餌を与え懸命に雛を育て、その成長を見守り続けます。

しかし、雛がもう十分に独り立ちできるようになると、巣立ちを促します。親鳥は、巣の内側にあった柔らかい羽毛と木の葉を、すべてくちばしで外へ散らしてしまいます。

すると、巣には鋭いトゲのある枝しか残りません。雛は巣から飛び立とうとしますが、高い断崖絶壁から中々飛び立てません。

しかし、枝にしがみつくとトゲが刺さります。どうすることもできなくなった瞬間に、雛は思い切って大空へ飛び立つそうです。これが「巣立ち」となり、雛は自分の翼で飛べることを、この時初めて実感するそうです。

皆さんも、この六年間で色々なことを経験しながら、大きく成長しました。日々の授業、たくさんの学校行事、クラスや学年での取り組みなど、様々な場面を振り返った時に、自分の成長が実感できるはずです。

大切なことは、頑張ってきた自分をちゃんと自分で認められることです。頑張ればできるのです。それが自分の自信となるはずです。

小学校の卒業は、今までの少年時代との別離であると同時に、新しい青年時代への出発でもあります。皆さんが大人へ近づく新たな「巣立ちの日」です。

大きな広い社会で自分なりの人生を進んでいってください。それは、自分らしく生きることであり、決して一番を目指すだけのものではありません。

誰にも真似できない自分なりの人生を生きていって欲しいと願っています。

これから始まる中学校生活では、先生や家族や友だち、色々な人に相談することがあっても、自分がどうなりたいのか、何をしたいのかは自分が決めることです。それが、まさに校歌の歌詞にある「希望輝く明日を求めて」です。

夢や目標の達成には、自分自身で選択し判断するしかありません。「自分のことは、自分自身で考えて決める」ということです。

それが、校訓の目指す「生気あふれる明日を目指して」につながる第一歩です。

卒業生の皆さん、サクラ小学校が、あなたたちの母校、ふるさとです。いつでも帰ってきてください。先生方は、皆さんが顔を見せてくれることを楽しみにし、いつでも優しく迎えてくれます。

最後になりましたが、保護者の皆様、本日のご卒業おめでとうございます。これまで、本校の教育活動にご理解ならびに多大なご協力を賜りましたことに、心より感謝し、御礼申し上げます。

お子様は、これからの中学校・高等学校でより大人として、時には辛いことや苦しいことにも出会うこともありましょう。

しかし、これは大人になるために必要な成長過程です。どうぞこれからもしっかりと見守りながら、子どもたちの持つ力を信じて、子どもたちの自立を応援してくださることを重ねてお願い申し上げます。

そして、私たち教職員は、子どもたちの永遠のサポーターとしてあり続けます。以上をもちまして、はなむけの言葉といたします。

鷲に関する話モチーフにして子どもたちに話をした。大好きな鳥の話で「最後の授業」を締めくくろうと思ったからだ。そして、その中でも最も好きな鷲の生態に関する話を選んだ。

日本において、生態系の一つの頂点に君臨するのが、鷲や鷹などの猛禽類である。

猛禽類は、他の動物を捕食する習性のある鳥類の総称をいい、獲物を捕まえるための鋭い爪、掴む力が強い趾、鉤型に曲がった嘴を持つことが共通の特徴だ。

その強さ、気高さは、古来より人々の敬意とあこがれを集めている。プロ野球球団のイーグルス、ホークスといったようなチームの名前や、戦闘機、バイク、クルマの名前としてもよく用いられる。現在、世界最強の戦闘機である、Ｆ２２

の通称は「ラプター」、まさに猛禽類という意味である。
戦国武将たちは、鷹の威厳あるその姿に魅せられ、タカを飼い慣らし、鷹狩に興じた。この文化は今にも伝わっている。
これらの猛禽類について分類学者リンネは狩りをする鳥を単一の目（もく）にまとめた。
鋭い爪とくちばしなど共通の特徴を持つが、形態的解剖学的研究が進むと、これらの外見上の類似は表面的なものであることが明らかとなり、狩りという習性に基づく進化結果とみなされるようになった。
ワシタカ類とフクロウ類はタカ目とフクロウ目に分けられた。近年ではハヤブサはタカ目から区分されハヤブサ目というカテゴリーの猛禽類としている。
また、ワシタカ類は体の構造ではフクロウ類よりもむしろコウノトリ類に近い構造をもつことが分かってきた。１９９０年代以降に発達したＤＮＡ分析による鳥類分類でも、この類縁性が支持されている。
鷲と鷹とでは、生物分類学的に違いがないということになった。したがって、両者の区分はあくまでそれまでの呼称の慣習に基づくものであり、ワシ（鷲）とはタカ目タカ科に属する鳥のうち、オジロワシ、イヌワシ、ハクトウワシなど、比較的大き目のものを指す通称となり、タカ（鷹）とは、タカ目タカ科に属する鳥のうち、オオタカ、ハイタカ、クマタカなど比較的小さ目のものを指す通称ということになっている。
鳥の子どもの成長は実に早い。高等な生活を営むサル類などの哺乳動物と比較すると、鳥類の一人前、すなわち巣立ちまでの時間は非常に短い。巣から早く出て、早く一人前になってもらうためだ。そうしないと親鳥も子も生き残れないからだ。
哺乳動物がお乳を与え、親といっしょにいることで子を着実に養育しようとするのとは異なり、大空を飛ぶ鳥にとって巣でヒナを育てるとき、早くヒナを巣の外に誘い出しトレーニングさせることは生き残りにとても重要なことである。ヒナは巣から出なければならない宿命を負う。
若い頃から山に行くのが好きだった。大自然の中で、たった一人で佇んでいるといろいろなわずらわしさから解放されるような気がしたからだ。
対外的には仲間が多く、賑やかな場が好きな明るい性格だと自分では思う。しかし、人間はそれだけで説明できる簡単なものではない。やはり、誰もが一人で生まれ、一人で死んでいく孤独な存在である。そんな孤独な心を鳥に投影したかったのであろう。孤高なイメージの鷲が悠々と空を飛ぶ姿にあこがれた。
そして、その様子を観察することも自然と好きになった。もっとよく見たいと望遠鏡を求め、その動きに魅了されるようになった。
仲間には、「何で、一人で山に行くの」
「一人ぼっちで寂しくないの」と聞かれることがある。その

度に
「歩くのがゆっくりでみんなと一緒に行くと迷惑をかけるから」
と言って言い訳した。
ハイキング好きの友達から
「いっしょに行こうよ。みんなと行くと山は何倍も楽しいよ。それに一人で行くと危険な年になって来たんだよ」
と言われることもある。
「まー、山と言ってもすぐ戻れる程度の山しか行かないから」
と笑って返した。
きっと仲間と行く山はそれなりに楽しいはずだ。冗談を言い合い、仲間の様子を話したり、面白い話で盛り上がったりすることは間違いない。それは、それで楽しい時間であることには違いない。どうしても他人に見せる楽しい自分になってしまう。
だから、誰にも見せない本当の自分と向き合う時間は、自分自身を保つのにはどうしても必要な時間だ。そう心得ているからきっとみんなの誘いに乗らなかったのだろうと思う。

その日もいつものようにカバンからそそくさと望遠鏡を取り出し、鳥を観察し始めた。
大きな自分にとってシンボルとなるヒノキを中心に見渡すのがいつものルーティンだ。
数百年の時を同じ場所で生き続ける木には、それだけで崇高さを感じる。幾年もの厳しい風雨に耐え生き延びた忍耐と力強さを感じる。
以前、その木の下まで歩いていった。真下から仰ぎ見るとその木は果てしなく空に繋がるような気がした。
そして、それと共に何かに抱かれているような感じがした。大きな自然の中に存在するちっぽけな自分自身が案外気持ちよかった。
さっーと見渡し場所を見つけ、望遠鏡の焦点を合わせていく。季節ごとの移ろいを感じつつ、同じでありながら常に同じでない景色を見渡す。その木の中程に目をやるとあのイヌワシが巣を作っているシーンを見つけた。
びっくりした私は、望遠鏡を覗いていることさえすっかり忘れてしまった。
まるで、それを近くで見ているかのような錯覚に陥った。イヌワシに気づかれないように自分の身を小さく丸めて夢中になって望遠鏡を覗きこんでいた。
イヌワシの巣作りについては、思いの外、簡単に図鑑やユーチューブの画像で見ることができる。確かにプロに近い技術をもった人たちがとった画像は焦点化され見事だ。
しかし、この瞬間は違う。実際にその場面に出くわしている。いくらきれいな整った画像を心地のよい部屋の中で見ていてもそれはどこか他の場所で起こった現実だ。
実際の瞬間をリアルに見るのとでは明らかに違う。それは、比較にはならない現実・本物であるからだろう。若者が

ライブにあこがれ、足しげく通うのも当然だ。ゆれる木々が視界をさえぎるが、息をこらして望遠鏡の先の様子に神経を集中させた。

一心不乱に巣を作る親イヌワシの様子は、鬼気迫るものであった。しかし、垣間見るその目は、慈愛に満ちたものだった。

よく見ているとイヌワシのくちばしは、赤く染まっていた。きっと硬い、枝を運ぶ内に傷つけてしまったのであろう。その傷に負けずに生まれて来る卵のために準備を確実に進める。子どものために親は、自分を傷つけることをも厭わない。

そして、骨組みが出来てからは、自分の羽を抜き居心地のよいベッドを作っているようだった。毛を抜くときのゆがんだ表情、さぞ痛かろうと悲しくなった。

生まれくる子どものために本もマニュアルも知識もないのに自分を傷つけて準備をしようとする。あふれんばかりの子育て情報を持ちながらも子育てがうまくいかずに人間は苦心している。たくさんの情報・サービスが、もしかしたら人間を余計に混乱させているのかもしれない。

人間に比べ、子どものために身を傷つけてでも親の役割を果たそうとする親の営みは、やはり崇高な行為であると思う。子育ては、生物の宿命とも思われる共通の行為である。

しかし、霊長目の哺乳類。動物界の中で最も進化の程度の高いとされるヒトは、これに躓いている。いろいろな知識や技術は、ヒトを文化的で豊かな暮らしへと導いた。それに伴い生物としての基盤となる子育てをいつの間にか忘れてしまったのかもしれない。

学校における保護者は、当然のことながら子どもの親である。学校を会社に例えるなら保護者は学校にとって顧客である。顧客の要望は最優先されるのは資本主義社会では当たり前である。

その顧客と同一歩調で教育活動を進めるのが学校の本来の姿であろう。それが、近年揺らいでいるのは紛れもない事実である。

きっとそれは、科学技術の進歩やコンピューターの進歩による人間社会の自然からの離脱に起因するのかもしれない。

豊かで文化的とは、人間に都合のよい仕組みである。それは、一面においては自然を克服した姿とも取れるが、ある面、本来の自然からの大きな隔たりを作ったとも解される。暑さ、寒さなどの自然現象を受け入れ共存しながら生きていくのが本来の生き物の生き方であろう。

しかし、科学技術の進歩は人間の欲求に応じて大きく発展した。それは、人間にとって都合のよい世界、つまり、都市社会を作り上げた。その中で、安全に生きることを目指し発展を遂げた。しかし、制御できない近年の大きな自然災害には歯が立たず呆然とするばかりである。科学技術の進歩の限界を人間はうすうす感づき始めている。

自然の営みの中で動物たちは自分たちの種の保存を行なわなければならない。そう考えると、自分自身がこの目で見た

自然の姿、その象徴とも思えるイヌワシの巣づくりの話は最後の授業にぴったりの話だと考えた。

イヌワシの巣作りを見てから、その虜になった。自分一人でその様子を独占しているのも単純にうれしかった。

それから、毎週の山登りが始まった。ある日、枯れ木の間から巣を覗くと卵が見えた。私はその時、思わず「おめでとう」と言いうれしくなって一人涙した。まるで、自分の身内の出来事のような感じがした。

天候の悪い日に家人は「何もこんな天気の日にわざわざ行く事なんてないのに」と言った。

当たり前だろう。わざわざ、そんな日に山へ行く必要もあるまい。それは、当然のことである。

しかし、私には、山に行く必然性が当然あった。陰ながら、イヌワシを応援したいという気持ちだった。その気持ちが、山へと駆り立てたのだったのだ。

式辞が終わると、会場からは割れんばかりの拍手が巻き起こった。

何とか最後の仕事をやり終えた。タナカ校長先生は、ほっと胸をなでおろした。

そして、壇上からゆっくり会場を見渡した。

「お父さん、すごくかっこよかったよ。私にとって自慢の父さんだよ」あのいつものの女の子の声が、また聞こえてきた。

長女のマリ子の声だ。はっとしてみると6年生の一番後ろの席に長女のマリ子がいた。あの声は、そうだ、マリ子の声だ。自分の娘の声だったのだ。

自分の娘の声に教職最後の日に気がつくなんて俺も本当におろかなうつけだ。なんだか、全てがむなしく思えてきて、足元がぐらつくような気がした。

マリ子の方を見るとにこにこしていた。

家では、けっして見せたことのない笑顔だった。「おい、そんな顔、家では見せたことないじゃないか」すがるような思いで六年生のマリ子に尋ねた。

「どうだった。よかったかい、お父さんの最後の仕事は」マリ子はニッコリ笑ってこう言った。「お父さんは、低学年の子どもばかり担任の先生だよね。だから、六年生の女の子の気持ちにうといのよね。顔や声は、そっけなくしているようでも、心の中では、お父さんのこと大好きって思っているんだよ。だって、お父さんは、こんなに広い世界にお父さん一人しかいないでしょ。だけど、好きなのを正直に好きっていうことの方が、むずかしいでしょ。だから、今日は、正直な気持ちを言いに来たんだよ」そういうマリ子のほおには涙があふれていた。

タナカ校長先生は、今すぐにでも舞台から降りて自分の娘を思い切り抱きしめてあげたかった。そして、「学校のみんなの校長先生である前にお前のお父さんだよ」と言いたかった。マリ子の方を見ると何か話しているようだった。口の動きをよくみると

「大丈夫だよ、わかっているよ。お父さん。正直になれなかった私の方が、悪いんだよ」
「そんなことはないよ。ごめんね。お父さんは家ではお父さんでなくてはいけなかったんだ。そうわかっていながら、どうしても先生をやってしまっていた。おろかだったんだ」
長い間、のどにつっかかっていたものがスーッと取れたような気がした。
「そうだ、家に戻ったら思い切り抱きしめてあげよう」心の中で叫ぶと、今まで鮮明に見えていたマリ子がスーと消えてしまった。

なんだかすごい時間が過ぎたような気がしたが、拍手はまだ続いていた。ほんのわずかな時間だったのであろう。しかし、不思議な体験だった。しかも、体育館の舞台の上でこんなことが起きるなんて一体、何なんだったのだろう。
タナカ校長先生は、ゆっくり威厳を保ってしずかに礼をした。頭の中は、混乱したままだった。けれどもそんなことを会場のみんなに悟られてはならない。ゆっくり落ち着いたいつもの調子で壇上から降りた。そして、国旗、来賓にていねいに礼をして自分の席に戻った。
やはり、錯覚だったのであろう。マリ子がいたはずの席を見ると空席だった。もしやと思い、会場の中をゆっくり見渡して確認した。
やはり、六年生のマリ子はいなかった。

しかし、保護者席の片隅に実の娘のマリ子を見つけることが出来た。
たしか、今日の朝もそっけない様子だった。
「行って来ます」
といつもと変わらずひょうひょうとした感じの声だった。
「行ってらっしゃい」
私もいつものように返した。
すると今日は、一呼吸置いてマリ子からの声があった。
「お父さん、今日は最後の卒業式だね。今までがんばってくれてありがとう」
「なんだよ、柄にもないこと言うじゃないか」
「だって、校長先生は式辞を読むんでしょ。お父さんが、今年は暗記するくらい練習してたからすごいなと思ってね。お父さんの最後の授業だね。子どもたち、きっと真剣に聞いてくれるよ。きっとお父さんの思いは伝わるよ」
「何だよ。うれしい話聞かせてくれるじゃないか。マリ子が応援してくると思ったら力がわいてきたよ」
「お父さん、力みすぎずにこどもたちの顔をよく見て話してあげてね」
「わかったよ、ありがとう」
ほんの少しの会話だった。
にこっとしたマリ子は、何か思い出して言い出しそうな素振りを見せた。
しかし、それを打ち切るように

「じゃ、行って来るね」
とも一度踵を返し玄関をすーっと出て行った。
家のことは妻に任せ切りだった。家では、まったくだめな父親だった。そのせいか私と彼女の間には何か壁のようなものがあり、それが続いているように感じていた。もちろん、男親と娘ということもあるかもしれない。どこの男親だって感じているだろうことなのかもしれない。しかし、親としての自分が、胸を張っていられない存在だという弱みがあった。けれども、「ありがとう」とマリ子は言ってくれた。それだけでもよいとしよう。

朝の、ちょっと何かを言おうとしている様子はこれだったのかと思った。
何も仕事まで休むことはないだろうにと思いながらもうれしくなった。そして、あの六年生のマリ子とダブって来た。
「今も同じ気持ちでいてくれるのだろうか」
「なぜ、来たの」本人に直接聞いてみたい気持ちでいっぱいになった。それと同時に彼女は、なぜ仕事を休んでまで来てくれたのだろう。父親の先生としての姿を見たかったのであろうか。
最後の授業を自分も受けてみようと思ったのであろうか。彼女にしかわからないことである。
聞きたいことは山ほどある。しかし、マリ子に聞くのはよそう。

彼女が、仕事を休んでまで私の最後の授業の出てくれたという事実が、私の教員生活の最後に大きな花を咲かせてくれた。
そして、「ありがとう」という感謝の気持ちで終えられることが出来た。そのことをわが子が教えてくれた。
やっぱり学校はいいなと今更ながら思わずにはいられなかった。
そして、本当に白紙だった定年後の人生に「最初の授業」に取り組もうと思うようになった

（中区）

［入選］

きくみ（龍戸伝説）

内山文久

わたしが幼かった、若かった頃の話をしてみることとしよう。思い出しても悲しいことが多い。それゆえ、くるみよ、孫のおまえに話すことには躊躇っていた。だがお前も十八になった。わたしも、おまえのおかあも、十八で嫁に行った。おまえも、もうすぐ嫁に行くことだろう。それになによりも、わたしはすっかり年を取ってしまった。それゆえ、今をおいて話すことが出来ないかも知れない、と思うのだ。

この話は、わたし以外、誰も出遭ったことのないものであると思うから、是非とも身内であり、おなごであるおまえには言い残しておきたいのだ。お前のおかあには話してある。だが、おかあは、恐らくお前には話さないだろう。出来れば、忘れておきたい、そっとしておきたいと思うだろう。しかしこの話は、或るふとした瞬間、おなごのお前が、何故この世間にいるのだろうと思った場合、そのことを確かめるためのものであるし、またそこから、物事を考え始めるもととなるであろう。これからわたしが話すことは、お前には、恐ろしく、不思議な事と思えるだろう。おばばの話だから嘘だと思うかも知れない。だがそれでもいい。始めることとしよう。

それはわたしが数え年五つの時の事だった。木の葉が色づき何処までも澄んだ秋の日の夕暮れ、おとうが帰って来た。いつもは右手に弓を持ち、左手にはヤマドリやキジを二、三羽ぶらさげているのだが、その日は左手には何もなく、力なく、指はやや曲がって開いていた。背中には弓矢がきちんと十二本束ねられ、出かけた時のままだった。濃い藍色の法被と股引と足首に巻かれた脛巾は、草の汁で汚れ、分厚い藁靴もすり切れていた。目的の鳥が捕れないため、あちこちと足を伸ばしたのが判った。そう、おまえに教えたことがあるだろう、おまえの爺様、わたしのおとうは猟師だった。もっとも、その頃迄は、人の話によると、猟師であるだけで、時にはひどい仕打ちをされたそうだ。「四つ足を狩る輩」「鳥を捕るやつは天の罰」などと言われることが多かった。それゆえ、おとうとおかあは、今おまえが住んでいる柳瀬に、一軒の小さな家を建てて、出来る限り、他の部落の人とは離れて暮らしていた。

「おとうとおかあは、誰からも自由でありたかったのだ」そうわたしは思っていた。

「おかえり」

おかあが言った。

「おかえり」

わたしも続けた。

「今日はめぼしいものが現れんかった。川伝いに二瀬まで行ったんだがな。駄目だった」
と、おとうが元気なく言うと
「そんな日もあるわいね」
とおかあが慰めるように言った。ただおとうはいつもとは違っていた。呆けていた。酷く疲れているようだった。
「おとう、どうかしたの？」
わたしが心配してそう尋ねると、その声にはっとして、私の方を見た。
「大丈夫だよ、少し疲れただけだ」
「そうだ、きくみ、おまえにあげたいものがある」
そういって小さなわたしの手を引き、外へ出て、家の入り口の脇に置いてある小さな麻袋を手に取り、言った。
「目を瞑ってみな」
何気ない、いつものおとうの言葉だった。だが怖くて少し躊躇った。実はこの言葉からわたしの運命は始まったといってもいい。しかしその時はそんなことは夢にも思わなかった。おとうからみやげを貰える喜びもあった。大好きなおとうだったからわたしは素直に目を閉じたのだ。そうやって暫くじっとしていると、おとうに
「目を開けな」
と言われ、わたしはゆっくりと目を開いた。するとおとうの両手を合わせた掌に蒼白く、蠢く小さな獣がいた。初めて見るものだった。蛇に似て口は蛙のように裂け、小さな丸い目、細長い舌をしていた。ただ、蛇身とは違い、二本の腕と足のそれぞれに、三本の爪のついた指を持つ、細長い髭と尾を持った生き物だった。首はしっかりと藤縄で巻かれ、紐も付いて、逃げ出せないようになっていた。
「これをおまえの友として、育てな」
そういってわたしに藤縄の紐ごとくれたのだった。
　おとうから言われた通り、獣を育てようとわたしは両手に獣を抱え、急いで納屋に連れて行った。見ると莚の上、おとうから貰った獣は弱っていて、口の中の両端からいっぱい血が出ていた。（可哀そう、すぐ血を止めなければ）と思い、どうすれば良いのか（猫の額のような畑で刈り取った小豆の鞘を、庭で叩いている）おかあに聞いた。
「怪我をしている？　血が出ているのかい。だったら蓬と虎杖の葉を揉んでその汁を飲ませればいいよ」
と言われて、そのとおりそっと獣の口を開け、その混ぜ汁を静かに飲ませた。すると見る見るうちに傷口が塞がり、獣はすっかり元気を取り戻した。わたしが喜んで、納屋の中で飛びあがり、はしゃいでいると、いつの間にかその蒼白い生き物はわたしにすり寄って、藤縄を持ったわたしの右手の親指と人指し指を、ぺろぺろと、細い舌で舐めてくれた。少し驚いたが、草の原にいる毒蛇とは思えなかったから、わたしは安心し、納屋の中に箱を拵えて貰い、どこにも行かないよう、しっかりと紐を納屋の柱に巻きつけ、縛って、その中に住まわせるようにしたのだった。

しかしそれから間もなく悲しい事が起こってしまった。獣が来て十日も過ぎると、急に、元気だったおかあが病気になり、ひと月もすると亡くなってしまった。わけもわからず、わたしはおいおいと何日も泣き続けた。

おかあは家から離れた、おまえも知っている西北の桜久保にある墓地に埋められた。聞くところによると、亡くなったことを誰にも告げず、おとうが一人で背負って、埋めに行ったそうだ。どんな思いで背負い、埋葬したのだろうと思うと今でも哀しくてたまらない。その日からおとうは少しずつ元気を失い始めていた。おかあの亡くなったことがその理由と私はずっと思っていた。しかし本当はそうではなかった。

それからというもの、わたしは、おとうが戻って来るまで昼間の間独りぼっち。仕方がないので、納屋から獣を取り出して、庭で食べ物を与え、一緒に辺りを動き回って、たった一人であることの寂しさを紛らわせていた。取り留める縄はついてはいたものの、獣はもう逃げもせずわたしのいい友として、わたしのいく所へは何処へでもついて来てくれた。獣は私が大きくなるにつれて、その姿も子犬のように愛らしくなった。それでもわたしは、おかあのいないことを思って、時には悲しくて悲しくて、友達の獣を見ながら泣いていた。ただそんな時いつも獣はすり寄ってわたしの涙を舐めてくれた。すると涙はたちどころに消えていた。そのことをわたしは不思議にも思わなかった。その獣の優しさを嬉しいと思った。わたしはこの獣に(やまち)と名付けて呼ぶこととした。

初めは藤縄をつけたままだったが、直ぐにわたしは取り払ってしまった。やまちは決して逃げ出そうとはしないと、わたしには解っていた。何故か解らなかったのだが、わたしはやまちを信じていた。

おかあが亡くなって暫くの間、おとうは猟を早めに終えて家に戻ってきた。わたしの無事を確かめるため、またわたしの世話と夕餉の支度をするためだった。わたしはおとうに炊事や洗濯のやり方を教えてもらいながら、やまちと暮らしていた。この柳瀬にたった一軒しかない家の周りは家から下によく見える谷川（大川）の両岸を除いて、鬱蒼とした広葉樹の森が広がっていた。でもわたしは何も怖くなかった。何故か猪や熊はわたしの家に近づかなかったばかりか、鳥達や小さな獣・兎などは、わたしとやまちの姿を見ると、遠くに逃げて行ったのだ。

「変だな、どうしてかな」

と初めは思った。しかしそれがごく当たり前になるとなんの気持ちも起きなかった。

そうこうするうち、わたしは数えの七つとなっていた。もう家のことは何でも出来るようになっていた。やまちも三尺ほどの大きさになっていた。私は子供心に、やまちが異形の獣であることは解っていた。それでも、やまちと離れる、やまちを失うことを恐れ続けた。だから他の人、よそからやってくる人には何よりも気を配っていた。おまえも知っているように、昔のわたしの家は川から随分上がった小高い場所に

あった。わたしは家の屋根に見張り用の梯子を掛けていた。ほんのたまにこの道を行き交う人々（例えば信濃に向かう塩売りの商人たちの行列、奥の高い山に登る修験者）がいたからだった。そうだ、思い起こせば家の前に続く、両側の低い川沿いの道に、何か違うものが現れると直ぐに、わたしの傍にいるやまちが警戒の（シュウシュウ）という音を立てた。その時、わたしは必ずその梯子に上り、近づいてくる姿を見、危ないと感じた場合には急いでやまちを家の下の土室に潜ませ、裏の林の陰に、びっしり生えていた杉苔を掻き集めて、五枚の厚い欅で出来た室の蓋板の上に、満遍なく載せ、更にドクダミの搾り糟を匂い消しのため撒いておいた。すると不思議なことに間もなく、家の周りに鳥や兎が集まり始め、他から来た人にとって当たり前の風情となるため、人々は何の疑いもなく家の前を通り過ぎて行った。商人たちが護身用に引き連れた犬さえも気がつかない程、やまちの匂いが消されてしまうのだった。わたしはやまちを失うのが怖かった。やまちがこの世には一匹しかいないことを肌で感じていた。

「誰かに見つかって、どこかに連れていかれるのは、絶対に死んでもいやだ」

と思っていた。確かにわたし達は言葉を交わすことは出来なかった。しかしわたしの言葉をやまちは解っていた。やまちはおのれのシュウシュウという声の、高さや低さ長い短い音によって、わたしに返事をしてくれたのだった。それでわたしはやまちの思いを知ったのだ。わたし達は姉弟のようにして育ったといってもよかった。ただ大きくなるにつれて、おとうは少しずつ変わっていった。（思えばその頃、何故かは解らなかったのだが、やまちもおとうを避け続けていた）それで時としておとうは、わたしがやまちと一緒にいるのを見ると、急に正気が失せていくようにわたしには見えたのだった。だからわたしはおとうが帰ってくる前にやまちを箱に戻した。やまちもそれを察して、素直に従ってくれた。仕事一途のまじめなおとうだった。そして一生懸命わたしを育ててくれた、尊敬できる、立派な人だった。

　それから十年以上の月日が流れた。わたしが十八になる頃にはおとうは更に生気を失い、病み、痩せこけてしまった。おとうの病状を心配して時折やってくる、遠い親戚だという、近くの河内（かうち）部落の優しいお年寄り「伝蔵」さんの持ってきてくれた、肺臓の薬も、食べ物も、殆ど喉を通らず、夥しい血を吐く日が続くようになった。必死の思いでわたしは、おかあの遺した木綿や麻の布切れを、おとうの口にあてがい、何度も拭い続けた。その折、一つ不可思議なことがあった。血の付いた布を外の洗い場に持って行き水に漬けて洗おうとすると、たちまち血の色は消え、元の儘となったのだ。わたしはそれを知ってから、洗う仕草をしてから畳み直し、部屋に戻っておとうの枕元に置いた。それが自然なことと思っていた。おとうはまもなく仕事はおろか、立ち上がることも出来ず、寝たきりとなってしまった。わたしは必死で看病と身の回りの世話に心と体を振り絞った。当然、食事の世話

以外やまちを相手にする、どこかに連れて行く余裕などなかった。やまちは箱の中で、鋭い目をし、一点をみつめているのだった。

その日も木の葉が色づき、何処までも澄んだ秋の日の夕暮れだった。おとうは、おかあの名（すぎ）とわたしの名を繰り返し呼びながらしだいに衰弱し、とうとう亡くなってしまった。わたしは、おとう、おとう、と何度も繰り返し大声で泣きながら叫び続けた。もはや声も出ないくらいになっていた。おとうが死んでしまったのだ。わたしは本当に独りぼっちになってしまったのだ。

わたしはおとうの亡骸の傍で朝まで呆けて座っていた。囲炉裏の火の消えるのも忘れていた。すると

「よへいさんいるかいね」

と家の前で、河内部落の伝蔵さんの声がした。

「おとうが、おとうが、死んだ」

わたしはやっとの思いで家の入り口に近づきそう答えた。伝蔵さんはおとうの姿を見て、静かに手を合わせた。

「河内の村の人を呼んでくるから待っておれよ」

そう言って、引き返していった。次の日おとうは丸い杉板で作った大きな桶の中に、屈むようにして入れられ、蓋をされ、麻縄で巻かれ、担い棒で二人の村人に担がれ、おかあのいる桜久保へと向かった。おとうは掘られた穴に埋められた。呆けていた私はその場にいた伝蔵さんにお礼を言うのがやっとだった。桜久保からの長い坂を一人で下り、家に戻った。

わたしは望みをすべて失っていた。あの仲良くしていたやまちも二日前に姿を消していた。わたしはとぼとぼと秋の枯れた草が生えた急で曲がりくねった坂の獣道を大川に向かい彷徨い歩いていった。死のうとしていた。お前も知っているだろう、谷川の大川は流れも速く大岩に囲まれた淵は一丈もあることを。そう、わたしはこの柳瀬の家の下にある、魔淵の底に沈んでしまおうとしていた。そうすれば、おとう、おかあに会える、そう思い、一貫目余りの石を麻縄で縛り付け、片足に結わえ、両手に抱えて飛び込もうとしていた。

「おとう、おかあ、待って、いま行くから」

そう叫び、飛び込もうとした時、突然、辺りの空が真っ赤に染まり始め、奇妙な雲が形を変え蠢き始めた。すると雲の中から谷底のわたしに向かって、懐かしい音が聞こえたのだった。それはまぎれもなく、いなくなってしまったやまちの、それもおのこの音声（こえ）だった。

「きくみよ待て、死ぬではない。私はおまえと今まで長い間一緒に暮らしてきた。思い出してくれ。あの日蓬と虎杖で癒された私だが、そこにはもともと二つの牙があったのだ。私は龍神の子として、今は天竜川と呼ばれているその一つの支流、戸中川渓谷の水源に産み落とされた。（川の全てを隈なく知れ）と父に言われ、その任を果たそうと、そこからそろそろ流れ下っていった。その時流れが出会う二瀬という場所で、おまえのおとうに出会ったのだ。おまえのおとうはもう一つの流れ、白倉川で口を漱ごうとしていた。新たなる川を

知るため、その川を遡ろうとした私はお前のおとうに偶然出くわしてしまったのだ。お前のおとうは私を捕まえた。生まれて半年もすれば私も父と同じように、無敵で自在にあらゆる場所に行け、姿も如何様にも変化出来たのだが、所詮赤子ゆえ牙をむいて歯向かったにも拘らず、おまえのおとうの力には勝てなかった。それゆえたちまちおまえのおとうに牙を抜かれた。牙は私たちにとって空を飛ぶためのものだ。西の遥か遠く、西域という場所に近い崑崙山に眠っている宝玉を、子供である私が龍神から譲り受け咥えると、空の果て迄飛んでゆけるのだ。

私はおまえのおかげでこの天竜という川の全てを様々な方法で調べた。ある時は魚のように泳ぎ、ある時は霧に乗り、雨に従って様々な川に降り立ってその地に住む人々と生きとし生けるものを知り、豊かに育もうとしていた。幸いなことに水を巡るためには牙は不要であった。何？いつそれを行なったかというのだな。そうおまえ達が眠っている間だ。更に年を重ねる度に、より大きな川を目指した。

今私はこの天竜川の源、諏訪の湖に住んでいる。ここが清浄であれば、流れは堂々と海に向かう。あとはおまえ達の住む周りの、ささやかな川の流れの群れだけが清ければよいのだと思い、諏訪の湖を守っているのだ。おまえの父が龍神の世界に立ち入って、その子である私に傷を負わせたとはいえ、おまえの父を殺めたのを、どうか許してくれ。これは龍神の世界では止むを得ないことだった。おまえの母も巻き添えにしてしまった。龍の怒りは罪をなしたその家のすべての人間にかかってしまうのだ。それで私は龍神にお前を守る誓いを立てた。龍神は肯き、私に（きくみ）おまえだけは幸せにせよと言われた。私は嬉しかった。私は今、龍神に玉を投げてもらう、それが落ちた場所、そこがこれからお前の住む場所になるのだ」

「やまち、おまえはどこにいるの」

わたしがそう叫んだ時、巨大な閃光が桜久保のむこう側に落ちると同時に、聞いたこともない激しい雷鳴が轟き、その辺りは何十丈もの高さの炎が上がり、その煙は天まで届くかに見えた。やまちの言った言葉に従ってその場所に近づこうとしたが、あまりの火の激しさに、近づくことが出来なかった。炎は一晩中燃え続けたのだった。

次の朝、薄っすらと明け始めたのを確かめてから、わたしはその場所に向かった。だらだらと長い急勾配の坂道をはあはあと息を切らしながら、登っていった。桜久保を越え、竜の玉が落ちたと思われる場所に向かった。そこはもともと「松原」と言って、一本だけ百年以上経っている大きな松が根を張り、途中まではまっすぐ、それから四方に太さを変え曲がった枝を伸ばしている、森の中にぽっかりと小さな穴の開いたような場所だった。焼け跡になって終ったであろうと思った松原に着いたわたしは、驚いた。松原の松とその周り一帯は一枚の葉も焼けずに残っていたのだった。そしてよくよく見ると、その松の根元近くにあった高さ三尺ほどの卵型の岩

を螺旋状に貫いた後、地面に落ちた二寸程の艶やかに光る、黒い卵形の龍の玉があった。わたしは恐る恐る拾ってみた。まだ暖かかった。幼かったあの頃感じていた、あのおかあの体の温もりを思い出していた。わたしはそれを懐にそっとしまってもう一度、周りを眺めてみた。そこはまだ煙が燻る焼け跡ではあったが、ずううっと山の上の方から、広いなだらかな斜面になっていた。しかもそこに立っていたと思われる大きな木々の根は不思議なことにすべて灰と化して、焦げた大小の岩がぽつぽつと見えるだけとなっていた。更にわたしは視線を変え、焼け落ちたとは言え僅かに残る、西に向かう細い坂道の向こうの森と、その先に広がる窪地を見た。そこには何十軒もの家が立ち並ぶ、父から聞いていた「大原」という村の家の連なりが見えたのだった。

（この辺りの森は暗い森・煤窪（ずずくぼ）と言われていた。大の男でも、昼間であっても、一人ではめったに通らない場所だった。今なら、おなごのわたしでも、もうこの森も怖くないな。柳瀬からここを通ってゆけば、多くの人のいる大原村に楽に行ける）

わたしがそう思った時だった。その西の森に続く坂道から一人の男の姿がこちらに登ってくるのが見え始めた。男は呆けたように立つ、わたしの姿を見つけたのだろう、急に速足となっているのが分かった。近づくにつれ、それはわたしが初めて見た、それもわたしの亡くなったおとうの姿によく似た若者だった。わたしは必死で両手を振った。それを見た若者は更に急ぎ足で駆け寄って来た。坂道だったから息も絶え絶えだった。暫く両手を両膝にあてがい息を整えていた。額に汗は噴き出していたが、瞳は澄んでいた。若者は息を整えた後

「ひどい火事だったな。お前は大丈夫か。怪我はしていないか」

と、しっかりとした声でわたしに言った。何故か聞き覚えのある懐かしい声の響きだった。初めて同じ年頃の人に会うのが嬉しく、わたしは顔がほてっていた。

「ええ、ありがと、大丈夫、だに、わたしは少し奥に行った柳瀬という場所に住んでいる、きくみ、だに」

「お前がきくみか。おまえの父のことは聞いた。おまえ、ひとりだったから、さぞ大変だったろう」

若者は静かに、はっきりと、それでいて優しくいったのだった。わたしは、今もどうしてそうしたのかわけが分からないのだが、思いが溢れて、咄嗟に夢中でその若者の胸に縋り付き、泣きじゃくった。

「いいよ、いいよ、泣けるだけ泣けばいい」

そういって若者はわたしの少し破れかかった着物の両肩に手を置いてなすがままの姿勢でいてくれた。それから

「さあ座るまいかね」

とわたしを地面の上にでた松の根元に促した。座りながら

「きくみ、おまえはこれからどうしたいのだ」

と若者が問いかけた。わたしの思いは果てしなかった。しか

し（何をおいても）と思い、ただ一つだけ答えた。
「わたしはどんなことがあっても、死ぬまでここで生きようと思っている。それは変わらない。もう決めたこと」
そういうと若者は
「やはりそうだったか、わかった。お前の心根の堅さが良く分かった。おれの名は（さだむ）だ。今お前が見ていたあの大原の部落の者だ」
「お前がここに住みたいのなら、わしと一緒に、ここを住み家としよう。ここは東南向き、とても日当たりのいい場所だ。それにこの焼け野原は耕すにはもってこいだ。きっと黍も粟もモロコシも野菜もよく育つだろう。なにしろこの広さだからな」
「一緒に、ここを住み家って、どういうこと」
「俺たちは夫婦になる、ということさ」
わたしは解っていた。この人はおとうの生まれ変わりなのだ。わたしは黙って頷いた。これでいいと思った。
　さだむはわたしを連れ、坂を下り、煤窪の森を抜けようとしていた。思ったとおり、この森は鬱蒼とはしていたがその歩く時間はほんの少しだった。森を抜けると下り坂の下、遙か遠くに川が流れ、その川の向こうに山並みを背にした大原の部落が見えた。その時立ち止まったさだむは、わたしの手をしっかりと握り、わたしを見つめながら
「これから、わたし達は必ず幸せになるのだ。行こう」
と言った。わたし達は枯れ草の多い、土くれだった坂道を下り降り、さだむの家に着いた。
「おとうおかあ、このひとが俺の嫁になる、きくみ、柳瀬のよへいさんの娘だ」
さだむはそう言うとわたしを部屋に通した。わたしは囲炉裏の向こうにさだむの両親の姿を見た。何も言えないで下を向いていると、小柄なさだむの母が言った。
「あんたがあのよへいさんの娘かねえ。たいへんだったづら。それにしても、あんた、すぎさんにそっくり、器量良しだねえ」
わたしがはっと驚いた顔をする暇もなく、背の高い、がっちりとした体の、さだむの父が続けて言うのだった。
「わしらはよへいさんには世話になったよ。昔、この部落が飢饉になった時、よへいさんは、すぎさんと二人で、一生懸命、猟をして捕まえた獣の肉を捌き、わたし達にただ同然で与えてくれた。幼かったさだむが無事大きくなったのもそのおかげだよ。とても有り難かったよ」
わたしは知らなかった。おとうおかあの二人が、この大原の部落の人と確かな繋がりを持ち、決して村八分にされてはいなかったことを。わたしは思い違いをしていたのだ。
（二人は決して己だけの自由に生きていたのではない、おとうもおかあも、家のため、そして周りの人々のため精一杯生きてきたのだ）
それを知ったわたしはわけもなく嬉しくて、声を出しておいおい泣き続けた。この思いは初めてだった。両親ばかりでは

なく、ひとの気持ちがこのときほど温かいと思えた時はなかった。
「いいさ、いいさ、泣きたいだけ泣きな。それから飯にしよう」
さだむがそう言うと、さだむの両親は、にこにこ笑って頷いた。わたしは暫くそこに世話になった。山仕事や畑仕事を手伝い、生活をしている内、自然にわたし達は結ばれ、夫婦となった。それでもわたしは、やまちと約束したことを、決して忘れなかった。
　それからのわたし達はこの松原を二人で耕し始め、粟、稗、モロコシを畑にうえ野菜を作り、開け放たれた土地の周りに、栗と竹の林を作った。二人には土地があまりにも広かったので、大原からさだむの友達や親戚の若者たちを呼んで一緒に耕してもらった。皆は喜んで手伝ってくれ、帰り際に皆が口々に
「ここに住みたい。住んでも良いか」
と聞いてきた。わたしとさだむはもう嬉しくて、皆に気に入った場所を与えた。はじめは皆、小さな小屋で暮らしていたが、それぞれ嫁婿をもらい各々家を建て、いつしかひとつの大きな部落になっていった。
　着物の中に大事にしまった龍の玉は、暫くわたし達の家の奥間に大切に置いていた。部落の人は皆知っていた。ただそれでも誰一人奪おうとはしなかった。ある日寄り合いがあって、この松原を新たに「龍戸」と呼ぼうと、河内部落からこへ移り、住みついた、知恵のある（うきち）という年寄が言い出し、皆が「そりゃあいい」ということとなった。龍が玉を投げ落とした入り口、場所ということになる。そうだ、龍の恵みのおかげで、村は豊かになっていった。あれからもう四十年も経った。
　それから間もなくわたし達にも子供ができた。はじめはおなご、お前のおかあ（みのよ）だ。それからおのこが二人、お前のおじさんの（ゆうと）と（せいと）だ。お前も知っておるだろう。今では大きくなってみな婿嫁を貰っている。孫のおまえはその一番目、そう初孫だ。ところで、お前は何故今、柳瀬に住んでいるのかわかるかい。それではその事も話してあげよう。
　お前のおかあ、みのよも十八になっていた。わしがさだむと初めて会った日と同じ秋の夕暮れだった。一人の若武者がこの部落にやってきていた。体に二か所、大きな切り傷があった。左肩と右の脇腹だった。若武者はわしらの家の前で仰向けに倒れていた。初めに見つけたのはみのよだった。みのよは急いで若武者の胸にそっと手を当てた。
「まだ温かい、弱いけれど心の臓も動いている」
そう思ったみのよは急いで、おとうと私を呼んだ。わたしとみのよはあの日と同じように蓬と虎杖を揉み、煎じて飲ませた。みのよは夢中で世話をしていた。夜通し若武者の頭に濡れた木綿のあてがいをし、取り替え、囲炉裏の火を絶やさず見守っていた。その姿を眺めながら、わたしはふと、おとう

のことを思い出していた。それでもあの時の、どうしようもない悲しみとは違って心と体は喜びに溢れていた。理由などなかった。生きようとするものを育むことに夢中な、みのよの姿に双手を挙げたい気持ちだった。

　みのよの手当が実を結んで次の日の朝になると、若武者はすっかり良くなっていた。熱も下がり、二カ所の傷も、大きな跡だけとなっていた。戦いで汚れた着物を（その時丁度わたしが縫い終えていた）おとうの野良着にみのよが着替えさせると、若武者はこの土地の者と区別が付かない程の、百姓の姿に変わった。みのよは、煎じ薬と白湯を若武者に静かに手渡した。囲炉裏を囲んで二人は近くに座っていた。その時は二人だけだった。みのよは恐る恐る、若武者に聞いてみた。

「あんたはどこからきたの」

囲炉裏の莚に座った若武者は初め何も答えなかった。みのよは、若武者の横顔をじっと見つめ

「どうして答えてくれないの」

「あんたはどうしたの、どこからきたの」

みのよは（知りたい）という思いを必死で言葉にした。若武者にはみのよの気持ちが充分に解っていた。それでも暫く押し黙っていた。しかし、ようやく、こう答えた

「どう言えばいいのか。それがしは、もう死んだのだ」

「どういうこと？　わからない」

と、みのよが聞くと、若武者は静かに答えた

「武士としてはもう生きられないということなのだ。もうそれがしには、生きる術がないということなのだ」

「それがしに、これからの行く末は、何もないのだ」

「そんなことだめ、わたしには解らない。今ここにこうして生きているのに。術がないなんて」

「それじゃあ、これからどうするというの」

「どう生きていこうとするの」

みのよは迫るように問いかけた。

「わからないのだ。どうしようもなく混乱しているのだ。ただ願いごとが一つだけある。悪いがしばらくここに住まわせてくれないか。眠る場所は自分で拵えるゆえ」

そう言われて、みのよの顔はほころび、喜び勇んだ。

「そう！　それじゃあ、おとう、おかあにきいてみる」

みのよが（でい）で休んでいるわたし達に向かって、そのいきさつを話した。おとうは

「何やら訳がありそうだな。そういえばひと月ほど前、大原に行ったがその時、都に戦いがあったという、噂を聞いた。我々南朝の総大将、お頭であった大楠公は戦死され、敗れた者たちの多くは四方に逃げ延びているようだ。ただこの地は都から遠いゆえ、北朝がいますぐわしたちに何かをするということもないだろうと」

「それじゃあ、あのお方もそうなの？」

みのよがおとうに尋ねると

「そうかもしれんな。恐らく」

と、おとうは答えた。

「わたし、あのお方を絶対に守りたい！」
突然、みのよはわたしたちに訴えるように叫んだ。わたし達は驚いた。そしてわたし達ふたりは眼を交わし、頷いたのだ。その気持ちはよく解った。さだむとわたしもそうだった。あの出会いがわたし達を結びつけたのだ。娘とはいえもう十八だ。わたし達二人は、みのよの心を信じたのだった。何？くるみ？　孫のおまえは知らなかったのかい。そうだお前のおとうは武士だった。正しくは加藤一平太と言った。いっぺい、そうだおまえのおとうだ。わたし達は喜んで二人を一緒にさせた。そうすれば万が一のことがあっても、いっぺいの身を皆に「設楽からきた百姓」として知らしめておいて、誰も改まって気を配ることのないよう、村中の人に伝えておいた。いっぺいもそれを進んで受け入れた。そうして二人の住まいを柳瀬に決めたのだ。そう、わたしがおとうおかあと三人で暮らした懐かしい場所だ。わたし達も龍戸の人々もみな（てんだって）わたしが移り住んだ後出来た、それも二、三戸ばかりの柳瀬の部落をもう一度切り開いた。あれから今では十軒ほどの部落になっている。その後直ぐ、大川の魔淵に流れ込む沢のほとりに昔からある観音堂に祭壇を作って、そこに龍の玉を御安置した。毎年の秋の日に夜を込めてお祭りをしているのを、おまえも知っているだろう。そう、観音様への一年のお礼と龍の魂を鎮めること、龍の恵みが柳瀬をはじめこの大川に繋がる山の民へと行き渡るようお祈りする祭りだ。これはお前のおとうとおかあが護り始めたのだ。おまえはたった一人の娘だ。これからおまえは、龍神様と観音様、おとうおかあを大切にするのだ。そのためにはいい人を見つけることだよ。
「おばば、わかった。約束するね。ずっと大切にする」
「ありがとね。おまえは良い子だ」
　わたしがさだむと出会う前、それは苦しい悲しいことが続いた。だが今はもう幸せだ。子どもも孫も、村の衆もいる。ただわたしにはあと一つだけ望みがある。それはもう一度やまちに会いたいということだ。あとは思い残すことはない。日暮れも近づいた。今日の話は、ここまでにしよう。おとうおかあが心配するだろうから帰るがいい。次の話はまた日を追って話すこととしよう。
　孫のくるみは龍戸から北に向かって家路を急いだ。折しも秋の夕暮れだった。空は限りなく澄んでいたが闇が迫りつつあった。おばばが昔登ってきた坂道をゆっくり下ってゆくと、遠く柳瀬の部落の上に赤い雲が沸き上がった。雲は揺らぐように空へそしてさらに奥の山並み、戸中山の方角にするすると流れていった。そして一瞬黄金色の閃光を煌めかせたかと思うと消えていった。くるみはおばばの言ったことを思い出していた。
「きっと、やまちは私たちの話を聞いていたのだ。私が帰ることになって、私が護ろうと堅く誓ったことに満足し、あの戸中山に戻っていったのだ」
そう信じ、そう思い続けていた。

「ただいま」
「お帰り」
中からおかあ（みのよ）の静かで優しい声が聞こえた。

＊

いっぺいは素性を話さなかった。それを一人にでも打ち明ければ、みのよとの生活は様変わりをし、そればかりかこの一家を含めてこの柳瀬、大原という部落まで北朝に滅ぼさてしまうという恐れを持っていた。一平太とは偽名だった。正式な名は大塔宮護良（もりよし）親王の落胤、惟良（のぶよし）親王であった。父亡き後、楠正成とともに足利尊氏と戦ったのだが、正成は戦死し、自分だけが尾張に逃れ更に三河遠江に向かい、後に信州信濃に身を隠そうとしていた。しかし、設楽の郡で北朝方に見つかり逃げ、川を泳ぎ越えた。しかし岸辺で待ち伏せした北朝の間者に襲われ傷を負った。それでもなんとかこの龍戸の部落迄生き延び、此処、みのよの家の前で倒れていた。不幸中の幸いとでも言おうか、その時はたった一人だけ、共に戦った武将達はもとより、母も配下の者も殆ど、北朝の手にかかってしまって、惟良は天涯孤独の身となっていた。
「ここは南朝の筋を引くものばかりの場所だ。かといって身分を明かせば叔父宗良のように信濃の地で横死するばかりか、周りの者も巻き込んでしまう」
そう確信した惟良は決心し、この地の人となったのだ。
ある夜の事、いっぺいは恐ろしい夢を見た。自分がどこにいるか、場所さえわからなかった。その時、いっぺいは真っ暗い狭い道、いわば細い九十九折のような穴から出てきていた。そこには細々とした、それでいて透き通った水の流れがあった。水源であることは判った。その後さらさらと、自分の体は苦も無く、流れ始めた。緩やかな、次第に激しくなっていく流れだった。米粒にも満たなかった体もずんずんと大きくなっていく。流れにまかせてその波の上いっぺいはその沢を、続いて川を下って行った。辺りはどこも秋の色に染まっていた。しかし流れに任せて流れていく途中、色も温かみも違う、もう一つの流れに出会っていた。
「このもう一つの清らかな流れは何なのだろう」
と思ったあといっぺいはわれをも知らず、その川を遡り始めていた。すると岩陰のあるちょっとした砂の岸辺に見慣れぬ獣がいた。そう思うのは無理もなかった。相手の姿に接し、それが人であることが判ったものの、逆に自らの異形に気づいたからであった。異形としての自分。
「何だこれは、わたしはもともとこのような姿ではない」
そう思ったのだ。いっぺいは生まれたばかりの、親と全く同じ龍の体をしていたのだ。見ると両手は鱗に覆われ、二本の足と同様、鋭い爪が付いていた。驚いていた。そう思ったのも束の間、獣はいっぺいに襲いかかってきた。その攻撃に対して、いっぺいは反撃すべく鋭い己の二本の牙を翳し相手を威嚇した。しかしあいての獣は強く、ひるむことなくいっぺいをむんずと掴み、二つの武器を持つ口を開き、小刀で牙を切り落とした。痛みが体中に走って、いっぺいは蹲った。挙

げ句の果て、いっぺいは首に縄をかけられ、どこかへ連れられて行く。
「なぜこんなことになるのだ。何もしてはいない自分が。悔しい。もしも命を永らえる事が出来たら、こいつを呪ってやる。呪い殺してやる」
その思いに体中が沸き立った。
「悔しい！」
そう叫んだ後、間もなく、妻のみのよに体を揺り動かされた。いっぺいは訝しく思った。
「今の夢は何だったのだろう」
そういえば私があの天竜という大河を泳ぎ渡っている時、瞬く間に気を失った。その時声が聞こえていた。
「惟良、そちは東に向かうのだ。山間の場所に行け。そこにお前を待つ者達がいる。お前は政をしてはならない。お前は民と共に生業を味わうのだ」
それは岩を手彫りで彫った隧道の中に反響する声のようであった。再び我に返ると三河の対岸、遠州大千瀬川の砂と砂利の混じった川岸に倒れていた。

＊

あの時、私は納屋に繋がれていた。きくみという娘が私を世話してくれた。牙を抜かれて瀕死の私を救ったのだ。牙が成長しきれば私は無敵だったのだが、抜かれて私は天に戻れない身、地上を生きるものとなった。ただそれでも私は姿をいかようにも変えられた。霞のように小さくもなり、大河の姿にも変えられた。逃れようとすればいくらでも出来た。だが愛おしいきくみのため、きくみが眠りにつくまで、明るい間、私はきくみと一緒にいることにしたのだ。しかし龍神の世界では、私が天に帰る事が出来ないようにしてしまったきくみの父、よへいを許さなかった。そのために、よへいの愛おしい妻に呪いをかけた。愛おしいものを奪うことが呪いの根源となるのだ。もとより本人、よへいには、決して癒やされぬ肺の病、また妻の「死への移ろい」という呪いを与え続けた。
呪いはまず、妻に龍の姿を乗り移らせることであった。更に妻にも激しい肺の病という呪いもかけた。あの二瀬で私と戦ったことをよへいはよく覚えていた。私は徐々に呪いを強めていった。それ故よへいは、次第に変ってゆく妻を見て驚き、恐れ、おののいていた。時間の移ろいと共に次第に強大な龍の姿が見えてきたのだった。当初は眠りにつく前、妻は理由もなく寝床からゆっくりと立ち上がり、両手をひろげ腰をゆらゆら動かした。よへいは朧気ながら龍がのたうつ姿を見た。それで
「すぎ、その姿は、すぎ、どうしたというのだ」
よへいがそう問いかけると
「なあに？　おとう。なんでもないよ」
そう答えてすぎはまた寝床に入った。よく見ると龍の姿はどこにもなくいつものすぎに戻っていた。このすぎの仕草は繰り返され激しさを増した。初めのうち、すぎは自らよへいを

諭し、よへいもはっと我に返り、事なきを得たのであるが、それを繰り返すうちに、よへいは完全に正気を失っていった。すぎの肺の病も重くなり、多量の血を吐く迄になっていた。

あの日、すぎは突然、寝床から起き上がって、大きく手と腰をくねらせた。あまりの苦しみのため、身悶え血を吐いたのだが、その大量の血飛沫がよへいには、呪いのかかった龍の叫びとなっていた。

「おのれ！　よへい！　牙の恨み、晴らさずおくものか」

龍の怒りに満ちた音声と幻に向かって、よへいは手にした切れ味鋭い山刀を振るいに振るった。時は来ていた。暫くの間、龍はすぎを自由に操り、それから最後に、すぎの身をよへいの正面へと曝したのだ。山刀がすぎの左肩を、続いて右の腹に致命的な打撃を与えて、すぎはどっと床布の上に倒れ落ちた。床は血の海と化し、すぎは間もなく、息を引きとった。よへいは戦いに疲れ果て、すぎの亡骸の横に突っ伏し眠ってしまった。ただこの一部始終は呪いであるため、よへいにはすぎを殺めたという自覚は全く無かった。

朝目覚めたよへいは、傍に横たわるすぎを起こそうとしたが、すぎは死んで冷たくなっていた。左肩、右脇腹にも傷は無く、夥しい血溜まりは一滴も見られなかった。よへいは訳もわからず、すぎの名を呼び続けた。呪いは解けたのだがそれはただすぎだけのことであった。それからも、よへいへの呪いは続いた。病魔はギリギリとよへいの体を蝕んでいった。しかし私はきくみにだけには、呪いをかけることなどできなかった。龍の世界では

「人間など低劣な輩には、ひたすら相手を思い育もうとすることは決してできないものだ」

と教えられてきた私だったが、きくみは素直に龍である私の命を救い、縄という屈辱さえも取り払い、真の友として一緒に生きようとした。

今振り返ると、私はきくみに本当に取り返しのつかないことをしたと思っている。―龍として、一方的に相手の全てを育もうとしたこと、支配しようとしたこと―それは間違いだと教えられたのだ。私は命を司るものと言われようとし、振舞おうとした。しかしきくみはそのような思惑など無縁だった。ただ私を見つめ、慈しみ、共に生きることを選んでいた。真の龍王たるもの、きくみのようでなければ、心からの信頼を受けられはしない。見せかけは不要なのだ。ひたすら愛そうとする、一緒に生きる、見守ることが龍と人々の間に成立しなければ何の意味もないのだ。

＊

きくみはくるみの願いもむなしくあの秋の日からひと月もたたず亡くなってしまった。くるみはぼんやりと東北の川伝いにある一段と高い山、戸中山下にある麻布の山を見ていた。曇り空のためか寒さが身に染みていた。急に麻布の山に濃い霧がざわざわと立ち始めていた。くるみには解っていた。麻布の山に風花が舞う季節になったことを。その風花の

霧は次第に谷の両側の山並みをくるみの家に向かって稜線を嘗めるように高い所からじわじわと低い所へと迫ってきた。ひとひらの風花が降りたって、くるみの目に映った。

「おかあ、風花が咲いた」

そう叫んで、くるみは家の板戸を閉め、上がり端にいて縫い物をする母の横に座った。囲炉裏の火が消えかかっていたので、傍にある薪を二本くべた。

「風花が舞ったかいねえ。さむいはずだ」

「うん、そうだよ。今年初めてだに」

＊

後記

きくみ伝説の原本は、昭和四十三年に刊行された、磐田郡水窪町民俗資料緊急調査報告書である。私はその中にある竜戸由来という伝説に着目し、加えて地元に伝わる竜に纏わる伝説と、それに関係があると思われる他の伝説を参考にし、脚色、書き直した次第である。

希しくも今住んでいる浜松市中区鹿谷町の、私の家の前隣は、この資料の出版元である、「旧あきは印刷所」の跡地である。従って今、手にしているこの報告書は五十年前水窪で蒐集され、浜松市内のここで印刷され、山奥の水窪に運ばれ、再び、元の版元近くへと戻ってきているのである。深い因縁を思わずにはいられない。全般に亘って書き記した章句には様々な内容が錯綜していることを私は重々承知している。その内容での不明はお許し願いたい。

ちなみに私が生まれ育った場所は河内という、柳瀬から四百メートル程西南に行った部落である。話のなかにある場所は殆ど—大原も竜戸も、桜久保も、龍の玉の落ちた岩も、柳瀬も観音様も、二瀬も魔淵も—実在している。

（中区）

［入　選］

温暖化対策

六　樫　若　人

明るく素晴らしい未来を期待する幸せな少女グレタさんが、国連で邪悪な大人達に悪態をついた年にそれは始まった。

まったくひどい年だった。猛暑日の日数は過去最高を記録し、アメリカで大型ハリケーンがバハマ諸島を破壊したあと、日本にも15号、19号と大型台風が立て続けに来襲し、平穏な市民生活を破壊した。政府は特定非常災害を布告した。

秋になってもサンマはいっこうに捕れず、今冬は暖冬だと、気象庁は長期予報を出していた。

氷河は今世紀末には半分になり、海面は1メートルも上昇する。海辺の都市は水没の危険があるとＩＰＣＣ（気象変動に関する政府間パネル）が公表した。

気候学者のなかには、地球温暖化なんて言葉は、甘すぎる。温も暖も、暖かでのどかな春のイメージが強すぎる。地球高熱化とか、地球灼熱化とかいうべきだ、と言い出す人も現れた。

そんな中、こんなネット記事が世間に出回った。

「地球温暖化阻止のための計画実行に、ご寄付をお願い致します」

今はやりのクラウドファンデングである。計画の骨子は次のようになっていた。

ロケットを打ち上げ、地球と太陽の間に薄いカンレイシャの膜のようなものを広げれば、太陽光の何％かをカットできます。そうすれば気温の上昇を抑えられます。日食の時、まわりの気温が下がったのを経験された方も多いでしょう。あの時は太陽光を完全遮断していますが、カンレイシャのようなものなら数％遮断するだけですから、気温低下も精々０．５℃ぐらいでしょう。やってみる価値はあるでしょう。

これが話題になった。地球温暖化防止なら、結構な話題だと、視聴率ねらいのテレビ局から、週刊誌、日刊紙の記者やキャスターが群がり、発案者のタカポンさんの元へ押しかけた。

「いったいどのくらいのカンレイシャを広げるんですか。月の大きさなんですか」ＴＶでよく見かける、声の大きなキャスターが質問した。

「いや、実際にはカンレイシャを広げるのではありません。

そんな大きなカンレイシャなんて作れませんから。じつは農業などで使われている実際の温室が、室内の温度が上がらないようにカンレイシャを掛けるのをみて、この表現を思いついたんですが」

タカポンさんはキャスターの顔を見ながら、こう説明した。

「いいですか、「チャフ」というものをご存じですか。ああ、知らない。そうでしょうね。あまり一般的のものじゃないですからね。簡単に言えば、薄い金属の膜を細かく裁断したものです」

「よく戦闘機が敵のレーダーを拡散するのに使うものです。これを地球の周りにぐるっと撒くわけです。地球を覆い隠すほどじゃありません。せいぜい数トンのチャフを撒けばいいのです。数％の太陽光をカットすればいいんだから」

「大気圏で撒けば、風や雨、また重力でいつか地表に落ちてしまいますが、宇宙空間なら、ずっと地球の周りをまわっていてくれるというわけです」

「なるほどわかりました、でその費用はどのくらいかかると思われますか」

お堅い論調で知られる日刊紙の記者が質問した。

「そうですね。数トンのアルミ箔の裁断屑と、それを上手く四散させるシステムは、精々１０００万もあればいいでしょう。だいたい宇宙空間は無重力だから、一度広がったら元に戻す力が働かないんですよ。だから、箱から少しずつバラばらまいていけばいいんですから」

「問題はそのシステムを宇宙まで持っていくロケットです。今は、民間でも打ち上げを行っていますが、やっぱり数十億円は掛かるんじゃないんですか」

「するとこれは、やっぱり机上の空論ですか」

よく爆弾記事を載せる週刊誌の記者が聞いてきた。

「いや、世界には邪悪な大人ばかりじゃないと思います。きっと地球のためならと、たくさん寄付を考えてくださる人もいるはずです。そこで、」

タカポンさんは、集まった記者を見回しながら、こう続けた。

「皆さんは、この記事を持ち帰って、是非いろんな所に流していただきたいのです。もちろん問題点や、改良した方がいいところもたくさんあるでしょう。でもこのまま温暖化が進行して、人類が破滅を迎える前に、大人だって何かやったと、グレタさんに言えるほうがいいんじゃないんですか」

翌日からのニュースや新聞記事、週刊誌の特集は喧々囂々の様となった。

ほとんどが、無謀、アホ、バカの嘲笑だったが、一部に、おもしろいじゃないか、やってみる価値がある。と言った意見もあった。

一躍タカポンさんは時の人となった。出演を依頼してきたＴＶ局の、昼番組のコメンテーターが半分笑いながら、質問

を繰り出した。

「いつロケットを打ち上げる予定ですか。またその時は、是非当番組で独占取材をさせて下さい。及ばずながら、いろいろ御協力も出来ると思います」

「いや、まだ基金が百万ちょっとしか集まらなくて、しかたなくアルミ空き缶を集めて、資金の足しにしようと頑張っているところです」

「え！　こんな計画にもう百万も集まったんですか。ものずきな人もいるもんですね。いや失礼しました。で、もう［チャフ］散布装置は作ったんですか」

「ええ、不退転の気持ちを伝えるために、もう作りました。と言っても、大きな箱にあちこち穴を空けてばらまけるようにしただけですが。後は、これを目的地まで打ち上げてくれればいいんです」

「と言うことは、打ち上げられなかったら、壮大な無駄遣いですね」

「そうならないことを願っています」

このＴＶ番組が放送されてから１週間後に、驚天動地のニュースが配信された。

我が偉大なる金正恩委員長は、地球環境の危機に立ち向かうべく、我が国が誇る最新鋭の火星１５号を提供し、タカポン氏が完成した［チャフ］散布装置を宇宙に打ち上げることを決定した。

これからの話はタカポン氏個人の域を超えて、国際情勢に関係してきた。当然アメリカとその関係国は、弾道ミサイルの実験は国際条約違反だと息巻いた。安部首相は、たとえ空き缶でも、北朝鮮には輸出は出来ないと原則論を振り回した。中国やロシアは、温暖化防止のための行為だと正当性を訴えた。世界世論が賛否両論に割れる内に、１１月上旬に唐突にロケットは打ち上げられた。

いつものように、満面の笑みを浮かべ、ロケット発射に立ち会う金正恩委員長の姿がＴＶに写しだされ、大成功が連呼された。

ロケットが目的を達したのか、無事［チャフ］が地球の周りに拡がったのか、確かめるすべもなく２０１９年も終わっていった。電波を発信していないロケットを追うには、あまりに宇宙は広く、モノが小さすぎたのだ。そして忘れやすい日本人の常として、いつの間にかこの話は世間の話題にあがらなくなっていった。

２０２０年はオリンピックイヤーだと、日本全国がお祭り騒ぎになりはじめた４月、新聞の片隅に、今年の初鰹は不漁、と報じられた。

「いやあ、全く鰹の群れがこない。これじゃ、食っていけな

いよ」

1本釣りの漁師さんの嘆きが記事になった。気象庁も、今年は黒潮の勢いがないと認めた。

桜が三月でなく、小学校の入学式の頃満開となった。いやあ昔はこうだったんだと、孫について入学式に来たおじいさんが悦に入っていた。確かにランドセルに降りかかる桜の花びらは素敵な絵になった

5月になっても涼しい日が続き、田植えを日延べする農家が続出した。

6月の衣替えが過ぎても黒い学生服が目立った。ツバメもなんだか元気なく飛んでいた。

「お母さん、太陽がまあるく見えるよ」

「ダメよ、お日様を直接見たら目が悪くなるわ」

背負った子供に指摘された母親が、真昼の太陽を見上げながら、なんか少し元気が無い太陽ね、と感じた。初夏の太陽はもっと眩しかったんじゃないかなと思った。

7月24日に待ちに待ったオリンピックが開幕した。開幕前あれほど騒がれた猛暑はなく、驚くほどさわやかな気候だった。熱中症で運ばれたのは、高齢者だけで、それも日に数件と消防庁もビックリするほど少なかった。

8月9日札幌でのマラソンも無事終わり、森さん・小池さんが橋本さんとがっちり握手を交わしながら大会成功を祝った。小池さんが「こんないい気候なら、東京でマラソンが出来た」と愚痴り、橋本さんが「まあまあ」となだめているその日に、気象庁から気になるニュースが流されてきた。

「台風1号が発生しました。規模はまだわかりませんが、進路に当たる地方の方は、昨年の例もありますから早めの準備をお願い致します」

でも心配されるほど台風は発達せず、いつのまにか、太平洋上で消滅していた。

8月25日にパラリンピックが開幕した。ここで開幕を中継するアナウンサーが、驚くべきことを発した。

「今年の東京は、猛暑日がなかったんですよ」

そして9月6日に閉幕する頃には、もう涼風が立ち始めていた。

そして農林水産省は、今年の米の作柄は不良であると発表した。

それからの異常気象は立て続けだった。いいこともあった。サンマが北海道に押し寄せ、大漁になったことだ。しかし悪いことの方が多かった。太陽光発電の会社が予定通りの

発電効率を上げられなかった。台風が来ず、水不足が各地でおこり、水力発電も予定通り発電できなかった。お陰で、背に腹は代えられず、石炭火力の増設や、原子力発電の再起動が行われた。温暖化の騒ぎはいつの間にか鎮静していった。

２０２０年の冬は、記録に残る冬だった。東京が大雪に見舞われたのを初め、温かい静岡や沖縄も雪が積もった。各地で、氷点下の記録が更新された。東京の雪は何日も残り、都市機能が寸断された。至る所で凍死者が発見された。スタッドレスタイヤの在庫が払底した。

北極の氷が大きく増加している。南極が大きくなっている。
ハワイ島の付近まで大きな氷山が流れてきている。
グリーンランドが全面結氷した。
シベリアや、アラスカが氷で覆われてしまっている。
アイスランドが氷結している。
あちこちで、氷山と船舶の衝突が報告されている。

世界のニュースは、こんな記事であふれ出した。地球寒冷化の始まりだ。第５次氷河期だ。地球の終わりだと宣う怪しげな宗教がはやりだした。南へ民族の大移動が始まった。今度はアメリカからメキシコへ人が流れ出した。

そんな中、アメリカのＦＯＸニュースが、１年前のカンレイシャ（チャフ）騒動を特集に組んだ。

「１年前に、日本のＭｒタカポンが太陽に向けて遮蔽物を放出したが、それとこの気候は関係があるのではないか」

「そんなうまくいったはずがない」という意見と、「それが原因だ」という意見が激突した。しかし、結論として、太平洋に落ちた数枚の木の葉を拾えないのと同様、宇宙空間に漂っている、わずかな（チャフ）は回収できないという結論になった。

結局太陽光の輝きを取り戻す方はないのだそうだ。

そうこうしているうちに、氷の面積はさらに広がり始めた。ある一定以上に氷が広がると、太陽光を反射する効果が高まり、地表はますます低温化するのだそうだ。もはや人間の知恵では対処できなくなってきていた。

何十年かあとには地球の全面結氷も避けられないのだそうだ。

そして気象学者の予想通り、地球は凍り付いた。しかしそれを確認した人はもう誰もいなかった、そうだ。

（東区）

［入選］

神の末裔

田中章博

「臣（おみ）というものは将来、神様の側近となるんだ。大智、お前は将来、神様に仕えるのだよ。俺と同じようにな」

遠い昔、父親に言われた言葉だ。嫌なことだ。神様に仕えるだなんて、自由が奪われるから嫌だ。僕は自分の意志で生きていたい。何かに縛られることなく、自由という中で生きていたい。人生ってものは、誰にも縛られず、自分の意思で決めるものじゃないか。なのにどうして、産まれた家で決められなければならないのか。それが僕にはさっぱり分からない。そもそも、この世界は歪んでいる。太古の時代、神々によって創られて、その神々の血を引き継ぐ者が臣である。神の家系だからといっても、人間の扱いなのに。だったら、生き方も仕事も選べるんじゃないか。

「そう思うんだったら、お父さんに言ってみたらどうなのよ？」

ため息混じりの声が返って来る。

「嫌だよ！　父さん怖いし……」

「ヘタレね、大智は」

クスっと少女が笑った。髪を束ねる花の簪がユラっと揺れた。ヘタレと言われて悔しくはない。少女の言うことは正しくて、そしてこういう会話はいつものことだからだ。

「花菜は自由になりたいとか思わないのかよ？」

「うーん、不満は無いわよ？　巫女楽しいし」

「その精神が僕には分からないなぁ……」

僕は心に思っていたことを、目の前の少女こと豊田花菜に打ち明けた。彼女は僕の幼馴染で、そして豊田家は、我々、磐田家に代々仕える巫女の家系である。彼女もまた、巫女を継ぐ運命に晒されている。しかし、僕とは違って彼女は家を継ぐことに肯定的である。

「でも大智。どうしてそんなに継ぎたくないのよ？　継いでも、きっとある程度の自由はあるわよ？」

「そうかな？　僕は父さんが休んでるところを見たことがないけど」

僕は父親が仕事をしていない瞬間を見たことがない。いっつも神社の中で、神様に仕えて忙しなく働いている。そんな父親しか見たことがない。臣というのは忙しいもの。自分の時間というものは、一切取れないものである。僕はそう思っている。

「それは、あなたが普段ほとんど家にいないからじゃないの？」

「うぐっ」

言葉が詰まった。全くもってその通りだ。実際問題、今僕住んでいるのはもちろん自分の家だが、日中僕がいる場所は豊田邸である。もっというなら、花菜の部屋である。ちゃぶ台のような小さな机を囲って、二人で座布団に座って向かい合っている。

「ていうかさ、あれからお父さんと話した？　そもそも何回会ったの？」

「……話してない。そもそも会ってない」

「はぁ。そんなもんだと思ってたわよ」

呆れた視線が僕を刺す。そして花菜は立ち上がって、深く息を吸い込んだ。そして僕を見下ろし、ピシッと指差し、強く言った。

「帰りなさい！　今すぐお父さんの元に行きなさい！　そして学んできなさい！　臣ってのがどんな仕事なのか、どれだけ休みがあるのか、どれだけ自分の時間が取れるのか！　さあ大智くん、今から楽しい社会科見学ですっ！」

沈黙。外のアブラゼミの声と、冷房のクォーという音だけが、僕と花菜を包んでいた。花菜は再び、座布団に座った。そして一つ、咳払いをした。その後優しい顔をして言った。

「私もね、昔は巫女なんてやりたくなかったわよ。お母さんの指導は厳しいし、衣が引っかかって転ぶと痛いし、舞を舞う度に足が痛いしさ。それでも、何年もやっていくうちに楽しく思えてきた。私、思うんだ。正面から見つめてるだけじゃ何も見えないけど、角度を変えたら色々見えるんじゃないかって。大智もやらず嫌いは辞めて、一回でもやってみたら？　そしたら何か、今までと違うことが分かるかもよ？」

「違う角度、ね」

僕はそう呟いて、立ち上がった。

「お、行く気になった？」

花菜が明るい表情で僕を見上げる。僕は笑顔で答えた。

「麦茶取ってくる」

その瞬間、花菜の顔から明るさが消えた。そしてサッと立ち上がって、僕に迫った。こうなることは分かっていたので、僕は襖を開けて廊下へ飛び出した。

「コラァ！　逃げんなー！」

家の中で、追いかけっこが始まった。僕は豊田家の冷蔵庫を目指して走った。後ろからは花菜が僕を追って走ってきている。廊下を走り切り、サンダルを突っかけて土間に降り、目の前にある冷蔵庫の戸を開ける。目の前に、ペットボトルに入った麦茶が現れた。それを掴んで、僕は冷蔵庫を閉めた。その瞬間、もの凄い勢いで背中に何かが飛びついてきた。

「さあ、麦茶を飲んだら神社に行くこと！　分かった？」

「はいはい分かりましたよ、行きゃあいいんでしょ？」

蓋を開けながら適当にあしらった。行くだけでいいならお安い御用。神社の正面から入って、本殿を突っ切って、裏から出てくれれば問題なし！　そう思っていたら、花菜が頬を膨らめて言う。

「行くだけじゃだめ。しっかり臣の仕事を見てくること！」

「……」
「あーもう！　世話が焼ける幼馴染だー！　いいわよ！　私も一緒に行ってあげる！」
「いやいいよ」
「よくない！　一人で行かせたら、きっと神社の本殿に入ってそのまま通過して裏から出てくるだけでしょうが！」
「うっ」
バレた。やろうとしてたことがバレた。なんでだ？　もしかして、エスパー！？
「はぁ、ずるい奴。これじゃ、臣になっても神様が受け付けないかもね」
「マジで！？」
「なに嬉しそうな顔してるのよ。ったく」
そんなに顔に出ていたのだろうか？　少し気になった。
「とにかく、今から行くわよ。ほら、靴履いて」
そう言われて、僕はサンダルから靴に変えた。そして花菜が玄関の戸を開けて、僕らは豊田邸から神社に向かった。
豊田邸と神社は、目と鼻の先にある。というか、豊田邸は磐田神社の境内にある。先祖代々仕える豊田家は、家を境内に建てて行き来を楽にしてあるのだ。実際、花菜の母親は、今も巫女として毎日神社に通っている。花菜も週に二回、神社に通って舞の練習をしている。豊田家は、巫女の家系のため、女子が重宝される。豊田家の女性のもとに男性が嫁ぐのが基本なのである。そしてその間に産まれた長女が、次の巫女となるのである。聞いた話では、男子が産まれた場合は、原則自由の身であるらしい。僕が産まれるのは、磐田家よりも豊田家の方が良かったのかもしれない。
歩き始めて一分足らずで本殿の前に着いた。昼間に入るのは久しぶりだ。そもそも、本殿に足を踏み入れるのが久しぶりだ。いつも、朝に自室のある離れを出たら、帰ってくるのは夕方か夜だ。こんな昼間に来たら、気が狂ったとでも思われるのだろうか？
「なに突っ立ってんの。入った入った」
花菜にそう言われて、僕は本殿に上がった。
本殿の中は薄暗く、静かな空間だった。目の前に神様が鎮座している祠がある。僕は迷うことなくその祠へと近づいて行く。そして、その祠を手で持ち上げて横にずらした。
「なにやってるのよ！　バチが当たるわよ」
「僕を誰だと思ってるんだよ。これでも一応、臣の息子だよ。祠に触れても問題ない身分にある。もっと言うなら、神様に実際に会える身分でもあるんだけど？」
花菜の言葉を制して言う。
「こういう時だけ都合よく身分を使って。まったく、天下太平な人ね」
「うるさい。あと、ここから先は臣の家系しか入れないから、じゃあね」
「分かってるわよ。しっかり見学してきてよ？　収穫ゼロだったら、明日から豊田邸の立ち入り禁止ね」

「……はーい」
一瞬返事が遅れたけど、気にしないでおこう。祠を退かすと、そこに地下へと続く階段が現れた。僕は迷わず、階段を降りていく。十数段の階段を降り切ったところに、木製の扉があった。そこを軽くノックする。
「はい」
中から男の声がした。声の主は、父親である。さっきまでは緊張なんてしていなかったのに、声を聞いて一気に心拍数が上がった。一体何ヶ月ぶりに話すのだろう。ある出来事以来、僕は父親と話していない。だから今、凄く緊張している。
「父さん、僕です。臣の仕事を見学させてください！」
思い切って声を出したが、最後の最後で声が裏返ってしまった。
「大智か。何しに来た？」
「言ったよ、見学だって」
「ああ、聞いた。だが、それでも俺は訊く。何しに来た？」
めんどくさい。言っている意味が分からない。
「返事がないのはどうしてだ？」
「質問が意味不明だからだよ」
「ふざけるな」
「ふざけてない！　僕は言ったよ？　見学したいって。なのに何しに来たって質問はあまりにおかしい。意味不明だ！」
扉の向こうから反論は来ない。仕掛けてやろう。
「返事がないのはどうしてですか？」
「鈍感だからだ」
「ふざけないで下さい」
「ふざけてなどない！」
怒鳴られた。僕の体がビクッと震えた。記憶が蘇ってくる。一年経ったか経たないか。そのくらいの記憶なのに、もう何年も前のようにも感じる。そう思っていたら、向こうから微かに息を吸う音が聞こえた。僕は咄嗟に目を閉じた。
「去年、お前は臣を継ぎたくないと言い放ったな？　自由が無くなるから、こんな仕事は一生やらないと。そしてその意思を貫くかのように、一年以上も俺と口をきかなかった。俺はな、大智。嬉しかったんだ。息子が自分の意思で決めたことを貫いていて。決められたレールを外れて、自分の道を開拓していて。それなのに、今お前は何と言った？　臣の仕事を見学させて欲しい？　ふざけるな！　俺の感動は一体どこに行ったってんだ！」
あれ？　思ってたのと違う理由で怒られた。ずっと、僕が後を継がないことに怒っているものだと思っていた。それで怖くて口がきけなかった。なるべく会わないように生活していた。それだから、見学させて欲しいと言えば喜んで入れてくれると踏んでいたが、どうやら違ったようだ。違ったというのも、ほぼほぼ真逆なものである。そこで僕は口を開いた。その口は、少し緩んでいた。
「どこにも行かないよ。父さんの心に残ってるはずだよ。それと、無駄になるなら僕の一年もだよ」

少し間を開ける。向こうからは何も言ってこない。
「僕は今まで、父さんは怒っているのだと思ってた。それが怖くて、会わないように生活してきた。朝早く起きて、家を出て、散歩して、豊田邸に行って、走って、帰ってくる。そんな生活をしていた。ただただ、父さんに会わないように」
「酷い息子だな」
低い声がした。その言葉は、案外グサっと僕の心に刺さった。その通りなのだけども。
「でも、それって勘違いだったってことだよね？　何も僕は、逃げなくていい人から逃げていたってことだよね？」
「そうだな」
ふっと鼻で笑った声がする。
「だから、僕の一年も無駄になっちゃうわけ。それに、僕の一年は父さんが思ってるような立派なものじゃない。意思を貫いた結果じゃなくて、逃げに逃げてた結果なんだから」
「そうなのかもな」
そう言った父さんの声は、少し小さかった。
「入れ」
父さんがそう言って、扉を開けた。僕は神と臣だけが入ることの許される部屋へ入った。
「久しぶりだな、大智」
「本当に」
父さんの顔を見るのは一年振りである。だが、あまり変化はない。黒い顎髭が、相変わらずまだらに生えている。
「それで、見学させて欲しいということは、臣になる決意ができたのか？」
「いいえ。やっぱり自由が欲しいです。今日は父さんの生活に自由があるかどうかを確かめに来ました」
正直にズバッと言った。すると父さんの顔から笑みが消えた。
「大智。何も変ってないな」
「逃げてただけの人に変化を求めるなら、マイナス方面を求める方が無難ですよ？」
「……」
今度は呆れた顔になる。一方僕は笑顔を作って見せた。側から見たら、ただ煽っているようにしか見えないだろう。
「それで、自由があったら後を継ぐのか？」
「内容が面倒じゃなければ考えときます」
呆れ顔から色が抜けた気がした。
「それで、臣ってどんなことするんですか？」
笑顔で訊いてみた。すると、背中を強く押されて、僕は部屋から出された。そして背後で扉がバタンと閉まる。
「もう来るな！　さっきまでの感動話はどこ行った？　俺の感動を返せ！」
「いや、あの、せめて仕事の内容だけでも…」
「黙れ！　お前は臣になるな！　もう、好きにしろ。自由を求めるなら、とことん自由を追え」
「……」

追い出される形で、本殿を後にした。祠を元の場所に戻して、鳥居をくぐり、長い長い階段を降りて下の道に出た。
「あーあ、どうすんだよ。なんの収穫もないから、豊田邸の立ち入りは禁止じゃないか。花菜になんて言えばいいんだよ……」
そう呟きながら、町を歩いた。この町、日渡（ひわたし）は、サイレントヒル連邦国の中に位置し、昇竜川という大河の東岸に位置する小さな町だが、磐田神社に祀られている最強にして最恐と呼ばれる火の神様の加護の元、周りから攻められることなく平和を保っている。この世界は、神の存在が絶対的である。神の気分で町が滅びる。いつ攻められてもおかしくない状況にあるのだ。それでも攻められないのは、火の神様が著しく強いことを物語っているのだ。神は、負け戦を仕掛けるほど愚かではないのだ。
「空には雲ひとつ無いってのに、僕の心は曇っちゃったなぁ」
近くにあったコンクリートの壁にもたれて、空を眺めながら呟いた。その僕の横に、買い物袋を手からぶら下げた、花の簪を頭に刺した女の子がやってきた。
「見学をサボって呑気に散歩とは、いいご身分で」
「げえ……」
今一番会いたく無い人間に会ってしまった。
「なに今一番会いたく無い人間に会っちゃったみたいな顔してんの？」
「何で分かった！？」
「顔に書いてあった」
やっぱりエスパーじゃないの？　怖いんだけど。そう心で呟いた。
「言っておくけど、私はエスパーじゃないわよ？」
花菜がそう言った。もう信じられない。妖怪かよ、こいつ。
「それで、どうしてこんなところで空を見上げてるの？」
彼女が僕の顔を覗き込んで訊いてきた。僕はさっきの出来事を話した。
「それって収穫じゃない？」
「はい？」
意外な言葉でびっくりした。もう豊田邸に立ち入れないと思っていたのに。
「だってさ、これからは自由を求めて過ごしていいってことでしょ？　だったら、思う存分自由を求めてやればいいんじゃないの？」
「それでいいのかな？　それって結局、磐田家を断絶に追いやるってことにならない？　僕一人っ子だし」
「でもお父さんが認めたも同然だから、気にしちゃいけないんじゃないの？」
「そうなのかな？」
「いざとなったら、私が磐田家の養子になって臣になれば……」

「お前、本気で言ってるのか？」
「ううん、冗談」
「だったら言うなよ……」
そう僕が言うと、花菜は少し肩をすくめた。その後すぐに歩き出した。
「どこ行くの？」
僕が訊くと、花菜が答えた。
「家だよ。夕飯の支度しないといけないからね」
午後の日に照らされた彼女の顔は、少し輝いて見えた。
花菜と別れて、僕は町を少し歩いた。花菜に一緒に来ないかと言われたけれど、今は神社の境内に入りたくなかったので断った。しばらく歩くことにする。空では小鳥が飛んでいて、森の中ではセミが必死に生きている。そして思う。みんながみんな、自由ではないのだと。鳥もセミも、自由に見えるけど、実際は決められた道を歩んでいる。限られた命で子孫を残す。自分のためじゃなくて、種族のために、一生を私的に使っていない。確かに自分が生き残るためにすることもある。でもやはり、それよりもメインは種族を守ることなのだろう。特にセミは、一生をそれにかけているだろう。僕は本当に、我がままな人間なのだ。
いつの間にか、夕方になっていた。お腹が空いたので、豊田邸にお邪魔することにした。
「お邪魔しまーす」
戸を開けて、土間に上がる。花菜と彼女の母親である藤子さんがいた。そして藤子さんが言う。
「あら、大智くん。お客さんが来てるわよ」
「僕にですか？」
そう訊いたところ、彼女は頷いた。首を傾げながらも廊下を歩き、大広間へと着いた。襖を開けると、そこにはなんと、父親がいた。
「よお、大智」
「と、父さん！？　どうして……」
困惑する僕に、父さんは思わぬ話を持ちかけた。
「お前、豊田家に養子に入れ」
「ええ！？」
「養子が嫌なら花菜ちゃんと結婚して婿入りしなさい」
「そう言う問題じゃない！」
「そうだな。お前ならそう言うと思ったさ。そこで、養子になれと提案している」
でも、どうして養子なのか。そう思った瞬間、土間の方向から花菜の声がした。
「豊田家で必要なのは長女である私だけ。男子が産まれても、その子は普通の人間として人生を歩んでいけるってわけ。だから自由は手に入るわよ？」
いやエスパーかよ。怖いよ？
「まあ、そう言う訳だ。臣は後ほど、神様が直々に決めてくれるそうだ。何も今すぐに必要なわけじゃないからな。神様曰く、神様が自分の目で見極めて、その子を磐田家の養子に

すればいいそうだ」
「そうなんですか」
　僕は神様に会ったことはない。会ってもいい身分にあるけれど、臣の仕事をしていないから、目で見たことはない。男性なのか女性なのか、若いのか老人なのかも分からない。でも、最強で最恐な神だから、きっと大きくて、筋肉ムキムキな体育会系の男性なんだろうと思っている。
「それで、どうだ？」
　父親の声で現実に戻った。そして考える。磐田家と縁を切って、豊田家として生きれば自由である。そしたらすぐに旅に出て、各地を回って、いろんな経験をして。うん。答えは出た。
「なります！　養子になります！」
すると土間から歓喜の声が聞こえる。
「やったー！　私の弟ね！」
「あ、やっぱり考えさせてください」
「なんで！？」
　花菜の弟にだけはなりたくない。本当に。兄なら妥協できるけど。
「あー、分かったわよ。私が妹で、大智がお兄ちゃんねー」
　だからエスパーかよ。でも妥協ライン。条件クリアだ！
「言ったな？　じゃあ僕が兄で、花菜が妹な」
「はいはい。どうせ自由を求めてすぐ旅に出るだろうから、実質妹でも姉でも変わんないんだろうけどね」
「なんで分かった！？」
「あ、やっぱそうなんだ」
　エスパー疑惑、半端ないぞ？
「まあ決まりだな。よし、磐田大智。今日付けで磐田家より縁を切る。明日からは豊田大智となる！」
「ははっ」
　父親に張りのある声でそう言われて、僕は咄嗟に正座して礼をした。いつの時代だろうと思うかもしれない。だが、由緒正しい神社においてはこれが常なのである。

　次の日。豊田大智となった僕は、早朝に豊田邸を出た。とりあえず、今日中に昇竜川を越えて、西岸都市“浜竹”を目指す。そこは、サイレントヒル連邦国の中でも最も大きな都市で、湖の神の加護のもと成り立っている。国内一の都市ということで、最新技術も集まる。一度でいいから見てみたかったのだ。臣の家系は、町から出ることを許されていない。だから旅なんかできないし、買い物も全て町の中で済ませる。どうしても欲しい物は、他の家の者に頼むしかないのだった。
「相変わらず、今日も快晴だなぁ」
　空を見て僕は呟く。昨日は心が曇っているだのなんだの言っていたが、今日はそんなことはない。空と同じく、晴れ渡っていた。しばらく川に向かって町を歩いていると、山と山の切り通しのところで、大きな獣を見つけた。トロールベア

ーだ。死神の持つ鎌のような大きな爪を持ち、他の動物を襲う肉食獣。この世の中で、生身の生き物としては神の次に強い存在だろう。見つかったら死ぬ。そう思って道を逸れようとした瞬間、トロールベアーの目の前に、道にしゃがみ込む、赤い髪の毛の小さな女の子がいることに気がついた。

（危ない！）

そう思った時には、僕の足はもう動いていた。トロールベアーの横をすり抜けて、女の子に覆い被さるように伏せた。その直後、ズバッと背中を斬られた。激痛が走る。だが、僕はその程度で怯むような貧弱さではない。一応神の末裔。人間離れしたところも少しは持っているかも。その辺の確証が無いのは残念なところなのだが。

「くそう！」

獣に向かってそう叫び、僕は立ち上がった。血塗れだが、立てる。おお、やっぱそういう力はあるのかもしれない。

「がるるるる……」

獣が何か言っているようだが、言葉が通じないので無視をする。僕は足に力を入れて駆け出した。

「やぁぁぁああ！」

獣の正面から拳を握って叩き込む。が、しかし、生身の人間が勝てる相手ではない。大きな腕で僕を弾くと、そのまま口開けて噛み付いてくる。

「ぐあぁ！」

右腕が痛い。噛まれた。え、千切れてないよな？　確認するが、千切れた様子はない。どうやら、トロールベアーは、爪は日本刀並みに良く切れるのに、歯はそんなに強くないらしい。これは食べるの苦労しそうだな、この種族。肉食なのに歯が弱いとか、どんな動物だよ。そう思っている間に、間合いを取る。女の子の前に立ち、必死に守る形で。

「がうぅぅぅ……がうっ！　がうっ！」

そう言って、再び僕に爪を向けた獣。僕も再び走ろうとしたが、血液が限界に達した。目眩を起こし、その場に倒れた。まずい。このままだと首に爪が落ちる。神の末裔でも、さすがに首を斬られたらおしまいだ。僕は女の子の方を向いて叫んだ。

「逃げて！　生きなさい！」

しかし女の子は逃げなかった。それどころか、僕の前に歩いてきて、ボソッと一言言い放った。

「弱いな、人間は」

赤髪で、ロングヘアーをツインテールでまとめて、白く輝かしい肌をしている。目は深緑のような色で、ニヤッと笑った顔は悪戯っ子の象徴のようだった。紅の羽織りと紺色の袴で、腰には黒い鞘の長い刀を携えている。柄には、金の炎の彫刻がある。そんな煌びやかな少女が、神以外には勝機の無い獣の前に立ちはだかっている。これでは死んでしまう。なんとかして止めなければ……！

「逃げ……」

そう言いかけた瞬間の出来事だった。

「弱き獣め、我の前より跡形もなく消え去るがいい！」
そう言い放ち、少女は目の前に迫った爪を右手で掴んだ。そこで爪は動かなくなり、少女は少し獣に近づき、左手を獣の体に当てた。それからすぐに、少女の左手から炎が吹き出した。獣は炎に包まれた状態で、少女の手から伸びる火柱に吹き飛ばされるように、一本道の遥か向こうまで飛んでいった。そして最後。少女が右手から大きな火の玉を出して、獣が飛んでいった辺りに放り投げた。火の玉は爆発し、爆風で僕は数回ゴロゴロと転がった。少女はパシパシと手を払い、僕に向き直って歩いてきた。そして僕に手を当てた。まずい、焼かれる！　そう思って目を閉じると、少女が笑った。
「警戒するでない！　我はそなたを治そうとしてやってるのじゃ。ほれ、じっとしておれ」
その声の直後、僕の体から痛みが消えた。血液も戻っている。どうやら、本当に治療されたようだ。
「ありがとうございます。でも、ごめんなさい。守ろうと思ったのに、結局守られてしまいました」
「最初から期待しておらんからいいのじゃ。神が人間に助けてもらうなんて、聞いた事ないからの」
「あっははは。ですよね、神が人間に……て、えぇぇぇぇ！？
か、かかか、神様！？」
ナチュラルすぎて気付かなかった。だけど、神様なのか？
この少女が？　身長、推定百四十センチメートル。体重、目分量での計測不能。足の大きさ、推定二十センチメートル。容姿年齢、ざっと十三歳。ギリギリだが、ロリには含まれない……転はず。いや、体型としては十分ロリかも。
「何を信じきれないという顔をしておる？」
首を傾げる神様。いや、だって、思ってたイメージとだいぶ、いや、ずいぶん違うから。そう言ったら、怒るだろうか？
迷った挙句、辞めておいた。
「まあいい。我は決めたぞ！」
「はい？」
「そなたを次の臣とする！」
「……え？」
「そなたを次の臣とする！」
「いや、聞こえてますよ？」
「そうか。いやな、実は色々な事情があってな、神社の息子が臣を継ぎたくないと言って、家を出てしまったのじゃよ。それで我も困っておってな、今の臣もしっかり者で働いてくれるのじゃが、やはり後継ぎがおらんと我も安心して遊べないからの。じゃから早い段階で次の臣を決めねばなるまい。そして、あのトロールベアーに勇敢に立ち向かったそなたこそ、我の側近にふさわしいと思ったのじゃ！」
「はあ。でも、臣ですか」
「そうじゃ！」
「辞退できませんか？」
「うーん、無理じゃな」
「どうして！？」

できることなら今すぐ辞退したいのに。理由を述べよ、二十字以内で！

「我がそなたを気に入ってしまったからじゃよ」

ぴったり二十字！　さすが神様。って、そうじゃない！

それ、凄く身勝手な理由だな。

「それに、我の言うことに逆らうということは、この町を敵に回すも同然じゃよ？」

「ぐぬぬ、卑怯な神様だ……」

「卑怯でもなんでも、自分の望む世になるのなら手段は選ばぬ！」

「……最低だな」

「なんか言ったか？」

「いいえ、何も。あ、神様。どうしてしゃがんでたんですか？

あれじゃあ、襲われてるようにしか見えませんよ？」

「うぐっ！　あー、それはじゃな……」

そう言いかけて神様は言葉に詰まった。そして誤魔化すかのように僕の手を握った。そして笑顔で言う。

「そんなのはいいのだっ！　さあ、そなたが新たなる臣となるのだ！　我が一生自由に遊んでいられる人生を作るのに協力せよ！」

その瞬間、僕の体が光に包まれた。そして、何かが起こった……わけではないようだ。

「今のは……？」

「詔じゃ」

「みことのり……！？」

「そうじゃ。もう拒めんぞ？　これでこの町全体に、新たな臣の誕生を宣言したからな！」

やられた。神様の特権を利用された。詔は、この町の最強情報だ。誰も逆らえない。発布されるのは稀だが、町人全員が知ることのできる唯一の神様の言葉だ。それは神社にいち早く送られ、神社から町内放送で知らされる。

『ピーンポーンパーンポーン。先ほど、我らが火の神様が詔を発表なされた。新たな臣を決定した。近日中に臣の引き継ぎを行い、他の行政においても、役職の総入れ替えを行う。関係する家の者は、明日の朝、磐田神社に参るように。以上。パーンポーンピーンポーン』

そう。こうやって放送がかかる。にしても、急だ。引き継ぎは近日中と曖昧なものの、会議は明日からとは。

「さて、我らは神社へ参るぞ！　そなたを全員に紹介せねば！」

そう言って、神様は僕の手を掴んで駆け出した。その速さは次第に速くなり、遂には空へと飛び立った。周りは赤い膜で包まれている。これは火なのだろう。ジェット噴射みたいな要領で飛んでるのかもしれない。

神社には一分もかからずに着いた。降り立ったら、目の前に父親がいた。

「神様！　と、大智……？」

「……只今帰りました」

そう言って、一礼をした。
「まさか、次の臣って……」
「そうです。僕です……」
そう言った僕から父親は目を外した。そして神様を見つめて言った。
「いいんですか、神様。こんな自由人を臣にして」
「うー？　なんのことじゃ？　そやつは我をトロールベアーより守ろうと死闘を繰り広げたんだぞ？　そんなやつ、見たことない。捨身で人を庇うなど、余程いい奴じゃと思うが？」
その言葉で父親が僕に視線を戻す。
「そうなのか？」
「まあ、死闘ではなかったですが」
そこに神様が口を開く。
「死闘じゃよ。実際に、我が助太刀しなかったら、そなたは死んでおったわい。どうするのじゃ？　あれが我じゃなくて、本当に子供だったら」
「死にます」
「そうじゃろ？　ほら、死闘じゃ」
ニコッと笑う神様。その笑顔とは対照的な父親の呆れ顔。
「神様、もしかして、また仕事を俺に押し付けてダンゴムシとお戯になっていたのではないでしょうね？」
「ぎくっ」
「それで道端にしゃがんでたところ、森の覇権を奪還したいトロールベアーに襲われた」
「うぐっ」
「近くに引きつけてから一気に焼き払おうと思っていたところに、自由人となった大智に見つかって守られ、面白かったから観戦していた」
「ぎゃうぅぅ」
「はあ。もう、仕事なんですから、俺に押し付けないでしっかりやってください」
「しゅん……」
神様って、ダンゴムシと戯れるのが好きなのか。というか、トロールベアーは森の覇権を取り返したいってことは、昔に神様が奪ってしまったってことか？　気になるけど、今は自分のことだ。
「それで、僕は豊田家の者なのですが……」
「何を言っておる。もう詔の発布の時点で、そなたは磐田の姓を受けるのじゃよ。まあどうやら、そなたがこの家の家出少年だったようだけどな。すまんな、気付かなくて」
そう言って、蔓延の笑みで僕を見つめる神様。煽ってるように思えて仕方がない。僕はもう一度神様に問う。
「詔、無効にできませんか？」
「うん、無理じゃなっ！」
右手の親指を立てて、胸の前でグーとポーズをする神様。その輝かしいほどの笑顔が眩しくて、僕は空を見た。雲ひとつない空に向かって、僕は腹の底から叫んだ。
「臣になんて、なりたくなーい！　僕は自由でいたいんだ

ー！」
　真夏の神社のセミの声が一斉に止み、僕の声の余韻だけが残る。
「大智と言ったか？　良いことを教えてやろう」
　神様が悪戯っ子の顔でそう言って、僕の耳元で静かに囁いた。
「この世で自由なのは、神だけなのじゃよ。人も獣も虫も鳥も、全ては我ら神の掌の上で踊っているだけなのじゃよ。なんせ、この世界を創っているのは神なのだからな」
　この時、僕は全てを悟った。この世界において、運命を変えることはできないと。これから僕は、臣としてこの自由主義の神様に仕えなければならないのだ。それでもいい。なんだかんだで、楽しそうな神様だ。楽しそうな生活だ。忙しいだろうけど、それに見合う物もありそうだ。花菜の言っていた通り、違う角度で見たら見えてきた。これからのビジョンが、はっきりと。
「ありがとうございます」
　笑顔で神様に向かって言った。神様は、可愛く首を傾げて困惑していた。

（磐田市）

小説選評

竹腰幸夫

今回の応募作品は十三編。郷土の傑人伝記1編、郷土の伝説物語1編、自伝・半自伝3編、現代社会作品5編（うち、老境のテーマ1編）、超現実作品2編、観念的心象作品1編。括り方にご不満もありましょうが、大略以上のような傾向でした。いわゆる老境もの、養護老人ホームの問題点、定年退職後の心象といったテーマは今回影を潜め、書き手が交代しつつあるのかなと感じたことでした。

なお、毎回のように申し上げることですが、「作品」は読者を得てはじめて成立するものであるということ、を書き手の皆さんにこころしていただきたいと思います。読者の共感・共鳴を得るにはどうしたよいのか、表現上あるいは構成上それを意識しつつ工夫・熟慮願いたいと思います。折角のモチーフ、熱意がその姿勢の不足・欠如によって「作品」たりえなくなってしまうのがまことに残念だからです。

以下、「作品」として優れた仕上がりになっていると思われる数編を紹介します。

『約束』 私たちの存在は何なのか？宇宙の実態は？時間や物質も存在してはいないのではないのか。それらは単なる影に過ぎないのではないか。――不安や不条理の中に生きる私たちの奥底から呼びかけて来る問いに、身もだえしながら生きてきた主人公の心象風景が、泥濘にもがく身体描写の巧みさの中で浮かび上がる。あえて分類すれば、観念小説・心象小説ということになるのだろうが、そのリアリティは読者をぐいぐい引きこむ。

私たちの現実のすぐ隣にある「向こうの世界」への傾斜、その呼びかけとのやりとり。その際の身体のむずがゆさ、もどかしさは、筆者の並々ならない実感に裏付けされたものだろう。本編に浸りながら、いやでも人間の原質を顧みずにはいられない。

『足の裏の熾火』 大学・心理学の勉強中に、その学問のあり方に疑問を抱いた主人公。今は清掃員として働く。スリランカへの一人旅のなかで、かつての疑問に自分なりの答えを見出して行く。人を癒すという事はどういうことなのか。人はどのように癒されているのか。

この作品においてもやはり、不安・不条理に生きる現代人にとって拠り所となるものは何かという、根本の問を柱にしている。『約束』でも問題にされているが、複雑にからみつく最新の思考が本当に人のこころに迫る知恵となるのか。人間はもっとシンプル、素朴な感性を生きるのではないか、というような問いかけが聞こえて来る。

『温暖化対策』 軽いＳＦ作品だが、提示された問題は皮肉が利いて面白い。地球温暖化対策として奇抜な発案をした人物、それを取り巻く周囲、マスコミ。果たしてその考えは有効なのか。――ＳＦ作品には欠かせない、アイデア、ユーモア、軽妙さなどを十分備えて、楽しい作品となっている。この作者の今後にも大いに期待したい。

『最後の授業』 半自伝作品か。小学校校長としての最後の卒業式式辞。長い教員生活を回想しつつ、その締めくくりスピーチに思いを凝らす。教育現場への提言・苦言をもひそめながら誠実に描こうとしている。

（なお、右のようにいずれの作品も直接浜松市が舞台となっているわけではないのです。そこが評価の分かれ目になることは、ないということを一言。）

小説選評

柳本宗春

今年の応募作は、歴史に材を求めたもの、自己の体験や最近の世相を絡めたものなどバラエティーに富んでいました。それぞれに面白く読ませていただきましたが、題材への興味にとどまらず、小説としての構成ができていることが「伝わる」作品となるポイントだと思います。

以下に各作品について、感想を一言ずつ述べます。

「黎明」

昭和四〇年代、映画産業の中の主人公たちと、結婚し実家の商売を継いでからの話。前半、後半どちらかに絞って、丁寧に描く方が深みがでたのではないか。

「最後の授業」

校長として最後の式辞を読む主人公の胸に去来する様々な記憶。エピソードや登場人物にリアリティがある。

「きくみ（龍戸伝説）」

地元に伝わる伝説に、様々な脚色を施した物語。龍神の存在自体が興味深く、語り口も上手くて伝説の世界へ引き込まれる。

「岬の日没」

漁業の町が製鉄業の町へと変貌していく時代の人々の営みにスポットを当てている。素材や着眼は素晴らしい。ただ、独特な会話を文章として効果的に表現するのが難しい。

「提督農に帰る」

海軍大将、その後九州帝大総長でもあった百武源吾が退職後に住んだ引佐での生活を描く。魅力的な人物であり、資料に書かれたことを再構成するところにもう一工夫が必要だと思う。

「温暖化対策」

温暖化対策を巡り世界が勝手に動いていく様を、現実の情勢も交えてシニカルに描く好短編。

「女子校の思い出」

女子校生活をベースに「私」の人生を綴る。すべてを書こうとせず、中心を決め、そこに集約する構成を考えてほしい。

「赤い実」

七十六歳の女性の死を巡る謎を、残された手記から探る。文章は読みやすいが、謎にやや消化不良の感があるのが惜しい。

「約束」

ファンタジックな展開だが、水に濡れたり泥がまとわりつくなど身体感覚に訴える描写で説得力のある作品となっている。

「僕の大好きなラグゥ（唄）」

日本で働くインドネシアの青年が語る、初老の日本語教師とご当地アイドルグループの関わりという題材が新鮮。構成や文章も上手く、一気に読んで楽しめる。

「足の裏の熾火」

スリランカを旅する女性が主人公。ガイドとの会話の中で、様々な関心と問題意識を持つ展開が効いている。ラストはやや唐突な感じがあり、もう少し丁寧に描いた方が良かったか。

「２０１９年の秘密基地」

幼なじみの思い出と現在の関係の根底にある問題。よくある話だが驚く展開もあり、自然な描写で読ませる。

「神の末裔」

神の側近「臣」の家に生まれた主人公の葛藤がテーマだが、軽妙な語りで面白く読める。手慣れた感じの文章である。

児童文学
［市民文芸賞］

森のゆうびんポスト

住吉玲子

さむいさむい冬がきて、どうぶつたちのすむ森に、ちらちら、雪がふりはじめました。

雪はいちにちじゅう、やみませんでした。つぎの日も、またつぎの日もふりました。

ようやく雪がやんだ朝のこと、森はどこもかしこも、つもった雪でまっ白になって、枝のあいだからさす、お日さまのひかりで、きらきら、かがやいていました。

その森の中を、子うさぎのぼうやが、はねてきます。しげみにつもった雪をちらして、ぴょんぴょんぴょん。

ひさしぶりに晴れたので、子うさぎのぼうやは、いつもよりずっととおくまで、でかけてきたのでした。

やがて、子うさぎのぼうやは、小さな川にかかる丸木(まるき)ばしのそばで、たちどまりました。目をこらして、なにかを見ています。

いったい、なにを見つけたのでしょう？

それは、子うさぎが、いままで見たことのない、赤いものでした。雪をかぶった、赤くてまるいかたちのもの。

赤いリンゴ？

いいえ、こんな大きなリンゴはありません。

赤くて大きなキノコ？

いいえ、こんなにつめたい雪の中に、キノコは、はえないでしょう。

「だれかが赤いぼうしを、おとしたのかなあ？」

子うさぎは、手をのばして、赤いもののうえにつもった雪を、はらいおとしてみました。

ぼうしではありません。

そのとき、川のむこうから、シカのおばさんが、丸木(まるき)ばしをわたってきました。

「あら、子うさぎちゃん、ひとりでおさんぽ？」
シカが、やさしく声をかけました。
「シカのおばさん、おはよう。ねえねえ、この赤いのなあに？」
子うさぎのぼうやは、シカを見あげてききました。
「まあ、すっかり、雪にうまってしまっているわ。あのね、これは『とってもいいもの』よ。」
「『とってもいいもの』？」
「そう。」
シカは、にこにこして、そうこたえると、まえあしで、赤いもののまわりの雪を、かきはじめました。
雪の中から、まるいやねのついた、小さなおうちみたいなものが、あらわれました。どこもかしこも、まっかです。
「これは『ゆうびんポスト』っていうの。」
「ゆうびんポスト？」
子うさぎのぼうやは、くびをかしげました。
「そう。おてがみをいれる箱。」
「おてがみって、なあに？」
「おしらせしたいことをかいた紙よ。ゆうびんポストに、おてがみをいれると、ゆうびんやさんがそのおてがみを、あてさきにとどけてくれるの。」
「すごいね。ぼくも、おてがみいれたいな。」
子うさぎのぼうやは、目を大きくひらいて、ながい耳をぴくぴくとうごかしました。

家にかえった子うさぎのぼうやは、さっそくおてがみをかきました。なんどもかきなおして、やっと、気にいったおてがみがかけました。
【こんにちは。
あなたはだれですか？
ゆきがいっぱい、つもりました。
ぼくのうちに、あそびにきてください。
まっています。】
子うさぎのぼうやは、じぶんのかいたおてがみを、声にだしてよんでみて、
「うん。なかなかよくかけた。」
と、うなずきました。そして、その日は早くねました。
つぎの日の朝、目がさめるとすぐに、子うさぎのぼうやは、きのうかいたおてがみをもって、川のそばのゆうびんポストへ、いそぎました。
白い雪の中の、赤いゆうびんポストは、まるで、子うさぎがくるのを、まっていてくれたみたいに、朝日をあびて、ぴかぴかひかって見えました。
「おてがみがとどいたら、だれか、あそびにきてくれるかなあ？　たのしみだな。」
子うさぎのぼうやは、そんなひとりごとをつぶやきながら、ゆうびんポストの小さな四角いあなに、おてがみをいれました。
パラリと、おてがみのおちる音が、ポストの中からきこえ

ました。
子うさぎのぼうやは、なんだかうれしくて、ぴょーんと高くジャンプすると、大いそぎで家にかえりました。そして、わくわくしながら、だれかがあそびにきてくれるのを、まちました。

その日のごご、キツネのゆうびんやが、丸木（まるき）ばしをわたって、川のそばのゆうびんポストのところへ、やってきました。
かたから黒いかばんをさげたキツネは、ゆうびんポストのまえの雪をのけて、ポストのしたのほうにある、まるいとびらをあけました。
「おお！　きょうは、ひさしぶりに、てがみがはいっているぞ。」
キツネは、うれしそうにいいました。
ところが、
「さて、あてさきはどこだろう？」
と、手にしたおてがみを見て、キツネはかおをくもらせました。
あてさきが、かいてありません。
これでは、だれにとどけたらいいのか、わかりません。
おてがみを、うらがえしてみました。
なまえもありません。
いったい、だれがかいたおてがみなのか、わかりません。
キツネは、こまってしまいました。

「はてさて、どうしよう。」
うでをくんで、空を見あげてかんがえました。
木の枝のすきまから、冬の晴れた青空が、すきとおったみずうみみたいに、きれいに見えます。
その時、枝さきで、ばさっと音がして、キツネのかおに、雪のかたまりがおちてきました。
「ヒャッ」
と、キツネは、くびをすくめました。
「やあ、これはしつれい。」
声がして、わかいツグミがいちわ、ポストのうえにおりてきました。
「つめたかったでしょう、ごめんなさい。」
ツグミはあやまると、キツネが手にもっているものを見て、
「おや。それは子うさぎが朝はやく、このポストにいれていた、てがみですね。」
と、いいました。
「なんと！　きみは、このてがみを、だれがポストにいれたのか、しっているのですか？」
キツネは、あわててたずねました。
「ええ。ぼくはけさ、森をひとまわりしてから、この木のうえで休んでいたのです。ちょうどそのとき、子うさぎのぼうやがやってきて、そのてがみを、ポストにいれるのを見ました。」

「じゃあ、これは、子うさぎのぼうやが、かいたものなんだ。」
キツネが、ほっとしたようにいいました。
ところがすぐに、
「だけど、あてさきがかいてないので、このてがみは、その子うさぎに、かえすしかないなぁ。」
と、つぶやきました。
それをきいたツグミは、
「そのてがみ、子うさぎにかえすんですか？　なんだか、かわいそうな気がしますね。あの子うさぎは、てがみをポストにいれながら、『たのしみだな』なんて、ひとりごとをいって、うれしそうに、にこにこしていたのに。」
と、いいました。
ちょうどそこへ、シカがやってきました。きのう、子うさぎのぼうやに、ゆうびんポストのことをおしえた、あのシカのおばさんです。
「みなさん。こんにちは。」
シカは、ほがらかにあいさつをしました。
そして、
「ゆうびんやさん、こんな雪のつもった森の中まできてくださって、ごくろうさまです。でも、冬のあいだは、おてがみをだすかたは、いないんじゃあないかしら？」
と、いいました。
「それがですねえ、きょうはポストに、このてがみがはいっていたのです。」
「まあ、そうなの。」
「ところが、あてさきがかいてないので、こまっているところなのですよ。」
そういってキツネは、ためいきをつきました。
「てがみをだしたのは、子うさぎのぼうやです。ぼく見ていたんです。」
と、よこからツグミがいいました。
「あらまあ、あの子うさぎちゃんね。わたしきのうの朝、子うさぎのぼうやに、ゆうびんポストのことを、おしえてあげたばかりなの。さっそく、おてがみをかいたのね、あの子。うふふ。」
シカはうれしそうです。でもすぐに、
「あてさきをかきわすれるだなんて、あわてんぼうさんね。」
と、つけくわえました。
「それが、どうも、かきわすれたのではないようなのです。ちょっとしつれいして、てがみをよんでみますね。
【こんにちは。
あなたは、だれですか？
ゆきがいっぱい、つもりました。
ぼくのうちに、あそびにきてください。
まっています。】
という、てがみなのですよ。」
シカは、それをきいて、
「なるほど。つまり子うさぎちゃんは、あてさきをかきわす

れたのじゃなくて、あてさきのないおてがみを、かいたっていうことね。」
と、うなずきました。
「子うさぎは、きっとはじめて、てがみをかいたんですね。いっしょうけんめいに、かいたんだろうな。」
そう、ツグミがいうと、
「『だれにも、とどけられません。』っていって、子うさぎに、このてがみをかえしたら、きっとがっかりするだろうな。だけど、いったいだれにとどけたらいいんだろう。」
と、キツネもこまりがおで、いいました。
「なにか、いいかんがえはないかなあ。」
「なんとかしてあげたいわね。」
ツグミもシカも、くびをかしげてかんがえこみました。
しばらくして、
「子うさぎちゃんは、だれにおてがみがとどいたら、うれしいのかしらね？」
と、シカがつぶやきました。
それをきいて、
「そうだ！」
と、キツネが、ポンと手をうちました。
「このてがみは、この森のみんなに、とどいたんだよ！」
キツネのことばに、
「えっ、どういうこと？」
と、ツグミが、キョトンとしたかおで、たずねました。

「あてさきのないてがみだから、森じゅうの、だれにとどいてもいいっていうことさ。つまり、きみにでも、シカさんにでも、ぼくにでも、とどいていいんだ。ということは、森のみんなにとどいたのとおなじ！」
「まあ！　そうよ、そうだわ！　きっと、子うさぎちゃんは、このおてがみが、だれにとどいてもうれしいはずよ。」
シカが、きゅうにえがおになっていいました。
「ぼく、いいことをおもいついた。森のどうぶつたちに、てがみのことをしらせて、みんないっしょに、子うさぎの家にあそびにいくってのはどうだろう？」
そういってツグミは、スイッとまいあがると、ゆうびんポストのうえを、ぐるりとひとまわりしました。
「それがいいわ。」
「うん、そうしよう。」
「じゃ、ぼくが、森のみんなにつたえてくるよ。『あしたの朝、子うさぎの家にあつまれ！』って。」
と、ツグミがいいました。
「それじゃあ、わたしは、木の実のはいったクッキーを、いっぱいこしらえて、もっていきましょう。さあ、いまから、じゅんびしなくちゃ。」
シカは、せわしなく雪をけちらして、丸木（まるき）ばしをわたっていきました。
「よし、こうしてはいられない。ねえツグミくん。きみは、川のこちらがわのみんなに、つたえてくれ。ぼくは、川のむ

こうがわに、しらせにいくよ。さあ、日がかたむいて、さむくなってきたから、いそごう。」
キツネはそういうと、かじかんだ手にいきをふきかけて、黒いかばんに、てがみをしまいながら、いそぎあしで歩きはじめました。
こうして、キツネのゆうびんやと、ツグミのわかものと、シカのおばさんは、それぞれ、森の中へちらばっていきました。
だれもいなくなった赤いゆうびんポストのうえを、つめたい風がふきすぎて、小枝につもった雪を、ひらひらと、まいちらしていきました。

そのころ、ゆうびんポストのちかくのほらあなで、クマが冬眠(とうみん)をしていました。
クマはさむい冬のあいだは、木のうろや、ほらあなの中で、ウトウトと、ねむってすごすのです。
ところが、さっきから、キツネたちのはなし声が、べちゃべちゃとやかましかったので、クマは目がさめてしまいました。
「せっかくおいらがねているのに、うるさいやつらだ。」
あたたかなほらあなの中で、まるくなってねていたクマは、目をこすりながらつぶやきました。
ところで、このクマは、いつも大声でわめきちらす、らんぼうものでしたから、森のどうぶつたちからは、きらわれていました。
みんなこのクマを、こわがっているのです。
でも、ほんとうは、森のみんなとなかよくしたいおもっている、心のやさしいクマでした。
クマは、むっくりとおきあがると、
「あいつら、なにか、そうだんをしていたな。『子うさぎのおてがみ』とか、『みんなにしらせにいく』とか、そんなことをいっていた。おいらもなかまにいれてほしいな。」
と、ひとりごとをいいました。
そして、ほらあなから、あたまだけをだして、そとのようすをうかがいました。
ヒューっと、風がふきつけたので、ブルッとしてくびをひっこめた時、なにかがペタリと、クマのはなさきにはりつきました。手にとって見ると、小さな紙にかかれた、おてがみでした。
なんとそれは、さっきキツネが、かばんにしまったつもりで、でも手がかじかんでいたので、するりと雪のうえにおとしてしまった、子うさぎぼうやの、おてがみだったのです。
「おいらのところに、てがみがくるなんて、うれしいじゃないか。『あそびにきてください』って、かいてあるぞ。いったい、だれからだろう。」
クマはおてがみをうらがえしたり、さかさまにしたりしてみました。だれからのおてがみかわかりません。そのとき、クマはハッときがつきました。

「そうだ！　きっとこれが、さっき、あいつらがいっていた『子うさぎのおてがみ』だ。子うさぎからおいらに、てがみがとどいたんだ。」

クマはにこにこして、なんども、子うさぎのぼうやのおてがみを、よみかえしました。

やがて、つぎの日の朝になりました。

お日さまがのぼって、きょうもいいお天気です。

子うさぎのぼうやは、大きなアクビをしながら、トウヒの木のねもとの家から、そとにでてきました。ゆうべは、よふかしをしてしまったので、まだねむいのです。

子うさぎのぼうやは、きのう、おてがみをポストにいれてから、いちにちじゅう、だれかがあそびにきてくれるのを、まっていました。どこにもでかけないで、家にいました。おひるも、ごごも、ゆうがたも。そして、よるおそくまでまっていました。

でも、とうとう、だれもやってきませんでした。

子うさぎのぼうやは、がっかりしていました。ぜんぜん元気がでません。

家のまえのきりかぶに、こしをおろして、しょんぼりと、ほおづえをつきました。

子うさぎのぼうやの目のまえには、ひろい丘が、森までつづいています。丘いちめんにつもった雪が、お日さまにてれされて、白く、まぶしくかがやいています。

でも、子うさぎのこころの中は、はい色のくもりぞらです。

子うさぎのぼうやが、つまらなさそうに家にもどりかけた時です。とおくから、がやがやと、おおぜいのはなし声が、きこえてきました。

声はだんだん大きく、ちかくなってきます。

子うさぎのぼうやは、ふりかえると、せのびをして、声のするほうを見ました。声は森のほうからきこえます。

やがて、丘にカモシカのすがたが見えました。そのうしろにはイノシシもいます。それからサルのきょうだいも。

まっ白な雪のうえを、まっ白なからだで走ってくるのは、おしゃれなテンです。すばしこいノネズミが、あとにつづいています。

でも、まっさきに、子うさぎのぼうやのところにやってきたのは、ツグミでした。

ツグミは空をとんできたのです。

「てがみをよんだので、あそびにきたよ。ぼくはツグミです。」

ツグミはそういうと、さっき子うさぎのぼうやがすわっていた、きりかぶのうえにまいおりました。

元気のなかった子うさぎのかおが、パッとかがやきました。

テンがいきをはずませて、丘をかけのぼってきました。サルも、イノシシもきました。

「おてがみをかいてくれたんですってね、ありがとう。わたしはテンよ。」

「ぼくたちはサルのきょうだいさ。なかよくしような。」

「おいらはイノシシ。走るとはやいんだぜ、きょうそうしようか。」
森じゅうから、たくさんのどうぶつたちが、子うさぎのぼうやのところへ、やってきたのです。
そしてさいごは、キツネのゆうびんやでした。
「子うさぎくん、てがみをゆうびんポストへいれてくれて、ありがとう。ぼくは、キツネのゆうびんやです。きょうは、森のみんなといっしょに、あそびにきましたよ。」
と、いいました。
子うさぎのぼうやのかおが、こぼれそうなえがおでいっぱいになりました。
「みんな、きてくれてありがとう。」
子うさぎのぼうやはうれしくて、とびきり高くぴょーんとジャンプしました。
お日さまのかがやく丘のうえで、子うさぎのぼうやと、森のどうぶつたちは、雪だるまを作ったり、雪がっせんをしたりして、あそびました。
だれかが、つなひきをしようといいだして、『川のむこうチーム』と、『川のこちらチーム』でつなひきをして、『川のむこうチーム』が、かちました。みんな、ちからいっぱいつなひきをしたので、雪のうえにころんでしまって、からだじゅう雪まみれになりました。
おたがいに、雪のくっついたかおを見て、みんなで大わらいしている時、とおくの丘のはずれに、黒いかげがあらわれました。
「クマだ！」
せの高いカモシカがさけびました。
クマは黒い大きなからだで、ノッシノッシと雪のうえを歩いてきます。
ぺちゃくちゃとおしゃべりしていた森のみんなが、きゅうにだまって、クマがちかづいてくるのを見つめました。
サルたちはすぐにもにげられるように、みがまえています。ノネズミは、こそこそとイノシシのせなかにかくれました。
やってきたクマは、大きなそりをかかえていました。
クマはあつまっている森のどうぶつたちを、まんまるな黒い目でジロリとにらむと、
「子うさぎの家はここか？」
と、うなるような声でききました。
みんな、クマが、どんならんぼうをしにきたのかとおもって、しんぱいそうに、子うさぎのぼうやをふりかえりました。
「そう、ここがぼくのうちだよ。」
子うさぎのぼうやは、クマがあんまり大きいので、びっくりしましたが、クマのことはよくしりませんでしたから、こわがらずに、へんじをしました。
「てがみがとどいたのでね。あそびにきたんだ。」
クマは、ちょっとてれくさそうにいうと、
「ほら、これ。」

と、おてがみをさしだしました。
子うさぎのぼうやが、ゆうびんポストにいれたおてがみです。
「わぁ！　ぼくのおてがみだ。クマさんにとどいたんだね。わーい！」
子うさぎのぼうやは、そういって、
「キツネのゆうびんやさん、クマさんに、おてがみとどけてくれて、ありがとう。」
と、にこにこして、キツネにおじぎをしました。
キツネのゆうびんやは、びっくりしたかおで、クマのもっているおてがみを、のぞきこみました。それから、ツグミとかおを見あわせて、ふしぎそうにくびをかしげました。
なぜかというと、キツネは、じぶんが、きのう、おてがみをおとしたことに、まったく、気がついていなかったからです。
「そりをもってきたから、みんなでのろう。」
と、クマは、かかえてきた大きなそりを、雪のうえにおろしました。
「わー、そりだ！」
それまでイノシシのうしろにかくれていたノネズミが、ピョンとはねて、いちばんにそりにのりました。まっ白いテンも、ちょこんとノネズミのよこにすわりました。
クマがうれしそうに「ワッハハハッ」と、わらいました。
それを見て、びくびくしながら、クマのようすをうかがっていた、サルのきょうだいも、カモシカも、やっと、あんしんしたように、えがおになりました。
「おいら、丘のうえまで、このそりをひいていってやるよ。」
クマはそういって、丘のいちばん高いところまで、そりをひっぱっていきました。
さいしょに、ノネズミとテンと、子うさぎとイノシシが、そりにのりました。
丘のうえから、風をきって、いきおいよく、そりがすべりおりていきます。
「ワー！」「キャー！」と、はずんだ声が丘にひびいて、あたりに、雪のこながまいあがりました。
みんなは、かわりばんこに、そりにのりました。
クマは、なんどもなんども、そりを丘のうえまではこびました。
森のみんなも「ワッショイ、ワッショイ」と、かけ声をかけて、いっしょにそりをひっぱります。
いつのまにか、森のどうぶつたちは、クマとなかよくなっていました。
らんぼうものだと、おもっていたクマでしたが、ちっともこわくありません。

やがてみんながあそびつかれて、おなかがすいたころ、丘のむこうから、シカのかぞくが、ワイワイおしゃべりしながら、やってくるのが見えました。

せんとうは、シカのおばさんです。
シカたちは、くびから大きなかごをさげています。ちかくまでくると、かごから、やきたてのクッキーのいいにおいが、ただよってきました。
「みなさん、どうぞたくさんめしあがれ。」
シカたちはそういって、木の実のクッキーをくばりました。
シカのおばさんが、子うさぎのぼうやのところへやってきました。
「子うさぎちゃん、森の中の『とってもいいもの』は、どうだったかしら？」
と、シカは、にこにこしてききました。
子うさぎは、ちょうど、クッキーをくちいっぱいに、ほおばっていましたから、目を白黒させて、大いそぎでごくんとのみこみました。そして、
「シカのおばさん、森の中のゆうびんポストはね、ほんとうに『とってもいいもの』だったよ。ぼくのおてがみ、クマさんのところにとどいたんだ。」
と、とくいげにむねをそらしました。
「まあ、クマさんに！」
シカのおばさんは、びっくりしたようなかおをして、くびをかしげました。でも、すぐにえがおになって、
「おてがみがとどいて、よかったわね。」
と、いいました。

森の中では、川のそばの赤いゆうびんポストに、風がやさしい歌をうたっていました。

（浜北区）

［市民文芸賞］

ホタルが舞う古墳の里

河島憲代

ひさびさのサッカー練習がない日。
五年生の双子の兄弟、兄の勇と、弟の進は、のんびりと家にいた。
窓のむこうは、緑もすがすがしく早苗の田んぼが続き、遠くに二人が通う浜松市の西町小学校が見えている。
進は、母さんと並んで窓のガラスをふいていた。そのとき、田んぼのあぜに、羽根の黒い小鳥がツイーとおりた。
「ツバメじゃん！」
進は、身をのりだし、
「母さん、ツバメが来ているよ。ほらっ」
と、指さす。
「ほんと！　そんな頃になったんだわ」
窓に顔を近寄せ、ガラスをみがきながら、母さんが言った。
朝からずっとソファで体を丸めて本を読んでいた勇が、パシッとその本を閉じた。
それから、おもむろに体をのばすと、
「読んだぞ！　これで『日本の歴史』シリーズ二十一冊、全部」
わざと、そばにいる母さんと、進に聞こえるように叫んだ。
母さんが、ほほえんだ。
「すごいじゃないの、いつのまに。我家のサッカー少年勇は、歴男だったのね」
すると、すかさず進が、
「ねえ、ねえ。ちなみに、おれは？」
目をクリクリさせて、母さんの気をひく。
「そうね、進は、サッカー少年、アンド、リトルファーブル君かな」
「さすが母さん、わかってるう！　だけどさ、歴女っては聞

くけど、勇の歴男ってへんだよ。それにさ、勇が読んでたのって、マンガだし。読んじゃったんだから、窓ふきしろよな」

勇にむかって、進は、口をとがらせて言う。

進も良く本を読む。けれど、たいていは、生き物の本や、図鑑。今、メダカと、ドジョウを飼っている。棚に並べたその水槽の中で、酸素の泡がプクプク立ち上がっている。

三月のはやい頃に、進は、勇をさそって、地元の「ホタルを育てる会」の人が育てたホタルの幼虫二千匹の放流を手伝った。

「進、うまくこの幼虫が育てば、六月のはじめあたり、ホタルになって飛ぶんだよな」

「うん。去年もそうだったよ。特に、今回は、数が多いから、すごく楽しみさ。おーい！　ホタルの幼虫たち、ザリガニに気をつけろよ」

進は、勇と、そんなことを話したことを、ふと思い出して、ニヤッとした。

やっと、窓ふきに加わった勇が、

「歴史さあ、特に古代がいいな。人間がどうやって生きてきたかって証拠が、土の中から発見されてわかるじゃん。それってすごい。まだまだ知られていないことが、地面の下にはいっぱい眠っているんだろうな」

遠い昔に思いをはせるように言った。

窓をふくそんな二人を、にこにことながめていた母さんは、窓をふく手を止めて、さりげなく言った。

「五月にね、子ども会のソフトボール大会があるのよ。勇も、進も、サッカーチームの練習が忙しくって、ソフトボールには参加していないけど。五・六年の人数がたりないんだって。二人とも出てくれない」

母さんは、すでに百パーセント勇と、進は、出ると決めている。

二人は、それを感じていたが、

「えーっ。サッカーの練習はあ？」

「あのさ、ソフトボールのルール、くわしくないし」

などなど言いかえした。

でも、母さんは、のんきに笑顔で言う。

「心配ないわ。サッカーの監督さんには、話しておいたから。ソフトボールのルールのことは、パパに特訓してもらう。グローブもあるしね」

「やっぱ、もう決めてんじゃん」

「西町子ども会のチームで、ソフトボール大会に、おれたち出るってことだろ」

勇と、進は、ほっぺたをふくらめて母さんを見た

五月の日曜日。浜松市のグランドで、市の子ども会ソフトボール大会が開かれた。

「ソフトボールのユニホーム着ちゃった」

「なんか、はずかしいや」

そう言いあう勇と、信の背中には、8、9の背番号が鮮や

かだ。
なんと、西町子ども会チームは勝ち進む。
「信じられない」
と、目をまるくしたのは、応援に来ていた母さんたちだ。
「ガンバレ！」「ガンバレ！」
「かっとばせ、西町！」
まるで、まるで、ママチアガールみたいに立ち上がって声を出している。
そして、とうとう西町子ども会チームは、優勝してしまったのだ。
「さすが六年生たち。ホームランだもんな。しかも、満塁ホームランだぞ」
「かっこよかったあ！」
「おれら、足でがんばった。盗塁なんども」
「えへっ、足には自信あるじゃん」
勇も、進も、にわか参加のわりに活躍できて嬉しかった。
そうして、次の日曜日。意気揚々と、静岡市での県大会へとのりこんだ。
しかし、レベルの違い。残念ながら、一回戦敗退だ。
「まあ、良くここまで来たもんだ」
などと、みんなで言いあった。
帰りのバスの都合もあって、西町子ども会チームは、対戦相手だった駿河子ども会チームの応援をする。けれど、駿河子ども会チームも負けて、三回戦には進めなかった。
でも、試合後、駿河子ども会チームが、わざわざ、西町子ども会チームの応援席の前にかけて来て、整列。そうして、
「応援ありがとうございました」
帽子をとり声をそろえて、あいさつをした。
「がんばったよ！」
西町子ども会チームは、笑顔で駿河子ども会チームに拍手と声援をおくった。
そのとき、勇と、進は、そのチームに女の子がひとりいるなあと思っていた。ショートカットで、よく日に焼けている。
日が西にかたむいた頃の帰りのバスの中で、母さんが、なんだかにこにこと楽しそう。
勇と、進の前に、バスの補助席からスマホの画面を見せに来た。
「勇、進、ほら見て。この子たち駿河子ども会チームの子よ」
「あっ」「あの子じゃん」
さっき、気がついた女の子もいる。
「この二人、駿河子ども会チームの子。双子ちゃんでね、五年生なの」
「なんで母さん知ってんの？」
「その二人、男の子と、女の子だろ？」
「そういう双子ちゃんもいるの。くふっ。母さんね、この双子ちゃんのお母さんと友だちになっちゃったのよ」
スマホの画面を動かしながら、
「それでね『ぜひ、ご家族で遊びに来てください』って、誘

われたわ」
「みんなでってこと？　いやだね、おれは」
「おれも」
ぷいっと、そっけない勇と、進に対して、
「あらあ残念。バーベキューによ。お肉をたっぷり持って行こうと思っているのに」
片目をつぶってパチンとしてみせる。
「あっ、それ行く」
「おれも行く」
「そう言うと思ったわ」
くくっと、母さんが笑った。

バーベキューの日。父さんの運転する車で、勇と、進。母さんと四人で双子の兄と、妹のいる静岡市にむかった。静岡インターを下りると、十分位でその家に着いた。
赤い屋根の二階だてで、庭の芝生がきれいに刈りこんであった。
すぐ、親たちは、おしゃべりしながら庭にテントを張ったり、バーベキューのセットを出したりと楽しそうだ。
ちょっと、そわそわしていた勇だが、ここは、おれがと思ったのか。
「ぼくは、勇(ゆう)です。弟は、進(しん)です。十一月十一日生まれだよ。一並びです」
進の分もふくめて自己紹介をした。

「あっ！　おぼえやすい誕生日。ぼくらもさ。十月十日だもの。ダブル10(テン)の日。ぼく、誠(まこと)。妹は、文(あや)だよ」
誠の横で、文がにこっとする。それから、
「ちょっと、まってて」
と言って、家の中に入って行った。
「誠君、ソフトボールの試合の時は、メガネかけていなかったよね……」
進が、首をかしげ聞く。
「運動する時は、はずすんだ。スライディングして、メガネをこわしちゃったことがあってさ。ぼく、ソフトボールをやるの好きで、一年生の時からチームに入った。文もね」
「そっかあ。おれたちの西町子ども会が負けたの無理ないや。なっ勇」
勇が、進のそばで「うん、うん」とうなずく。そこへ、文がもどって来た。
「あのね、バーベキューのしたくができるまで、みんなで登呂遺跡に行って来るって言ってきたの。ねえっ、勇君、進君、行こう」
すでに文は、小さな白いポシェットを肩からかけていた。ソフトボールチームのユニホーム姿とは、まったくちがって、紺色のワンピースが良くにあっていた。
うながされるまま、勇と、進は、誠と、文と歩き出す。
「登呂遺跡って、近いの？」
興味ぶかく勇が聞く。

「すぐだよ。あの高いビルの南側さ。歩いて五分って所なんだ」
「行ってみたかったんだ、ぼく。歴史の本で読んで」
「あの……。勇さん、歴史、好き?」
文が、横を歩く勇に聞いてきた。
「文ちゃん、勇ね、『日本の歴史シリーズ』を読破してる。マンガだけど」
「進、マンガで良くわかるんだぞ」
勇は、誠と、後ろにいる進にむかって言う。
すると、文の声がはずむ。
「すごい！　私もときどき図書室で借りて読むわ。特に、古代がおもしろくって」
「だろ。文ちゃん」
勇は、なんだかわくわくする。
「それでね、登呂遺跡でのイベントにも良く行くわ」
「イベント?」
「火おこし体験や、古代米の田植などね」
「へーっ！　じゃあ、文ちゃんは、浜松の蜆塚遺跡は？　行ったあ?」
「残念。まだなの。行ってみたい」
もりあがる勇と、文の会話に、進も、
「ぼくんちの学校の近くにさ、古墳があるよ」
と、わりこんだ。
「古墳！」

誠が、メガネの奥の目をまんまるにした。
「ぼくも、文もだけど、けっこう昔のことをいろいろ知りたくて。この前も駿府城の石垣の発掘に参加してきたんだ。すごく暑い日だったけど、ていねいに土をはらいわくわくだった」
「あっ、いいな。テレビのニュースでその発掘のようす見たんだ。やってみたかったなあ、ぼくも」
両手を頭のうしろに組んで、勇は残念がる。
四人でしゃべりながら歩いて行く先に「登呂遺跡入口」の案内板があった。
押しボタン式の信号で、横断歩道を渡る。主要道路なんだろう、けっこう車の量が多い。
まわりには、家々や、マンション等があり、そこに、古代遺跡があるとは思えないのに。
遺跡に着くと、はっとするくらい広い緑の空間があった。空が大きくぬけている。
「田んぼだ！」「田植がしてある！」
勇と、進は、おもわず声を出した。
「いいでしょ。ここは、私のパワースポットなんだから」
笑顔の文が、そう言うなりスキップで水田のまわりの小道を行く。ワンピースのすそがゆれて、ポシェットがまるで小ウサギのようにはねる。
文の行く先に、復元された竪穴式住居が六個ある。少し離れて高床式の倉が一つあった。

「あははっ。ここに来ると、いつもそうなんだ。文が、ときどき、古代人の子どもかっておもえたりするさ」
ゆかいそうに誠が言った。
五月の風が、さらさらと稲の葉をゆらす。
田んぼにじっと、白いサギが立っていた。
そのとき、復元家屋の前で、まるで古代人の大人が現れたみたいに、薄いベージュ色の布を衣服のように身につけたおじさんが、
「おーい！　きみたち。今から火おこしをやってみないか」
そういって、手をふってきた。
「資料館のおじさんだ。行こう」
誠が、返事をする。
「はーい！」
勇と、進は、誠とかけ出す。
水田のむこうから、文もかけてきた。

一日が、あっという間に過ぎた。
帰りぎわ、勇と、進は、母さんにそっとつげる。
「あのさ、こんどは、ぼくんちに誠君と、文ちゃんをよぼうよ」
「田んぼや、小川にホタルが飛ぶころ……」
「そうね」
にっこりと母さんがうなずく。

梅雨どきには、めずらしい晴天の日。
誠と、文が静岡から、勇たちが住む浜松に、昼すぎの新幹線で来ることになっている。
二人の親たちは、夕食の頃に車で勇たちの家に来てくれることになった。
「進、ゆうべホタルの下見をしてきただろ？　どうだった？」
「飛びかってた。今夜は、もっと光る気がするんだ。『雨のふった次の日は、ホタルがたくさん飛ぶ』ってことがあると『ホタルを育てる会』のおじさんが、前に話してたし」
「そうか。誠君と、文ちゃん、二時に浜松駅に着くよな。まちどおしい」
「うん」
そう話す勇と、進は、窓の外をながめた。
家の前の田んぼは、たっぷりと水をたたえ五十センチほどに育ったイネの足元を支えているかのようだ。庭のアジサイの花は、日増しに色をこくしていた。
どこかで、カエルたちの声がしている。

新幹線の改札口で、勇と、進が立っていると、階段を下りてきた誠と、文が手をふってきた。
「やあ！」「やあ！」「こんにちは！」
もう、ずっと前からのなかよしだったようにあいさつをした。
駅の送迎レーンに、勇と、進の父さんと、母さんが車でま

っていてくれる。駅前広場でどこかの学校の吹奏楽部が演奏していて、にぎやかだ。前になり、後ろになりして、四人で歩いて行った。

「文ちゃん、浜松に来たら、蜆塚遺跡を見たいって言ってたから、今から行くよ」

「ほんと！　勇君おぼえていてくれたんだ」

「あのさあ、ぼくんちのそばにある古墳の出土品も、浜松博物館に展示されてる」

「見たいわあ！　進君」

文が、勇と、進の顔をにこにことのぞきこんだ。

「そのあとは、浜松城に寄るよ。誠君」

「ほんとかあ！　やったね」

誠が、ひゅっと右手を上げたので、勇とハイタッチ。

そんな子どもたちをみつけた母さんが、

「ひさしぶりね。誠君、文さんいらっしゃい」

父さんの運転する白いワゴン車の助手席の窓を開けて言ってきた。

「古代のにおい！」

勇の思っていたとおり、文は、蜆塚遺跡を楽しそうにめぐり、浜松博物館に入った時のリアクションが、歴女だった。

「ああうれしい！　今から、私をすてきな世界へつれて行ってね」

シーンとした展示室に、文は、ゆっくりと足を踏み入れた。

そして、進が説明していた古墳の出土品のあるガラスケースの前で、

「わあ！　きれいなガラス王。小さいけれどすいこまれそう『蛭子森（えびすもり）古墳の出土品』って」

と、説明文を読む文。

「ぼくんちの近くにある古墳の名前ね」

ちょっと、照れくさそうに進は、文に小声で言った。

「ますます、興味がわいたわ」

のぞきこむ文の小さなつぶやきは、すきとおった小鳥のさえずりみたいだった。

そんな文を見て、勇も、進も「ここに来てよかった！」と、ちょっと安心した。

けれど、文のキラキラとした目を見て、家の近くにある小さな古墳を、どう感じるだろうかと不安もある。

誠は、浜松城の『野面積（のづらづみ）』の石垣の前で、

「駿府城で発掘されている石垣とちがうんだなあ」

そう言いながら、手でさわりうなずいた。

「ほらほら、石垣の前に並んで、並んで」

スマホをかまえた母さんが、手まねきする。

「歴女さん、歴男君たち、ファーブル君もね。はいポーズ」

の声に、つい、みんなで笑いあった。

それから、勇と、進の家にむかった。

時間は、四時をまわっていた。

「今から行こう。蛭子森古墳へ」
熱心にさそったのは、勇だ。
四人、連れ立って家を出た。
道ぞいの田んぼのイネは、ぐっとのびて、近づくとカエルがひそんでいたのか、ポチャンと飛びこむ音がする。
「いいわあ、空が広くて深呼吸したくなる。このあたりにも古代の人たちが住んでいたわけでしょ。きっと、住み良かったのよ」
文が、空を見上げて言ってきた。
さすが、歴女は、深い考えをするものだと、勇と、進は、楽しくなる。それだけに、蛭子森に近づくのが心配でもあった。
「もうすぐ見えるけど、『日本の歴史』にのっているような有名な古墳を思いうかべちゃあだめだから。文ちゃん、誠君」
勇が念を押す。
夏至にむかうこの頃は、まだまだ日はかたむかない。並んで歩く四人の影がくっきりと田んぼ道にあった。
「暗くなってきたら、もういちど、この辺に来ようね。ホタルを見にさ」
そう言って、進は、ちょっと前に走り出て、両手をひらひらさせた。おまけにヒューヒューと口笛を鳴らす。
「ホー、ホー、ホタルこい。でしょ」
文に歌われて、進は、ほっぺたを赤らめた。
田んぼのイネの上を吹いてくる風が、汗ばむ四人の前髪をはね上げていく。
「ほら、あそこの高い木が何本かかたまって見えるだろ。そこなんだ」
勇と、進が前方にある蛭子森を指さした。
「田んぼの中に、あの森なの？」
そうつぶやいた文は、蛭子森にむかってかけだした。誠も、勇も、進もあとに続く。
静かにたたずむ蛭子森。小鳥の声がする。
「さりげなく、ここにあるのがいいわあ」
「そうだな。古代人の祈りの場が」
文と、誠の言葉に、勇と、進は、ほっとして（よかったあ）と見あった。
こんもりとしげるドングリの木が、さわさわと風に葉をすりあわせている。
「ここさあ、秋になるとドングリがいっぱいなるから、小さい頃から、ぼくらのドングリひろいの場所なんだ。カブトムシや、クワガタもいるよ」
進がとくいになって言った。
「また遊びに来たいな。ねっ文」
「うん」
と、蛭子森古墳の静かなたたずまいをながめる誠と、文。
「おいでよ」「おいでよ」
そういう勇と、進の声がはずんでいた。

夕方、誠と、文の両親が静岡から車で来て、一気に賑やかな夕食となった。
食事もそこそこに、進は、
「母さん、ちょっとホタルを見て来る」
と、耳打し、自転車を走らせた。
さっきまで、きれいな夕焼けにそまっていた空が、あい色を濃くしていく。
右に、左にと、進の自転車のライトのすじが、田んぼのイネを深緑色にうきあがらせる。
蛭子森のあたりまで来たとき、小さな光が進の前をふわっと舞った。
「よし！」
そのまま、田んぼのまわりの道を自転車でゆっくりと進む。小川の水音がチロチロと聞こえる。
「きのうより、いいじゃん。みんなをつれてくるからな」
進は、心の中で、あの放流した幼虫が、ちゃんと育って、いま光をはなって舞う姿が嬉しくてたまらなかった。
「おお！　すごい！　きれいだ！」
誠と、文のお父さんが一番に声を上げた。
「『子どもの頃、ホタルを友だちと追いかけあったり、虫かごに入れて持ち帰った』と、よく私の親が言っていましたよ。私には、そんな思い出がないです」
と、勇と、進の両親に話す。
「あらっ！　手に止まったわ」
文が、おもわず両手でかこう。
文の手の中で、ホタルの光が点めつする。
「すてき！　このホタルたちの中に、夕食の時に勇君が話してくれた、二人が放した幼虫が育っているわけでしょ」
「なんだか、今、夢の世界にいるみたいだ」
話す文と、誠の横顔が、ホタルの光の中にうかぶ。文は、そっとホタルを放った。
時のたつのも忘れて、勇、進、誠、文は、あぜ道に立ちつくしていた。
風にのって、かわいい声がする。
はっとして、四人はふりかえった。
見ると、小さな女の子や、男の子が小走りでやって来る。
そうして、キャッ、キャッとにぎやかに通りすぎて行く。
「どこ行くの？」
勇、進、誠、文が、そろって、その小さな子たちに聞いてみた。
「アッチダヨー」
と、夕やみの中にこだまのようにかえってきた。
「あの子たち、ドングリの首かざりしてたわ」
文が、目をしばたたき言った。
「そういえば、あの子たちの着ていた服さあ、登呂博物館のおじさんが、イベントでいつも着ている古代人の衣みたいだったぞ」

誠も、目をパチクリさせて不思議がる。
「『アッチダヨー』って……」
進が、首をかしげた。
「わかった、わかったぞ！　あの子たち、蛭子森から来たんだ。ホタルを見にさ」
勇が、とびあがって言った。
それから、顔を見あい、四人で声をそろえて言った。
「うわあっ！　古代人の子たちじゃん」
「おーい！　そろそろ帰るぞ」
田んぼのむこうで、勇と、進のお父さんの声がした。
ホタルが、星のまたたきとあわさって、よりいっそう光り輝く。

（東区）

［市民文芸賞］

はるとくんとふしぎな仙人

金指芙美代

「カチ、カチ、カチ、カチ」
ミッキーマウスの時計の針の音が、きこえます。
勉強中のはるとが時計をみあげると、11時5分もすぎていました。
「えっ！　もうこんな時間。やばーい」
はるとは、鉛筆を持ったまま、目をこすります。
はるとが寝る時間は、10時です。時々、ゲームをして寝るのが遅くなるので、ママとの約束です。
でも、きょうは、ママに勉強のドリルのお直しができていないと叱られて、夕食の後、部屋にもどって勉強しているうちに、ふと気がつくと、こんな夜遅くになっていました。
「あーあー、もういやだ！」
はるとは、天井にむかい声をあらげてからそのまま机にうつぶせになりました。

塾の四年生算数の勉強中でした。
はるとは、うつぶせになったまま横目でドリルをみると、数字がゆがんでみえて、あたまがグルグル、からだがフワフワ。
体を起こし、ドリルのページをめくり、
「こんなの、むずかしい！　まだ、ならってないよ」
はるとは、そういいながら、うっすら目に涙をため、口をとがらせました。
そして持っていた鉛筆を指先でくるくる回すと、突然、その鉛筆を壁に投げつけました。
「いたーい！」
壁にぶつけられた鉛筆は、芯が折れ、コロリと、机の角（すみ）に、ころがり落ちました。
はるとは、塾の勉強をほったらかしにしてあしたの学校の

仕度もせずにベットにもぐりこみました。
はるとのほっぺたに涙がツウーと流れています。
はるとに壁に投げつけられた鉛筆も机の下で、シクシク泣いています。
「泣くんじゃない、鉛筆よ」
静かな暗い窓の外で、その声は、きこえます。
すると、白くて長い鉛筆の杖をついた老人が、窓からスーっと、部屋に入ると、はるとに近づきます。
そして、ベットの中でねむっている、はるとに、やさしくほほえみ、
「はるとくん、きょうも頑張ったな。ゆっくりとおやすみ」
と、語りかけると、胸まであるグレーのあごひげをなで、ついでに、長いまゆげも、サッサッっと、整えました。
すると、机の下にころがっていた鉛筆が立ち上がり、
「鉛筆の仙人！　きょうも、はるとくんの部屋にきてくれたの？」
「フム、フム」
鉛筆の仙人は、静かにうなずきました。
鉛筆は、
「ぼく、はるとくんに壁にぶつけられてさ、とても痛かったんだ。芯も折れてしまったんだ。はるとくん、ときどき、ぼくをなげて、芯を折るんだよ、だから、ぼく、こんなに小さくなっちゃったのさ」
と、仙人に語りかけます。
「フム、フム、鉛筆よ、お前もがまんしろ、あの子も今、勉強でつらくて泣きたいんだよ」
すると鉛筆は、鉛筆の仙人にコクリとおじぎをして
「はい、わかりました。はるとくん、ときどき、勉強しないでゲームしてて、ママに叱られているものね。そんなとき、はるとくん、ぼくにいつも話してくれるんだ。『ぼくね、叱られてもママ大好き』って。『なによりもママがぼくの一番の味方だよ』って、いってるよ」
「フム、フム、そうだろう」
「どうしてわかるの？　あの子の気持ち」
「わしは、鉛筆の仙人じゃよ、あの、はるとくん、鉛筆をずっと大切に使ってくれてる。ほんとうは、とてもやさしくていい子なんじゃよ」
「じゃあ、どうしてぼく、壁にぶつけられちゃったのかな」
仙人と、芯の折れた鉛筆の話し声をきいていた、他の二本の鉛筆が、コロコロと、近くまでころがってきて、仙人にいいました。
「ぼくたちみてたよ、はるとくん、ずっと勉強してたんだ。何回も何回も、ぼくたちを使っては消し、一生懸命だったの。涙が一すじ流れていたんだよ。『つかれているんだね』『頑張っているんだね』って、ぼくたち話してたんだよ、ね」
もう一本の鉛筆も、うなずくと、
「うん、それでね、ぼくたち机の角（すみ）に置かれて、落っこちそうになったけど、頑張って、机の上でしがみついていたのさ。

だってさ、はるとくん、毎日、勉強してんだろ、問題の答がわかったときのはるとくんの嬉しそうな笑顔。とってもかわいいのさ、ぼくたちみんな知ってるよ。そのときは、ぼくたちも、はるとくんと一緒になって笑うんだ」

「フム、フム」

鉛筆の仙人は、にっこりうなずくと、

「ほう、さすがわしの弟子たちじゃ、よう知っておるじゃないか、はるとくんの頑張りをな」

そして芯の折れた鉛筆に

「お前もそっと、はるとくんのことを守ってやるのじゃよ。あしたの朝、きっと、はるとくんは机の角（すみ）にいるお前をみつけて、鉛筆けずりで、けずってくれるとも。勉強には、お前が一番大切なんじゃからな」

そういうと、鉛筆の仙人は、すやすや寝むっている、はるとのほほに、やさしくキスをすると、また長いあごひげと、目がみえなくなるほどの、長いまゆげを、サッサッと、さすります。それから白い杖の鉛筆にまたがり白い着物のすそをなびかせながら、暗い闇の中に消えていきました。

「はると、おはよう、朝ごはんよ。起きなさい」

ママがはるとの部屋のカーテンをあけると朝の光がミッキーマウスの時計に、まぶしくそそぎました。

六時です。

すると、ママの突然の厳しい声。

「なによ、はると！　このちらかしようは、起きなさい！　はると！　もう、しょうがないわね」

そういいながら、窓をあけました。

ふわぁーとした風が、はるとの髪に流れます。

「うーん、もう朝？」

目をさましたはるとが、大あくびをしながら起き上がりました。

「なにいってるの、朝にきまってるでしょ！　勉強はしたの？　宿題はやったの？　準備もしてないじゃないの。早く片付けなさい！　ママ、もう知らないから。」

いつもの優しいママの声が、どんどん、ソプラノになっていきました。

そういい残し、ママは、トントントンと、階段をおりていきました。

「はーい」

いつも素直にそう答えるはるとです。

だって、ママが大好きですから。

頑張れば、ディズニーランドに連れていって、ぼくの好きなミッキーに会えるように、シンデレラ城に泊ってくれるって。ミッキーの時計も買ってくれたんだ。一緒にコマまわしや、ドッジボールも、それにゲームもやるんだよ、コマまわしも、ドッジボールもゲームも、ぼくのほうがママよりうまいんだよ。

でも、でもでも、少し嫌な所もあるのさ。だってさ、ママ、

勉強しろ！　って、うるさいんだから。
はるとは、勉強も運動もできます。
頑張っているからです。
体は少し小さいけれど、とても明るくて、元気な子供です。
だけど、ときどき、何もしたくないときだってあるのです。

はるとは、ベットから起きあがり、身仕度をすると、学校へいく準備をします。
きのう勉強した算数のドリルは、塾のだから持っていかない。算数の本と国語の本と、ノート。音楽の本と、そして、今日は分度器と、コンパスを忘れちゃいけない。などと、ひとりごとをいいながら仕度をしていると、あけっぱなしのふで箱の中に三本あった鉛筆が、一本もありません。
あわててキョロキョロさがすと、机の上に二本の鉛筆が芯が丸くなって、いまにも落ちそうです。
「あったぁ」
はるとは、二本とも、鉛筆けずりでけずって、ふで箱の中に入れました。
そして、あと一本の鉛筆をさがします。
「ない、ない、ない、どこいったんだ」
と、ブツブツいいながら、あちらこちらをさがします。
「鉛筆、出てこーい」
大きな声で、少し、あせりながら机の下をのぞくと、鉛筆が、片すみにころがっていました。

「あった、あった。あー良かった」
はるとは、さがしたその鉛筆をみると、
「あれ？　折れてる…。あっそうか、ぼく、きのうの夜、なんだか悔しくて、この鉛筆をなげたっけ」
はるとは、折れた鉛筆にコックリと、あたまをさげると、
「きのうは、なげてごめんね、痛かった？　いま、けずってあげるからね」
と、ていねいに鉛筆をけずりました。
そしてまた少し小さくなった鉛筆は、
「はるとくん、きれいにけずってくれてありがとう。きょうも学校でぼくと一緒に勉強しようね」
そういうと、ふで箱の中に、嬉しそうにきちんと入りました。
他の二本の鉛筆も、顔をみ合わせて、ニッコリと笑いました。
はるとは、ふで箱をランドセルの中に入れました。
それからママの作ったコーンスープにロールパンと、ミニトマトが入った野菜サラダも残さず食べると元気よく学校へ出かけていきました。

今日は、四年生春の一せい学力テストの日です。
はるとが、ママに叱られながら、何回も何回も泣きながら直してきた箇所が、テストに出ました。
はるとは、とても自信がわいてきました。

「鉛筆くん、テスト、ぼく、頑張ったよ」
使った鉛筆を「やったぜ」と、にこにこしながらふで箱にしまいました。
「ランララン、ランララン」
帰り道のとちゅうにある家の庭に、大好きな小犬がいて、いつもなら遊んで帰るはるとなのに、今日は、その小犬をみむきもしないで、うたいながら走って帰りました。
「ただいまぁ」
はるとの大きな声。
いつになく玄関の戸を勢いよくあけ、にっこり。
「はると、おかえり、まあ、なんだか楽しそうね」
と、ママもにっこり。
ママも今日は、とても、ご気嫌そうです。
「ママ、あのね、今日の学力テスト、頑張ったよ」
はるとは、玄関の中に入ると、ランドセルをおろしながら、目を輝かせて、思いきり笑い白い歯をみせました。
「まあ、そう、はると、偉かったわねぇ」
ママは、優しくほほえみ、そっと、はるとを抱きしめました。ママのいい香り。
てれくさそうに、ママに抱きしめられたまま、はるとは、ママに言います。
「ママ、むずかしい所がテストに出たんだ。ママが直しなさいっていった所だよ。だからすぐわかったさ、やっぱり、勉強しておいてよかったよ、ママ」
「そうなの。はると、頑張れたのね、すごいじゃないの、ママ嬉しい」
するとママは、
「はると、はるとが笑っているついでに、すてきなお知らせがあるわ、さあ、なんでしょう?」
はるとの肩に両手をおき向きあうと、にっこり笑っていいました。
「すてきなって? ママなに? おやつは、ショートケーキとか?」
「ううん、もっとすてきよ」
「じゃあ、なによ、早くおしえて、ママ」
はるとは、ママの手をにぎります。
「それがね、ウフフ」
「ウフフって、ママ、もったいつけないの」
「わかったわ。いうわね、はるとが一番いきたかった…」
「ディズニー?」
はるとは、首をかしげて、ママをみました。
「そう、ディズニーよ、そのディズニーランドの予約がとれたの」
「えっ! ほんと? ぼく、ディズニーランド、どうしてもいきたかったの。ミッキーに会いたい。ママ、ありがとう!
いついくの?」
「来月の土、日曜日にね、シンデレラ城よ」
「わぁー、すごーい!」

はるとは、ママに抱きつきました。

そして、待ちに待った、ディズニーランドに出かける日がきました。

はるとは、その前の夜は、塾の勉強を一生懸命しました。折れて小さくなった鉛筆を使ったあと、

「この鉛筆、もう終りだなぁ。」

と、つぶやくと、大切にふで箱の中に入れます。そして、ミッキーの時計をみて

「九時半か、きょうは勉強、頑張ったもんな」

と、ひとりごとをいって、フトンをかぶると

「あした、楽しみ」

はるとは、にっこり笑いながらねむったのでした。

つぎの日、

夢にまでみたディズニーランドにつくと、はるとが今晩泊まるシンデレラ城が遠くにみえました。

「わぁ！　シンデレラ城だ」

はるとが、まぶしそうに、シンデレラ城をみあげると、そのシンデレラ城のてっぺんに白い着物をきて、白くて長い鉛筆の杖をついた、鉛筆の仙人が立っています。

「フムフム、フムフム」

はるとをみつめ、高い所からやさしくほほえんでいました。

はるとは、シンデレラ城のてっぺんにいる仙人をふしぎそうに

「ねぇ、おじいさん、あなたはだあれ？　どうして、シンデレラ城にいるの？」

と、首をかしげました。

鉛筆の仙人は、静かに語りかけます。

「はるとくん、こんにちわ。わしは鉛筆の仙人じゃよ。頑張って、勉強をしていたな。鉛筆を大切に使ってくれてありがとうな」

「えっ？　大切にって？　ううんぼく、鉛筆を壁になげつけたりもしたんだよ。ぼくのことみてたの？」

「そうじゃよ、毎晩な。はるとくん、鉛筆を泣きながら壁になげつけたろ、鉛筆は芯が折れて、痛くてつらかったけどな」

「ごめんなさい」

「いや、ええのじゃよ、ときどき、はるとくんが涙を流して勉強していると、一生懸命、頑張っているのじゃろうなと、わしも涙を流していたのじゃよ」

「鉛筆の仙人のおじいさん、いつもぼくといっしょに泣いてくれてたの？」

「フム、フム、そうじゃとも。はるとくんがなげて芯が折れた鉛筆は、わしの弟子なのじゃ。わしたちは、はるとくんが泣けば泣くし笑えば笑うのじゃよ」

「ほんと？　ぼくが勉強する所、ちゃんと、みていたんだね」

「そうじゃよ、とても心配での」

そして、長いあごひげをなでながら、鉛筆の仙人は、

「はるとくん、このごろ、いつも笑っているじゃろう。笑っていると、いい事が起こるんじゃよ」
「いい事？　そっか、あのとき、テスト頑張って嬉しかったの。だから、すごく笑った。そしたらさ、ママ、ディズニーランドの予約とれたっていうんだ。とっても嬉しかったんだ。今日だって、ぼく、心が踊る位、ワクワクしているんだ」
「フム、フム、はるとくんの、その笑顔とても、かわいくてすてきじゃよ」
「ありがとう。ぼく、頑張ってるもん。テスト、満点だったんだよ」
「そうじゃな、フムフム、このごろ楽しそうに勉強をしておるな」
「うん、楽しいよ」
「良かったなぁ、わしの弟子たちも笑っているよ、フムフム」
　鉛筆の仙人は、そう語りかけると、やさしくうなずいて、長い杖の鉛筆を青い空に、まっすぐかかげました。
　すると、黄金の光の輪があらわれ、流れるような長い道になりました。
　はるとは、その道をサーとのぼると、はるとのからだが急に軽くなり、空に舞いあがっていきます。
　そして、いつのまにか鉛筆の仙人の杖にまたがり仙人と一緒に、ディズニーランドの、空を高くとんでいるのです。
「わぁー、すごいなぁ！　へぇ、あっちにもこっちにも鉛筆が楽しそうにとんでいるよ。どうして？　どうして？　鉛筆が、みんなで笑っているよ、なんてすてきなんだろう」
「ごらん、ここは、はるとくんの好きな夢の国だよ、ほら、みてごらん、ミッキーがいるよ」
　はるとが、ディズニーランドの地上をみおろすと、ミッキーが、シンデレラ城の前で、手を振っています。
「はるとくーん、ようこそ、ディズニーランドに！」
「ミッキー！　こんにちわぁ」
　はるとは、両手をちからいっぱい振って叫びました。
　ストーンと地上におりたはるとは、ミッキーと固く握手をしました。
　ニッコリ笑うはるとに、ミッキーがギュッと、ハグしてくれました。
　はるとは、心臓が爆発しそうにドキドキしました。
　みつめあったミッキーの黒い瞳の中に、はるとの輝いて笑う顔がくっきり浮びました。
　そして、ミッキーに、ディズニーランドを案内してもらい、はるとは、夢のような楽しい一日をすごしました。

「カチ、カチ、カチ、カチ」
　はるとの部屋のミッキーの時計の針の音がきこえます。
　ディズニーランドから帰ったはるとは、とても元気に明るく勉強をしています。
　はるとは、
「カチ、カチ、カチ、カチ」

と、音のする時計をみあげます。
「十時」
そうつぶやくと、
「勉強、頑張ったぁ！」
はるとは、にっこりして、折れて小さくなった鉛筆に、ミッキーからプレゼントでもらった鉛筆のキャップをかぶせると、
「鉛筆くん、いっぱい勉強したね、サンキュウ」
机の小ひきだしの中に、大切にしまいました。
それを部屋のすみで見守っていた鉛筆の仙人は、
「フム、フム、フム、フム、きょうも、頑張ったね、はると」
と、やさしく声をかけ、鉛筆にまたがって、長いあごひげを、暗い夜の風にたなびかせ、空へ空へと帰ってゆくのでした。
（南区）

［入　選］

みいちゃんとクロ

佃　美帆

みいちゃんは、生き物が大のにがて。だって、いやなおもい出でばかりなんだもの。
ニワトリなんか大きらい。すごいいきおいで向かってきたかと思ったら、わたしのコッペパン、とって食べちゃった。
イヌなんか大きらい。お母さんと買い物に行くたびに大声でほえるんだもの。わたしは、そのイヌにぜんぜんいじわるをしていないのにな。
クモなんか大きらい。夜トイレに行くと、ぜったいに足音もさせないでサアッと出てきておどかすんだもの。
もっといやなのは、キリギリスやクツワムシ。だって、あんなに細い足で動けるなんてふしぎすぎる。わたしには、がいこつが動いているようにしか見えないんだもの。
そんな生きものがにがてなみいちゃんだけれど、一ぴきのネコだけは、べつです。きょうもいつものように、夕ごはんがおわると、みいちゃんはにわに出てよびました。
「クロー。」
すると、どこからともなく一ぴきのまっ黒なネコがあらわれ、

「みゃぁん。」
あまえた声ですりよってきました。
　みいちゃんは、お母さんにつくってもらったおにぎりをクロの前におきました。
「おかかたっぷりのスペシャルおにぎりよ。きょうは、大せつなきねん日だものね。」

　きょうは、みいちゃんとクロがはじめて出会った日なのです。そのとき、クロはまだ小さくてとてもやせていて、近くのお寺の木の下でふるえていました。みいちゃんには、今にもその子ネコがしんでしまいそうに見えました。でも、家に連れて帰ったら、きっと動物ぎらいのお母さんは、
「その子ネコ、もとのところにおいてきなさい」
と言うにきまっています。
　みいちゃんは、さっき、おかしやさんで買ってきたお魚の形のおせんべいを三つ、紙ぶくろから出して、子ネコの前において帰りました。
　次の日、みいちゃんは子ネコのことがしんぱいで、お寺に行ってみました。すると、みいちゃんが来るのをまっていたかのように、きのうの子ネコが近よってきました。
　みいちゃんは、コッペパンを服の下からそっとひっぱり出しました。ここに来るには、あの大きらいなニワトリたちがいるあき地を通らなければなりません。ニワトリたちに見つからないように、コッペパンを服の下にかくして、いそいで走ってきたのです。
　みいちゃんは、ぺっちゃんこになってしまったコッペパンを半分にわって子ネコの前におきました。子ネコは、うれしそうに食べはじめます。みいちゃんも、のこりの半分のパンをかじりながら、ひとりごと。
「子ネコちゃん、おなかがすいていたのね。あしたも食べ物を持ってきてあげるね。あ、そうだ。子ネコちゃんに何か名前をつけてあげなくっちゃ。ええと、タマ、チビ。」
でも、子ネコは知らん顔。
「うーん、まっ黒くろすけのクロ。」
と言ったとき、子ネコは、大きな声で
「みゃぁん。」
となきました。
　まるでへんじをしたかのようです。
「オッケー。クロできまり。ぴったりだわ。子ネコちゃん、あなたの名前はクロよ。」
　こうして、みいちゃんとクロはいつでもいっしょ、大のなかよしになりました。
　ときどき、家までついてきてしまうので、お母さんに見つかるたびに、同じことを言われてしまいます。
「その子ネコ、もとのところにおいてきなさい。」

　やがて、クロは、大人のネコに成長しました。クロのすみかは、あいかわらず、お寺です。今も家でかうことが、でき

ないからです。でも、おしょうさんが、クロにお寺のえんの下をかしてくれたので、いつでもクロに会いに行けました。

みいちゃんのお母さんは、少しづつ、クロにいやな顔をしなくなってきました。なぜって、クロが、こっそりみいちゃんの家の屋根うらべやに入って、なんどかネズミをつかまえてくれたからです。

お母さんは、大よろこび。

「ありがとう、クロちゃん。おれいに、にわであそんでいいことにするわ。でも、家の中にはぜったいに入らないでね。やくそくよ。」

そして、お母さんは、クロのために、時々のこりごはんでおにぎりも作ってくれるようになりました。

クロは、「記ねん日スペシャルおにぎり」をおいしそうにペロリと食べおわりました。

いつもなら、クロは、みいちゃんのおしゃべりを聞いて、お気に入りの赤いボールとじゃれてから帰るのですが、とつぜん、えんがわにとび乗りました。そして、あいていたまどから、家の中に入りました。

「クロ、入っちゃだめだよ。お母さんにしかられちゃう。」

みいちゃんは、あわててクロを追いかけました。クロは、おし入れの前にすわると、みいちゃんをふり返り、

「みゃぁん。」

となきます。

みいちゃんは、クロをだきあげていそいで外に出そうとすると、クロは体をひねってとびおり、おし入れの戸をあけようとしました。

「クロ、中をのぞきたいの。しかたがないわね、ちょっとだけよ。」

みいちゃんが、おし入れの戸をあけると、ふわっと風がふいてきました。その風といっしょにとてもいいにおいがしてきます。

みいちゃんが、そのにおいにさそわれておし入れの中に一歩入ると、キラキラと光っている明かりのようなものが、おくの方に見えました。

「みゃぁん。」

クロは、長いしっぽをみいちゃんの手にからませました。まるで、いっしょに行こうとさそっているかのようです。みいちゃんは、その明かりが何なのかたしかめてみたくなりました。そこで、クロといっしょにまっくらやみの中を進んでいくことにしました。

だんだんくらさに、目がなれてくると、まわりのようすがわかってきました。足もとにも道がのびています。道の両がわには、せが高くて太いクスやスギの木々が何本も立っています。その先には、風にふかれてさやさやと音を立てている竹林があります。

やがて、前の方から、あまずっぱいにおいがしてきました。みいちゃんがそのにおいのする方へ進んで行くと、広いウメ

林がありました。いいにおいの正体は、じゅくし始めたウメの実だったのです。

みいちゃんは、クロといっしょなので、くらくても、少しもこわくありませんでした。かえって、ふしぎな森のようすにわくわくしてきました。

「子ネコちゃん、おなかがすいただろう、こっちへおいで」

とつぜん、くらやみにおじいさんの声がひびきわたりました。その大きな声は、スギの木の方から聞こえます。みいちゃんは、その声にびっくりしました。心ぞうがどきどきしています。

「みゃぁん。」

クロは、みいちゃんの手をはなすと、声のする方へ走り出しました。

「まってよ。クロ、わたしをおいて行かないでよ。」

みいちゃんは、あわててクロを追いかけようとしました。そのとたんに、何かにつまずきました。

「いたっ。」

どうも、ひざをすりむいてしまったようです。いたくてなみだが出てきました。

「あれまあ。おじょうちゃん、いたかったじゃろう。ここを通るものは、みんなつまずくんじゃからなあ。ほれ、この草でこすっておけば大じょうぶじゃよ。」

おじいさんは、足もとにはえていた赤い葉っぱを一まいちぎってみいちゃんにくれました。そして、クロのすがたを見るとやさしい声で言いました。

「おや、子ネコにいつも食べものをあげてくれたのは、おじょうちゃんだったんだね。おかげで子ネコは、こんなに大きくなれたよ。」

おじいさんに助けおこしてもらいながら、みいちゃんは、おじいさんの顔をじっと見つめました。とってもやさしい目をしています。

ふしぎなことに、おじいさんの白い長いあごひげが、風でゆれるたびにピカピカ光ります。

それを見たみいちゃんは、ひとりごと。

「わたしがおし入れに入ったとき見た光は、おじいさんのおひげだったのかしら。」

そのみいちゃんの声が聞こえたおじいさんは、

「わしのひげが気になるのかね。」

と言いながら、長いひげの半分くらいをそっと持ち上げました。

すると、おじいさんのひげの一本一本に、たくさんのホタルがとまっているのが見えました。そのホテルは、クリスマスに見たネオンのようにピカピカ光っています。

「このホタルたちはわしの友達じゃ。げん気がいいじゃろ。このじきになると、いつもわしのひげの中にもぐりこんでくるんじゃ。この子たちのなかまはむこうにたくさんいるんじゃよ。会ってくるといい。子ネコちゃん、そこまであん内しておあげ。」

「にゃあん。」
クロは、うれしそうにへんじをすると、みいちゃんの手をしっぽでなでました。みいちゃんが、そのしっぽをやさしくにぎるとクロは歩きだしました。くらい道でしたが、ホタルたちがみいちゃんの足もとをやさしくてらしてくれています。
そして、坂を下っていくときゅうに目の前が明るくなりました。みいちゃんは、
「すごぉい、すてき。」
とさけんだきり、何も言えなくなってしまいました。目の前のけしきがあまりにもすばらしかったからです。
みいちゃんは、近くにあった切りかぶにすわってじっとホタルたちのようすを見つめました。クロも、みいちゃんの横にそっとすわっています。
草たちはライトグリーン、こけたちはライトイエロー、大きな池はライトブルー、そして、大小の木々は、いろいろな色が重なりあってふしぎな色にかがやいています。
ホタルたちも、キラキラと光りながらたのしそうにとんだり、いろいろなところにとまったりしています。
みいちゃんは、ホタルたちのもっと近くに行ってみたくなりました。いっしょにおどってみたくなりました。そこで立ち上がり、一歩前に進もうとすると、
「みいちゃん、そこから先は、あぶないよ。もどってこられなくなるよ。」
いつの間にかひげのおじいさんが、みいちゃんたちの後ろに立っていました。
「子ネコちゃんはみいちゃんを、どうしてもここにしょうたいしたかったのじゃろうなあ。しっぽでわしのひげのさきっぽをなんども、なんどもなでるんじゃ。わしになんとかしろといっているんじゃろうな。くすぐったくてたまらなかったよ。」
おじいさんはにこにこしながら言いました。
バサッ、バサッ。
とつぜん、頭の上の方で大きな羽音がしました。
「おやおや、ふくろうが食事からもどって来る時間じゃ。みいちゃん、そろそろ帰らないとお父さんやお母さんがしんぱいするよ。子ネコちゃん、帰り道をあん内しておあげ。」
「みゃぁん。」
クロが、しっぽを大きくふると、みいちゃんは、からだがふわりとうかんだような気がしました。
「あらまあ、みいちゃんたら、こんなところにいたのね。ずいぶんさがしたわよ。まさか、おし入れの中でねてたなんて思わなかったわよ。とてもしんぱいしたわよ。」
お母さんの声に目を開けると、しんぱいそうなお母さんとお父さんの顔が見えました。
「あれ、クロはどこ。」
みいちゃんが、おきあがってみると、そこはおし入れの中で

した。でも、クロも、あのおじいさんもいません。みいちゃんは、そっとつぶやきました。
「また、会えるといいな。もし会えたら子ネコちゃんじゃなくて、クロという名前だっておしえてあげたいな。」
　すると、どこからかあのおじいさんの声が聞こえてきました。
「会えるとも。来年のホタルのころにな。それまで。子ネコちゃんのことをよろしくたのむよ。」
　あのクロの声も、どこからか聞こえてきました。
「みゃぁん、みいちゃん、またあした。」

（東区）

［入　選］

ようせいだった、ぼく

かまくらゆきこ

　ぼくは、そうた。
　きょうは、ぼくの7才のおたんじょう日。おかあさんは朝から大きなチョコレートあじのケーキをやいてクリームでデコレーションしたり、ぼくの大すきなトリのからあげをいっぱいつくってくれた。それから、庭に咲いていた花をつんでテーブルにかざったりもした。
　すると、おねえちゃんが折り紙をほそく切ってわっかにつなぎはじめた。
「何をするのかな?」
と、見ていると、それをカベにはった。まどから入ってきた光が、折り紙のわっかにあたってキラキラとかがやいている。
「わぁ、なんだかとーってもたのしいね」
って言ったら
「こんやはそうたちゃんのおたんじょう日パーティーよ。おとうさんがかえってきたら、みんなでおいわいしましょうね」
と、おかあさんが頭をなでてくれた。ぼくはうれしくなって
「おとうさん、はやくかえってきてくれるといいなぁ」

と、おもったよ。だって、おとうさんは、いつもぼくが寝てからかえってくるし、朝おきるともういない。土よう日も、日よう日もおしごとに行っちゃうんだもん。さみしい時もあるけど、いっぱいいろんなことをおしえてくれる。ぼくは、そんなおとうさんを

「か～っこいい！」

と、おもっているんだ。

ねぇねぇ、きいてよ。じつは、ぼくには、とっておきのひみつがあるのさ。

ぼくは、ここんちの子になるずぅーっとまえ、イギリスという国の、ロンドンっていうところにすんでいた。ぼく、ようせいだったんだよ。ロンドンには、ようせいのなかまがたーっくさんすんでいてね、いつも、みんなでたのしくくらしていたんだ。

「ピーター・パン」と、いうなまえの、いつまでも子どものままで、おとなにならない男の子と「ティンカー・ベル」がかけてくれるまほうのこなで空をとんだり、わるものの「フック船長」をやっつけたりしたんだよ。インディアンの女の子をたすけに行ったり、女王さまの庭でかくれんぼしたり「ピーター・パン」といっしょにいると、まいにちとってもたのしかったなぁ。

でもね、ある時「ロンドン・アイ」ってよばれている、せかい一大きなかんらん車のちかくをとんでいたら、とってもとってもつよい風が

「びゅうううう……」

ってふいてきて、ぼく、クルクルっと、とばされちゃったんだ。ようせいのなかまたちも見えなくなってしまった。

「だれか、たすけてー」

ってさけんだんだけど、風がつよすぎて、だれもたすけにきてくれなかったんだよ。

こわくなって、ないてしまいそうになった時

「ストン」

って、公園の木の上におっこちてしまったんだ。ドキドキしながら

「ここは、どこ？」

って、木の下をあるいている人に手をふってみた。でも「かぶるととうめいになるマント」をきていたので、だれもぼくに気づいてくれなかった。

「やっぱりだめだな……」

かなしくなってないていると、むこうからおかあさんとおねえちゃんが手をつないで、おしゃべりしながらあるいてくるのが見えたんだよ。

ふたりともわらってて、なんだかキラキラかがやいていた。

「たのしそうだな。いっしょについていってみよう」

と、おもいついて、いつのまにかここんちの子になったんだ。

しらなかったでしょ？
これがぼくの、ひみつのおはなし。

よるになって、いつもよりはやくかえってきたおとうさんと、おかあさんと、おねえちゃんと、ぼくのたんじょう日パーティーをした。とーってもたのしかったよ。
そして、おふとんにはいると、おかあさんが、いつものようにおねえちゃんとぼくに、いろんなおはなしの本をよんでくれた。よみおわると
「ミコちゃんもそうたちゃんも、うちの子にうまれてきてくれてありがとう。ふたりとも大すきよ」
っていって、おふとんごとぎゅーっとだきしめてくれたんだよ。
「やっぱりね。ぼくのおもったとおり！」
ぼく、ここんちにきめてよかった。

（西区）

［入　選］

すずの恩返し

松　田　健

昔、遠州・舞阪村に、網元の長者がいました。多くの使用人を使って、遠州灘や浜名湖で、たくさんの魚介類を獲っては、それを毎日、地元の舞阪はもとより、浜松の町や遠く三河の方まで売りさばいて、それは裕福な暮らしをしていました。
それでも唯一の悩みは、家の跡取りの問題でした。長者夫婦には、三人の子どもに恵まれていましたが、三人とも娘で家の跡取りになる息子がいなかったのです。それで長女に、お婿さんを迎えることにしました。
長女は、名まえを鈴と言い、近所でも評判の器量よしでした。色が白くて美しい顔立の上、頭も良くて働き者でもありました。
「あんなきれいな娘さんは、これまで見たことがない」「お鈴さんは、舞阪一、いや遠州一のべっぴんさんだ」などと、言われていました。
そんな訳ですから、長者の家で、お婿さんを探しているという噂が世間に伝わると、それはそれは、沢山の縁談話が次

から次と長者夫婦の元に持ち込まれました。
ある時、知り合いの雄踏の長者が、
「雄踏に、大変真面目で働き者の若者がいるから」と、縁談話を持ってきました。
舞阪の長者夫婦は喜んで、早速、長女の鈴に、その若者を引き合わせてみました。けれども鈴は、お見合いの席で、その男を一目見たとたん、「男前じゃないから嫌だ」と、即座に断ってしまいました。
「男の価値を顔だけで判断するものじゃないよ」
「そうだよ、鈴。真面目な働き者が一番だにい」
「お姉ちゃんの価値観は、ミーハーの子どもみたい。おかしいよ」
父親からも母親からも妹たちからも言われてしまいましたが、鈴は言うことを聞きませんでした。
すると、ふだんから怠け者だった次女が、自分の事は棚に上げて、
「働き者の男なら、男前でなくたってありがたい。わたしが、その男のお嫁さんになりたい」と、言いました。
それで長者夫婦は、その働き者の若者を長女の婿として迎えることは叶いませんでしたが、次女が望むのならと、次女をその働き者の男のところへ嫁がせることにしました。
その後、次女は雄踏で、それなりにしあわせに暮らしたそうです。

長者夫婦は、今度は村櫛の方の知り合いからの紹介で、働き者で、更にそれに加えて、男前の若者と引き合わせることにしました。そして、これなら長女の鈴も不満はないだろうと思いました。
「どうだ、良い男だろう。仕事も良くできる男だ」
長者がこう言って、長女の鈴に、その若者を引き合わせると、今度は、
「背が低いから嫌だ」と言いました。
「なっ　なんだとー。あちゃあ……。よくもまあ、そう次から次と、わがままを言うもんだねえ……」
今度こそ、長女の鈴も満足してくれるだろうと期待していたのに、長者夫婦も、がっかりしてしまいました。言われてみれば、たしかに、この若者は男前でしたが、少し背が低いのでした。
すると、その様子を見ていた三女が、
「わたし、働き者で男前なだけでも、じゅうぶんにありがたいわ」
と、相手の背が低いことなど気にならず、その若者と結婚したいと両親に頼みました。こうして、その男の元に嫁いで行きました。その後、この三女は村櫛の地で、それなりにしあわせに暮らしたそうです。

長者夫婦は、今度は遠く浜名湖の奥の方まで訪ね歩いて行って、細江の村で背が高くて男前で、その上、腕の良い浜名

湖の漁師だという若者を見つけてきました。そして、
「これなら、今度こそ鈴も納得して喜ぶだろう」と、自信を持って会わせました。
ところが、鈴は、また首を横に振るばかりで、たてには振りません。
「なっ　なんでだ。何が不満なんだ」
「こんな、わがままを言うような娘に育てた覚えはないのに。トホホ……」
長者夫婦は、ほとほと呆れて困ってしまいました。
「もしかしたら、鈴には他に誰か好きな男が、いるんじゃないのか？」
長者夫婦は首をかしげるばかりでした。

そうこうしているうちに、ある時、近所に住む人たちの間で、やはり、どうも鈴には、好きな男がいるらしいという噂が立って、やがてそれは長者夫婦の耳にも届きました。
「それはいったい、どこのどいつだ。大事な娘をたぶらかすような男は、この俺が絶対に許さん」
父親の長者は心配で気がきではありません。すぐに娘の鈴に、
「おまえ、自分で勝手に好きになって、付き合っている男がいるのか？」と尋ねました。
でも鈴は、どうせ父親に話しても分かってはもらえないだろうと思って、何も話してはくれませんでした。

娘から聞き出すことを諦めた長者は、ある日、使用人の中で、もっとも信頼し漁師たちのかしらを任せていた男を屋敷に呼び出し、
「ここ暫く漁の方は、若い衆に任せておけばいいから、おまえに一つ頼みたいことがある」
と告げ、長女の鈴に関する噂の真相を確かめてくるように命じました。
「親方、承知しました。そういうことなら詳しく調べてまいりましょう」
漁師かしらの男は、そう言って出かけて行きました。

暫くして戻ってきた漁師かしらは、早速、
「親方、奥さん、分かりましたよ」
と、屋敷に報告にやって来ました。
「お鈴さんに、好きな男がいるのはたしかでした」
「やっぱり、そうだったのか。で、どんな男なんだ」
「何時の頃からか、今切近くの浜辺に、ほったて小屋を建てて、一人で一匹のねこと一緒に暮らしている男です」
「げっ　なんでまた、そんな貧乏臭い男と……」
長者は呆れて頭を抱えこんでしまいました。
「いやいや、それが貧乏臭いどころか、すらりと背が高くて、なかなかの美男子ですよ」
漁師かしらの男が言いましたが、
「なかなかの美男子だなんて言ったって、男のくせに甲斐性

がなきゃあ、しようがないだろう。それにどこの馬の骨とも分からん」

長者は、かんかんに怒って言いました。

「でも品の良い顔立ちをしていますから、そんな悪人とも思えません」

「そんなこと分かるものか。それにしても見かけだけで惚れ込んでしまうなんて情けない。その男には容姿以外にも、何か人を惹きつけるような魅力があるのか？」

「はい。その男は笛の名人です」

「うぅ～ん。笛の名人だって。そいつは遊び人じゃないのか」

長者夫婦は、ますます心配になってきました。

「月明かりの下で、その男が浜辺で吹く笛の音は、それは素晴らしいですよ。とても、この世のものとは思えないほど神秘的で美しい音色です。誰だって、あの音を聞くと心がいやされますよ」

漁師かしらの男が言いました。

「でも怪しいなあ。それに、いくら笛が上手くたって食えないんだぞ」

長者は吐き捨てるように言いました。三人の娘の中でも一番美しくて、利発だった長女の鈴が、そんな目先のことで男を判断するなんて、親としても情けない限りだと長者は思うのでした。

さて、鈴が好きになったというその若者は、名まえを義高と言いました。何時の間に、どこからやって来たのか、今切の浜に小さな小屋を建てて住み始めていたのでしたが、欲のない性格らしく、一人で少しばかりの魚を捕り、少しばかりの畑をたがやして、一匹の子ねこと暮らしていました。

ある時、鈴は、ひょんなことから、この若者義高と出会い、好きで好きで、たまらなくなってしまったのです。

それは初夏の夕暮れ、鈴が今切の浜を散策していた時のことでした。いとも心地よい笛の音が、すーっと風に乗って流れてきました。まさしくそれが、義高が吹く笛の音なのでした。

鈴が思わずその笛の音に聞きほれて、しばらくそこにたたずんでいると、今度は、人懐っこい子ねこが近づいて来て、足元にじゃれてきました。

「あらっ　かわいい子ねこだこと」

鈴は、その子ねこをたまらず胸に抱き上げていました。

そして、ふと気が付くと、いつの間にか、笛を手にした美しい若者が、すぐ自分のそばまで来て、横に立っていたではありませんか……。

鈴は思わず、ポッと頬が熱くなっていました。そこへ、

「すず、ここにいたのか？」

その若者が声をかけてきました。

（えっ　なんで、わたしの名まえを……）

鈴は、ますます頬がほてってくるのを感じました。

「どうして、わたしの名まえを……」

鈴が若者に尋ねると、
「えっ」
今度は、若者が目を丸くして驚きました。そして鈴が胸に抱いていた子ねこを指さして、
「今、あなたが抱いてくれているその子ねこは、わたしが飼っているすずです」
と言いました。
「あっ　そうなんだ。この子ねこちゃん、わたしと同じ名まえなんですね。わたしも鈴って言うんです」
「こりゃあ驚いたなあ」
その偶然に、鈴も、若者の義高も驚いて、二人は笑い転げていました。
こうして、お互いに出会ったばかりなのに親近感を抱き、いっぺんに恋心が芽生えたのでした。これが二人の出会いのきっかけでした。
それから若者は、鈴と会う度に、優しく鈴さんと言って、ていねいに、さん付けで呼んでくれました。
鈴は鈴で、若者には義高さん、子ねこにはすずちゃんと、ちゃん付けで呼ぶようになりました。
二人の恋は、鈴の方が積極的でした。義高は、鈴が地元の長者で網元の大事な娘であることを知ると、これ以上、親しくなることをためらっていましたが、鈴の方は諦めませんでした。どんどん鈴の方から接近して、何時しか深い仲となっていたのでした。

そしてこのことは、両親の長者夫婦にも知れるところとなったのでした。
母親は、娘の鈴さえそれを望むのなら、二人の仲を許そうとしてくれましたが、父親の長者は許さず、とうとう鈴は勘当されて屋敷を出されてしまいました。
しかし、鈴は親から勘当されてもしあわせでした。心底好きになった若者、義高のところへ押しかけて、晴れて夫婦になりました。誰も表立っては祝福してくれませんでしたが、本当に心から好きなひとと一緒になれて、しあわせでした。
長者は落胆しましたが、もうすっかり長女だった鈴のことは諦めて、そのうち次女か三女夫婦を跡取りに迎えるつもりになっていました。

こうして、鈴は義高と、貧しいながらも楽しい日々を過ごすようになりました。
ところが一つだけ二人にとって、悲しい出来事が起こりました。突然、子ねこのすずが、どこかへ姿を消してしまったのです。
義高は悲しみにくれました。夫が悲しんでいる姿を見て、鈴も悲しくなりました。
「わたしのせいだわ。わたしが義高さんを奪ってしまったから、すずちゃんは、わたしたちに遠慮して出て行ったに違いない」

こう思うと、余計に胸が痛みました。
「ごめんね。すずちゃん」
鈴は、月に向かってつぶやきました。
「鈴さん、もう気にしなくてもいいよ。すずも、わたしに鈴さんって言う良いひとができたから、安心して、どこかに行ってしまったんだろう」
義高は、鈴の肩をやさしく抱いて、慰めてくれました。
元々、すずは、まだほんの小さい赤ちゃんだった頃に、海辺に捨てられていて、ノラ犬かカラスに襲われて深い傷を負い、今にも死にそうになっていたところを、義高が見つけて保護し、これまで大事に育ててやっていたのでした。

不思議なことが起こったのは、それからしばらく経った、ある夜のことでした。
鈴が寝ていると、子ねこのすずが夢の中に現れたのです。
「あれっ　すずちゃんじゃないの。いったい、どこへ行ってたの」
鈴は思わず叫んでいました。けれど、子ねこのすずは、ただやさしく微笑んでいるだけで、それには答えず、そして、いきなり人間の声になって、
「鈴さん、もうすぐ大きな津波が襲ってきます。ここに居ては危険ですから、すぐに汐見坂の高台の方に避難してください」
と、告げてきました。

「えっ　津波が……」
鈴が驚いて聞き返した時には、子ねこのすずの姿は、もう消えていました。
「あなた、急に起こしてごめんさいね。だけど、わたし今、気になる夢を見てしまったから」
鈴が隣に寝ていた夫の義高に、そう話しかけてみると、
「おまえも見たのか」
と、義高も実は起きていて言ってました。そして、ほんのりと小屋の隙間から差し込んでくる月明かりの下で、二人は顔を見合わせました。
「あなたも、すずちゃんを見たと言うの？」
「そうだよ。たった今、夢の中に現れた」
「二人、同時に同じ夢を見るなんて、不思議だわ」
「これは、きっと正夢に違いない。すずが知らせに来てくれたんだ」
「どうすればいいの？」
「これから、すぐに汐見坂に避難するんだ。舞阪のお屋敷や村も危ない。すぐにみんなに知らせに行こう」

こうして夜中に、突然、村中に、大きな笛の音が響き渡りました。
「こんな夜中に、うるさいじゃないか」
大きな笛の音に叩き起されてしまった村人たちは、皆、何事かと怒って家の外に出てきました。

そこへ鈴から、今から津波が襲ってくるから、すぐに逃げるようにと告げられて、長者や村の人たちは、最初、半信半疑でしたが、そこへ、どどどぉーんと、凄い地響きがして、大きな揺れがきました。

「地震だ。これは本当に津波が来るぞ」

みんな一人残らず慌てて汐見坂の高台に避難しました。そして東の空が少しは明るくなって、夜明けが近づいた頃、遠州灘のはるか彼方の沖から、大きな大きな波が物凄い勢いで、次から次と打ち寄せてきました。

みんなが呆気にとられている間に、平地の家屋や畑が、いっぺんに飲み込まれていきました。

「なんてことだ」

「こんな大きな津波は初めてだ」

人々は高台の上から、すさまじい光景を見て、口々に言い合いましたが、

「とにもかくにも命だけは助かった。命が残っただけでもありがたい」

みんな肩を抱き合って喜び合いました。

一方、鈴と義高は、高台に一緒に避難して来た人々や犬やねこの間に、子ねこのすずが居ないか探してみましたが、その姿はありませんでした。

それでも、すずが夢の中で知らせてくれたのだけは、たしかに本当のことでした。

津波が去った後、何もかも壊されてしまいましたが、みんな無事だったので、村の家や道路、畑の再建も、どんどんはかどりました。

命の助かった長者夫婦や村の人たちは、危険を知らせてくれた鈴と義高に心から感謝しました。

長者は、鈴の勘当を解き、二人を新しく立て直した屋敷に招き入れ、跡取りになってくれるように頼みました。

一緒に住んでみると、義高は笛を吹くのが上手いだけではなく、仕事も真面目にこなしました。

そればかりか、所作、立ち振る舞いに、どことなく品があるので、最初は、どこの馬の骨かと疑っていた長者も、今では、ただの家柄の者ではないと思い始めていました。

それで、どこかの大事な息子なのに笛ばかり吹いていて、一時的に勘当されていただけだったのなら、逆に、こんな所へ引き留めてしまって、申し訳ないことだと思うまでになりました。

ある日、長者夫婦は気になって、義高に、そのことを尋ねてみました。

すると、義高は、好きな笛ばかり吹いていたので勘当された訳ではありませんでした。

義高の両親は、この遠州より、ずっと西の国、近江の郷で、小さなお城を持つ領主だったのですが、ある時、隣の大きな

郷から攻め込まれて、義高たちの郷は滅ぼされてしまったのでした。そして領主だった両親は責任を取って自害していました。

けれど、せめて一人息子だった義高は、郷を追われても命だけは粗末にせず、生き延びていって欲しいと、両親から諭されて、以来、ずっと各地をさすらいながら、この遠州の地まで流れてきたのでした。

それから、鈴と出会うまでは、捨てられ傷ついていたところを、助けてやった子ねこのすずと、一緒に暮らしていたのです。

「それなら、ここにたどり着いたのも何かの縁。これからは末永く、この地でしあわせに暮らしてください」

と、長者夫婦は義高に言いました。鈴も、好きな夫と両親が和解してくれて、こんなに嬉しいことはありませんでした。

またこれ以来、この長者の屋敷では、どんなのらねこでも、やって来ると追い立てたりせず、家の守り神として、大事にしてやったということです。

（北区）

［入　選］

サラダのうた

如月はるの

ぼくは、毎日サラダを食べている。

ぼくのお母さんは、うちのサラダのことを、「黄金のサラダ」と言っていた。

一日三回、食べる。

よーく、かんで食べると、体が喜ぶ。体が喜ぶと、「いのちのくさり」が、体の中で働いて、ぼくを助けてくれる。

おかげでぼくは、今日も、大好きな算数と休みじかんの運動場が、楽しくてたまらない。

お母さんが教えてくれた、サラダの事。

ぼくたちの食べたごはんや肉や魚の栄養は体の中で、血や肉やエネルギーになる。

だけど、そのときに、たくさんのビタミンやミネラルやこうそが、集まって手をつながないと、だめなんだ。肉や魚の栄養が、人間の体の血や肉にかわるときに、大切なやくめがあって、働いてくれる。これが、いのちのくさり。たべものの中にはいっている栄養。ぼくたちのいのちをつくってくれるたべものなんだ。

黄金サラダには、たくさんのしゅるいの、材料がつかってあって、いっぱいビタミン、ミネラルがある。
キャベツ、オニオン、ピーマン、キュウリ、トマト、ピクルス、きのこ、パプリカ、コーン、ツナ、エビ、まめ、ドライマンゴー、ブルーベリー、クランベリー、デーツ、アボガド、キウイ……ごま、オリーブ。
黄金のサラダ、いのちのくさり、一日三回おかあさん。トントンこつこつ、ほうちょうで、千切りキャベツとスライスオニオン。
トントンこつこつ、トントントン。ほうちょうの音が、うれしくて、つい台所にいきたくなる。千切りの音は、お母さんの音。
黄金サラダ、いのちのくさり、一日三回もりつける。きんちょうするね、もりつけは。赤、青、黄色、とりどりに、心をこめてもりつけて、見ているだけで、ときめくよ。
黄金のサラダ、いのちのくさり、一日三回よくかんで、かんで食べると甘くなる。
もぐもぐ、もぐもぐ、もぐもぐと、かむとサラダがとけだして、ぼくの体をよろこばす。
今日も、ぼくは、学校の運動場を走りながら、おかあさんの黄金のサラダのことを思い出して、うれしくなった。
おかあさん
「きゃべつ　だいすきだよ。」

（中区）

［入　選］

たのしいお客さま

宮島ひでこ

朝から降りつづいていた雨は、夜になり台風のような大雨になりました。
窓から見える木も草も、大粒の雨にうたれ風にゆれています。
ぼくは、その木々のゆれ動く姿をながめながら風の音をきいていました。
すると、どこからか弱々しくないている子ねこの小さなき声がします。その声は、だんだんぼくの家にむかって、近づいてきます。ぼくは、カーテンを少しあけて、子ねこの姿をさがしましたが、見つかりません。
『そうだ、おばあちゃんをよんでこよう』
二階の戸じまりをしていたおばあちゃんは、トン、トン、トンと急いで階だんをのぼってきたぼくに、
「どうしたの？」
と、びっくりした声でふりむきました。
「おばあちゃん、うちの庭で、子ねこの声がするよ。小さい声でないてる」

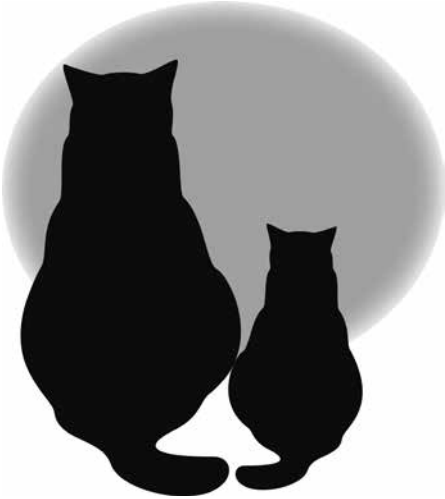
おばあちゃんは、ぼくと二階からおりて台所のカーテンをひろくあけて庭を見ました。台所のあかりが、外をてらしています。
でも、子ねこの姿はなく、なき声もきこえません。
しばらくすると、今度は玄関の方から悲しそうな力のない、小さな声がきこえてきます。ぼくは、いそいで玄関へ走っていって、外にでてみました。
風は、少しやんでいます。
「にゃおー、にゃおー、ねこちゃーん、おいでー、にゃおー」
ぼくは、ねこのなき声をまねしてみました。何回も、ねこの声をまねして呼びかけていたら、なんだかねこになった気分になり、
（ぼくは、ねこのなき声が上手なんだ）
と、おもわず自分のことを笑ってしまいました。
ぼくは、かさをさして子ねこをさがすことにしました。
「子ねこちゃーん、どこにいるのー、おいでー、にゃおー、にゃおー」
しばらくして、あたりを見まわしていたぼくは、木々の葉っぱのあいだにいる黒い子ねこを見つけました。少し体をふるわせて、ぼくの方をみています。そして、「にゃーん、にゃーん」と、何度もなきながら、又、台所近くの庭の方へにげていきました。
「ねこちゃーん、にげなくていいんだよー。にゃおー、にゃおー、ねこちゃーん」
ぼくは、にげていく小さな黒いシルエットを目でおいかけました。
『そうだ、台所のそばの雨にぬれない所に、パンとミルクをおいてみよう』
ぼくは、おばあちゃんといっしょに、ミルクとパンを別々のおさらに入れておきました。そして、半分だけしめたカーテンのかげにかくれるようにして、子ねこがあらわれるのをまちました。
しばらくして、黒い子ねこちゃんが、木の葉っぱをくぐるようにしてやって来ました。ペチャ、ペチャとミルクをおいしそうにのんでいます。そして、時々、あたりを、きょろきょろと見まわすと、安心したのでしょうか、パンを、モグ、モグ、ゆっくり食べおわりました。
ぼくは、うれしくなって、
「おばあちゃん、よかったね」
と、レースのカーテンのうらで、顔をみあわせよろこびあいました。
子ねこちゃんは、ぼくたちが見ていることは気がつきません。
そこへ、パパとママが仕事から帰ってきました。
パパは、子ねこの姿をみていいました。
「だれかが、捨てていったねこだったら、かってあげないとかわいそうだな」
ママは、

「わたし、スーパーへ行って、キャットフードをかってくるわ」
と、いそいで出かけていきました。
パパも、ママも、すっかり子ねこを育てる気持ちでいます。
ぼくは、おばあちゃんにたずねてみました。
「おばあちゃん、このねこちゃん、うちの子になったらどうする？」
「しかたないわね。ママとパパと三人でしっかり世話していきなさいね。まず、おしっことウンチをどこでするのか、病院へつれていって病気がないか検査、お風呂、食事のお世話、あそんであげたり…。いっぱいありますからね」
「おばあちゃんは、なにするの」
「わたしは、としをとったから、あまり責任をもてないのよ。みんなでそだてていってね」
そういいながらも、おばあちゃんは、その夜、黒ねこの赤ちゃんのためのかわいいベッド造りをはじめました。
小さなダンボールを高さ十センチぐらい、横はばが三十センチかける二十センチぐらいの形に切り、その中に、やわらかいタオルをたたんで入れ、子ねこだから足をもちあげなくても、さっと入れるように箱のすみを一カ所あけて、出入口になるようにしています。
やがて、外の雨は小雨にかわり風もやわらいでいます。
さっきまで、「にゃん、にゃん」とないていた子ねこちゃんでしたが、元気がでてきたのでしょう。じーっと、ぼくたちの方をみています。
「よかったね、ねこちゃん。むこうのへやの前の雨がかからないところに、食べもの、水、ベッドおいておきますよ。よく、ねんねしなさいね」
おばあちゃんは、カーテンの内側から、子ねこにやさしく声をかけました。
そこへママが、帰ってきました。
「買ってきたわよ、いちばん値だんが高くて、おいしそうなホタテ入りのフード。赤ちゃん用だから食べやすいみたいよ」
ママは、息をはあはあしながら、カーテンをゆっくり、少しだけあけました。
黒ねこの赤ちゃんは、ホタテ入りのフードをおいしそうに、食べ終わってから、台所の方を向いてじーっとみんなの声をきいています。
「うわー、おなかいっぱいになったのね。子ねこちゃんの目がとってもかわいいこと」
家族みんなが、たのしそうに話しているのを二階できいていたおじいちゃんは、体の調子が良くなったといって、下までおりてきました。それから、子ねこが、ペロペロと、お皿をなめたり、手足をなめたりしているのをみて、うれしそうに話します。
「かわいいもんだな、捨てられたねこ、それともまいごかな、かわいそうに…」
「おじいちゃん、ほら、このねこちゃんのベッド。むこうの

部屋の前の広いところは、雨や風の心配がないから、あの場所にベッドと食べものをおいてあげるつもりなのよ」
「それは、いいことだ。なんだか家族がふえた気持ちだな」
そう楽しそうにいいながら、おじいちゃんは、また二階へもどっていきました。
外は、雨がやんで、風もやわらいでいます。しばらく庭にいた子ねこちゃんは、草むらを通ってどこかへ行ってしまいました。
そして、「にぁん、にぁん」と、今度は元気な声でないています。その声は、玄関の方からきこえてきます。
ママは、ミルク、パン、ホタテのフードをそれぞれのお皿に並べました。水は、他の器に多めに入れてあります。
ベッドになった箱には、「黒ちゃんのベッド」とかいて、ピンクやブルーのクレヨンで、花のもようが、えがいてあります。
「あしたの朝、とってもたのしみだね」
と、ぼくが、大きな声でいうと、みんなの顔はにこにこしています。
黒ねこの赤ちゃんが、おいしそうにフードをたべている姿や、ベッドでねむっている姿を家族みんなは、それぞれ頭の中にえがいているようです。
「おふろに入れるのは、だあれ?」
「なまえは?」
「ぼく、黒ねこだから、クロちゃんがいいと思うよ」
しばらく、会話がはずみます。
翌朝のことです。
夜明けと共に、一番先に目がさめたおじいちゃんは、台所につづく奥の部屋から見えるところに準備した、おばあちゃんがつくったベッドと、ママが用意したミルク、パン、ホタテのフードを見ようと、そーっとカーテンをあけようとしました。
ところが、ふしぎなことに、ドスのきいたおとなのねこの「にゃーおー」という声がきこえます。
「えーっ、なんだこの声!」
おじいちゃんは、びっくりしてカーテンをそーっとあけてみました。
そこには、小さな子ねこといっしょに、大きな黒ねこがいたのです。
親ねこです。
ママが準備したパンやミルクを食べたようで、口のまわりをペロペロなめています。
そして、まんぞくした顔で、見あげています。その親ねこと、目と目があってしまったおじいちゃんは、腰がぬけるほどびっくりして、おばあちゃん、パパ、ママをよびにいきました。
「あっち、むこう、親ねこ…」
と、大きな声でさけび、すわりこんだおじいちゃん。

ぼくも、家族みんなのさわぐ声に気がつき、ベッドとフードが見えるへやへ、いそいでいきました。
パパも、ママも、子ねこの親がいたことにおどろき、赤ちゃんねこが、ホタテのフードが入っていた皿を、いつまでもなめているすがたをみて安心したように顔を見あわせています。
近所でくらしているねこちゃんたちでしょうか？
おばあちゃんは、がっかりした気持ちと、子ねこがママねこといっしょにいる安心と、入れまざった気持ちだと、ぼくに話しました。ぼくも、同じ気持ちです。
昨日は、台風のような大雨だったのに、今朝は、すっかり雨はやんでいます。
ぼくは、コンクリートでできているブロックべいの、すきまのところを親ねこといっしょに帰っていく子ねこに話しかけました。
「クロちゃん、あそびにきてくれてありがとうね。こんど、天気のいい日に、また、ママといっしょにきてね。まってるからね。元気でね」
子ねこは、ぼく、ママ、パパ、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなの方をふりかえると、元気な声で、
「にゃー、にゃー、にゃー」
と、返事をしてママねこのうしろから、ゆっくり歩いていきました。
大雨の夜に、ぼくの家に来てくれた小さな黒ねこのクロちゃんは、たのしい、たのしいお客さまでした。
久しぶりに家族みんなで過ごした、ほっこりと心あたたまる夜でした。

（中区）



［入　選］

七夕の願い事

生　﨑　美　雪

七月七日、今日は、七夕です。美咲は、お母さんと一緒に、昨日、坂の上の空き地でとってきた笹を、部屋の中に飾りました。

薄い緑色の笹の葉っぱが、窓から吹いてくる初夏の風に、さらさらと音をたててゆれています。

「美咲ちゃん、折り紙で、一緒に短冊を作りましょう」

お母さんが、スーパーで買ってきた折り紙を、テーブルの上に広げました。

「赤、黄、緑、白、紫、ピンク。銀色、金色。わー、きれいな色紙がいっぱい」

美咲は、いろんな色の折り紙を見て、うれしそうに言いました。

「よかった。美咲ちゃんが喜こんでくれて。」

お母さんは、美咲の笑顔を見ると、ほっとしたように言いました。

美咲は、ついさっきまで、窓辺に座って、さみしそうにしてたのです。それは、数日前に、こんな事があったからです。

美咲が、小学校で仲良しになったお友達の友理ちゃんが、お父さんの仕事の都合で、急に転校してしまったのです。

美咲は、しくしくと泣きながら、学校から家に帰ってきました。

それから毎日、小学校から帰ってくると、部屋の隅っこに座って、しょんぼりと窓のむこうを見つめて、泣いていました。そんな美咲のことを、お母さんは、とても心配しました。

（大好きなお友達が、突然いなくなってしまって、さみしいのね。小学校へ行けなくなってしまったらどうしましょう。）

美咲は、まだ小さかった頃から、大人しくて引っ込み思案で、小学校に入学しても、なかなかお友達が出来ませんでした。

小学校から家に帰ってきても、なんだかいつもさみしそうな顔をして、部屋の中で、一人でぬいぐるみやお人形と遊んでいたり、絵を描いたり、絵本を読んだりしていました。お父さんとお母さんは、そんな美咲のことを、とても心配していました。

ところが、ある日、美咲が学校から、お友達を連れて帰ってきたのです。

「友理ちゃんです。お友達になったの。」

美咲は、うれしそうにお母さんに、友理ちゃんを紹介しました。

「こんにちは。」

友理ちゃんは、にっこり笑うと、おさげ髪をゆらして、ぺ

こりとおじぎしました。
「こんにちは、友理ちゃん。美咲とお友達になってくれたのね。ありがとう。」
そうお母さんが言うと、美咲と友理ちゃんは、うれしそうに顔を見合わせて笑いました。
（ほんとによかったわ。）
お母さんは、二人の笑顔を見ると、ほっとしました。
友理ちゃんは、遠くの街から、美咲の小学校に、転校してきました。明るくて元気で、笑顔が素敵な女の子です。
小学校の教室で、美咲が一人で自分の席に座って、ちょっとさみしそうに窓の外を眺めていたら、友理ちゃんがかけよってきて、
「こんにちは。友理です。よろしくね。」
と、右手をそっと差し出しました。
美咲は、ちょっと驚いて友理ちゃんを見ました。
すると友理ちゃんが、ニコニコとうれしそうに笑ったので、美咲もなんだかうれしくなって、
「こんにちは。美咲です。よろしく。」
と、右手を差し出しました。
二人は、笑顔で握手しました。
休み時間になると、教室で一緒に絵を描いたり、絵本を読んだり。友理ちゃんは、前の学校に通っていた時のことや、お家で飼っている、かわいい猫ちゃんのことを話してくれました。美咲も、友理ちゃんに、お父さんやお母さんのことを話しました。
こんな風に、二人は、仲良しのお友達になったのです。
ある日、美咲が学校に行くと、友理ちゃんが、美咲のところへ、かけ寄ってきました。
「おはよう。美咲ちゃん。」
「おはよう。友理ちゃん。」
美咲は、うれしそうに笑って、友理ちゃんを見ました。
すると、友理ちゃんが、
「はい、これ。」
と、ガラスのように透き通った、ピンク色のビーズの首飾りを、手のひらにのせて、美咲にそっと、差し出しました。
「わあ、素敵。きれいね。」
美咲は、目を輝かせて、そのピンク色のビーズの首飾りを見つめました。首飾りには、緑色の葉と、かわいらしい赤いお花がついています。
「私が作ったの。美咲ちゃんへの贈り物よ。」
「友理ちゃんが作ったの⁉きれいね。ありがとう。」
美咲がそう言うと、友理ちゃんが、ビーズの首飾りを、そっとかけてくれました。
「素敵。美咲ちゃんにとっても似合ってるわ。」
「ほんと？　友理ちゃん、ありがとう。」
美咲は、うれしそうに笑いました。
「この首飾りは、美咲ちゃんと私、お友達になったしるしよ。」
友理ちゃんも、にっこり笑いました。

「お友達…。私、友理ちゃんとずっと仲良しでいられたらいいな。」

美咲は、ちょっとはずかしそうに友理ちゃんを見ました。

「うん。ずっと、これからも仲良しのお友達でいましょう。」

友理ちゃんは、微笑みながら、美咲を見ました。

それから二人は、仲良く手をつないで、教室の窓のところまで行きました。

ガラス窓のむこうに、水色の空が広がっていて、ふわふわと白い雲が、たくさん浮かんでいます。おひさまが、キラキラと輝やいて、運動場をとり囲んでいる木々の緑の葉っぱが風にゆれました。

美咲は、そっと窓を開けました。

すーっと、気持ちのよい風が、美咲と友理ちゃんのほほをなでました。二人は、深呼吸して、一緒に、窓のむこうの景色を見つめました。

子供たちが、ボールや縄とびをしていたり、ブランコに乗って、ゆれていたり、すべり台をすべっていたり、ジャングルジムで遊んでいたり。

みんな、とても楽しそうに遊んでいます。

「美咲ちゃん、私達も一緒に、外に行って遊びましょう。」

友理ちゃんが言いました。美咲が、ちょっととまどっていると、友理ちゃんが美咲の手をとりました。二人は、手をつないで、教室のドアからろう下へ出ると、下駄箱で靴にはきかえました。それから、二人一緒に、小学の玄関を抜けて、運動場へかけ出していきました。美咲は、休み時間に運動場へ出るのは、その日が初めてでした。

いつも、教室の中で、時々窓のむこうで遊んでいるクラスメイトたちを見たりして、絵本を読んだり、絵を描いたりして過ごしていました。

友理ちゃんの不思議な魔法にかかったみたいで、何だかとてもワクワクして、楽しい気持ちになりました。

「美咲ちゃん、友理ちゃん。一緒にボール遊びしましょう。」

運動場に出ると、美咲のクラスの女の子たちが、美咲と友理ちゃんのところへかけよってきました。

「うん。」

二人は、クラスの女の子たちと一緒に、ボールをついて遊びました。

ポン、ポン、ポン。と、軽やかに、赤や青黄色や白。いろんな色のボールがはねています。おひさまのあたたかな光が、運動場にふりそそぎました。

カラン、カラン、カラン。

チャイムがなりました。

「休み時間、終わっちゃったね。教室に戻ろっか。」

友理ちゃんがそう言って、また、美咲の手をとりました。

「うん。」

美咲も、友理ちゃんの手をそっとにぎって、二人一緒に、運動場をかけ足で走りました。クラスの女の子たちも、二人のあとから、走ってきます。

運動場の花だんに咲いているチューリップの、赤や白、黄色やピンク色のかわいい花が風にゆれました。
美咲は、友理ちゃんが首にかけてくれた、ビーズの首飾りに、そっと、手をふれました。
首飾りが、おひさまのやわらかな光で、キラキラと輝やきました。
「友理ちゃん、素敵な贈り物を有難う。」
――せっかく、お友達になれたのに…。
友理ちゃんとの思い出が、心の中に浮かんできて、美咲の目から、涙がポロポロとあふれでてきました。
そんな美咲を見て、お母さんは、何とか元気にしてあげたいと思いました。それで、お父さんと相談して、七月七日にお家で、七夕の飾りとお料理で、七夕のお祭りをしましょう。と、決めました。
「美咲ちゃん、一番好きな色を選んでね。」
「うん。じゃあ、お星さまの金色！」
美咲は、テーブルに並んだ色んな色の折り紙の中から、金色の折り紙を選びました。それから、ハサミで、金色の折り紙を半分に切って、短冊を作りました。
「短冊に願い事、書いてね。はい。」
お母さんが美咲に、黒いペンを渡しました。
「うん。」
美咲は、お母さんから、ペンを受け取ると、ちょっと考えてから、こんな風に書きました。
「友理ちゃんに、また、会えますように。」
お母さんは、美咲が願い事を書いた金色の短冊に、針で、小さな穴をあけました。そして、こよりの白いひもを通しました。それから、この金色の短冊を、笹の葉の細い枝に結びました。
「美咲ちゃんの願い事、かなうといいわね。」
「うん。願い事、かないますように…。」
美咲は、目をつむって、小さなてのひらを、そっと合わせました。
「さあ、他の色の折り紙も短冊にして、飾りましょう。」
美咲は、お母さんと一緒に、折り紙をハサミで切りました。そして、針であけた穴に、白いヒモを通して、いろんな色の短冊をたくさん作りました。
それから、折り紙のきれいな短冊を、笹の葉の枝に飾っていきました。
サラ、サラ、サラ、サラ。
赤、青、黄、紫、緑、オレンジ、ピンク、金、銀。
色とりどりのきれいな短冊が、心地よい音をたてて、風にゆれました。
七夕の夜になりました。
お父さんが、お仕事の帰りに、ケーキ屋さんで買ってきてくれた、フルーツがいっぱい飾ってある、カスタードクリームのフルーツタルトを、テーブルにのせました。金色のお星さまが真ん中にのっている、七夕のフルーツタルトです。

夕食は、美咲とお母さんと一緒に、手巻き寿司を作りました。エビやマグロ、キュウリ、梅、納豆、玉子。いろいろな具を酢飯でくるんで、おのりを巻いた手巻き寿司です。
テーブルに、七夕のお料理が並びました。
「わあ、美味しそう。」
美咲は、うれしくなりました。
「織姫と彦星、きっと今夜、天の川で出会うのね。」
お母さんに教えてもらった、七夕のお話しを思い出して、美咲は、ちょっぴりロマンティックな気持ちになりました。
「今夜は、たくさん星が輝やいて、きっときれいでしょうね。」
お母さんも、うっとりとして言いました。
「そうだね。きれいな星と、天の川を、あとからみんなで見に行ってみよう。」
お父さんが言いました。
「うん。」
美咲は、わくわくしましした。
「さあ、七夕のお料理をいただこう。」
美咲とお父さん、お母さん。三人一緒に、七夕の手巻き寿司と、フルーツタルトをいただきました。
「おいしい。お父さん、お母さん、ありがとう。」
美咲が、にっこり笑いました。
「美咲、短冊にどんな願い事書いたんだい？」
お父さんが、美咲に聞きました。
「転校しちゃった友理ちゃんに、もう一度会えますように。って、書いたの。」
そう言うと美咲は、友理ちゃんのことを思い出して、ちょっと寂しそうな顔をしてうつむきました。
「そうかい。友理ちゃんに、また会えるといいね。」
お父さんの言葉を聞くと、美咲は、顔をあげて、
「うん。」
と、にっこり微笑みました。
「きっと、また会えるわね。美咲のはじめての素敵なお友達だものね。」
「うん。きっと、また会えるね。私、夜空のお星様に、お願いするわ。」
美咲は、すっと椅子から立ち上がると、窓の側まで歩いていきました。
そして、そっと窓を開けました。
そよそよと、涼しい夜の風が、部屋の中に入ってきました。
夜空のむこうで、小さな星たちが、キラキラと輝やいています。
お父さんとお母さんも、美咲のそばに来て、三人で一緒に、夜空に輝やく星たちを見つめました。
金色の小さな星がひとつ、すーっと、光の尾をひいて、夜空を流れました。
「あっ。流れ星」
流れ星が、キラリと光りました。
「大好きな友理ちゃんに、また会えますように。」

美咲は、そっと、また願い事をささやきました。流れ星が、美咲にほほえみかけているように、キラキラと輝きました。

夜の風が吹いて、七夕飾りの色紙の短冊と笹の葉が、サラサラと、ゆれました。

美咲が願い事を書いた金色の短冊も、風にゆれて、キラリと光りました。

美咲は、首にかけている友理ちゃんからもらった、ピンク色のビーズの首飾りに、そっと手をふれました。

「美咲ちゃん、ずっと、これからも仲良しのお友達でいましょう。」

あの時の、友理ちゃんの明るい声が、星空のむこうから風にのって、優しく聞こえてきました。

（中区）

［入選］

ヤンク

馬塚典子

出会い

それは、とっても変てこな犬だった。

生まれて間もない子犬だというのに。

ドテッとした体。足は太くて短い。

モジャモジャした黄土色の毛は、ごわごわにからみついて、あまりきれいじゃない。

キョロキョロと見上げる目だって、なんだか、かわいくない。

それに、やたらと跳びはねては、土間の柱にぶつかっているよ。

ぶつかっては「ブーブワッ」って、なくんだ。

「いやだあ、こんなブタみたいな犬」

小学生の、のんちゃんと、けいちゃんは、そろって声をあげた。

だって、二ヶ月前まで飼っていた犬のゴロは、茶色の毛並の、りりしい姿の犬だった。

病気で死しんでしまったゴロ。

家族のだれもが、さびしいなあ、と思っていた。
だから、中学生の誠兄(まこにい)は、友達からの情報を、たどりたどって、
「隣り村の農家で子犬が生まれたらしい」と聞き出し、訪ねて行った。
そして、この犬をもらい受けて来たのだけれど…。
普段は無口な、お父さんまでもが、
「落ち着きの無い犬だなあ」
少しがっかりしたように言うのだった。

「ぼくが、自転車の荷台に乗せて走ったから、デコボコ道だったから、箱ん中でゆさぶられて、車酔いしちゃったんだよ」
それに…
誠兄は心の中でつぶやいた。
子犬は三匹いたんだ。その中で、一番地味でぼんやりしてたこの犬。
だけど、あの時。
ぼくを見上げて、うれしそうに笑ったんだ。
その夜は、土間に布を敷いて、犬の寝床を作った。
「さあ、おやすみ」
電灯を消すと、ブウブウキャオンなき声がうるさくてたまらない。
「もーお、静かにしてよお」
のんちゃんけいちゃんは、またまた、この新しく来た犬が嫌になった。
「生まれてはじめて、一人になったんだからねえ、怖いんだよねえ」
いつもなら「電気つけっぱなしはだめ」と注意するお母さんが、電灯をつけて、明るくしてやった。
一晩中、電気代がもったいない。
三日間ほど、ないてうるさいやつだったがだんだんと声をたてなくなった。

名前をつける

もう、車酔いなんかしてないはずなのに、ピョンピョン跳びはねては、ドカッと、あちらこちらにぶつかっている。
のんちゃんもけいちゃんも、いきなりドンと、ぶつかってくる犬に怒った。
「もーお！　もーお！　やめえ！」
それでも、楽しそうな犬の顔。
だから、かわいくないけど、まあまあ、じゃけんにするのは、やめた。
「名前はどうするの？」
あっそうか、イヌだもブウだのと呼んでいたが、ちゃんと名前がなくてはいけない。

家族みんなで考えた。
「ゴロは？」
「だめえ。ぜーんぜんゴロじゃない」
この変な犬、あのゴロとはちがう。
「ゴロがかわいそうだ」
ドン・モジャ・ムクゲ。
うーん、どれもあんまりうれしくない。
やっぱりブウかなあ。
「ヤンクはどう？」
お母さんの言葉で、子ども達は顔を見合わせた。
「あっそうだ！　火星のヤンクだね」
わあっと笑い声が広がった。
空想科学小説「少年少女火星探検隊」には、火星に住む熊が登場する。
誠兄が持っている本を、妹たちも読んでもらったから知っていた。
わくわくドキドキする物語りのなかで、火星熊と仲良くなった地球の子ども達が、熊に付けた名前が「ヤンク」だった。
やたらといたずらばかりしているドジな、火星の子熊は、このブウとちょっと似てる。
「似ているのは動きの方で、姿は、かなりちがうな」と、みんなは思ったが。
火星熊は、全身美しい金色の毛。
こちらは、モジャモジャ毛の、きたない黄土色だからね。
「ヤンク」と呼んだら、
「ブーワン！」と返事した。
だから、決まり。
「ヤ・ン・ク」

いたずらっこ

庭の小屋につながれても、よく動き回る、ヤンクだった。
スズメが羽パタパタさせて降りて来ては、ヤンクの犬まんまを狙って食べる。
ヤンクがブワブワ怒って追っても、首輪の綱がピーンと張って、ちょうど届かない位置で、平気でおこぼれご飯をついばんでいる。

ある日の事。
猫のタマが、垣根の金魚草のかげから出て来た。
犬小屋のすぐ前を、ゆっくり、すまして通りながら、チラリ、とヤンクを見る。
それから、スタッと軽々縁側に跳び乗ると、ツーンと伸びをして言った。
「ヤンク。あたしが先輩よ。敬いなさい。下からいくらほえたって、どうせここまで来られない。つながれたまま、ジタバタしなさいにゃあああ」
と、次の瞬間

勢いよく突進して来たヤンクは、ドスン！　縁側に跳び乗っていた。
「ギャーオ！」
タマは全身の毛を、マンガみたいに逆立て奥の方にすっとんで逃げた。
ヤンクの首輪の綱の先には、地面に打ち込んであった棒杭ごと、引っこ抜かれて、ぶら下がっていた。

のんちゃんと、けいちゃんは、捜していた。
くつとぞうりがそれぞれ片方ずつ、どうした事か見つからない。
はきものは、ちゃんとそろえて置かないとお父さんに叱られちゃう。
「ヤンクに聞いてごらん」
お母さんに言われて、そうしてみたが、ヤンクは首をかしげるだけ。
今度は、お母さんが
「かくしたんでしょ。どこへやったの」
しゅんとして、犬小屋の裏に回ったヤンクは、サクサク穴掘りして、土まみれのくつとゾウリを、くわえて出してきた。
お母さんには弱いんだ。

お父さんは、ヤンクを連れて近くの畑に行った。
広い畑の中、綱をはずしてもらい、喜んでピョンピョンはねるように跳んで、お父さんの周囲を回った。
強気になったか、大きく回った時、ドボン
畑のドブに落っこちたヤンク。
ああ、火星の金色熊ヤンクも、小説の中で、泥沼に落ちたのだ。
そこまで似なくてもいいのに。
金色熊と同じ、ドロリドロリ、なさけ無い姿。
お父さんは、近くの川に連れて行き、ザブザブ洗ってやると、気持良かったのか、急に元気になって、ブルンブルン、と全身を振って水を飛ばした。
そのままピョンピョン走って、川原のカラスを追いかけ、どんどんむこうへ行ってしまった。
お父さんは、呼んで追いかけ、捜し回ったが、見つける事ができなかった。
首輪と綱だけ持ち帰り、言った。
「犬は利口な動物だから、じきに帰ってくる」
子ども達は思った。
「ヤンクは、利口かなあ…」

どぶに落ちた

誠兄（まこにい）の手

それから、一ヶ月程が過（す）ぎた。

お母さんが、家の前を掃除していると、
埃っぽい道のずっとむこうから、やせた犬がトボトボ歩いて来る。
うす汚れた茶色の犬だ。
「ヤンク？　いや。ちがうね」
お母さんは、ほうきを取り直し、掃除を続けようとしたが、気になった。
やせ犬は、ショボ・ショボ・と家の前まで来た時、ふっとこちらを見た。
ピタと歩みを止め、奥の庭の方を見たようだった。
「ウワワワワッ」
突然、叫ぶようにほえると、庭にかけ込んで行った。
そのまま犬小屋にとび込んだ犬は、オウオウと、なき声をたてながら、小屋をガリガリと引っかいている。
ヤンクだ！
ああ、身体じゅう傷だらけ、ギスギスにやせ細って汚れているが、この顔はヤンク。
これはヤンクだ。
きっと、怖い野良犬や人間に追われながらやっと、自分の家にたどり着いたんだね。
中学校から帰った誠兄は、ヤンクがぐったりして、何も食べないでいると聞いて、黙ってどこかに出かけた。
そして、生卵を一つだけ買ってきた。
その頃、卵は高価な食べ物だった。
お皿に割り入れて、ヤンクの口元に持って行ったが、ヤンクは、悲しそうな目をして、食べようとはしなかった。
誠兄は、生卵を自分の手の平に移すと、
「おいしいよ。元気になれよ。ねっ」
ヤンクは、安心したように、誠兄の手を、ペロペロなめて、卵を食べた。

ライオン

ヤンクの身体は、ぐんぐん大きくなっていった。
毛並は、相変わらずモジャモジャしていたが、顔のまわりや頭の上の毛は、ふさふさに伸びて、太陽の光がさすと、なんとそれは、美しい金色に光っていた。
どっしり座って、顔を上げた時、その姿はライオンみたいに雄々しく見えた。
番犬として、夜中にほえる守りの声も、大きく、りりしい。
すごい名犬になったか、と言うと……
夜、そっと外をのぞいて見ると、そのライオンは、犬小屋の中にしっかり身を隠しながら、声だけりりしいのだ。
だから、たまにお父さんが庭に出ると、ダッと小屋からとび出て、ドスドスと足音をたて歩き回る。
「ちゃんと夜回りしてますよ」と言うように。家の中の家族に聞こえるように歩き回ってから、犬小屋の中か、台所の戸

口にうずくまっている。
犬だって、暗い夜は怖いんだね。

ヤンクのいる庭

当り前のように、毎日ヤンクはいた。
夜は、防犯のため綱からはずして、放し飼いだったが、家の囲いから外には出ない。

昼間は、チュク・チュクと、にぎやかなスズメ達がやって来た。
パタパタと地面に降りてきても、ヤンクは、おこらない。
ヤンクの食器のふちに、チョンと乗って、ご飯をつついても、おこらない。
知らんふり、寝たふりしているヤンク。

ある日のこと。
並んでつぼみをつけたチューリップに、黄色の花が一りん開いた。
ふっくらかわいいチューリップ
「ヤンク、ほら見て、きれいだね」
「明日は何色咲くのかな」
のんちゃん、けいちゃんは楽しみだった。
二人が小学校から帰って見ると、
「あれぇ、チューリップ、無いよ」
花もつぼみも、プッツリ消えて、長い茎と緑の葉っぱがあるばかり。
ヤンクが寝そべっている。
眠っているのかヤンク。
いや、いつもなら、すぐに尻尾を振る。
「ヤンク、ちょっとこっちを見なさい」
しぶしぶ顔をあげたヤンクの口に、黄色の花びらが、ひらひら張りついていた。
「あーっ。ヤンクが、チューリップ食べちゃったああ」
「いやだあ、お母さーん、ヤンクが！」
のんちゃん、けいちゃんは、ヤンクの頭をパシパシたたいて、おしおき。

猫のタマは、そっと遠回りして縁側に登ると、うずくまって見ていた。
スズメ達は、柿の枝に避難して、並んで見ていたね。
毎日、当り前のように、怒ったり、笑ったりして、過ぎて行った。

風の音

それは、風の吹く冬の夜だった。
あの時の、ヤンクの表情を、忘れる事は、できない。

ゴオオオオ…
寒風が窓をガタピシとたたいていく。
風の中で遠く、犬の遠ぼえがした。
その時、台所の戸をガシガシ掻きむしるような音と、「クインクイン」なく声。
ヤンクが、どうしても家の中に入れてほしいのだ。
「どうしたヤンク」
お母さんが戸を開けると、サーと寒風と共に走り込んで来た。
フッフッフウフウフウ…
白い息を吐きながら、ヤンクは、土間からあがりがまちに、鼻づらを乗せた。
フウッフウッ
荒い息づかいをしながら、居間の家族を、じっと見ている。
なんだか、悲しそうな顔に見えた。
金色の毛並は、うす暗い土間のせいか、色あせて、沈んだ色に見えた。
その目は疲れているようだった。
「どうしたの、おまえ…」
「フウー」
ヤンクは、大きく息をつくと、土間を忙わしく一まわりした。
そして、動きを止めると、もう一度こちら居間の家族をじっと見た。
二・三歩、後ずさりしたようだった。
いきなり、ダダッと外にとび出して行った。
風がドオオオーと吹き込んで
「おお、寒い寒い」
「ヤンクったら、寒くて、ちょっとだけあったまりに来たのかなあ」
「もう夜回りに行ったね」
みんな、少し笑って、少しほっとした。
ドドドーゴオオオオ
風に混ざって、犬の遠ぼえが聞こえた。
だけど…
その夜から、ヤンクは姿を消した。

山脈の奥

みんなで、ずいぶん捜した。
どこかで捕獲されたのでは、と関係施設や役所に行って、調べてほしいと頼んだ。
何度もお願いしたが、相手にされなかった。
それどころか、
「今時、放し飼いをしていたとは、何事だ」
違反だと言われ、叱られた。
「ヤンクは利口だから、早く帰っておいで」

あれから、何年か過ぎても、新しい犬を飼うことは、できなかった。

のんちゃん、けいちゃんは、遠い町へ行った時も、姿の似た犬を見つけると、

「ヤンク！」と呼びかけてしまう。

もう、会えるはずは無いのだが。

誠兄は、時々リュックを背負い、ふいっと山に出かける。

山脈の奥へと、旅をする。

旅先で知った話しを、妹たちに聞かせてくれた。

険しい山脈を走り抜けて、修業をする人達がいる。一緒に走り抜けていく犬がいる。

大きな大きな犬だって。

ライオンみたいな毛をなびかせて、

今も修業をしていると言う。

（東区）

［入選］

利子（りこ）

加藤直美

顔を上げて‼　すいこまれそうな青い青い空、口に入れたら溶けそうな白い白い雲。

「フー」っと息をすいこむ、利子（りこ）は、小学三年生の「こけし」の様な女の子。

まゆげの一cm上のパッツン一直線の前髪、耳の下すれすれの後ろ髪、「開いてるの？」と心配される位い細い目、「どうしてお母さんの高い鼻に似なかったのかな？」不思議な位いペチャッとした鼻、横にいるお父さんの鼻をみて「まぁいいかなあ」と思う。

口はとっても小さく、小鳥がさえずってるように愛らしく、よく通る声で少々早口に話す。

とってもおしゃべりなのに、辛い事、嫌な事、悲しい事には、無口になる。

自分の気持ちを正直に話す事が苦手。

気の強さからなのか、悲しいと思うより、くやしいと思う、「泣かない」と思ってるのに、涙があふれて、自然と頬をつ

たう。

学校の席は、先生と黒板にとっても近い真中の一番前、体育、朝礼でも一番先頭。

なんとなーく、恥ずかしくって嫌なので、なんとか前から二番目をねらっている。

身体検査の時には、思いっきり身体を伸ばして背伸びをしてみるけど、悲しいかな、身長を測る木の棒が頭の上から「ゴツン」と下りてきて、上から押さえつける、なんとかはねかえそうと試みるが、測定器の正確さに負けてしまう、そしてまた、一番前になる。

体育の時間、休み時間の廊下、運動場で、小柄な子を見つけると、つい目でおっている。近くにいる時は、さりげなく近づいてすれちがってみる、「同じ位いじゃない？」心の中でそっと言ってみる。「同じクラスなら、私が二番目なのに、残念」

次の身体検査の時には、「背が伸びた～」ってうれしく思うけど、他の子も伸びてるからまた一番前。

利子は、身体は小さいけど、正義感はとっても強く、気も強い。

利子には、一つ年上の進兄(シン)ちゃんがいる。ぽっちゃりしていて、目はパッチリまんまる、利子よりずいぶん身体が大きいのに、とっても優しい、お菓子をもらったら、利子は一人で食べちゃうのに、お兄ちゃんは、「半分あげる」って声をかけてくれる。

口数は少く、いつも利子がズ～ト話していて、「うん、うん、そうだね」って聞いてくれる。本当は、今、質問したのにって感じだけど、「まあ、いいか」って思わせてくれる。

そんな感じだけど、利子は気付いてる。おまんじゅうを半分こした時、少し考えてから、少し大きい方を、あんこが少し多い方を利子に渡してから食べる事を、「美味しいね」って「ニコッ」とする事を。

大～好きなお兄ちゃんは、「でぶ」って言われても言い返さない。利子はガマンできない

「でぶじゃない、ぽっちゃりしてるだけ」

小鳥がいっせいに鳴き出すように、早口でまくしたてる。

周りを味方にして、口では負けない、男の子にだって立ち向かっていく。

お兄ちゃんは、「もういいよ」って言うけどね。

利子は身体を動かすのが大好き、運動場を走り回ったり、泳いだり、身体も軽く、逃げ足も速い、危くなったら走り出す。

お父さんからは、「女の子なんだから、けんかしたり、危い事をしたらダメだよ」って言われても、「相手が悪いんだもん」「私は悪い事してない」ってひかない。

お父さんは、「しょうがないなぁ～」って利子の頭を「ポンポン」ってなでる。

利子は、どんなに悲しくても、くやしくても、人前では泣かないように、得意の足で走りさる。

特に、お父さんの前では、歯をくいしばって、涙をみせないようにしている。
泣く指定席は、空が近い裏山か、押入れの中か、夜、お布団にもぐってから泣く。
お父さんには、泣き顔を見付からないようにしている。だってお父さんがとっても悲しむから、悲しむのを知っているから、お父さんが、とっても大変な事を知ってるから。
昨年の台風で、お父さんが出張中に、裏山が崩れて、お家がペッチャンコになった日に、お母さんは、利子とお兄ちゃんを抱き締めて、守ってくれた、なのにお母さんは、自分の身体を守る事が出来なかった。
お母さんは、病院に運ばれて行ったきり、帰って来なかった。
それから、利子、お兄ちゃん、お父さんの三人の生活が始まった。
利子は、「ただいま〜」って、お母さんが帰って来る気がして、今でもあれは、夢の中の出来事のような気がして……何度、お父さんから、説明されても「でもね」って思ってしまう。
時々思う、「何か悪い事したかな?」って、お父さんは、「悪くないよ」ってボソっと言う。
お母さんは、とっても柔らかくって、温かくって、いい匂いがして、手品師みたいに何でも作ってくれた。
ご飯も美味しかったし、パンも焼いてくれた、洋服も、セーターも帽子も編んでくれた。
お母さんに出来ない事なんてないんじゃないかと思っていた。
魔法使いだったのかも……
でもね、歌だけは、何か変な感じだった。
人前では、けっして歌わなかったけど、ラジオから流れてくる歌を一緒に口ずさんでるんだけど、違う曲を歌ってるように聞こえた、お母さんには、言わなかったけど。
利子の声は、お母さんにそっくりみたいなので気に入ってる。
利子が笑うと、「お母さんが笑ってるみたいだ」とお父さんはニコニコしながら言う。
利子の泣き声は、お母さんの泣き声にお父さんには聞こえるかもしれない。
お父さんは、利子とお兄ちゃんのお母さんでもある。
ご飯を作ったり、お洗濯をしたり、掃除をしたり、買い物に行ったり、学校の用事をしたり、そしてお仕事にも行っていて、スケジュールはいっぱいです。
お父さんは、こっそり本を見たり、人に聞いたりして、いろいろ研究したり、勉強したりしているみたい。だって「今日はよく出来たみたいだ」ってメモを見ながら、ひとり言を言ってたりするから、利子は、知らないふりをしてるけどね。
お父さんは、優しかったり、厳しかったり、いろんな顔を持ってる。たぶんお父さんの中に、お母さんもいるからだと

思う。
身体も心も、とっても忙しいと思う。
一つの身体に二人分の人間が入ってるんだからね。
お父さんの背中は、大きくて、広くて、おんぶしてもらうと、とっても安心する。
ついつい、ウトウトしてしまう。おしゃべりな利子のさえずりがとぎれると、「それで?」って聞かれる。半分夢の中にいるような感じで、おしゃべりしてる。
お父さんといると、何もこわいものは、無いような気になってくる。
「お父さんは、こ〜んなに背が高いのに、なんで利子はこんなにちっちゃいの?」お父さんに聞くと、「これからグ〜ンと大きくなるけど、今のちっちゃな利子は、とっても可愛いよ」って言ってくれる。
利子が大きくなったら、何て言うんだろう?
暫くは、身体が雲のジュウタンを歩いてるみたいに、フワァ、フワァして、ボ〜として、頭の中がワタガシで一杯、そんな感じ。
参観日や運動会……いろんな機会や行事の時に、利子とお兄ちゃんは、お母さんがいない事を、チクチクとした痛みと一緒に感じる。
友達のなにげない、お母さんの話しを聞くと、利子のお母さんはもういないという事を、コップに水を入れるように、一杯になり、夜、お布団にもぐると、涙があふれてくる。
「お母さん、私、悪い事したのかな?」ってつぶやく、お母さんは何も言わないけど、ほほえんでくれてた気がして、ズ〜ト泣いていたと思っていても、気が付くと朝になっていて、お父さんの「おはよ〜」の声に、何もなかったように「おはよ〜」と答えて、一日が始まります。
お父さんは、たびたび考えていたようですが、ある日「お兄ちゃんと利子を二人だけにして家を留守にするのは、とっても心配なんだ」って言いました。
私達は、「大丈夫だよ」って言いました。
二人は、三人の生活に、少しずつ慣れてきたし、不満もなかた、ただお母さんもいれば、それは最高だけど……。
お父さんは、お父さんのお兄さん（叔父さん）の家の離れに引越す事を決めてしまった。叔父さんの家には、小学四年、五年、六年の三人の男の子と叔母さんと数頭の牛がいました。
叔父さんと叔母さんは、優しく声をかけてくれるけど、牛の世話で忙しそうで、顔を見てゆっくりお話しした事はありません。
最初は、牛を近くで始めて見て、あまりにも大きくて、こわそうだったけど、おそるおそる近付いてさわってみると、体のわりに、おとなしいし、目が小さくてまんまるで、草ばかり食べていて、こんなに大きくなるのが不思議で、ゆっくり、ズ〜ト食べてばかりいる食いしんぼうだし、食べこぼすし、よだれも出てて、赤ちゃんみたいで、毎日見てると、可愛いくさえ見えてきた。

お兄ちゃんは、三兄弟の中に入って、楽しそうにしていた。
利子は、夜遅く帰ってきて、二人の世話をしてくれる、お父さんを少しでも助けたいと思って、それなりに出来そうな事を考えて、一所懸命、お手伝いしようと決めました。
お父さんから教えてもらい、掃いたり、ふいたり、片付けたりするお掃除や、お味噌汁、目玉焼き、サラダを作って、「小さなお手伝いさん」ってお父さんが呼んでくれるから、洗濯物を干したり、よせたり、たたんだり、少しずつ挑戦していました。
ご飯が妙〜にかたかったり、「おかゆ?」みたかったり、洗濯物がシワシワだったり、「あれ?」って思ったけど、お父さんは、おもしろそうに、「助かるなぁ〜」って顔を「くしゃ」とさせて、利子の頭を「ポンポン」となでてくれる。
利子は、お父さんの「くしゃ」っとした顔を見たさに、学校に行く前に、学校から帰ると、せっせと出来る事を、それなりにやり始める。
お兄ちゃんは、遊びに行ってしまい、「全く頼りにならない」と文句を言いながら、少しずつ、家の事をしていた。
今は、早く目が覚めた日には、学校に行く前に、お洗濯をし、部屋をお掃除して、片付けたりして学校に行きました。
少しずつですが、出来る事が増えてきました。
お父さんに、「スゴイなぁ」ってほめられると、頑張っちゃう利子でした。
ある日、学校から帰ってくると、干してあった洗濯物が、地面に落ちて泥がついていました。
「しっかり留めたつもりなのに……変だなぁ?」と思いながら、洗い直しました。
次の日は、片付けたはずのゴミがちらかっていたし、ある日は、朝、叔母さんからもらった「カステラ」学校から帰ってから、お兄ちゃんと半分こして食べようと思ってしまっておいたのに、楽しみに二人で帰ってみたら、箱の中は空っぽ……暫くは、訳がわからなくって「何故?」って思った。
箱を捨てながら、目から涙が流れた。
そんな利子を見ていたお兄ちゃんが、ボソット言った。
お兄ちゃんが下を向いたまま、「たぶん三兄弟の仕業、僕達の事を〝いそうろう?〟って言って笑ってた」と言った。
利子は、お父さんに言わなかったし、何もなかったみたいに片付けてたし、カステラも食べたつもりでいた。
でも、ある日、お母さんのお位牌が倒されてるのを発見した時、まだ三時なのに、布団をかぶった。
「何故? 何故?」って思ったら、くやしくて泣いてしまった。
夜、お父さんの顔を見たら、目に涙があふれてきた、一言、「ここには、いたくない」って言うのがせいいっぱいだった。
お父さんは、「わかったからね」って言って「ポンポン」と頭をなでてくれた。
利子は考えた。
「利子が何をした?」

「何で嫌がる事をして、笑っていられる？」
「何を望んでる？」
「何故？　何故、そっとしておいてくれないの？」
「自分が嫌だと思う事を、どうして他の人にするの？」
いくら考えても……答えが出ない。利子の小さな胸に、痛い痛い「トゲ」が刺さった日々でした。
顔を上げる、すいこまれそうな青い青い空、口に入れたら溶けそうな白い白い雲、このまますいこまれたら、お母さんの所に行けるのかなぁ……
三人は、街の小さな家に引越しました。
夏休み、忙しいお父さんは、二人をどこにも連れて遊びに行けないので、考えて、お母さんのお母さん（お婆ちゃん）の家に、夏休みの一ケ月間、遊びに行く事になりました。
お婆ちゃん家は、大きな農家で、周りは、田んぼや畑に囲まれていて、後ろには山が、前には川が流れていて、とっても空気が美味しくて、気持ちのいい風が吹いていて、甘～い匂いのする所でした。
お婆ちゃん家には、一人子の小学六年生の杏姉（アン）ちゃんがいました。
おっとりしていて、とっても優しい、利子とお兄ちゃんに川での泳ぎを教えてくれたり、宿題をみてくれたり、いろいろ気にかけてくれた。
一番うれしかったのは、「弟と妹が出来た～」って友達に言ってるのを聞いた時だった。利子も心の中で、「杏姉ちゃんが本当のお姉さんならいいなぁ～」って一人でニヤニヤしてた。
お婆ちゃんは、腰が直角に曲がっていて、膝も痛そうに杖をついて歩いているけど、いつもニコニコしていて、「お米は一杯あるから、たんとお食べ」が口ぐせだった。
叔母さんは、背が高く、ガッシリしていて、力持ち、声も大きくて、どこで遊んでいても、「スイカを切ったから食べにおいで～」、「ご飯だよ～」っていう声が聞こえた。
食事は、ご飯のおかわり自由、おかずは大きなお皿にてんこもり、食べたいだけ食べる、多い、少ない、大きい、小さいも関係ない、自由に食べたいだけ食べたい物を食べればよかった。
人と比べる必要もない、「いそうろう」って言われることもなかった。
お腹がすいてる人、体が大きい人がたくさん食べて、でも、子供達三人には、叔母さんが「野菜を食べて、お魚も食べないと大きくなれないよ」ってご飯の上に勝手にのせる。
利子は、お風呂も、眠るのも杏姉ちゃんと一緒、「ピンクのが可愛いな」ってボソッと言ったら、パジャマも選ばせてくれた。ブカブカだったけど、うれしかった。
叔母さんは、お母さんみたいな匂いがするから、抱きついたり、子犬みたいにまとわりついてしまう。
叔母さんは「甘えん坊～」って「ガハハ」って笑う。
お婆ちゃんは、ご飯を食べたばかりなのに、おまんじゅう

を三個、こっそり持ってきて、「仲良くお食べ、お腹は、すいてないかい」ってニコニコしながら、日なたぼっこしてる。
ここに居ると、お日様がカンカン暑いけど、居心地がいい。
夏休みが、「あっ」と言う間に終わってしまった。
ここは、身体も心も楽ちんだったし、楽しかった。
何でも、かんでも杏姉ちゃんと同じなのが、説明できないけど、うれしかった。
ここで、すいこまれそうな、青い青い空を見上げると、胸にさわやかな風が吹き込んできた。
迎えに来たお父さんに、「ズ～トここにいたいなぁ～」って言ってみた、「そうか、良かったなぁ～」って「ポンポン」と頭をなでられた。
以前、胸に刺さっていたトゲが少し溶けたような気がした。
チクチクした、うずきが少しおさまったような気がした。
ピンクや白の桜の花が咲き始めた頃に、お父さんは、違う会社の社員になった。
三人は、お父さんの会社の社宅に入った。
そこには、いろんな人達がいて、利子より年上の子、年下の子、男の子、女の子。
毎日顔をあわせてると、自然と仲良く遊ぶ、年上の子が下の子の様子を見ながら遊ぶ、大家族になったような感じ‼
人数が多いから、いろんな遊びが出来る、新しい遊びも発明出来る。
一人でいる子を見付けると、誰かが声を掛ける。
誰かの親からもらったお菓子は、皆で少しずつ割けて食べる、こうすると互いの顔をみて「美味しいね」って言い合う。
わがままを言ったり、すねる子もいるけど、暫くすると、誰かが、「おいで」って声を掛ける。
ここにいると、大人はお父さんであり、お母さんであり、子供達は、兄弟姉妹と勘違いしてしまう。
時々、社長の親戚の由美子姉さんが、車で梨や柿を一杯持って来てくれた。
由美子姉さん家は、大きな山を持っていて、果物が一杯取れると言っていた。
時々、スクーターに乗って、さっそうと来るので、「カッコイイ‼」
持ってきてくれる果物は、虫さんが少しかじった跡があったり、形が微妙にゆがんでたり、大きすぎたり、小さかったりしていて、個性的だけど、色がとってもきれいで、いい匂いがしてた。
「虫さんが、我慢出来なくてかじるんだから、まちがいなく甘いわよ～」って由美子姉さんも「パクリ」、荷台から果物を降ろすと、「おちびちゃん達、いらっしゃい」って大きな声で私達を呼ぶ。
エンジンの音で、来たのはわかってるけど、由美子姉さんの声が合図になって一種の儀式みたいに集まって食べ始める。
由美子姉さんは、誰に対しても同じように声を掛ける、特

別扱いは無い、みんな同じ。
果物も、自由に選ばせてくれる、聞かれれば、「私だったらこっちかな～」なんて言っておいて、「食べ比べてみれば？」って誰かと半分こして、「こっちの方が甘いね」なんて言い合う。
大きいから「甘い」とは限らない、いろんな発見があっておもしろい。
由美子姉さんは、自由にさせてくれる、おしつけたりしない。
何だろう、この感じ、この感じがとっても気持ちいい、利子は思う。最初にお世話になったお家は、心が「チクチク」する「嫌だな‼」っていう気持ちで一杯になって、息苦しかった。「私が何か悪い事をしたのかな？」って思ってた。
夏休みは、とっても楽しかった、「フワフワ雲に乗ってるような時間で、「あっ」という間に過ぎてしまった。
短期間で、旅行でホテルに泊まるような、「お客様扱い」だったような気がする。
とっても親切だったし、居心地が良かったけど、長い期間はなんとなく無理なような気がする。
杏姉ちゃんも学校が始まったら、ズ～トめんどうもみられないだろうし、遊んでもくれないと思う。
短い期間だったこその、「フワフワ雲」だったのだと思う。
一日一日を生活していくのに、最低限のルールは必要だと思う、人を悲しいと思わせたり、自分が嫌だと思う事を人にしたり、辛いと思わせたりしてはいけないと思う。
悪い心は、最低だと思う。
特別に扱ってもらう必要はないけれど……。
自然と同じように、ありのままを受け入れて、空気みたいに接してくれればいい。
風のように、太陽のように、皆に同じように、さりげなくそばにいて、接してくれればいい、それが一番気持ちが楽であり、居心地がいい気がする。
利子は顔を上げる、すいこまれそうな青い、青い空、口に入れたら溶けそうな白い、白い雲。

（中区）

児童文学選評

那須田　稔

今年度の「市民文芸賞」と「入選作」は、次の通りです。感動作が揃いました。楽しい「選」の時間をすごすことができ、うれしく思います。

○市民文芸賞　「森のゆうびんポスト」
うさぎのぼうやが「ゆうびんポスト」に入れた手紙に誘われてやってきた動物たち。心なごむすてきな幼年童話。

○市民文芸賞　「ホタルが舞う古墳の里」
野球大会で出会った子どもたちが、それぞれの居住地の遺跡をめぐる。古代人の子どもと出会う「幻想」が新鮮。

○市民文芸賞　「はるとくんとふしぎな仙人」
はると少年に、鉛筆仙人が、すてきなプレゼントを贈る。夢あふれる物語。発想がすばらしい。

入選　「みいちゃんとクロ」
生きものがきらいな少女のこころに、ネコのクロがあらわれふしぎな世界に招待します。ストーリーの展開に感心。

入選　「ようせいだった、ぼく」
ほっこり心あたたまる誕生日の物語。

入選　「すずの恩返し」
少女の鈴が好きになった若者をめぐる伝説。ていねいな描写が読者をひきつける。

入選　「サラダのうた」
お母さんのつくるサラダを「いのちのくさり」とよぶ楽しさ！

入選　「たのしいお客さま」
雨の夜にあらわれた猫たちの話。心がなごみます。

入選　「七夕の願い事」
友だちが転校した淋しさをなぐさめる、七夕物語。

入選　「ヤンク」
ドジでいたずらな犬、ヤンクの楽しい話。

入選　「利子」
亡くなった母を想いながら、けんめいに生きる少女を描いて読者をひきつける。

この他、残念にも、選に入らなかった作品も、心のこもったものばかりでした。みなさんの健闘に拍手を送ります。さらに新しい物語づくりに挑戦してください。

評　論

［市民文芸賞］

俳諧に於ける軽みと死生観

伊藤　空

死生観と芭蕉

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

芭蕉最期の句である。

評論家　安藤次男は「『枯野』の句は、一句として見てもあまり出来はよくあるまい。少なくとも芭蕉は、生涯に遺した一千句ばかりの発句の中に、こんな切字の働のない、散文のきれはしのような句を作ってはいまい。多くは名詞留、哉留に作っていて、『おくのほそ道』以降はとりわけそうである。いうなれば『枯野』の句は、誇高き俳諧師が最後に誇を捨てたのではないか、と思わせかねない異躰の句である」と書いている。

そして、「芭蕉の『枯野』の吟は辞世ではない。妄執である。死に臨んで、それに相応しい同行を言いたかったまでだ。『木曽殿と塚をならべて』葬れとは、芭蕉もなかなかの皮肉屋だが、「枯野」の吟をたずさえて出向くのに似合の連衆をよく見定めていて、一見救いのない吟もこの遺言で救われる。膳所の地が気に入ったばかりではなかったようだ。やはり骨の髄まで芭蕉は俳諧師だった」と論じた。

こうして考えると、切れ字や名詞留、哉留などの技法はどうでもよい気がしてくる。

この句を読むと、死の床から切れ間なく一気に異次元へと引き込まれるように感じる。眠りについた芭蕉が、枯野をかけ廻る夢をみたかどうか、本当のところは分からない。一つ言えることは、強い気持ちが夢となって現れることがあるということだ。

哲学者　鷲田清一は「折々のことば」で、芭蕉の「幻住庵

記」に言及している。

終に無能無才にして此一筋につながる

鷲田は「芭蕉は仕官や出家を願ったこともあるが、若い頃から俳諧をむやみに好み、なおかつそれで世過ぎできたので、他には身を入れないまま今日に至ると、その生涯をふりかえる」と書いている。

芭蕉は仕官や出家の道を捨て、ただ俳諧一筋に生きたのである。

安藤は「みほとけの慈悲を願うこともなく死んだ正真の俳諧師が、あの世へ行ったら同行がいなくてもよいと考えるはずはない。芭蕉は『枯野』の句をたずさえてあの世で木曽殿とさしで俳諧をやってみたい、そうすれば不出来のまま辞世となってしまったような句も救われる、と考えたのではないか。本当の辞世は『枯野』の句ではなく、其角が伝える『木曽殿』云々のさりげないことばである」と論じている。

芭蕉は極楽浄土にいくことは望んでいなかったのではないだろうか。そんな芭蕉は正に「骨の髄まで俳諧師」とよぶにふさわしい。芭蕉は、年中蓮の花が咲き乱れ、美しい鳥が舞い、妙なる音楽がきこえてくるようなところには、魅力を感じていなかったのかもしれない。俳諧師として、四季の移り変わりのない極楽へいくより、木曽殿を歌仙の連衆に、枯野をかけ廻って本望、という芭蕉の執念。そして軽み。軽みとは、旺文社全訳古語辞典によれば、「晩年の芭蕉が、『蕉風』の確立に安住することなく、さらに求めたのが、『軽み』の境地であったという。具体的にこの『軽み』がいかなる理念であったかはさだかでない。しかし、少なくとも『さび』の幽玄、閑寂の境地を否定するものではなく、『さび』に固執するあまり、句境が重苦しく渋滞することを避けて、軽く、自然に詠む境地をさすものであったと思われる。『芭蕉七部集』第六の『炭俵』が、この『軽み』を実践したものである」と書かれている。

軽みは、貴族の文化として発展してきた和歌の嘆きの対極にあり、文化が庶民へと開かれていった武士の時代を芭蕉が生きたことに関係しているような印象を受ける。

子規と写生

ここで、客観写生を唱えた正岡子規の句についてもみておきたい。子規は、西洋絵画に深く影響を受けたといわれている。

日本画では鳥瞰法が取り入れられてきた。鳥瞰法では自分から離れ、俯瞰して描く。

長谷川等伯の松林図に目を凝らすうち、不思議な感覚に捉われる。小さく描かれた雪山は涅槃であり、松林はそこへ向かう人々という説がある。雪山は確かに遠く描かれているが、それは空間的というより、寧ろ時間的なものを感じさせ

る。

幽玄な世界観や儒教の世界観を墨の濃淡で表現する水墨技法と現実の自然が、不思議な迫力で見る者を圧倒する。

西洋画家　中村不折から強い影響を受けたという子規は「写生は画家の語を借りたるなり」と述べている。

子規が影響を受けた西洋絵画の特徴には、ルネサンスから発展をとげてきた遠近法がある。遠近法では空間を把握し立体的に描く。その時基準となるのは画家その人である。

子規の句に、

鶏頭の十四五本もありぬべし

がある。これはかつて鶏頭論争という論争を巻き起こした句で、評価の分かれる句である。

子規庵の庭には、中村不折らから贈られた鶏頭が十数本、実際に、植えられていたという。

この句を名句とするかどうかは、子規の生きる世界を勘案するかどうか、にかかっている。

私たちは子規が病に伏し、苦悶の日々を送っていたことを知っている。それは子規自身によって多く語られてきたからだ。病床六尺に縛られた子規との対比は、いよいよ鶏頭の生命力を燃え上がらせる。

詩人　大岡信は、子規がこの句を作る前年に加わった「根岸草廬記事」（明治三十二年六月）という、子規庵を題にした写生文の競作に注目する。文中には、鶏頭が一斉に枯れてしまった時子規が、「若し自分の思ひ焦がれて居る恋人の肖像を画かう〳〵と思ひながらまだ画かぬさきに其恋人に死なれたら、こんな心地がするであらうか」と残念がったことが記されている。

また、門人　河東碧悟桐も、「眷族十四五本を擁する鶏頭のひとりごとなる俳文を、同じ号にのせていた」ことより、鶏頭の句は、一年前の「根岸草廬記事」の思い出に当てて眼前にはない去年の鶏頭を思い出してたたえたもの、と推理した。

大岡は「完了の助動詞『ぬ』と推量の助動詞『べし』が結びついたこの用語法には、完了だけでなく確信や確認を表わす意味も加わっているが、いずれにしても現在ただいまの景を詠む語法としては異様」とした。

子規の心が、病床六尺を離れ、確かに過去の鶏頭の近くまで行ったのだ。このように、子規の現実の世界に思いを馳せなければ、しかし、この句は色褪せてしまう。

幾度も雪の深さをたずねけり

病床の子規は、確かに、雪を見たのだと思う。

それは、子規が今現在生きる世界の雪ではなく、過去に繰り返し見た雪であった。子規は手のひらに雪を受け、足跡をつけ、積もった雪では雪合戦をして遊んだこともあったかも

しれない。
そんな子規の無邪気さが、この句には溢れている。

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

子規の最期に遺した三句のうちの一句である。実際に咲いている糸瓜の花と、その花が散る前に死んでいる子規自身。
子規の心は、自身の死後という未来を旅している。死して尚自身の死体を写生しようという子規の執念が、この句を鬼気迫るものとしている。
それでいて、私はこの句に、どこか芭蕉の「軽み」に通底するものを感じる。
死の床から離れ、俯瞰して、どこか面白がってさえいるような。
共通するのは漂泊の想いである。
子規のいう客観写生は、ただ自分が見たままを写すものではない。
子規は、生を超えたリアリティーを写生に見出したのではないだろうか。生を離れ、俯瞰して生を見つめるという心の動き。それこそが、子規が目指した「客観写生」のように思われてならない。

俳諧における軽みについて

芭蕉は長句短句を連衆と付け合う俳諧、殊に三十六句を詠み連ねる歌仙に心血を注いでいた。
安藤次男は「その芭蕉は、『発句の事は行て帰る心の味（あじはひ）也』（三冊子）といいながら、一方では、『歌仙は三十六歩也、一歩も跡に帰る心なし。行にしたがひ心の改は、ただ先へゆく心なれば也』（同）というような、一読明らかな矛盾と思わせることばを遺している。もともと人間は、自他の矛盾もないところに、矛盾を矛盾でなくする工夫を生みようもあるまい。不帰の覚悟があってこそ、はじめて帰心の面白さも見えてくる」と書いている。
芭蕉は、寧ろ自らを離れ自らの存在を消すことにより、降り注ぐ微かな言葉を捉えようとした。
実は言葉は全ての人々に平等に降り注いでいるのだが、芭蕉は、その言葉を受け止めて句にした。
それらの句の評価が、その時芭蕉が実際にどのような状況に置かれていたかを考えに入れるかどうかによって左右されないのは、芭蕉が句を詠むとき、自らを世界の中心に据えてその身の上を勘定に入れることなく、自らを離れ、「造花にしたがひて四時を友」としたからであろう。
だからこそ、その芭蕉が、最期に自らを詠んだ「旅に病んで」の句に、少なからず違和感を覚えるのかもしれない。芭蕉が六文字を使い、自らの状況を直接詠んだのだ。やはりただならぬことではある。
安藤次男は、軽みを実践したものとされる歌仙「炭俵」の

「梅が香」の巻の終三句

未進の高のはてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野披
屏風の陰にみゆるくはし盆（菓子盆）　芭蕉

における「未進の高のはてぬ算用」では、「年の暮の慌ただしさを描きながら頭中はてしない漂白の念いがあり、それをただいまこの場の指頭にはじいているこの人物の面白さは、そのまま芭蕉の全人生の縮図と読んでいいだろう」としている。

安藤は「屏風の陰にみゆるくはし盆」は、「『軽み』俳諧の結実（本祝言）は来年を期したい、というきみの志は確かに見届けた」という野披への芭蕉の言葉だとする。「『軽み』俳諧の結実は来年を期したい」というのは、芭蕉自身の言葉であろう。「未進の高のはてぬ算用」が、芭蕉の全人生の縮図であるならば、「来年」が意味するものは自明である。「歌仙は三十六歩也。一歩も跡に帰る心なし。」（三冊子）についてはすでに触れた。安藤は「こういう俳諧のはこびを眺めていると一人の男がどこをどう歩いたかというようなことはどうでもよくなってきて、芭蕉の本当の旅はじつは俳諧のはこびの中にあったことがよくわかる。『枯野』の句は、やはり、『終焉記』が伝える『木曽殿と塚をならべて』というたのしいことばがあって、はじめて芭蕉らしい句になったのだろう」と述べている。

俳諧の運びの中の旅。芭蕉はその旅に軽みを求めた。発句は旅のはじめにあたるのだから、芭蕉が発句に軽みを求めたのは当然であった。

芭蕉は、どのようにして発句において「軽み」を表現しようとしたのだろうか。

発句における「行て帰る心の味」。私はそこに、「生」と、生を離れて漂白する「旅」をみた。時空を超えていく旅を。生を離れ、俯瞰して旅から生を再び見つめる。そこに生まれるのは発句の味わいだけではあるまい。発句における「軽み」もまた、そこに生まれるのではないかと考える。「行て帰る心の味」は、軽み俳諧の結実という芭蕉の見果てぬ夢へとつながっているのだ。

江戸時代中期の俳人、滝瓢水の句

浜までは海女も蓑着る時雨かな

浜へ行けば濡れてしまうのに、浜までは蓑を着て時雨から身を守ろうとする海女の滑稽な景が浮かぶ。

しかし、浜は「死」を意味している、という。死という旅から海女の姿、その生きようを見つめると、どうだろう。

人はいつか死ぬ。必ず死ぬ。その時までは自分を大切に守るという、現代を生きる私たちも心に刻むべき重い内容が、さらりと言ってのけられているのである。

死という旅から生を見つめるという観点から、枯野と糸瓜の句を読む。枯野の句で芭蕉は、枯野をかけ廻るという旅から、自らの死に際を見つめ、糸瓜の句で子規は、痰のつまった自分の亡骸を見る旅から、糸瓜の花を見つめた。

すると、その生は、旅に出る前とは、まるで違ったものに見える。

芭蕉はこの期に及んで極楽往生を願うこともなく、非業の死を遂げた木曽殿を歌仙の連衆にと願う。

末期の子規の目に映った糸瓜の花は、もはや子規の目に映ってはいない。

全てから自由になり、死から生を見つめることで「軽み」の境地に達した二人は、そんな幕引きを達観し、決して嘆いてはいない。それもなかなか、私らしいじゃないか、と、俳人らしく洒落ているのだ。これが風狂の極みでなくてなんであろう。（風狂にはふたつの意味があるが、私はそれらふたつを合わせて、「風雅を追及するあまり常軌を逸していること。また、その人」としたい）芭蕉は俳諧師としての誇りを捨ててなどいなかった。

屏風の陰にみゆるくはし盆

軽み俳諧の結実という夢は、今もどこかをかけ廻っているだろうか。

（中区）

参考文献

『芭蕉』安藤次男　中公文庫
『病床六尺』正岡子規　岩波文庫
『子規・虚子』大岡信　花神社

［市民文芸賞］

「東方の門」と藤村の文体

木俣　統裕

「東方の門」は島崎藤村の絶筆である。齢七十を超えた藤村の関心は、近代日本の来し方に注がれていた。明治以来、新体詩に決定的な影響を与え、散文において自然主義的な描写を確立した藤村こそ、外見的には近代日本の歩みそのものである。その近代を問い直す動きが活発になった昭和十年代に「久しい無沙汰の後」で筆がおこされたのは、ごく自然なことだったのかもしれない。近代日本の輪郭を明らかにするため、近世以来の日本と西洋との接触が描かれはじめた。そして寄せては返す波のように、遭遇と交流とが繰り返し描かれるはずであった。

文明開化の名のもとに実質的な西洋化が押し進められた日本において、洋の東西の交流を描こうとすれば本来それは歪なものにならざるを得ない。西洋近代がもたらす知識と脅威とのあいだで揺れる日本を表現するとき、西洋は克服すべき他者として存在する。ごく単純化していえば、西洋が外在化しているときはキャッチアップの対象となり、また内在化しているときはブレイクスルーの対象となる。しかし藤村は日本と西洋との関係をそのようには見なかった。「東方の門」は藤村であるがゆえに見えた地平として着手された。

「東方の門」の性格は、先立つ長編の「夜明け前」と極めて対照をなす。地方の名もない一個人の生涯をナショナルヒストリーに接続させるこの作品において、藤村は父島崎正樹（作中・青山半蔵）が目指した平田国学を基礎とする社会づくりの挫折を冷静な視点で描ききった。維新の原動力だったはずの国学的な理想は次々と西洋的、現実的な政策に置換され、地元のために奔走した木曽山林の開放運動は志半ばで挫折する。正樹は次第に居場所を失い、ついには失意のうちに座敷牢で亡くなった。開化の時代の残酷な面を生きたと言え

るであろう。正樹にとっての維新は、いつ明けるとも知れない夜明け前の暗い時代である。「夜明け前」はそのような父への鎮魂の思いを込めた作品であるとともに、藤村自身の生き方の原因を見定める作業でもあった。

一方の「東方の門」は群像劇的である。いくつもの体験が重層的に積み上げられる。「夜明け前」に通底する暗い影は身をひそめ、ちょうど歯車と歯車がかみあうように時代と人とが調和し正回転する。藤村は父を弔いながらも、その生き方を良しとはしなかった。「皮相な文明開化潮流の渦に立った父らが、その国学を活かし得る路」は他にもあったはずだと振り返る。ある人にとっての夜明け前の暗い時代は、またある人にとっての明るいオプティミズムの時代である。この明るさを描くために、藤村は技法として前近代的な手法を採用した。戦時下という特殊な時代の論理と、文壇における自身の存在感との狭間で藤村最期の創作が貫かれようとしていた。

「東方の門」の社会的および芸術的な評価は低い。序章は記紀神話の天岩戸の故事から始まる。閉ざされた日本が対外的に開かれるべきことのモチーフだと思われる。連載開始時、昭和十八年一月号の中央公論の目次は次のとおりである。

絵　四方拝（菊池　契月）
巻頭言　決戦第二年の発足
生産力増加の前提（田辺　忠男）
学問論としての科学論について（下村　寅太郎）
国家総力戦と配分原理（大熊　信行）
座談会　総力戦の哲学（高坂　正顕・鈴木　成高・高山岩男・西谷　啓治）
今次議会と国民運動（河野　密）
同甘共苦（陳　公博）
鑑真と弘法（褚　民誼）
香談（幸田　露伴）
利久とその時代（小宮　豊隆）
箱根用水の話（高倉　テル）
団平の憶い出　鶴沢道八師に訊く（茶谷半次郎）
シェリーフェン計画の悲劇（小山　弘健）
俳句　農家新年（高浜　虚子）
流星光底長蛇を逸す　世界海戦史考（伊藤　正徳）
小説　蒼生記（上田　広）
アート　支那の青磁（小山　富士夫）
新連載小説　東方の門（島崎　藤村）
新連載小説　細雪（谷崎　潤一郎）

目を引くのは谷崎潤一郎の「細雪」である。比較的戦時色の濃いタイトルが並ぶなか、当時から悪目立ちしていたであろう。同年陸軍省によって掲載が止められている。対して藤

村が戦陣訓の校正を引き受けていたことは、「東方の門」の評価を相対的に低くしている。

また本号の目玉は、高坂正顕ら京都学派による「総力戦の哲学」座談会である。議論の中心となるのは西洋近代にとらわれない日本のオルタナティブと、戦争を通じた将来の展望である。当時その京都学派と急接近していたグループが日本浪漫派であり、アプローチは違えども近代は超克されるべきものであるという認識で一致していた。古代への回帰的思想を顕わにする日本浪漫派が文壇に強い影響を及ぼしていた当時、記紀万葉に遡って近代日本を俯瞰しようとする視点は新しくない。「東方の門」の序章が天岩戸の故事から始まることはごくありふれたことだった。

戦後になってから吉本隆明は「祝詞小説」という言葉をつかって「東方の門」を評した。吉本にとって藤村の描こうとした近代の俯瞰は失敗だった。昭和十八年の日本とその来歴に、藤村が大きな矛盾や疑義を抱いていないという吉本の認識は正しい。

藤村の絶筆となったこの小説は、一種の祝詞小説ともいうべきものであろう。藤村は「夜明け前」のあとで、いわば書くべからざるものをかいたのかもしれない。筆は第三章で松雲和尚が東京の多吉の家に宿泊したところで絶たれている。

しかし、この作品がたとえ完成されたとしても失敗作であり、藤村自身の言葉でいえば「これが小説と言えるかどうか、それすら分からない」結果におわったことはほぼ間違いはあるまい。かれはここで言葉をかりたてて明治以降の近代を祝うノリトに触れてあるこうとした。太平洋戦争は老齢の藤村から内的な葛藤を集中しようとするすべての意欲を拡散させた。将軍たちがアジアの全地図を広げて虚大な膨張を夢みたとおなじように、藤村は日本近代の思想的な地図をひろげて虚大な構図を描いてみようとしたのである。ただたんに虚大な構図というものなら、老熟に達した作家がたれでも描く夢であるにちがいない。藤村がここでやろうとしたことは、それと違っていた。かれは単に戦乱の方向そのものを肯定したのではなく、そこにいたるものとしての日本近代の思想の根底を肯定したのである。(吉本隆明　「東方の門」私感)

大和言葉たる祝詞を触れ回るように近代を肯定したという評価は、「東方の門」への批判の代表的なものである。ここに藤村に特有の近代の肯定が顔をのぞかせている。もし西洋近代を超克する働きとして「単に戦乱の方向」を肯定するのであれば、そこに至る過程について評価を下すことは容易でない。しかし藤村は戦乱に至るプロセスそのものについて、素朴とも楽天的ともいえる見方をする。「日本近代の思想の根本を肯定」するためである。

藤村には近代的思惟に固有するはずの、ある特徴的要素が

欠けている。それは挫折と創造の淵源たる進歩主義、理想主義的な志向である。希望や理想という前提が欠けていれば、当然に後件としてのイロニーや超克の意志は存在しない。藤村が「おぞき苦闘」と自ら述べる生涯において、外観上強靭な精神を持ちえたのも理由がないわけではなかった。ゆえに日本浪漫派にとっての記紀神話は否定すべき近代へのアンチテーゼである一方で、藤村にとってのそれは今の時代に援用すべき素朴な祝詞にすぎなかった。

「破戒」が伝統的に社会的な批判を受けたのは、旧体制を新たな主義主張で上書きする力から距離をおいていたからである。藤村の作品および生き方は、京都学派が模索する弁証法的思考とも、日本浪漫派の古代を肯定する超越論的なイロニーとも隔たっている。亀井勝一郎は理想主義の欠如の理由に畏友北村透谷の自死や父正樹の無残な最期をあげた。理想を掲げた者たちの挫折と末路は、藤村の生涯にわたり暗い影を落としている。

しかし現実的な理由が他にもあったろうと思われる。藤村は近代化の恩恵を長らく受け損なってきた。維新による社会構造の急激な変化によって、木曽馬篭の本陣かつ庄屋であった島崎家は没落し、藤村本人も長らく経済的に喘いだ。「破戒」を自費出版する前後には実娘三人を立て続けに亡くしている。貧しさが理由だったともいわれる。そして妻の不貞、姪との情交、兄の強請など、近親との関わりで藤村は常に苦しんだ。維新なかりせばこれらの悲劇はあっただろうか。明治末の詩作から散文へのシフトは、ロマン主義的な新体詩の限界を自覚したからだけではない。本来藤村の本質は詩人であると亀井は見た。にもかかわらず異様なほどに苦しみながら私小説を生みだすことに執着したのは、一面では生活のためであった。

小諸時代、上京に際して藤村は神津猛を訪ねて金銭の借用を申し出ようとした。吹き荒ぶ寒風を押しての訪問だったという。しかし新作「破戒」の話等に終始し、結局目的とする話をきり出すことができなかった。後日藤村は言い出せなかった胸中を手紙でしたため、一家の糊口をしのぐための金銭として四百円の借用を願い出た。手紙を受け取った神津は、かつて空しい足取りで神津家を後にする藤村の心境を想ったことであろう。その後も藤村は、神津家が恐慌で傾くまで援助を求め続けることとなる。藤村は古い仕来りが残る家で育つとともに、経済的援助を周囲に求める生活を送ってきた。それゆえ、様々な抑圧に対して自己を貫くための表現や文体を磨かざるをえなかった。「ああ自分のようなものでも、どうかして生きたい」という生への執着は、ある処世術を生んだ。伊藤整は藤村に次のような一般論が当てはまると考えた。

たとえば貸した金を取りに行って金を取れない男が、あらゆる理屈や権利や約束のことを言い立てて、喋りまくるとする。だが別な男は、相手の前にじっと座って、言葉少なく遠回しに、自分の生活をもまた成り立たせてほしい、

とか、自分の顔を立ててほしい、と言ったとする。日本の社会では、前者よりも後者が利き目が多いのは確かである。論理や実証よりも、面目論や人格的圧力がものを言うような社会構造が存在しているからである。（伊藤整　近代日本人の発想の諸形式）

伊藤はこのような前近代的な「面目論や人格的圧力」を、告白小説「新生」のなかに見出す。

藤村の生き方は、偽善者たる危険を冒しながらも、その時の日本の社会の家族、親戚という構造に強く織り込まれた人間が、その非論理的な家族関係を破壊することなく、しかも自己の仕事と生活を貫徹するという、奇蹟に近いことを為しえた彼一流のやり方であった。純粋論理によるエゴの貫徹は、そのような社会では相手の破綻即ち革命をもたらすか、自己の破壊即ち死を呼び出す。論理そのものでもなく、古風な非人間的なシキタリや顔への単純な屈服でもなく、その中間で両方を壊さずに自分を貫くような、強力で曖昧で儀礼的な藤村の生き方の思考方法、即ち文体が、この奇蹟を成就させた。（同前）

外観上の「新生」は絶妙なバランスで成立している。作者の人生と文体とが表裏一体となった、奇跡的な私小説だといわれる。その一方、伊藤にはこの奇跡を成立させている言外の実質が見えている。

藤村は、告白小説を形において利用して、実質的にはそれを顔や圧力と似たようなものとして使ったのである。（同前）

田山花袋は見誤った。「島崎君は自殺する」と。藤村と姪との関係が「新生」をとおして露わにされた以上は旧時代的な方法、つまり家の対面を守るため間接的圧力によって誰かを犠牲にするような方法は放棄されたと。花袋は長い付き合いのなかで、藤村が物事の黄昏に敏感であることを誰よりも知っていた。一方で芥川龍之介は看破した。藤村は老獪な偽善者であると。告白が持つリアリズムの水面下に、実社会で確実に働く暗示的かつ圧迫的な力があると考えた。結果、芥川は慧眼であった。

このような力が最高潮に達したのは藤村の晩年である。昭和十七年「東方の門」の連載が始まる直前、平野謙は第一回大東亜文学者会議の壇上で藤村を見た。他の議場で「古典の精神による皇国文学の確立」を題目に語気を荒げる蓮田善明と対比する。平野の眼には蓮田とは対照的に会場から浮遊した幼い藤村の姿が写った。しかしその姿は艱難辛苦を耐え忍んできたレジェンドとしての存在感を強く印象付けるものであった。

私の感動したのはそのときの藤村のすがただ。おそらく藤村はあのとき生まれてはじめてあんな大勢の前で聖寿万歳の発生をしたのではあるまいか。その晴れがましさに対するあるためらいのような気配がふと私に危惧の念をおこさせた。だが、それは私の単なる杞憂にすぎなかった。いま思い返しても、そっと前から両手をあげて全然抑揚のないほとんど子供のような語調で「天皇陛下万歳」と口早に叫んだ、あのようなたぐいなく稚醇な聖寿万歳を私は知らぬ。それはすでに一定の型のできあがった世のつねの聖寿万歳とは全く類を異にしていた。袖口から青色の襦袢がちらとのぞけ、しずかに挙げた両腕が白かった。身長の釣合いからいって、なんだか顔が普通よりずっと大きく見え、それはお能の所作のひときれでもかいまみたような美しさだった。無論、聖寿万歳そのものが今日の国民にとっては感動の淵叢である。しかし、あの発声のふかい感銘は決してそれだけではなかった。一瞬にして「若菜集」のむかしから「夜明け前」にいたるながいあいだ、なんら保護もない新文学の担当者として幾艱難をしのいで来た老詩人の洗いさった無垢な美しさにうたれ、思わず湧き出る涙をとどめあえなかったのである。（平野謙　ふたりのこと）

昭和十七年当時の藤村はペンクラブ会長を経験し、公に戦陣訓の校正を依頼される立場である。小諸で惨めな思いをしていた時代はもはや遠い過去となった。自身の立場を「顔や圧力と似たようなもの」として利用しながら「東方の門」は創作された。そのため表層に見える印象とは異なり、実際には言外に一種異様な圧力を持つに至った。

「東方の門」序章は天岩戸に続き、幕末に来日したシーボルトが描かれる。鳴滝塾はシーボルトにとって未知なる日本を発見する場であるとともに、学びに来る者たちにとっては底なしの知識欲を満たす場であった。

すくなくともシーボルトは外人の身に異例として許された一週一度ほどの鳴滝行を何より楽しみとした。彼は医術、眼科学、婦人科学の外に、植物学、物理学、地理学等に通じ、言語の研究もおろそかにしなかった。彼の門人に授ける講義はそういう広い範囲に亙ったものであつたが、しかし十九世紀初頭の研究精神に満ちていて、些末な現象の分析にのみ囚われなかつた。その講義からは、いろいろな学問上の報告が門人等の間にひきだされて行った。それがみな彼の日本研究の土台ともなったのである。美馬順三等は石坂宗哲の「灸法略説」を蘭訳し、桂川甫賢は小野蘭山の「花彙」を蘭訳した。日本産の昆蟲図説を持ち寄るものがあれば、日本貨幣考を持ち寄るものがあり、藍染法を持ち寄るものがあり、日本古代史や勾玉記を持ち寄るものもある。殊に高野長英が日本に於ける茶樹の栽培と茶の製法は精しい報告の一で、その蘭文の見事さは人を驚かした。尤も、当時の士分と名のついた漢籍に親しまなかった

ものはなく、また医者仲間で本草書目を必要とする上からも漢学の素養に缺くるところがなかつたから、そういう力をもつた人達は種々な報告を蘭語に移す言葉の扱いにも十分な支度があったと言われよう。

知れば知るほどシーボルトはこの国のものの間に隠れている美しい性質を見つけ、その日本固有の伝統は欧羅巴人はおろか他の東洋人の間にすらよく知られていないことを思い、古代から長い長い歳月の間に養はれて来たものが幾多の才能を生み出していることに気づいた。（東方の門）

シーボルトとその周りに集う学生たちの溌剌とした交流が目に浮かぶようである。集まった者たちが互いに情報交換をするうちに、和学と漢学と蘭学との総合が成されようとしていた。ここには本来「細雪」に比べて直接的に掲載差止めの可能性となる要素がある。それは掲載時の敵国であるオランダとの深い交流と、親密な関係によって享受する恩義である。当時日本自ら敵愾心を強くあおる一角との親善を描くことが果たして藤村以外の作家に可能だっただろうか。オランダによる日本への宣戦布告は昭和十六年十二月八日であり、日本による蘭印進攻は翌一月である。

つづく「東方の門」の第二章と第三章は、明治二十九年当時の木曽馬篭万福寺の松雲和尚が、国内を回遊しながら青山半蔵を回想するシーンとなる。和尚が回想する半蔵は、哀悼と批判が織り交ざったものとなっており、まさに藤村の心境と同一視されるべきものである。そしてここで筆は絶たれた。

その後の筋書を推測するにあたり、「東方の門」には三種の創作ノートが残されている。雑記帳（い）、雑記帳（ろ）、年表の覚書である。このうち藤村の思想を書き綴ったと思われるのは雑記帳であり、ストーリーの構想を思わせるものは年表である。年表最後の書付は昭和十八年五月、藤村が亡くなる約三ヵ月前である。年表には透谷、独歩、花袋など親しかった者の生涯とともに、海外との折衝にあたった幕臣栗本鋤雲の事績がならぶ。

しかし特に詳細に動向が記されているのは、藤村と入れ替わるようにフランスに赴いた吉江喬松、そして岡倉天心である。そこにアジア主義のような指向性があったかは不明である。ただ確実にいえることは、天心を取り上げる以上はその延長線上にマサチューセッツ出身の米国人、フェノロサの存在を避けて通ることはできないということである。

天心において洋の東西が出会うにあたり、日本に固有の美を見いだし、天心の自覚を呼び覚ましたのはフェノロサであった。固有の美は差異のうちに見出されるべきものである。その差異の場を生じさせる契機として、日本美術におけるフェノロサの存在は必須である。残された年表では法隆寺夢殿の開帳をはじめ二人が同道した事績が記載されている。そして天心のボストン美術館への着任は、美術的な面での交流だけでなく、アメリカ現地における人的交流も視野に入る。

藤村は「東方の門」を発表するにあたり「実はこの作、戦

後にと思って、その心支度をしながら明日を待つつもりであった」と語った。この心境は様々に解釈されうるが、戦争が終結した世にふさわしい小説を発表したかったという意味だけではなかったかもしれない。本来は戦時中にふさわしくない作品であることの告白を含んでいた可能性がある。その場合「東方の門」の連載を可能にするのは、藤村という存在がもつ言外の力である。

藤村が描きたかった近代日本は、歴史の横軸ともいえる東西交流の積み重ねである。そして世界に対して自覚される日本である。強い言葉を選ばないことをもって、亀井は藤村の本質を詩人とみた。我々は何々であるという積極的な表現よりも、何々ではないという控えめな藤村の表現に強い意志を感じる。本質になるまで物事を切り落としたとき、詩人はカメラのシャッターを切るように一瞬を描写する。藤村が描写するのは東西の交流を中心とした歴史の横軸である。反対に京都学派や日本浪漫派において議論されるのは縦軸ともいうべき歴史のストーリーである。藤村は歴史の横軸を集めては、ただひたすらに積み重ねた。そして近世と近代の摩擦がもたらす葛藤を、十九世紀と二十世紀の連続を想起することで回避した。

もしわが国における十九世紀研究というべきものを書いてくれる人があったら、奈何に自分はそれを読むのを楽むだろう。明治年代とか、徳川時代とかの区割はよくされるが過去った一世紀を纏めて考えてみると、そこに別様の趣が生じて来る。（春をまちつつ）

藤村は歴史の断絶に重きをおかない。権力やイデオロギーが設ける時代区分から比較的自由だった。

今は十九世紀の齎した積極的な効果すら疑われるほど、世界を通じての一大変遷の時に当る。自由主義の否定、個人主義の否定、各方面からそれらの声が起って来るというのは何を語るものだろう。かくも世界が動揺し過去の遺産にのみ多くの人が頼れなくなったのは何のためかと想いみるがいい。それには前世期をよく見てかからねばならない。前世紀をよく見るには、どうしてもそれ以前の十八世紀というものを知らねばならない。（夜咄）

当時の社会がなぜ「過去の遺産にのみ」頼れなくなったのかを知るために、敢えて世紀をひとつずつ遡って省みるのである。近代は近世に理由を持ち、近世は中世に理由を持ち、中世はすなわち古代に理由を持つ。そこには順接的に歴史を接続する意思がある。ゆえに昭和十八年の時点の藤村は、近代を肯定した時点で、古代を含めた歴史の来し方そのものを肯定しえたのである。

藤村が近代に向ける視線には、楽天的な明るさと素朴さがある。複雑で重層的な因果律に基づく歴史のあり方は、藤村自身の生と相似形である。もし暗示的にでも、自身の生を歴史のあり方と重ねていたのであれば、「東方の門」の執筆は藤村にとってのささやかな希望であったかもしれない。

参考図書

「藤村全集第十三巻・第十四巻」筑摩書房
「近代日本人の発想の諸形式」伊藤整　岩波書店
「『破戒』執筆の哀歌」並木張　櫟
「島崎藤村『東方の門』」藤一也　沖積社
「島崎藤村論　作家論」亀井勝一郎　講談社
「島崎藤村必携」三好行雄編　學灯社

（浜北区）

［入　選］

北山・東山文化とその背景

滝澤　幸一

はじめに

室町時代に造られた金閣は、広大な敷地に建ち、神仙蓬莱の世界を表す鏡湖池に燦然と輝く姿を移す陽の姿だ。一方で銀閣の錦鏡池は、小さくも考え抜かれた配置の浮石や石橋を携え、落ち着いた佇まいを静かに映す。許されない事ながら、満月に照らされる銀閣を見てみたい思いがする。金閣を建てた義満。銀閣の義政。贅を尽くした建築は、職人の腕の見せどころであった。技は応用され、進化・拡散して行ったことだろう。

我国と頻繁に交流のあった朝鮮通信使の言葉を三つ並べよう。応永二七年（一四二〇）宋希璟の通訳、尹仁甫に「国に府庫なし、ただ富人をして支持せしむ」と言われている。三代将軍義満が北山文化を興し、明貿易で過分の利益を収めた後の時代で、耳を疑う。

次いで、応永末年とあるが、宋希璟は旅行記『老松堂日本行録』で日本の二毛作、三毛作や、優れた潅・排水技術に感嘆している。

間もない永享年間には、朴瑞生が京都の町で「日本の市の人々は、店の軒に台や棚を設けて物を売るから、塵にもまみれず買う人も見易い」朝鮮では魚や肉も地面に置いて売る。日本のようにせねばならない。と語っている。

足利義満が三代将軍になり、南北朝の争乱も終焉に向かい、幕政も軌道に乗り始める。義満は直轄軍の強化と、強豪守護の勢力削減などで、幕府の安泰を図り、文化的な建造物を築いたが、足利幕府が、幕府や日本の財政健全化に目を向けることはなかった。

一方で庶民の間では、職業の分化と工夫、改善が進んだことを、後の二例が示している。専業化した商人は、見せ台・見せ棚に商品を並べ購買意欲を高めた。見せ台、見せ棚を置く処が「店」と呼ばれるようにもなった。

対明貿易がもたらした、上質な陶磁器などは支配層や富裕層に愛用された。目標があると技術革新は早やまる。職人たちは日々研鑽に努めたであろう。この頃に興った地方特産品が、美濃の陶器や関の包丁など現代に残る物も多い。

土一揆や下剋上だけでなく、庶民の間でも活きるエネルギーの爆発した時代でもあった。

室町時代の政情

鎌倉北条幕府下で、北条一族の優遇処遇に武士階級にも不満が高まった頃、後醍醐天皇は倒幕の狼煙を上げた。天皇の皇子護良親王や勤皇の武士に加えて、悪党とか婆娑羅と呼ばれる権力に反抗する者たちも加わった。後醍醐天皇鎮圧に派遣された足利高氏も寝返り、鎌倉幕府は倒れ、高氏は天皇の名・尊治の一字を戴き、足利尊氏と改名する。

武士や公家の支配を払拭したい後醍醐天皇に、新しい幕府を目論んだ足利尊氏が従うには無理があった。南北朝の争乱が起きる。

倒幕の争乱から、南北朝の争乱と、戦いの続く中で戦費の徴用などで、勝手気侭な対応に世情は混乱した。後醍醐天皇の理想追求の姿勢には実体が伴わず、朝令暮改なども混乱に拍車をかけた。この政情に土一揆や下剋上の機運が高まる。力の結集と資金力を以って、伸し上ろうとするエネルギーが高まった。

南北朝の争乱は、建武二年（一三三五）から終焉するのには五十七年ほど要したが、尊氏が幕府を開いたのは、翌年の北朝建武三年（一三三六）のことだった。

職能民の誕生と世情

商人や職人が活躍する舞台は、大陸からの貨幣の流通が拡がった背景も大きい。年貢も物納から、売り捌いて貨幣で納入するようになる。あるいは地方の荘園が売り捌き、貨幣で届ける。ここにも商売の道が拡がる。

朝鮮使・朴瑞生が感嘆した、見せ台や見せ棚に商品を並べて、客が見易いようにする工夫、清潔さや新鮮さも工夫していただろう。

室町時代には職業の分化が急激に始まった。夫が獲ってき

た魚を、妻が売り捌く家業から一歩進んで、物を仕入て売る商人が現れる。

魚で有れば、夫が仕入、干物などに加工し、妻が売り捌いていたのだろうか。都の昼間は女性が倍増したという記録もある。女性が貨幣を手にする事が多くなり、家庭での経済は女性が支配するのが一般的であったようだ。

網野善彦著の『七十一番職人歌合』は室町時代の京都に活動した商人や職人を絵入りでリアルに伝える。魚、米、白布、椀、土器、扇、蝋燭、燈心、薬売りなど商人に、鍛冶、経師、仏師、紺染、琵琶番匠（楽器製造）などの職人。琵琶法師や芸能民など多彩だが、女性の職能民の姿が多数見られる。博徒や遊女も職能民としていて、朝鮮使・宋希璟は旅行記『老松堂日本行録』で、昼間からの売春が活発である事に驚いた記述がある。

鍛冶は戦乱続きの室町時代だから、刀などの武具の需要も多かっただろうが、建築資材である釘やカスガイ、鏨や鋸などを作るのが多かった。釘やカスガイは奈良時代に建造された磐田の国分寺跡などでも非常に粗野な品が発掘されているが、この時代になると庶民にも使われる。戦乱で焼け落ちた民家はカスガイや釘で再建が容易になったであろう。農具では平鍬に加えて、より技術度の高い備中鍬（三本鍬）が作られるようになって、堅い土や、石などの異物があっても食い込みが良く、農作業がやり易くなった。

使う道具を自作した時代は去り、職人が作る時代になり、生産者団体・座が出来る。

酒造の麹は、北野社の神人で北野神人・西京神人と呼ばれ、自らもそう呼称していたが、神仏の権威の低下に伴い、麹売りの呼称が定着する。こうした職能人の中に、貨幣など利益を溜め込み、有徳人と呼ばれる人が現れる。

金貸業は古来種籾を農民に貸し付けて、秋の収穫に合わせて利息を付けて返納する事で、種籾の確保と、神に対するお礼の意味合いがある「出挙」から出ている。農民が種籾まで喰ってしまうなどの予防の措置として、この時代に合った適切な措置であったが、やがて税の形になり、神社や領主の金貸し「私出挙」になり、寺社、酒屋、土倉などは年利で六割から七割の高利で金貸しをし、大きな利益を上げていた。

借り手の農民や下級武士などが結束して、徳政を要求し、証文を奪い、借金を無きものにしようとする一揆が頻繁に起こる。飢饉などで止む負えぬ事情の時と、毎年のような一揆には権力への反抗の部分もあった。これらは醍醐寺座主満済や大乗院寿尊の記録に詳しい。また、騒動はチャンスも生む。悪党とか婆娑羅と呼ばれる支配者の、そそのかしや支持もあったであろう。全国に拡散した。

稲作技術の向上

朝鮮通信使が感嘆した事例に、灌漑・排水の充実があった。土木学会編『明治以前・日本土木史』には、「用水は農業の根本を成すとして、治水潅水を努めるは豊臣秀吉」とあり、室町時代は三河の墾田、小田原の相模・武蔵の治水灌漑と熊

谷堤十六里の長堤、甲斐の水利設備など地方大名の施策が載るのみで、近畿一円の開発は見つからず、正平二十三年（一三六八）義満の検田では、近畿の耕地面積は鎌倉時代より減少している。

私は地方別の人口推移から、東日本に比べて、紀伊半島中央部は栗や団栗が採れない照葉樹林帯であったため、縄文時代は人が住まない地域だった。縄文後期の寒冷化で様相が変わった。人口の東から西への大移動であるが、この時点での近畿地方は、まだ人口の増は極めて緩い。一キロ平米当たり、〇、一三人とほぼ四国並みにすぎない。

近畿地方の人口が急増するのは弥生や古墳時代で、東海地方に準ずる二番目の人口密度となる。他より遅く、統制のとれた開発が、進んだ技術を生み出し、これを土台に工夫された仕組みが広まったと私は理解している。水利用の慣行などは『大乗院寺社雑事記』などに記録がある。領主の管理下にあった。

東大寺領の遠江国蒲御厨（現浜松市）では、長禄年間（一四五七～五九年）荒れた用水路の管理を農民が行う農民の自主管理に進む。灌漑は用水路に加えて、溜池なども併用し、施工や管理を通して、農民の団結心や協調の意識にも繋がった。

この背景には、荘園・御厨の領主は守護・国司の侵食に逼迫し余裕が無く、幕府や守護からも見捨てられた状態にあったとみる。

荘園などの領主から独立するためには、地侍や土豪の仲介を要する場合も多く、新しい支配者を作る危険もあったが、切羽詰まった状況があった。

これまで荘園主に仕えながら、僅かな私有地を持つだけだった農民が、荘園の統制力に限りが出て、自作農が現れる。自作農民は肥料作りにも精を出す。『看聞御記』は山野での争いを記す。草は堆肥になり、焼いて灰として施す。品種の多様化と合わせて、二毛作などが出来るようになり収量も増加した。

優れた灌漑施設は、排水も容易となり、裏作の栽培も可能になっていたと考えられる。稲作を伝えた朝鮮より、栽培技術が上回っていた証左が此処に見られる。朝鮮通信使の記録にある長禄年間は義政の時代になる。

足利氏と日野家

足利氏は源頼朝の祖父、為義の兄義国を祖とし、頼朝の従兄妹や義兄弟になる間柄を続けるが、七代後は天下取りを家訓とする。

一族は守護としての任地から、仁木、細川、桃井、畠山、斯波、吉良、今川、一色など。高、伊勢、上杉は早い時期から仕えた家臣。

日野家は後醍醐天皇に仕え、誅された日野資朝は三男。八男・賢俊は尊氏に仕えている。こうした縁があって、日野家は足利将軍家に九人の正室の他、側室も送り込んでいる。

足利氏と二つの宗教

北条氏の庇護をうけた禅宗は、尊氏・直義の執政下で、直義は五山制度を採用し安国寺を建立するなど、禅宗寺院の優遇を進めた。当然旧仏教に属する南都北嶺などの反発を招いたが、この政策には人心の統一を図ろうとする幕府の政治目的があった。

この施策の推進派は斯波、土岐などで、旧仏教に理解を示したのが細川であった。これが表面化したのが、康暦の政変である。

もう一つ、足利幕府で見られたのが、鎌倉時代に派生した新しい仏教が台頭する中で、足利氏は浄土宗の一派である時宗を重用した。踊念仏で知られる時宗僧侶は、戦死者の弔いと医学的な知識や技能を持ち、一方では能や芸部門に長けていて、戦時中も同行していた。

時宗からは、善阿弥、世阿弥、音阿弥、能阿弥、千阿弥などの名を持ち、広く芸事に秀でていた者も多く、「明徳の乱」を描写した軍記物に「明徳記」があり、作者は義満に仕えた阿弥号を持つ時宗の同胞衆だろうとされる。これらの中には、河原者と呼ばれる賤民や差別民も含まれていたが、能力に優れた者に差別はしなかった。特に、形式に拘らない義政は、在家の小栗宗湛の絵画を高く評価し、禅僧でなければならなかった画師に、禅の背景が全くなかった狩野正信が活躍できる場を作った。

室町幕府の権力強化

初代将軍・尊氏の時代は、後醍醐天皇との争乱に加えて、当初は親密であった弟・直義　との仲たがいによる三つ巴の戦いになり、互いに離合を繰り返す戦乱の明け暮れであったが、二代将軍義詮らは直義党の斯波義将を管領に起用し、これを叛逆の疑いを掛けて追放し、直義党の一掃をしたことで、足元が固まった。

三代義満は、十歳で父を失ったが細川頼之の庇護の下、宮廷で権威があった日野家から業子を正室に迎え、積極的に公家への道を求めた。廷臣最高位の太上大臣にまで昇り積めたのは、母（紀良子）が順徳天皇の子孫であった。業子を失うと、姪の康子を正室とし、後に康子を若き天皇の准母にした。日野家の後ろ楯で義満は天皇の父太上天皇に匹敵する。

この背景には、公家が持つ荘園を守護が侵食し、あるいは半済という制度で実入りが減り、一方で武家の権力が増大している事実、公家の権力の低下があった。

幕府体制の安定には、将軍直轄軍の増強で将軍の権力強化に努めた。組織的には、執事ー侍所ー直轄軍の制度を、管領、侍所、直轄軍を将軍に直属する形に改めた。合わせて家格を定め、管領には斯波、細川、畠山の三家などと定めた。高低の家格の最頂部が将軍家として従わせる制度である。

もう一つは、土岐、山名などの幕府に功を立て領国を加増させた結果、強大になった守護職に内部分裂を働きかけては叩き、弱小化を図っている。

室町第落成

制度の確立を成した後、義満は花の御所・室町第を建築し、後円融天皇を招き、落慶式を催し、将軍絶対の新時代を演出する。

下京から一転して上京北部の室町に建設したのは、有力守護邸の林立地であり、土御門の内裏や公家邸に並び、それを上回る規模で、朝廷と一体となり、その最高位に君臨する地位を誇示した。

これには令和元年九月ＮＨＫの「ぶらタモリ」で右京の桂川は天井川で氾濫し、左京の鴨川は河川浸食で川底が下り、後の時代の御所は左京に造られたという。右京ながら上京への選択は、桂川の上流部で且つ河から離れた移転であり水害回避でもあったであろう。

足利幕府は、三代義満によって権威が確立し、室町第の完成を以って、室町時代と称されるようになった。

金閣建立

応永元年（一三九四）義満は三十七歳で将軍を辞し義持に譲位し、太上大臣就任。公家の最高位に昇るも半年で辞任し出家する。

出家は公家・武家の差別観や身分序列を超越した地位を目指したものである。応永四年北山第の建設に着手。応永八年北山第を正式の政庁とし、日明に国交が開かれると明使の国書をここで受けた。北山第は公武上層部の社交の場ともなった。後小松天皇を迎え、滞在は二十日に及んだと記録にある。

廷臣最高の位（太上大臣）を得て、明に対して日本国王を名乗った義満であるが、帝位奪還の意思の有無が議論されている。私はこれに否定的である。何故なら、太上大臣を半年で辞任出家した際、管領など守護や右大臣ら公家も多数出家した。謀略を極め、功ある大守護を貶めた義満に多くの賛同者があったとしても、神格化した天皇の地位を狙うは、支持難しを自覚していたと思われるのである。義満は幕府安泰を図るために、守護の家格を定めている。自らの主張を曲げて廷臣が帝位を目指すことは、自らの定めに反する。

義満の日明貿易

義満が明の冊封を受けて以降毎年のように明使が来航し、「三島倭寇」と呼ばれていた対馬、壱岐、松浦五島からの倭寇鎮圧の功などを称えている。

義満の献上品は、生馬二十匹、硫黄一万斤、瑪瑙大小三十二塊計二百斤、金屏風三幅、槍千柄、太刀百把、鎧一領、厘硯一面、厘扇百把に対して、明からの下賜品は、花銀千両、銅銭一万五千貫、錦十匹、紵糸五十匹以下略。

義政時代には、銅銭十万貫を願い出て、五万貫が送られてきた記録がある。義政時代は応仁の乱後であり、困窮していたのも事実であろうが、下賜品を露骨に要求している。

義満の時代には青磁器、宋元画など美術品、義政時代にも書や画などが多量に下賜され、備わっていた美術品の鑑賞眼を一段と育てた。

他方「国に府庫なし」は足利幕政を通じて見られる。明徳

四年（一三九三）土倉と酒屋には法令で年間六千貫文の税を掛けていたが、この頃までは荘園制や半済令など土地に関する資料があるものの、これ以降は施策としての資料が出てこない。土地関係法令は無かったと断ずる他ない。事毎に有徳人に頼った。例を上げれば寛政六年（一四六五）義政の正室富子の産所造営費は堺の商人が負担したし、応永元年（一三九四）義満の日吉神社参詣も坂本中の富裕者の負担であり、後円融天皇の即位の費用も土倉、酒屋の有徳銭だった。

義満の死と義持

義満の死後、四代・義持は一転し対明貿易は断絶する。義持が義満に愛されていなかったためとされているが、明からの度々の催促に、応永二六年（一四一九）明への書状に、「日本は古来、諸神の考えを聞き、事を行う国だが、日明交流は神の許し無き所業である。このため義満の代は天候も乱れ、自らも斃（たお）れた。先君はその死に望み、永く外国との通行を絶つ誓いを立てた。私は先君の誓いを破ることはできない」と書き送った。義持は義満の施政をことごとくひっくり返した。

義持の記述は、『中公文庫・日本の歴史』によるが、『講談社学術文庫』では、弱者に想いを寄せる将軍として描かれている。資料と著作者の想いの違いがあって面白く読んだ。

義政と東山文化

義教の日明貿易再開

義持は応永三十年（一四二三）将軍職を一人息子・義量（よしかず）に譲ったが、二年後に病死する。義持の四人の弟の中から、天台座主の義円（ぎえん）が籤引きで選ばれ、義教（よしのり）と改め、六代目を継ぐ。

義持の方針には、商人、守護、寺社にも反発があり、幕府にも財政上の必要性が出た。義教は明への遣使の方針を取った。永享四年（一四三二）八月、五艘が船出した。乗船した商人の楠葉西忍（くすはさいにん）の談を大乗院寿尊が記録したものを見ると、航海の費用は一艘千五百貫文。明からの生糸は五倍の利を得ると記す。舟は大き過ぎぬ方が使い易いとある。

嘉吉（かきつ）の乱

六代・義教は小心で感情の起伏が激しく、偏執性の強い、異常性格であったといわれる。公家・武家に統制を厳にし、威に従わないと力で抑えた。力で抑える政策は神社仏閣や土一揆など全ての勢力に向けられて、この時代に土一揆は起こらないし、従わない比叡山は攻められ、首謀者は根本中堂に火を掛けて自殺している。比叡山は信長以前にも激しい鉄槌が下されていた過去があった。

嘉吉元年（一四四一）六月、鎌倉公方持氏の遺児春王、安王の首が届いた翌日、赤松満祐は義教を自邸に迎え、関東平定祝賀の宴を催し、宴半ばに義教を殺した。赤松家は三代義満四歳の頃、南朝軍の攻撃から逃れた義満を守った功で、毎年正月赤松邸で松囃子を観る佳例としていた由緒ある家柄であったが、義持の代と義教にも反抗していた。赤松の成敗は九月十日にようやく決着した。

義教と日野家の関係

公家各家が没落する中で、日野家は将軍家との重縁で一人

繁栄を誇るが、義教はこれを嫌い、永享三年（一四三一）六月日野家出の正室に代わり、正親町三条家の三条尹子を側室から正室に定め、内外に披露する。

義資を籠居、後には父・重光の所領没収のほか、義資も命により暗殺されてしまうなど、日野家は一族が疎外される悲運が訪れる。

日野家は嘉吉の乱で義教死去により、許され復権、政治力を得ることで、八人もの兄弟の中で兄・義勝と同じ重子を母に持つ、義政にも運が向いて来た。

八代・足利義政

嘉吉の乱で義教死去後、義勝が継ぐも、嘉吉三年、義勝も急死し、二歳年下の義政が、八歳で八代将軍を継ぐ。義政は後花園天皇より武威により治めよと「義成」の名を賜るが、祖父・義満のようにはならなかった。

義政が命を下しても、守護や地方の武士は従わず、土一揆も頻繁に蜂起する。父・義教への反発を一身に受けることになった。

命令を下しても実行されなければ、対応を考慮しなければならない。朝令暮改も出て、権威は更に低下する。管領三家の中、斯波、畠山が権力を失い、細川勝元は義政の上意を曲げる我儘をしばしば行う。反対意見を述べられない反細川勢力は義政に取り入ろうとする悪しき風習が起こった。御今参局、有馬元家、烏丸資任の三人は三魔とも呼ばれた。

二十歳を過ぎた頃の義政は、洛西の西芳寺に出掛け、室町花の御所の再建、寺社の参詣や花見の宴、猿楽の興行など華美を尽くすことで義満時代の再来を夢見るという錯覚に陥っていた。この時代は公家の貧困、庶民の苦痛に引き替え、武士階層が最も実力を高め、経済的な余力から出費を惜しまず贅沢な文化生活に振り向けた。

大飢饉と義政

長禄三年（一四五九）から、翌寛正元年は旱魃と長雨、異常低温、大洪水に、付随する疫病が蔓延し、秋は蝗の食害も出て大飢饉となった。餓死・病死者は八万二千とも八万四千にも上るが、幕府は対策を取らなかった。

鎌倉幕府の支配者は、一面では農村の地主であり、経営者でもあったから家父長的な愛護の気風や政治論理があったし、江戸時代は儒教道徳からの治者意識から農民愛護の姿勢があったが、義政や守護にはこれが無かった。

長禄二年から始めた室町第の再建工事は、続けられ、造園で手腕を振るったのは河原善阿弥である。長禄三年完成も、庭園造りに泉水を掘り、名木奇石を大名屋敷や寺院から徴発する。母・重子の高倉御所の造営など、庶民の困窮に配慮はなかった。

苦しい生活は情を失う。流れ者や差別民など賤民に対する冷たい仕打ちが増した。また人身売買・人買いが横行し、森鷗外などの『山椒大夫』では安寿と厨子王の母が佐渡に売られた後、足の筋を切られて逃亡出来ないようにされ、鳥追いをさせられる残忍な行為はこの時代を描く。

応仁の乱

義政は政争から逃れようと弟を義視と改名させ細川勝元を後見に後継指名したが、実子義尚が誕生し、妻・富子は山名宗全を頼り後継に義尚を望んだ。これに義満以降の強大守護弱小化政策の怨恨もあり、応仁の乱が勃発した。乱が始まると勝元、宗全が和平を志望しても守護たちの利害が絡み決着は長引いた。

十一年もの争乱も、双方の疲弊と、西軍・大内政弘、東軍・齋藤妙椿の働きで終息した。妙椿は義政・義視の和解にも尽力した。

東山山荘の造営

南禅寺の塔頭に山荘造営を始めたのは、寛政六年（一四六五）であったが、応仁の乱後、文明十四年（一四八二）浄土寺の地に改めて造営する。文明十五年、常御所の完成を待って、義政は移住するが、延徳二年（一四九〇）没するまで殿舎、園池の作事を行っている。

弟義視への後継問題や富子との不和など、思うに任せぬ義政は、祖父・義満の北山第における優雅で奔放な暮らしに憧れ、彼の円熟した手腕で殿舎、園池の造作を進めた。

困窮し地方に流寓した公家衆が、高い文化教養を求める地方に歓迎された時代、公家化した守護大名たちの願望とも重なり、義政の浪費は、意外にも守護大名などからの非難などはなく、憧れ、取り入れられる方向にあった。この後の戦国時代にも、公家の娘が大名家に嫁ぎ、その侍女たちが作法や文化を地方に拡げた。

おわりに

義政の造園には河原善阿弥の重用があったが、絵画の狩野派の誕生など、造園に限らず能阿弥、千阿弥などが絵画、立花、香合、茶湯などと座敷飾り、道具管理と、東山文化の精緻で高度な息吹は　社会の底辺に置かれた人達の活躍があった。

権威ある職人や僧職の下で、指示され働いていた河原者などが、己の工夫を加えて新しい技術を得ると、義政は身分に拘らず重用した。これは浄土宗の一派である時宗が、傷の手当てなどで優れた手腕を持ち、尊氏以降の出陣に就き従い、戦死者の弔いや、治療に当たらせていた。これらの中に、能などの達者な者を見つけ出し、取り立てていった足利氏の柔軟さを見ることが出来よう。

室町時代は戦乱多き時代ではあったが、向上心に溢れた時代で、民衆も創意工夫をし、現代に生きる産業や技術も少なくない。才能と志ある者には、応えてくれる時代でもあった。

＊　参考にした書籍

中公文庫
佐藤進一『日本の歴史⑨南北朝の動乱』
永原慶二『日本の歴史⑩下剋上の時代』
講談社
桜井英治『日本の歴史⑫　室町人の精神』

平凡社　佐藤進一『足利義満』
網野善彦『職人歌合』
吉川弘文館　河合正治『足利義政と東山文化』
田端泰子『室町将軍の御台所』
新井孝重『悪党の世紀』
小学館　松木武彦『日本の歴史①列島創世記』
岩波書店　土木学会『明治以前・日本土木史』

（北区）

評論選評

中西美沙子

「私は他者だ」といった詩人がいました。その言葉から評者が抱いた思いは、「他者性」の中に誕生するのが詩や小説、また評論などの文芸作品ではないかということです。フローベルは「ボヴァリー夫人は私だ」と語ったといわれていますが、この言葉にも表現者のあるべき視線が見えてきます。登場人物とその時代、それを彩る風俗をフローベルは、「他者の目」と「自己の感性」という複合的視野で表現しています。フローベルはリアリズム文学の先駆者といわれる小説家ですが、客観的な描写の中に生きた人間の身体を感じさせる重厚さがあります。その感覚の源を辿れば、自己と他者とを冷静に窺う視線が浮かんでくるのです。

表現に於ける「他者性」とは、何でしょうか。とかく表現者は、自分が書いたものに酔う傾向があります。

松尾芭蕉の言葉に「文台引下ろせば即反故也」があります。苦心して句を書いた後は、使い捨ての紙屑に過ぎないと彼はいっているようです。言葉を換えれば、句を書くことに拘泥すると本当の句はできないとも読めます。

評論の根幹は、「冷めた目で自己を見る」ことと、論じる「対象の骨格」を的確に掴むことだといえます。「対象の骨格」とは、論ずる作品と表現者との関係性を、どこに置くかということです。

思想家の吉本隆明は論ずることの根に「出自」を置いています。自分の育った環境と時代を「冷めた目」で見ています。その「目」は、唯の「冷たさ」ではなく、人に対する「慈しみ」ともいえるものです。

論ずるということは、対象作品を解体し新たな次元に挿げ替えることですが、表現者も傷を負う事でもあります。そのことを意識して論じてゆけば、必ず読む人の心に響くものとなることでしょう。

俳諧に於ける軽みと死生観

芭蕉と子規という俳人を、「死」を通して筆者は論じています。芭蕉最期の句といわれる「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」を論の背景に置き、芭蕉の死生観が考察されています。詩人安藤次男の『芭蕉』を引用しながら、死にあたってもなお芭蕉は、「軽み」と「ヒューモア」を俳句作りの根に置いていたことがこの論から理解され、一つの見解だと興味深く読みました。芭蕉に合わせるようにして正岡子規の俳句への思いと死生観も述べられています。

子規は若き日より不治の病に罹り、「死」と「表現」と「生活」とが不可避に関わる生き方をしていました。筆者は、庭に咲く鶏頭の花の数を、子規が現実の花の数よりも多く描いたことに着目します。子規は、写生俳句で名高い人でしたが、筆者は存在しない花を子規が意図的に置いたことと死生観と

を重ねます。
深読みかも知れませんが、言葉というものが、人の身体と心のマッスにより成り立っていると、読みながら感じました。

「東方の門」と藤村の文体

タイトルの「藤村の文体」から論が成されると思って読み進んだのですが、藤村の幾つかの小説の解釈から藤村自身の生き方の矛盾と毀誉褒貶が論じられており、少し残念な思いが湧きました。しかし藤村の小説を丁寧に読み、論じる姿勢に共感を持ちました。
筆者が藤村の有名な「夜明け前」ではなく「東方の門」をなぜ選んだか、その根拠が窺えました。「夜明け前」に比べ、藤村晩年の「東方の門」は「表現する意味」があったのだろうかという筆者の意が、眼目だったと理解しました。
伊藤整が「新生」を論じ、吉本隆明が「東方の門」を論じたことが引用されています。とても重要な指摘ですが、彼らの藤村への切り込みについての論考が、やや平板だと思われました。特に吉本の論じた、「『東方の門』は祝詞小説だ」という批評は、深く分析すべきだったといえるでしょう。次回再び論点を変えて挑戦してみるのも面白いかと思います。期待しています。

北山・東山文化とその背景

中世とはかくも油絵のように重厚で人間味のある時代であったと、論考を読みながら思わされました。
論の始めに書かれた朝鮮通信使の話は、とても鮮やかなところでした。それはその時代の人たちのいきいきとした生き方が実感できるからです。
筆者は室町時代を形成する様々な人や政治、文化を掘り起し論じます。そのどれもが史実に忠実であるということは評価しますが、室町という時代から受ける印象が、さほど強く読者に伝わらないのは、どこに問題があるのでしょうか。個々の部分は、とても魅力があるのに、読み通してみて実感が残らないのです。
それは網羅的に論を為しているからと思われます。制度や文化、庶民生活などのどれか一つを核にして論じ、他のものを背後に置き強弱を付けると、書きたいものが明確になると考えます。

無心ということ

「無心」について筆者は論じています。優れた武道家や宗教人を引用して「無心」の意味を考察しているのですが、それらの人を「凄い」と感じる反面、筆者が何を伝えたかったかが見えてこないのです。その理由は、武道家への思いが強すぎ、巧みな技と精神性の内側に入り込みすぎてしまったせいと思われます。文芸批評は、「驚き」を享受しながらも、冷めた目で見ることが基本でもあります。
以前、岩波文庫で、「日本の弓術」という本を読んだこと

があります。作者はドイツの哲学者であるオイゲン・ヘリゲリで、彼は大正時代に来日し、一人の弓道家に出合います。そして彼が的を射る的確さに驚きます。ヘリゲリは「精神」と「身体」との親和性に気付き一冊の本を書きました。精神と身体的な芸を哲学として考えているのです。

無心がマジックのように称される時代を私たちは生きています。筆者が「無心」に拘るのは、そういう今の時代に疑問を感じるからだと思いました。

仏教美術展覧会と出開帳

様々な美術展を観ると、そこに「観る工夫」が成されていることが分かります。しかし企画のあり方が素直に受け入れられる場合もあれば、疑問に感じることもままあります。それは美術の鑑賞が現代では消費の対象と成っている傾向に、疑問を感じさせられるからかも知れません。

筆者は様々な博物館や美術館で催される仏教美術の展覧方法に付いて、「肯定」と「疑義」の観点で論じています。

現代の展覧会を透かして見る為に、筆者は「出開帳」というセレモニーを論じながら描いています。「出開帳」は普段は見られない秘仏など開帳することをいいます。江戸期に於いては「出開帳」が人寄せにあり、寺の寄進に繋がったと筆者は書いています。「出開帳」と現代の美術展と類似したところがあると。

グッズの販売や広報のあり方が過剰であるのが、どの時代も同じなのかと論文を読んでいて可笑しくもありました。

仏教美術を宗教的な観点で見るのではない時代が到来しています。それは純粋な「美」を自分のものにすることでもあります。そこに「見ることの可能性」を感じます。筆者は鑑賞のあり方を投げかけていますが、明確に焦点が合っていない思いも湧きました。展覧会の意味と可能性が、論文に反映していないからと思われます。にも関わらず筆者が仏教美術に心惹かれていることは、強く感じました。

随筆

［市民文芸賞］

おなかがすいて　すいて

恩田恭子

私はこの年齢になっても、その頃の弟の無邪気な顔を思い出す。

「ねえたん、どこ行ってきたの？　ぼく心配したでえ」

昭和十九年五月、この頃は食糧不足が厳しく、配給もわずかになり、困る時代、何もない時代だった。

その頃、私は母と二人で弟を連れ、今年の冬用の山菜を確保するために何時間も歩いて奥深い山へ行った。初めて行く山である。道はなかったけれど母の後をついていくには小学生の私にも歩きやすかった。

幼い弟を近くに置いて早速ミズ取りを始めた。母が木を倒し枝を払って私が葉をむしりとった。

（このミズというのは自然に生えた木で、昔から食糧品として重宝されていた。山菜のなかではとても早く出る芽で、お茶摘みの前に取り、ゆでてよく揉み乾燥しておけば何年でも保存できる食材である。昔からみんなに愛され現在でも知る人が多い）

次々と木を倒し夢中になってミズを取りボウラにつめていった。

どのくらい時間が経ったであろうか、休憩しようとして、ふと気づいた。弟がいないのである。胸がドキドキして母と私はその場に座りこんでしまった。

「かずよしー、かずうー」

大きな声で呼んでみた。こだまが返ってきた。返事はない。とにかく弟を探すことが第一だ。母は、切った木を起こしながら戻れば必ず弟に会えるから、ゆっくり周りを見ながら私に先に行くようにと言い、母は後からミズをしっかり詰めたボウラを背負い、さらに周囲を見回しながら下りるようにした。

弟のことを思うと胸はどうしようもなく切なかった。早く会いたい、なんとしても見つけなくては、母も私もその思いだけだった。

「ヤアコ、よっく見るんだよ。座っているか、寝ているか、泣いているか、どこかで迷っているかもしれない。しっかり探すんだよ」

私の体は震えが止まらなかった。野犬に持っていかれたのではないかと不安はどんどん膨らみ、悪い思いだけが胸に広がってきた。上の方で母が必死で弟を呼ぶ声がする。

「かずよしーい。どこにいるー」

どのくらい探しただろうか。私は大きな枝を力いっぱい持ち上げてみた。そこに弟が眠っているのを見つけた。
「お母ちゃん、いたよお。和充がいたよお」
私は大声で何回も呼んだ。
「いたかあ。今行くでねえ。待ってないよお」
母の声が聞こえた。
私は泣きながら、弟の体を揺さぶった。ぱっちり目を開けた弟は
「ねえたん、どうした?」と驚いたようであった。その無邪気な声に私は弟を抱きしめ、泣いた。気が付いたら弟は裸足だった。その時、母が下りてきた。
「おかあちゃあーん」と弟は大きな声で泣き出した。母も泣いた。私も泣いた。
ミズ取りに夢中になっている母と私についていけず、おなかがすいた弟は座ったまま眠ってしまったのだった。朝も昼も何も食べていないのだ。
「よかった。よかった。無事でよかった」よかった、ただその言葉しかなかった。
大きなボウラを背負った母はミズを少し私のボウラに移し、弟をボウラの中へ入れた。
「和充、今度はお母ちゃんがこの中に入れてゆらゆらして連れていってやるでねえ。しっかりつかまっててね」
朝から何も食べず、それでも何時間も歩いてミズを取りに行かなければならない、そうして毎日を生き抜いていた。
「あっ、そうだ。忘れていた。来るときにお昼にと思って、干し芋を二つずつ持ってきたんだよ。食べるかねえ」とポケットから出してくれた。弟は大喜びで干し芋にかぶりついた。
随分歩いたが、家はまだまだ遠かった。
「ヤアコえらかったねえ。ひと休みするかねえ」
家が大分近くなった時、母が初めて口を開いた。
「きょうの和充のことはヤアコもお母ちゃんも大変なことだったねえ。でもね、これは誰にも話してはいけないことだよ。もし、和充が見つからなかったら大変なことだけど、見つかったから何にもないと同じことなんだよ。だから、家の人たちにも何にも言わないでいい。ヤアコとお母ちゃん二人の内緒のことだよ。夢を見たと思えばいい」
そして、母と私は胸の中にしまったまま弟も大きくなっていった。私は忘れたことがなかったが、母との約束だから誰にも言わずにいた。その後もミズを取る度にその時のことが思い出された。
どのくらいたったであろうか。母が私の嫁ぎ先に来て、初めてそのことを口にした。母も胸が痛かったのであろう。
「ヤアコ、昔こんなことがあったけど、覚えているかね」そう言って話し始めた。
「ヤアコはお母ちゃんとの約束を守ってくれて本当にありがとう。ヤアコとお母ちゃんの二人だけの秘密だったね。怖い怖い秘密だったけど話したことはなかったね。もう気を緩めてもいいでね。時々その話をしてもいいでね。お母ちゃんもやっとこの頃心の荷がおりたよ。食べ物がないということは本当につらかったねえ。今はお金を出せば何でも手に入る、いい世の中になったもんだね」
何年たっても母のこの言葉は私の胸か

ら消えることはなかった。
そうして、九十三歳になった母は五人の子どもに見守られながら静かに眠るようにこの世を去った。

（天竜区）

［市民文芸賞］

あの日

中津川久子

年のせいか、子ども時代が懐かしく思い出される。小学校三年生のころの話だ。

学校から帰ると、軒端にある肥溜めの中に、何と姉が落ちているではないか。

「梅子ちゃん、何で、どうして」

幸い肥出しをしたばかりだったのでいくらか良かったが、それでも全身、糞尿まみれで途方に暮れた。姉は盲と、てんかんの病いを持っていたのだ。症状は次第に進み、中学の最後の運動会にはゴールとは違う方向に走っていたという。

秋の日暮れは早い。とにかく救い出さねばと、ランドセルを放って思いっきり引っぱる。たちまち、私の手も糞尿だらけになって力が入らない。なんどもずりこまれそうになる。

「梅子ちゃん、縁に腹をつけて這い上がって」

「うおっ、ぐわっ」

言葉にならない声だけが返る。次の瞬間、私は肥溜めに入って姉の尻をがむしゃらに押していた。やっとの思いで引き揚げると、庭の柿の木の根元にある水場までつれて行った。真っ裸にして容赦なくホースで水を掛ける。陰毛がさわさわとなびく。姉は寒さでガタガタ震えていた。私はしゃくりあげながら、なんども詫びる。

両親はこんな姉を心配しつつも、畑仕事に明け暮れていた。学校から帰る私を、どこかで当てにしていたのかもしれない。しかし、決して姉を放置していたのではない。当時では外国にでも行くような思いで、東京の病院に連れて行ったという。人さまに話せない悩みを農作業にぶつけるしかなかった。心労は計りしれない。

辺りが陰ってくると急に心細くなる。大通りに出て高校生の兄の帰りを待つ。向こうの深い山を下ってくる自転車を瞬きもせず追う。下り終えて右へ曲れば期待できるが……もう何台見送ったことか。家々に灯りはじめた明りが潤んで見えた。

姉にも、ときどき安定した日がある。ハーモニカを吹いてやると口元を緩ませ楽しそうな表情に、手をとりダンスめいたことをしてやればはしゃいでもくれた。

ある日のこと、

「こんどはひさこちゃん家で遊ぼ」

天然パーマの掛かったみっちゃんが口を尖らせる。

「そーよ、もうずーっとひさこちゃん家で遊んでないよね」

ふだんはおとなしいふみちゃんが声を大きくした。みんな同級生で家も近い。

「えっ、あ、あのうきょうは家に入れないの」

いつも同じ言い訳をしている私に、二人が納得するはずもない。

てんかんの発作は何の前触れもなく所かまわずに起きる。全身を激しく痙れんさせ、白目をむき出しにして口から泡を吹く。なんど出くわしても怖い光景だ。子ども心にも見られたくない、隠したいの一心だった。

私の胸中など知る由もなく、二人はずんずん先を行く。今、まさに大戸に手を掛けた。

「待てー」

あわてて止める。部屋に急ぐ。茶の間に居た姉を北側の薄暗い納戸に閉じこめた。

「いーい、ここから出ちゃだめよ、絶対ね」

噛みくだいて言い聞かせると、こくっとうなずいてくれた。どれほどの理解力があるのか定かではなかったが、うなずいてくれたことが、只々うれしかった。よりによって、家の中でかくれんぼとなる。鬼はふみちゃんだ。

「もういいかい」

「まあだだよ」

私の耳は絶えず納戸に飛んでいて、わずかな音にもドキリとしていた。顔はつくり笑いでいつも引きつっていたものだ。納戸に近付けさせないために、みっちゃんを屋根裏部屋に誘う。自分の家とて、めったに覗かない。

階段を上りきると一気に空気が変わるのを感じる。むっとしたカビ臭さと、不気味な冷気とが入り交る。低い雨戸の節穴からは一筋光が伸びていて、まさに別世界だ。まず目に飛びこんできたのは、黒く大きな長方形の木箱である。蓋の部分が半円になっているのがおもしろい。確か、長持ちと呼んでいて、明治生まれの母の嫁入り道具とも聞いている。

見たさ半分、怖さ半分。二人でせーので蓋を押し上げた。ギッ、ギシッと錆ついた音と共にようやく開いた。と、階下から話し声が聞こえてくる。急いで下りていくと、ふみちゃんが姉を相手に遊んでいるではないか。しかも、極、自然体にだ。姉のほころんだ顔はいつ以来だろうか。

ほどなくして逝ってしまったが、家の恥、きょうだいの恥として家族ぐるみで隠していたことにつまされる。今も実家の長持ちを見るにつけ、あの日、あの時の姉の笑顔が蘇ってくるのだ。

（南区）

［入　選］

丸首とシャツ

福代善彦

「お父さんも時々、律儀に丸首の下にシャツを着るよね」
テレビを見ていた妻が、晩酌していた私に突然言った。
何を言っているのか、私にはさっぱり分からなかった。
「どういうこと？　律儀に？」
「うちの職場にもいるけど、窮屈で肩が凝らないの？」
「肩が凝るって、どういうこと？」
「カーディガンの方が楽じゃない？」
ここまで会話して、少し意味が分かった。
丸首よりカーディガンの方が、着ていて楽じゃないのかということだった。
たしかに私は丸首のアウター物を着るときは、必ず下にシャツを着ることにしている。それがどうした。
「だけど、俺は使い分けているよ」
「丸首の下に着るシャツはカジュアルで、ネクタイを締める時のようなシャツは着ないよ」
「俺にも、ちゃんと、こだわりがあるのだけど」
しかし私のこだわりの説明は、妻にはどうでもいい様子であった。
私には他にも、以前からちょっとしたこだわりがあった。
シャツを着た時に、胸元から見える「白Tシャツ」である。
学生時代から、胸元から丸首の白いTシャツが見えるように、ずっとしてきた。
しかし何年か前、娘に「お父さん、シャツが見えてるよ」と指摘された。
それ以来、肌着はV首に変えた。
少しずつ、こだわりを無くそうと思ってはいるが、今まで通りでいる方が楽である。
よく妻に「いい加減に捨てたら？　お父さんの洋服が一番多いよ」と言われる。
こだわっていたころの服が、今でも捨てられずにある。其のうち、着る時があるかもしれないと、着もしない昔のスーツやスラックスがタンスの肥やしになっている。
これでも思い切って、毎年少しずつ処分をしてきた。
どうしても捨てられない服がある。
四十年前に購入したショーケンがドラマで着ていた物と同じ「ビギのトレンチコート」は自慢の一着である。もう絶対に着ることはないだろう。タンスに掛かっているだけで満足である。
そうか、丸首の下にシャツを着ると窮屈そうに見えるのか。だったら丸首を着るときは、下にシャツを着ないことにしよう。
そして丸首のアウター物は、もう買わないことにしよう。

（中区）

［入選］

ラプソディ

サルルン　カムイ

郵便受けを開けると
鮮やかな　ピンクの色の封筒が
目に飛び込んできた。
開くと　雪国の香りがした。
「……わたし
結婚することにしたの。
女は結婚すると、女じゃなくなるの。
妻になるの、母になるの」
パソコンのゴチック文字が　冷たかった。

封筒を破り棄てようとした所
ぼたん雪の蛇の目傘をかざす
モノクロの絵はがきに　気がついた。
女の白袋。
見慣れた丸文字で、
「すごく困ったことがあったら
連絡くれていいわ、但し一回だけよ…」
と

ピンクの封筒の切手は「秋茜」。
大きな蜻蛉の後ろに　小さな蜻蛉
二匹が弧を描いて　空に向って舞っている。

……覚えておきます　小さなことまで
　あなたとすごした　大事な夜は……

ふるさとラプソディ。

（南区）

［入選］

ふるさと

石山　武

小雨ふる九月十八日、故郷の掛川市へ妻と「お彼岸」の墓参りに行った。
市街地から北へ車で十数分ほど走った、山間の集落が私の育った故郷、上西郷（かみさいごうながんま）長間だ。
故郷を離れて六十二年になるが、家の軒数も子供の頃とほとんど変わらない、だが空家が何軒かあり、実家の廻りの田、畑には草が生い茂って昔日の面影は無い。
だが山に囲まれ静かで空気も良いためか、老人施設が二棟も建っている。
その一棟は、実家のすぐ前に建っている。
施設を初めて見たときの私と妻は、
「これならゴロンと寝転んで行っても、そのまんま施設に入れるなー」

「そうだよね、お父さんの言うとおりだよ」
と、二人で大笑いをした。
こんな会話が聴こえたのか？　後日亡き義姉が、
「タケちゃ、もし老人ホームに入るだったら家のすぐ前にあるでね！」
この気遣いにはガクーン言葉も無かった。
其の後、私たちは彼岸、お盆、年末と一年に四回兄夫婦と、同級生のS君の墓参りに行っている。
実家には三代目となる、兄夫婦の息子たちが住んでいるが、寄ったことは無い。
此の日は墓参りに行く途中で「十月五日、六日は秋祭」の看板を見て「なあ！　久しぶりに長間のお宮へ行ってみるかあ」
「そうだよね！　行ってみるかね」
墓参りを済ますと、実家から更に山深い場所にある「長間神社」へ久しぶりに行った。
朱塗の橋から川面に目をやると、水量も少なく昔の清流にはほど遠い。
子供の頃には長かった、鳥居までの距離も此の日は近くに感じた。
何本かの杉の大木に、私の思いはいつしか子供の頃、母と一緒の秋祭りへとタイムスリップしていた。
敗戦後の食糧難で空腹の毎日、食事も「サツマ芋」「カボチヤ」が主役、炊き上がった御飯も「サツマ芋」が幅を利せて米は真っ黒。
収穫期より早く穫ったカボチヤは、水分ばかりでカボチヤの味がしない。
日々「腹と背中がピッタンコ」の空腹で、何でも喰べたが、どうしても喰べられない代物があった。
それは、サツマ芋の苗床で蔓を採った後の種芋だ。「捨てるのは勿体ない」と、母が蒸してくれた種芋は、筋ばかりでとても喰べられる代物では無かった。
その頃は、神社へ行く橋に欄干は無く、陽が落ちてから渡るのがとっても恐かった。
だが祭の夜は、露店の灯りが見えると、駈足で渡っていた。薄暗い灯りは電気では無くカーバイトが燃料でその臭いが何とも言えない。
灯の下には、檜の葉に載せた煮スルメが並べてあった。
おう、カーバイトとは別次元のえも言えぬ良い香りだ。空き腹を抱えた私はその場から離れることが出来ない。
「何をしてるだー芝居を観に来ただでもう行くよ！」母に手を引っ張られた私は煮スルメがどうにも怨めしくなっていた。
母に引かれて行ったのは、青年団が荒ムシロで作った芝居小屋もどき、見物席も土間にムシロが敷かれていた。
舞台では、旅廻りの役者による「チヤンバラ」が始まって客席も大盛上りだった。
翌日も、母と芝居を観にいくと前夜、斬られて亡くなったはずの侍が舞台に出て来た。
「母ちゃ、何んでこんだ！　夕辺あの侍は切られて死んだのにどうして出てるだあ？」
私の素朴な質問に「うーん……」と返

事に困っている母に、追い討ちをかけるように。
「だって母ちやも観てたズラ！　あの人は斬られて死んだじやんね！」
この話を母は晩年、兄姉や妻に話していた。
「死んだ役者がどうして出てるだあって、タケに言われてわしやあ…何んて言っていいか、本当に困ったよ！」と、よくネタとなって妻たちに大笑いされた。
母のことを思い出しながらふり向くと、妻のつまらなさそうな顔に、
「雨も降るで車の中で待っていてくれるか」
やっと現実へ戻ってからは、小雨の中を一人で十四段ほどの石段を上って社殿を見るが昔日の面影は無い。
屋根から落ちる雨音が芯から侘しさを誘い古びた社殿に向かって
いらかは青く！　こけむして
古城よひとり！　何しのぶ……

三橋美智也の「古城」を唄っていた。
昭和十六年、神奈川県川崎市で生れた私は、四歳のときに空襲で全てを失った両親、兄姉（三人）と共に父の故郷、掛川へ都落ちした。
「掛川の駅からね！　長間（ながんま）まで儂（ワシ）が『タケ』を負ぶって歩いて来ただに！　覚えている？」
私より七歳年上で、八十五歳になる長姉に良く言われたが、
「俺はその頃は、四歳だもんでそんなことは全然覚えてないよ！」
けれども長間神社（ながんま）で、母と芝居を観たときの迷セリフと、露店のカーバイトの灯り、煮スルメに空腹を霍乱（かくらん）させられたことは、八十路を目前にした現在も「よーく」覚えている。
四人兄姉であったが、兄と私より五歳年長で次女の姉は二十四歳の若さで逝ってしまう。
私を負ぶってくれた長姉は、浜松市内に住んでいるが加齢により体調は良くない。
そんな姉を気遣って、妻が作ってくれた手料理を、一ヵ月に一度は必ず二人で届ける。
妻の気遣いに、姉はとっても喜んでくれる姿に、私はいつも胸が熱くなって心より「ありがとう」と感謝している。
掛川で暮らしたのは、十六歳までの十二年と短い期間だったが、思い出は尽きない。
故郷を離れてから六十二年、我が人生をふり返ってみれば本当に「山あり、谷あり」の破乱の人生であったが、故郷の「上西郷長間（ながんま）」のことを忘れたことは無い。
「ふるさとの山に向かって言うことなし、ふるさとの山はありがたきかな」
私の故郷に対しての思いは石川啄木の歌と同じだ。

（東区）

［入　選］

巡り巡って

かわいあすか

気が付いたのは、三日も前の夕方。近所の横断歩道用信号機の下に、割れたビンが散乱している。

「すぐに片付けなければ危ないよ」

そう思った私だけれど、家に帰る間にあっさり忘れてしまった。

次の日も横断歩道を通ると、まだそのまま茶色の割れビンはある。

「大勢が気付いていると思うのに、片付けをする人はいないのね」

他人事のように呟き、また忘れた。

そこは毎日利用する信号だが、昨日もそのままの状態だった。

「あらま！　信号機前のお店の人も、気が付かないのかな。だめね、私が片付けましょう」

それでも帰ったら、完璧に忘れてしまう。

我が家は、その信号機からほんの三十メートルぐらいの距離なのに、私の記憶は維持できない。玄関を入れば、外での出来事は、頭から脱落してしまう。ああ情けない……。

今朝は五時前に目が覚めた。ふと、割れビンについて思いを巡らす。

「あのビンはまだそのままだろうか。自転車で通ることもあるけれど、パンクするかもしれない。それは困る。今日は孫が遊びに来る日だわ。あそこで転んだりしてケガでもしたら、どうしよう……」

布団の中で考えてもらちが明かないので、起きて見に行くことにする。

案の定、放置されたままだ。人が通らないうちに片づけようと思う。一旦帰り、今度はほうきとちりとりを持って行く。良いことをしに行くのだけれど、カッコつけに見えないかな？　照れくさいような気持ち。

出勤やウォーキングの人たちが、ちらほらと通る。誰も私の姿など気にかけてはいまい。それでも、あいさつはした方が良いだろうな。近所のマンションから出てきたと思われる高校生が近づいて来る。

「おはようございます」

声をかけると、彼女からも同じ挨拶が返ってきた。

「行ってらっしゃい」

そう付け加えたら、にっこりして足取り軽く過ぎ去った。

さあ、さっさと片付けてしまおう。ビン底の丸いかけらをそっとつまんで、ちりとりに置く。鋭く割れたガラスはほうきで集める。ちゃんときれいにしようと、信号機の下に生えている草をかき分けてみる。するともう一本、透明のビンが割れずにあった。外国のビールかな。手に取って見ると、ＭＥＸＣＯと読めた。もちろんこれも拾った。

帰る途中の駐車場前に、今度は黒いガラスが散乱している。昨日まではなかったと思う。いや、気が付かなかっただけかもしれない。手に取ってみると透けているが、スモークの黒だから自動車のサ

イドガラスだろう。随分の量があるので、一旦ビール瓶とカケラを家に置いてくる。

駐車場から出るときにでも街路樹に当たったのだろうか、木っ端微塵だ。車のガラスは安全のために、丸く砕けるようになっていると聞いたことがある。本当にビーズのようにコロコロしていた。

「運転手本人は気が付いているはずだから、なんとかすべきよ」

ブツブツ言いながらきれいに片付けた。ちりとりにいっぱいになり、結構重い。家でゴミ袋に入れて重さを計ってみると、二・二キロあった。

朝から善い行いをした満足感を覚える。

ふと、親切にされて助かったことを思い出す。一週間前の昼頃、一本の電話がかかってきた。

「H銀行のMと申しますが、カードを落としていませんか」

そうだ、三日前にカードでお金を出した。その夜カードをしまおうとして、無いのに気づくも、家の中にある筈だと思っていた。

「見当たらなくて困っています」

「警察に届けがあったそうです。〇〇と番号を言えばわかります。取りに行って下さい」

すぐに警察へ受け取りに行く。

「お礼の必要はありません、とのことでしたから、そのままお持ちください」

遺失物係はそう言った。念のため落ちていた場所を聞くと、Eデパートの地下だったという。確かにお金を出してから、そこで買い物をした覚えはある。でも、カードを落としたとは全く気が付かなかった。親切な人に拾われて本当に良かったと思う。

もしかしたら、因果応報？　私が良いことをする番だったのだと納得する。拾ってくれた方のことは聞かなかったけれども、帰りにH銀行に寄って、お礼を伝えた。

親切の応酬を、もう一つ思い出す——。

それは数年前のやはり早朝だった。いつもより早くゴミ出しに行くと、夫の財布が立っていた。私に「拾ってね」と言わんばかりだ。

起きてきた夫に渡したら、

「全く同じ財布だけど、僕のじゃないよ」

一緒に中を検(あらた)める。一万円札が二十枚も入っている。夫の財布なら、そんなに入っているはずもない。それに、各種カードや札幌行き飛行機のチケットなどがパンパンに詰まっている。財布が立つわけだ。

電話番号を見つけてかけてみたが、相手はなかなか出ない。警察に届ければ、飛行機に乗り遅れるかもしれない。何度もかけなおす。五回目にやっと繋がった。相手は、ぐっすり寝込んでいたとのこと。財布を落としたことさえ気づかなかったそうだ。のんきな人だわ、と親しみを覚えたのだった。

拾った場所で待ち合わせ、無事に持ち主に返す。その人は、札幌からお母様の一周忌に帰ってきたのだと言う。お礼にと立派な利尻昆布と一万円を差し出す

彼。そんなにしてもらわなくてもとお断りしたのだが、ちゃんとお礼をしなければ、母親に叱られるからと押し戻される。結局有難く頂戴した。財布のとりもつご縁もあったのかな。まさに早起きは三文の得をした、すがすがしい朝だった。

因果応報という言葉は悪い状況で使われることが多いようだが、実は人生を幸せに生きる秘訣を教えている言葉だそうだ。日頃の行いが、いつかは自分に返ってくるというわけだ。今のところ、助けてもらった方が多い気がしているけれども……。

私のようなそそっかしい者は特に、

「一日一善」というよりも
「気が付いた時に　すぐ一善！」
を心がけよう。
巡り巡ってくるのだもの。

（中区）

［入　選］

分からないことが面白いことかも

名倉　利男

美術鑑賞を趣味にしているが、自分には美術は分かったようで分からないものだとしか言えない。美術館で絵画作品を目の前にして、気に入った作品について、あれこれと考えを巡らせるのだが、なかなか答えが見つからない。暗中模索の状態が続いている。

美術鑑賞を共通の趣味とする友人は、独学で美術史を勉強しているから、作家や作品の名前を数多く覚え、作品の時代背景や作家の特色について、豊富な知識を持っている。それに比べて、私は美術館へ行っても、気に入った絵があれば、どうしてその絵を気に入ったかを考えているだけだ。だから、豊富な知識から絵画作品の説明をする友人の話を聞いて、なるほどそうなのかと感心するばかりだ。

美術館へ行くと、入口で美術展の趣旨を解説している。多くの観覧者はその解説を丹念に読んでから展示室に入る。展示室では、キャプションに書かれた手短な解説を読んで、理解すべきポイントを押さえながら、絵画を鑑賞しているようだ。私は解説やキャプションは一切読まずに絵画だけを見ている。だから、見た後に「良かった」「いいな」「すばらしい」とか感覚的な言葉しか出てこない。

自分が美術館で解説やキャプションを読まなくなったのには訳がある。プロの写真家のセミナーを受講したときに、受講者がセミナー時に撮影した写真を一堂に展示して、プロが作品を見ながら講評をした。そのプロは、受講者の作品の良い点を見つけ出し、それを言葉にして説明した。それを見て、良い点を見つけ出し、それを言葉にして表現できることがプロになれる資質の一つではないかと思った。その時から、美術館で気に入った作品があれば、セミナーの講師の真似を

して、その作品の良さを自分の言葉で表現しようと努力している。しかし、それはなかなか難しくて出来ない。キャプションを参考にして、この絵はここが良かったと言うのは簡単だが、何も見ずに自分の言葉で表現しようとするのは難しい。思うように、気に入った美術作品の良い点を説明出来るようにならないが、他人の評価に納得するのではなく、自分の評価を大事にしたいと考えている。

美術館を訪れた時に、美術を専攻していると思われる大学生らしい集団がいて、一人の学生が集団の前でその作品の解説をしていた。学生は「この絵の、この表現方法が、この作家の特色で、私はこの絵のここが気に入ったので推奨する作品として選びました。」というように、自分自身の評価を自分の言葉で表現していた。その時、この大学生のように自由に自分の考えを述べさせた方が、美術作品の鑑賞能力を伸ばせると感じた。さらに、自分がやりたいと考えていたことを、学生たちが目の前で行っているのを見て、自分もこのように出来るようになりたいと思った。

浜松市美術館では、近年、芸能人の作品展を企画している。芸能人の企画展は他の企画展に比べて圧倒的に入館者数が多い。そして子供から大人まで年齢層も幅広い。どういうわけか、芸能人の展示は一般的な展示と比べて、作品に添えられているキャプションが少ないようだ。それでも、観覧者は丹念に作品を鑑賞していた。だから、鑑賞者自身が自分で考えながら鑑賞しているように見えた。

昨年、学芸員の資格を取得するために、大学で博物館学を学んだ。博物館実習では、自分で絵画の展覧会を企画した。その中でキャプションや解説文作りを経験した。学芸員の立場では、自分が企画した展覧会では、キャプションや解説文が観覧者との接点となるから、自分の意図が伝わるように工夫した。その時に、一枚の絵のキャプションを書くのにどれだけ時間が掛かったことだろうか。百五十字程度の文章だから文章を書くのには数分も掛からない。ところが、短い文章を書く前に、作家の経歴や時代背景、その作家の絵画の特色など様々なことを調べた。その時は、百五十文字をアウトプットするために、何千、何万文字という資料を読んでインプットした。その時に、キャプションを読むよりも、自分で書いた方が格段にインプット量が多くなると感じた。

博物館実習が終わった後に、美術史を独学で学んでいる友人に「百五十字ぐらいの解説文を書くだけでも、数多くの資料を調べる。目的を持って調べると、内容を理解しようとするから覚えられる。美術史の本を読んでいるだけではなく。自分で気に入った絵画の解説文を書くと勉強になるから、やってみな。」という話をした。独学で学んでいると、発表や試験などのアウトプットの機会がないから、美術作品を鑑賞したら、鑑賞メモなどを書いてみたらどうかと、友人に勧めた。本来なら、友人に勧める前に自分自身が実行すべきことだが、思ったよりハードルが高い。

退職後に通信制大学に入学して心理学の勉強をした。心理学の知識を得てから

は、幼児から高校生ぐらいまでの子供が描く絵に興味を持つようになった。特に、高校生が描く絵は特徴的で、思春期特有の自分探しが絵に表現されている。自分の居場所を感じられない不安な気持ちを絵から感じ取ることができる。心理学を学ぶ前には、全然、気付かなかったことが、心理学の知識を得ることで気付くようになった。ということは、心理学の知識が美術鑑賞の世界を広げたと言えそうだ。

心理学を学んでいた時、フロイト・ユング学派を理解するにはギリシャ神話やキリスト教についての知識が必要だという教授の説明を受けて、ギリシャ神話やキリスト教について学んでみた。すると、ギリシャ神話やキリスト教の伝説を主題として描かれた西洋画を見ると、絵画の持つメッセージに気付きやすくなってきた。目的は心理学の勉強のためだったが、絵画鑑賞に必要な周辺知識の一つとなった。心理学の知識が美術鑑賞に役立つとは思いもしなかったが、新しい知識が趣味の世界を深めてくれた。

美術鑑賞を始めてから二十有余年。美術鑑賞に関連する知識は増えたが、相変わらず分かったような分からない状態が続いている。しかし、美術鑑賞をしていると、何らかの気付きがある。そして、前よりも確実に気付きの数が増えている。教養を高めるための学びが、美術鑑賞をするときの気付きに結びついているようだ。この先、美術は分かったようで分からないものというのは変わりそうもないが、教養を高めようとする努力が、人生の楽しみの発展につながることを期待している。

（中区）

［入　選］

ぼん坊

川島理志

昭和十九年天竜川中流域にある寒村に生をうけた。神官である父を助けるかたわら、母は長兄を相手に養豚と五反ほどの畑を耕作していた。親子ほど歳の離れた姉を頭に、九人兄弟の八番目が私である。

四方を小高い山に囲まれた平地を小さな川が縦断し、わが里は七十戸ばかりが点在していた。春になれば山すそにワラビを摘み、夏は背戸に流れる小川で水浴びをして、樹木が色づきはじめた晩秋には、山に分け入りクリ拾い、冬は山田で下駄スケートだ。

小学校に入学をしても山河を相手に遊びまわった。二年生の通信簿の担任の評価は、

「授業態度に落ち着きが無い。駆けっこ

だけは右に出るものなし」
自然児そのままで未だに記憶している。
部落の男子小学生は十五人で、登校だけは集団である。ガキ大将であるTがリーダーで、あだ名を「ぼん坊」と呼ばれていた。彼の母親が高齢出産で、一人っ子の誕生を喜び「坊、坊」と呼んでいたようだ。それを耳にした周の人達が捩り、彼の通り名となった。
三年生進級まもなく、恒例で年に一度登校グループの集会が教室で開かれた。日ごろ下級生と悪ふざけをしていたのを、六年生の彼が私を咎めて、
「一、二年生の頭を小突くのはやめろ」
「やだね」
三男坊で気が強く、人に命令されるのが嫌いで即座に反抗した。彼も両親の溺愛を受けわがままで遠慮は無い。言うが早いか私の体を組み伏せて、仲間の前でズボンを脱がされてしまった。一瞬何が起こったか頭の整理がつかず、恥ずかしさと口惜しさで立ち上がることができない。ぼん坊は皆を引き連れて教室からでていき、一人だけ取り残された。
翌朝から四、五日いつもの集合場所である橋のたもとに行くが、そのたびに、
「おんしゃなんか仲間に入れない。ここに来るな」
怒鳴り声とともに額を指先で突く。毎朝のくり返しで怖さがつのり足がすくんでしまう。周りの上級生もガキ大将の彼には反論ができず、顔をそむけるばかりだった。
それからは重い足を引きずるように、一人で家を出て学校に通うようになる。時間を少し遅らせTの顔を見ないようにした。橋の近くまで進んで集団が見えると、堤防脇の藪に隠れて彼らの遠ざかるのを待ち、間隔をつめないように通学するようになった。
毎日のことでますます辛さがつのり、精神状態が極限に近づく。学校へはいて行くズボンに、Tの分身が付着しているような錯覚に陥ってしまった。ズボンを丸棒で強くはたき続けないと、着用出来なくなるところまで追い込まれた。ある朝近くに住んでいる伯母が訪ねてきて、
「朝からなにをやってるだぁ」
「ホコリを払っていると言うだに、なにをしているのかねぇ……」
顔を曇らせ代わりに答えた母と伯母はしばらく小声で話をかわしていた。
この行為は一カ月ぐらいで収まったが、泣き言を父や母、兄弟にも学校の先生さえ漏らしたことはない。母の諭しとして、
「男は外で涙を見せたらいかん」
が口癖で小さな胸に受け止めていたのだった。直ぐ上の姉が当時中学一年で、後年七十四歳で早逝した母の葬儀のときに、
「心配した母さんから『理志の様子を注意しておくれ』って言われたのよ、あのころさ」
単独での登校時も、川面を見ると銀鱗を光らせたアユが川をくだる、親子のツバメが水際を盛んに飛翔する。山田のイネを乾した後の稲架にカラスが四羽止まっている「杉の木に巣をかけていた親子かなぁ」と想像しながら歩を進め、癒しとした。

当時、集団下校はなく低学年の私たちは、六年生より早く帰るので顔を合わせることはなかった。辛抱をしていれば時が解決をしてくれる、二、三カ月たつうちに辛さも遠のいていく。冬が過ぎ桜の咲くころに彼は小学校を卒業しすべてが解決した。

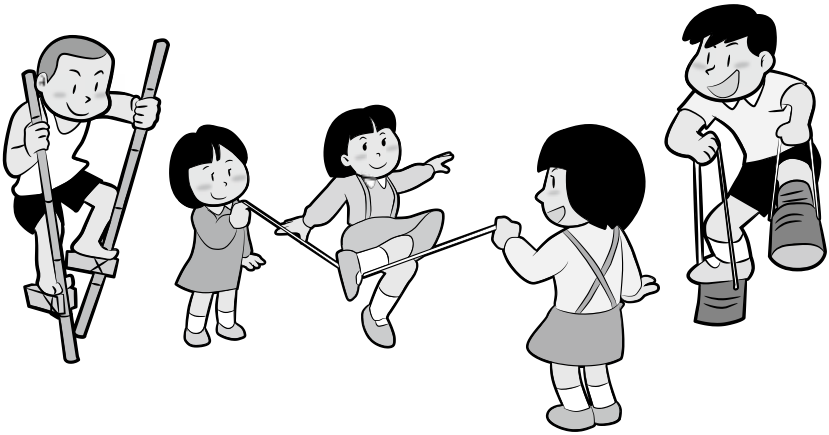
時は流れ社会人になってから、同じ部落の彼と同級生のSさんに行き合った。小学生のころの話題になり、

「彼が君をいじめたときに助けてやれなくてごめんよ。ぼん坊が君に悪いことをしたのであやまりたいと言ってただよ」

彼は中学を卒業し製造工場に就職したと聞いた。ときどきいじめたことが夢に現れ罪悪感に苦しんだようだ。

私も民間企業に四十五年籍を置き、後には代表として経営を担った。その間幾多の難問に遭遇し、ストレスとなって苦しんだ。そのたびにふるさとの山河が目に浮かび、若き日の苦悩が糧となった。

（浜北区）



随筆選評

たかはたけいこ

今春、七十一歳になる私にも、戦後の記憶は断片的に残っている。農村地だったので、飢えることはなかったけれど、おかずはその時期に採れる野菜ばかりが続いた。おやつという概念はなく、庭木に生るイチジクや柿を食べた。時に瓶から梅干を取り出して、裏の竹林に向かった。地面に落ちたタケノコの皮で梅干を挟んで二つ折りにして、折り山にくちびるをあてると、その隙間から梅汁が出てくるのをすすった。しょっぱいだけの梅干がおいしく感じられた。

小学校一年の時は給食がなかったので、毎日、弁当を持って行った。麦が入った黒っぽい弁当箱の中身を同級生に見られないように、包んでいった新聞紙を立てて、大急ぎで食べた。

一方でクラスのなかの数人はお弁当を持って来られなかった。昼休みが始まると、すっーと教室からいなくなり、校庭のどこかに消えた。やがて、弁当を食べ終わった級友たちが校庭に出ると、なにごともなかったように一緒に遊び始めた。

私はその様子を見るたびに、なんとも言えない気持ちになったが、やはり麦入りの弁当は恥ずかしかった。

だから二年生になって、学校給食が始まったとき、二重の喜びがあった。私は麦ごはんの弁当を隠しながら、食べなくてもいいし、弁当を持って来られない学友たちも同じものを食べることができるからだ。

応募作品を一読して私は考えた。時代は確実に流れている。苦しいことも楽しいことも飲み込んで、やがて風化させていく。

けれど、私たちは文字を書くことができる。文章を組み立てることができる。文章に残すことによって、確かな事実が刻まれる。

「事実はひとつ、真実はたくさん」

私はこの言葉が好きだ。ひとつの事実が当事者か他者で感じ方や、受け止め方は異なる。何を感じたかを書き残すことで、その瞬間の筆者の思いは真実に変わる。社会や時代がどのように変わろうとも、筆者にとっての真実が残る。だからこそ、私たちは文字を刻んでいるのだ。

書き続ける手を止めないで欲しい。地球上の生物のなかで文字を持っているは人類だけで、だからこそ人類は生き残ってきたのだ。

市民文芸賞

おなかがすいて　すいて

母と幼かった筆者との約束が、語られる時代になったこと。家族や世間の目に神経を遣い、モノそのものがなかった時代が確かに、数十年前の日本にあった。

読了して、私は改めて「平和の尊さ」という言葉の意味を反芻した。

市民文芸賞

あの日

生まれつきの病気を抱えた姉をもった筆者とその家族が描かれた作品。病気の姉を家族の一員として認めつつも、同級生には隠したいと思う筆者の気持ちが素直に描かれている。

社会のバリアフリー化が進み、障害もまた個性なのだと叫ばれている現代、私たちがしなければならないことは、かたちではなく、筆者の遊びに来た友人が、自然体で障害を持った姉と向かい合ったことではないかと、強く感じた。

入選

丸首とシャツ

筆者は何の疑問も持たずに肌シャツを身に着けていることを、何気なく奥様に指摘される。

それがどうしたと筆者は妻に問い、改めて自分の習慣に気づく。

今風ではないという妻や娘の言葉から、筆者は今という時代をとらえる。日常にこそ時代が流れていると感じた作品。

ラブソディ

郵便受け、ピンクの封筒…

封筒の差出人は元彼女だろうか。私はこの作品に時代が動いても、変わらないものを見出して、なんだか気持ちが軽くなった。

ふるさと

六十二年間、住み続けている町から、幼少期から十二年間、住んだふるさとを訪ねる作者と妻。訪ねるたびにふるさとの記憶は、色鮮やかに蘇り、輪郭はより確かなものになっていく。ふるさとをこんな風に捉えられる筆者の感性がいい。

巡り巡って

気づくことは易しい。行動に移すことは難しい。

気づいたことを実行するまでの筆者の心の動きが、丁寧に描かれている。行動に移した後に、筆者と読者は考える。そうだね、社会はちょっとした気遣いで動いている。

分からないことが面白いことかも

芸術とは何か、表現するとことは何かという哲学に近いテーマを筆者は自分の言葉で軽快に描いていく。文学、音楽、

絵画、舞台、映画…それらは互いに補い合い、生きている私たちの日常を豊かにしてくれていると、改めて感じた作品になった。

ぽん坊

筆者の巧みな風景描写力が読み手をぐいぐい文章のなかに入れていく。当時の子供たちの日常が風景描写とあいまって、絵本を読んでいるような気持になった。

こんな風に子供時代を描けるのは、筆者そのものの今の心の豊かさの証でもある。

詩

［市民文芸賞］

まどろむ

竹原孝子

誰も記憶がない
母の胎から
生まれ出た　その日のことを

張り裂けんばかりの
産声のあと
静けさの中で　まどろむ

お口を　もぐもぐ
眼を開けようと　しばたき
ちいさな手のひらを　握ってみたり
おならもする

誰も自分のことは記憶にない
まっさらな時間（とき）

（中区）

［市民文芸賞］

佐鳴湖

山下　進

夕暮れ時の佐鳴湖
岸辺近くに水の中から
十本以上の棒が突き出ている

よく見ると多くの棒の頭に
鳩（はと）ぐらいの大きさの鳥が止まっている

名前も知らなくて申し訳ないが
鳥たちよ　お前たちは
この世界から何か大切なものが失われていくように思うのだ
がそれを知っているか

鳥たちは知っている　知っているのだとつぶやくように顔を
下に向けたまま身動きもしない　何か考えこんでいるようだ
夕闇が増すにつれ鳥も棒も湖も
影絵のような景色に変わっていく

又明日の朝がやってくる
太陽が湖に光を放ち
晩秋の湖面は青色の宝石のように
きらきら美しく輝く

近い将来到来する大患難　ハルマゲドンを
忘れさせるかのように

（中区）

［市民文芸賞］

そうやってみんな

尾内以太

公園のすみで
鳩を一羽肩にのせている老人
その人はG氏とよばれている
口髭のG氏は
「ブランコをこぎなさい
　そうすれば祝福されますから」
とぼくらに言う
祝福が何かを知らなかったのに
ぼくらはブランコをこいだ
みんなはすぐにやめた
ぼくはこぎ続けた
ひとりこぎ続けた
声が変わり
すね毛がはえて
口髭がはえても
ブランコをこぎ続けた
犬が吠えても
けーさつに事情聴取されても
こぎ続けた
地元のテレビ局が取材にきた
「なぜブランコをこぐのですか」
「G氏がそうするよう言っていたので」
アナウンサーは首をかしげた
ぼくはテレビに放送されなかった
町の名物にも
珍風景にもならなかった
顔はシワだらけに
頭は白髪だらけになった
腰も膝も痛むようになった
肩にはいつのまにか
一羽の鳩がとまっている
ぼくは
ブランコをこぎ続けた
いまなら祝福が何か

わかりそうな気がした
けっきょく
ブランコから落ち
頭を打って
ぼくは死んだ
　らしい
一緒にブランコをこぎはじめ
すぐにやめた老人が
ぼくへの弔辞を読みあげる
「G氏はブランコをこぎ続けました」

（南区）

［市民文芸賞］

雪の朝

深田千代子

雪が降っている
私を目覚めさした静寂
息をのむような一瞬を
夢の中で過ごしたような
無い音を聞いたような
舞い始めたばかり　なのに
簾状になってゆく牡丹雪

家の周りの生垣に
吸いつくよう沈む
緑の葉は重たげに俯き
柔らかに　雪は覆い被さる
私の渇く胸の内まで染みてきた
つまらないこと　吹っ切れぬこと
白紙に戻してくれるのか
雪は重たいというが
私の気持ちは軽くなった

私の蟠り
搦め取ってくれた
今朝の雪
晴れ渡った青空見上げ
凜として立っていたい

（天竜区）

［入選］

髪型

根本文子

久々に実家に帰って来た娘
年とると皆髪短かくて
同じ髪型してるよね
どうしてなのかねえ
それは楽だから
それに白髪染めんのも楽だし
そうなんだ
娘は感心していた

私は長い事セミロングだ
でもこの頃面倒臭くなってきた
そろそろ切ろうか迷ってるのと言うと
何にも
今切らなくたって　いつでも切れるよ
そうだね
娘の心に入った。

それから二ヵ月後
私は旅に出た
二十人程の老若男女
四日目
気の合う友も出来た
パスポート見せて
気軽に見せた
途端
これ　貴女　何年前
二年前だよ
嘘　嘘でしょう
これはどう見ても
詐欺　詐欺だよ
女の人って
髪型で変わるって言うけど
非道い　非道すぎる
別に怒れる事ではなかった
ただパーマ掛けてくればよかったと思った

帰国して二日目
パーマを掛けてきた
見て見て私でしょう
パスポートの私が笑っていた。

（東区）

［入　選］

透明人間になった日

竹内としみ

たった七年……それしか生きていない女の子
どこか老成しているように見えた

ふと気づく
黒板の前で話す先生の声が消え、周りの友達の気配も消えている
どういうわけだろう
朧な空気に優しく包まれる心地よさ
微かに揺れるカーテンが目の端に映る
窓の外をぼんやり見ると
心の糸がほぐれ、どこかに放たれていく気分
いつのまにか体が透き通って
女の子は小さな透明人間になっていた
いいの…ここを飛び出していっても

賑やかな歓声が一斉に消された時間
カチカチと時を刻む教室の時計と
黒板の上でその身を削られるチョーク
静寂の中に溶け込む音ふたつ
窓の外の運動場は初夏の陽射しに身をさらし、一時の休息にまどろんで動きを止めている

チャイムが鳴ると
我先に外へと飛び出していく級友たちの姿
その波の異様な圧に立ちすくむ
心の糸は体をがんじがらめにして
一歩も動けずにいる小さな姿
それがいつものこと

もっと自由に心を解き放ちたい
もっと生き生きと動き回りたい
そうよ、透明人間なら
自由に、生き生きと、笑って駆け回れる
ちっぽけな人間たちのあいだをするする通り抜けて

空にだって舞い上がれる
高揚した気分は硬い表情を崩し
見たこともない笑顔が女の子を輝かせる

恍惚の渦に身を任せていると
突如天から降ってくるように音が届く
これはもしや終業のチャイム…
さあ、ゆっくりこちらの世界へ戻っておいで
そんな優しい眼差しを先生が向けていた
私が見えるの…透明人間なのに

つかの間の夢の時間は、彼女の心をバルーンの様に大きく広げ
やがて軽やかに外に駆けていく女の子
その後ろ姿はみるみる小さくなっていった

（中区）

［入　選］

お　盆

大庭拓郎

浜辺の団地で所帯を持つと
七月のお盆になった。

葦で御座を編んで
牛をこしらえる。
可愛らしい茄子の牛だ。
小豆のつぶらな瞳に
丈夫な脚を付けて
南天の耳に草花の
イヤリングを添える。

ポーチュラカの庭で
迎え火を狼煙のように
もうもうと高く長く焚く。
ちょろちょろだと
かみさんが足を踏み外しそうだ。

自慢のご馳走をお供えする。
一日目は梅干しと混ぜご飯。
かみさんは梅干しと
混ぜご飯が大好きだった。
二日目はミカンとギョウザ。
かみさん伝授の手作りだ。
ひき肉と野菜をたっぷり入れて
ぱりっと狐色に焼く。
三日目はリンゴと手巻き寿司。
卵焼きと煮物を
大葉と海苔でほっこり包む。

送り火も狼煙になり、
一番星がきらきらと光る。
かみさんが無事に
銀河鉄道に乗った合図だ。
じゃまたな、達者で暮らせ。

またも見るどこかの駅で迷う夢
妻が旅する銀河鉄道

（南区）

［入　選］

傍らの君

石黒　實

一日（ひとひ）の仕事を終えて今日も僕の傍らに眠る君。二人が知り合ってもう五十年になるね。

君の故郷はオホーツクの海が見える佐呂間の片田舎。僕は遠州春野の山間の生まれ。

お互い故郷を後にして、都会に働きに来てはみたけれど、十五歳の僕等にはやっぱり生まれた地が恋しかった。工場の屋根に沈んで行く夕陽を、いつも壁にもたれてポツンと見送っていた二人。互いの寂しい心を知った時、いつとなく傍らの人となった君。

小さな家だけど二人で暮らし始めた時「私達のお城だね」と喜んでいたあの頃の君。あれからアチコチ直しはしたけれど、築五十年以上もするこの家はもうオンボロ屋になってしまったね。

雨戸の隙間に入り込む風がガタガタと戸を揺らす。スレート瓦の屋根は黒ずんで、トタン壁の色もすっかりあせてしまったけれど二人の歴史が刻まれた僕らの城だ

「北の大地に咲く花よ」そう言って君が庭の隅に植えたスズランの花が、今では家の廻り一杯に広がって、可憐な白い花が今年も咲いたね

部屋の壁には僕の描いた額入りの水彩画が掛けられている、北遠の茶畑風景だ。

その隣には遊園地で写した子供達の写真も飾ってある。あの頃の僕はいつも仕事で帰りが遅く、子育てにもあまり協力出来なかったけど、君は二人の子を一生懸命に育ててくれたね。

今はもう成人してこの町を離れて行ったけれど、この家には子供達の声が染み込んでいる。元気に跳び弾んだ日の声が、笑った声がそのまま残っている。

壁に書いた落書きもそのままだ。

電話機の上には幼稚園で娘が作った母の日のリボンが吊されている。

工作の時間に息子が作った葉書刺しは今でも立派に使われている。

外から見たら頼り無さそうな家だけど、

心配していたこの夏の台風も無事凌いで幸せを繋いでくれた。

一日一日（ひとひひとひ）の思い出が、一年一年の歩みが、五十年の二人の人生が、この家の中にしっかりと詰まっている。

君の静かな寝息が部屋の隅に伝わって、今年も秋の気配が深まってゆく。

（中区）

［入選］

再び

内山文久

「大洪水」の後　難を逃れた鳥達は　東へと向かった
ひとっこひとりいない　ごつごつと磐の多い　それでいて
草木の生い茂っている「孤島」を目指して

片目を閉じ片目を開き　鳥達は　穏やかな海原を飛び続けた
気になっていた「方舟」は消え失せ　水押の欠片も見えない
だが突然　鳥達は　羽撃きを緩め　降り立ち　鳴き続けた
―戻ったのだ　喜びも悲しみも必要ではなくなる場所に

古ぼけた蛇の目ミシンの台の上　時折　インクが流れ
若葉に誘われた　溝五位の忍び音に　老人は目覚め
鳴き声の位置を確かめようと　左手が窓を開けた

勇ましいフローラの揺らぎにあわせ　再び　右手に
若々しい羽毛が生え　文字達は囀り　水浴びをする
鳥達が　悠々と彷徨い　飛び　着地する為に
―絶え間ない終末と生成―ひとつの木霊が鳴り続ける

（中区）

詩選評

橋本由紀子

『まどろむ』は、生命誕生の豊かな不思議の瞬間を取り上げ「おなら」「もぐもぐ」の動が生命の始まりを印象づけ同時に死へのスタートをも祝福の中で暗示。「まっさらな瞬間」が、この詩に強さと鮮やかさを与えています。『佐鳴湖』は佐鳴湖畔をいつも散歩している方かもしれません。美しい湖面や飛来する野鳥、吹き寄せる風、全てを愛しながら環境破壊が、ヒタヒタ湖面にも寄せているのを日々実感し、もっと大きな災禍が、いつか人類を襲うかもしれないと思う現代人の不安感を、静かに描いた作品。『そうやってみんな』は、風刺を込めて演劇風に描かれ、どんなパズルをはめても、はまりこみそうな、例え話に持ち込みながら思想や信念というものの「危うさいい加減さ」を皮肉に描きながら、幼少期、思春期に洗礼を受け鮮烈に信じたものを全て捨て去る事が出来ない、人間の純粋さをも皮肉っているのかも『雪の朝』の「私を目覚めさせた静寂」「吸いつくよう沈む」の描写がしんしんと降る日本画的な雪の朝の美しさと癒されていく様子が伝わります。

『髪型』は読んだそのままの詩、「ガハハ」と笑ってしまうような「おばちゃん」会話が手際よくユーモアたっぷりに書いてあります。『透明人間になった私』は、七歳で逝った少女を再び死から解き放ち、もう一度、教室で級友達の中に戻してやりたいと願う教師の深い愛情を感じます。「どこか老成」した少女は、一生分の喜怒哀楽、愛のプレゼントを持って去って行ったと。『お盆』と『傍らの君』は二編共愛妻記ですが、以前は、妻が調えていたかもしれない盆の準備を進めながら妻を偲んでいく。「妻が旅する銀河鉄道」が決め手となりました。『傍らの君』は省略と表現にもう一工夫欲しいと。『再び』は、別表現のイメージを加え広げていけば「絶え間ない終末と生成」の硬質感を無くして、目的を達せられると思います。

今回選外作品全般を通して感じた事がありました。日頃使っている日常感覚、テレビニュースの解説が、そのまま作品として入っていることです。逃れられない死や別離は作品を書く大きな契機となります。大切な思い出や感情を思いっ切り綴った後「さて、これからどうするか」と考えるところから詩が始まります。その中からエキスのような言葉を選び探していくのです。野に撒かれた宝石のような言葉を見つける。一茎の花の存在、切り取り方、角度と視線、前後を変えてみる。工夫は色々ですけれど大切なのは「心」だと思います。

昨年九月グランシップで「ＮＨＫハート展」があり静岡在住中野愛理さんの詩が入賞しました。紹介しますとタイトルは「灯った」―宇宙のお腹の中で　許されている　存在したら　無には　ならない　いつか私の手を引く　私は雨のきょうだい　私は虹の片足　宇宙のおなかにあかりはある　私の心にあなたが灯った　精神障害を持つ若い女性の苦しみが伝わってくる素晴らしい詩と思いました。他の作品もテクニック無縁の「叫び」に心動かされました。オリジナルを書いて欲しいと思います。

短歌

［市民文芸賞］

嫋やかな文字の誘ひの紅葉狩夫失ひて幾年を経し　中区　倉見　藤子

文化の日点字暦を子らは打つ静寂の中の音のかそけき
終戦日被爆の友は教会に平和を祈る真摯なる背

待ちわびて昏鐘を聞く方広寺塔の上なる月煌煌と
防人の別れ悲しむ歌ふたつ碑にあり萬葉の森

花片がゴンドラのごと揺れてゐる明けの蓮田に雨蛙のせ　中区　石原新一郎

ブナ林を「森の母」とふ国ありて「自然は常に正しい」とゲーテ
「正しい」の語源は「手手」の形容詞化人と人とが手をとりあふ姿
太宰の著『人間失格』その生を「人間合格」と*ひさしは言へり　*井上ひさし
綱を張ると言はれし力士膝痛め幕下で取る泰然として

夫が植え子が手入れせし杉檜歳月繁りて山の木となる
持ち山の見回りを兼ね蕨摘むこれが最後と山見つめをり
生きている限り歩くぞこの足で杖を突きつつ今日も散歩に
栗飯を届けてくれた子の髪に白きもの見ゆ共に老いたり

東区　宮澤　秀子

どの橋も夫の技術の入りており家族で渡る新車に乗りて
東京よりわれを訪ねて友来たる春野の緑を誇りに思う
母植えし百年経たり芍薬は大きく咲いて令和を祝う
この一年赤子の泣き声聞かぬままわが町寂しき師走を迎ふ

天竜区　恩田　恭子

〔入選〕

西区　伊藤　友治

生命の起源たずねてハヤブサは三億キロの橋
かけ渡す
改元を祝う令和の大太鼓曇天を突き街並みを
ゆく
うぐいすの掛け合いの声絶え間なし小雨にけ
ぶる都田の山

中区　石黒　實

つぶやき

コロコロと何を笑うや娘らの白い歯おどる茶
店の窓に
携帯をやっとの事で覚えるも廻りは既にスマ
ホの時代
中指を失すも五十年働いたこの手に乾杯今宵
の酒は

北区　伊藤　順子

我思うよりも君想う故に我ありといえずにあ
る君の横
しゃがみこみアリの行列追う孫の髪濡らす汗
輝きと見る
あの雲に乗ってあなたに会いたいと言えばさ
みしさ伝わりますか

浜北区　峯村友香里

雲間から光が溢れまた隠れ世界がゆっくり点
滅している
二つ三つ秘密を抱えて秋になるオーロラのよ
うなストールを編む
夕暮れを歩く左手には芒右手は明日を指差し
ながら

西区　柴田千賀子

智恵子の言うほんとの空を感じたし遠く来て
立つ安達太良の山
新涼に畑整えて大根蒔く実りの季(とき)よりこの今
が好き
夕空をV(ブイ)に切り裂き飛びゆける海鵜の群れの
羽音激しき

中区　内藤久仁茂

一筋(ひとすじ)に海へと向かふ天竜川やまぬ流れの意志
あるごとし
空よりも深きあをさをたうたうと天竜川は海
へと運ぶ
吾が飲むは天竜川の伏流水身を潤せるふる里
の水

東区　大檜　一郎

次々と襲いくる病魔たち迎えうつ我こゝにあ
りいざ出陣
何年も前に死にし母最近やたらと夢で会う不
思議
手をつなぐ昔我が子今は我わが子から見る手
ぬくもりや如何

中区　宮本　恵司

たうたうと四半世紀が流れたりチエロをかか
へて自覚なきまま
二十五年よくも倦かずに続け来ぬ楽団あれば
殊に感謝す
この先は四肢の衰へに抗(あらが)はむひと日ひと日に
練習かさね

中区　木下　文子

廃校に桜吹雪の舞ふを見る鍼治療受ける夫を
待ちつつ
香り佳きうす紫の薔薇の花「たそがれ」咲き
ぬ嵐に負けず
濃き緑にベージュのチェック　カシミヤの布
を織りたり米寿の夫に

中区　和久田俊文

置き手紙妻曰く花の水遣り掃除はマメにほな
行ってくる
虫の音に背中押されてメール打つ胸の高鳴る
月影の夜
饒舌なる蝉と寡黙たる蟻狭間に我のありて一
夏過ぐ

中区　松浦ふみ子

朝焼けとそのうち消ゆる街路灯おなじ色して
夜が明けそむ
めづらしきことにはあらず百戸余の誰にも会
はぬ昼のマンション
マンションに窮屈ならむ飼い犬は飼主もまた
しづかに住みて

南区　あゆのつか碧

鳴り響く目覚ましの音耳にして我れ今朝もま
だ生きてると識る
訪れる人一人居ぬ家なれどつまの遺せし庭に
鳥来る
何せんと朝に思いを描けども程なく忘れ無事
の一日

中区　内田　一郎

少しだけ良きことありて勇み立つ家庭菜園鍬
持ちて立つ
公園の木々紅葉して老人のラジオ体操日毎に
楽し
ふとわれの名を呼ばるる気配してラジオ体操
笑顔で終わる

南区　鈴木美代子

延命は望まぬ弟その時を如何に迎ふるか主治
医と話す
この女医にすべて託さむ医師として又人とし
て接しくれたり
土砂降りに烟れる夕べに君は逝く穏やかにな
る弟の顔

天竜区　恩田　利子

病おし家族と語らふ母の声耳すましつつ厨に
泣く
思いやりが重い槍となり飛んでくる母の心に
厚い盾欲し
急逝し兄を思いてさまよえる母の心を癒す術
なく

三方ヶ原幻想

中区　内山　文久

台地の上　トラック停まり　堆く　西瓜囚わ
る　板格子の中
晩秋の教室「ありおりはべり」声清か　無
私渾身　夕の特講

中区　清水　紫津

母の手をまさぐりながら母の声じっと聞き入
る絵本を見る子
寒風の吹く夜はなぜか思い出す亡父の奏でし
尺八の音を

中区　髙山　紀恵

春浅し雪どけを待つ農作業磐梯　懐（ふところ）田畑広がる
猪苗代春未（ま）だ遠し雪野原磐梯高く光り輝く

中区　鈴木　利定

ときめきを忘れ去らむとする年齢（とし）にふと誘いくる三十一文字よ
子供らの貧しさ悲しさ包みきてセピア色なる恩師佇む

南区　太田　静子

デイケアに夫送り出しそそくさと医院にとゆく老老介護
介護とはするもされるも辛きこと心掛けたし健康管理

南区　井浪　マリヱ

戦災に家焼失し居候気遣い覚ゆ子供心に
皆もんぺ集合写真生きるのに精一杯の終戦直後

中区　髙橋　幸

人影も話す相手も少なくて過疎地の兄を気遣いており
共に老い運転も辞め会うこともままならぬ友電話は長し

中区　桜花　ふみ

その夕べ密やかに咲く月見草淡い黄色を君と想えり
蜘蛛の糸きらきら光る雨上がり六月　少女つぶらな瞳

中区　坂口　ちせ

藪かげに一羽の揚羽蝶の舞い三十一文字の中に入りゆく
初めての病に家事の手を離れ出さるる夕餉をゆっくりと食ぶ

中区　内山　文子

靴下をはかせてくれと小さき声大きな足をそっと出す夫
右利きを両手使いにする試練老いの予感を覚悟するなり

北区　平井　要子

一万年タイムスリップしてみたい愛に溢れた
縄文の暮らし
髪を結いイヤリングした縄文の女(ひと)あ々継がっている今も昔も

北区　清水　孜郎

女子高生横並びにぞ矢を番え放つ一瞬弦音の床し
もっとこいもっとこいとぞ佐渡裕汗とばしつつタクトをぞ振る

南区　江間　得二

孫帰り雨粒ポツリ落ちて来た妻の背少し小さく見えて
テレビ見つつ眠りに落ちる歳となりビデオでたどる見過ごし場面

中区　手塚　みよ

記号よみ模様いれつつ編むセーター嫌がる脳を手懐けながら
門柱に無花果食む栗鼠の目はくるりくるりと四方(よも)見張るなり

中区　石井　泰子

憧れたヘップパーンの立ちし地に「わたし今居る」スペイン広揚
睦まじき二人の姿目に止まる恋人か母子か思いめぐらす

西区　加茂　智子

北欧の少女の未来を案じてるジャンヌと同じ道辿らぬか
リメイクという選択肢提示するワイシャツ三枚エプロンにして

浜北区　川島百合子

万葉の衣装まといてけまりせし高校生のサッカー部たち
昔の人が造りし琵琶湖疎水京の都にさくら運ばむ

中区　鈴木　賢三

はざかけの仕事を終えし里人の顔に安堵の夕風吹きぬ
ひたすらに皮むく老爺ただ一人縁に腰掛け干し柿つくる

北区　山田　文好

おとなしき蜂が大きな巣を構う知らずに触れし妻を刺したり
ジェット噴射の2秒、3秒投げ餅のごと霧の中落ちたる蜂、蜂

浜北区　山下　晏義

そろひたるオール四本風光るダム湖に競ふ青春群像
母とわれ卒業式のセピア色パーマネントといがぐり頭

中区　阪口佳寿子

きっかけは新聞広告富士山を目指して走るガソリン満タン
カーナビの到着時刻が巻き戻るスピード上げてバイパス行けば

東区　守屋三千夫

沸き返る敵のベンチに背を向けて汗か涙か背番号1
健康が何より大事バイク漕ぐ仕事帰りの真夜中のジム

中区　柳　光子

法曹を六十年余務めたる人の背筋の垂直に会う
軽快なおしゃべりのまま伯母が言う一人暮らしを諦めること

北区　後藤　とも

あれを思いこれを思いてありし日の母なつかしむ八十五の暮
みどり濃き松の小枝のひな鳥よ海を渉りて大空へ飛べ

東区　名倉みつ子

施餓鬼済むしずけき寺の松かげにひぐらし鳴きて亡き人偲ぶ
鱗雲あかねの空にひろがりぬ処暑の彼方に秋みつけたり

西区　近藤　茂樹

十二支の巡りめぐりて亡き兄の倍を生きたり新しき御世
わが子年を渾名となして「チューさん」と呼びたる兄の声もはるけく

中区　鈴木　和子

一年生言の葉足りぬいらだちに背をなでて聞く祖母なる我は
神主の長く使いし装束を棺の父にそっとかけやる

浜北区　岩城　悦子

住みし人無きし庭にも一輪の向日葵咲ひてゐるは悲しき
瓦礫にも雨風(あめ)にも負けず春蘭の咲きし姿に娘を重ねをり

中区　鴇多　健

母百歳記念の寄せ書き嬉しいと介護施設の長寿祝ひに
百歳の表彰状安倍首相知事市長から母驚く

南区　永井　眞澄

いつも見るテレビのアニメドラエモンサザエさんとか疲れがとれる
祭り見て太鼓をたたく男意気女性もたたく女意気かな

中区　小笠原靖子

つくばいの水に涼める雨蛙我と目が合い暑いねと言う
我が帰宅を待つように咲く夕顔の真白な面に嘘は言えない

中区　安藤　圭子

夏来れば必らず筆取る投書欄この街一夜に二千人死す
ストーブのたきつけ集め背に負えり戦争末期の国民学校

西区　渥美　進

寒椿燃える思いに風光り路行く人に微笑み返す

中区　平野　旭

一人居も孫居る家もそれぞれの又新たなる年の始まり

中区　柴谷　俊行

走り行く乙女の背中軽やかに振子時計のポニーテールよ

南区　大庭　拓郎

草に寝てわれよりはるかこまやかに星の想い
を知る猫ならん

中区　今駒　隆次

夏雀チョンチョンと飛びはねて一幅の絵を見
るがごとしそ

南区　内山　智康

潮の香がゆるやかに漂う朝まだき露店連らな
り輪島朝市

南区　内山　正則

父の日の贈り物など面映ゆしされど気になる
宅配の音

南区　中津川　久子

早世に無念の数多いまもなお君の打ちたる畑
の土ぞ

東区　井口　絹子

帰省した孫を見送り広き部屋大の字の跡そっ
と撫でみる

南区　相曽　多加根

家角に「御自由にどうぞ」の文字みずみずし
夏野菜に添えられて

北区　髙田　圭

夕立のあがりし後の蟻の巣に泥かき分けて這
い出るもおり

南区　袴田　成子

捜してたひょっとこの面を見つけたり三嶋大
社の売場の隅に

中区　鳥井　美代

身を震わせ全身で鳴く春の鳥優雅を越して逞
しくあり

中区　加藤　貴代美

入浴をデイでシャンプーしてもらい脳梗塞を
乗り越える母

中区　白柳　ますみ

施設へと移りし友に思い馳せ便りしたため夜
の更けゆく

南区　杉山　勝治

連れ添いて卒寿の坂を登り行く幸せ深くかみしめながら

南区　影山　ふみ

若き日に習いし琴の六段をひいて見ようと琴の爪見る

中区　田中　貞夫

亡き妻に好きな桜の一枝を活けて見せたい淡き花びら

中区　大山　啓

校門にわれを待ちぬし少年と互ひに老いて再会をなす

北区　鈴木　弘子

頭ごと日頃の悩み家に置き別の私がバス旅行する

東区　村木　幸子

志願兵の友ら幾人帰らざる今在る九十歳しみじみ語る

中区　岡本　蓉子

山坂を笑顔で越えし九十年語らい残し姉永遠の旅

西区　水野佐喜恵

人住まぬ実家に入ればまず五人の遺影に声をかく母に倣いて

中区　寺田ひさ子

昭和のきもの和モダンにとてとつおいつ考えあぐね元の箪笥へ

中区　渥美　佳子

入院記録献立ノート必死で生きた証捨てられません

北区　藤原　孝志

霧深きお茶の名産段々畑過疎となりたる山狭の村

中区　中村　照美

エベレスト登山ラッシュと報ぜられプラゴミ舞ってたヒマラヤ思う

中区　米澤寿鶴子

コンビニと杏林堂が軒並び夜な夜な光り木の
間に漏れり

中区　畔柳晴康

敬老会集う一日歳忘れ唄も飛び出し憩う一日

中区　福田美津子

遊歩道を手を振りながらやってくる長病み癒
えた友の姿が

南区　中村淳子

春の日の小屋にふるふる花吹雪二匹のやぎの
背景となり

天竜区　太田初恵

築八十年曽祖母の家に泊まる子の心に入るや
山里の月

北区　伊藤美代

突き刺さる河野裕子の終焉歌息がたりないこ
の世の息が

中区　河田琴栄

幾万の群より紛(まが)ふこともなく乳(ちち)をやるといふ
母蝙蝠は

中区　金取ミチ子

なつかしき人達夢に現われて目ざめ写真取り
出し見入る

東区　鈴木壽子

娶るなく征きし弟と涙ぐみし亡母を思ひぬ終
戦の日に

西区　野末妙子

友ら逝き親族(うから)も逝きぬ秋深ししみじみ歌うオ
ールドブラックジョー

東区　ストロベリー

建て前と本音の狭間さまよいし孤独な夜の自
分を愁う

東区　根本文子

夫の留守その現実が嬉しくて自分流に余暇を
楽しむ

北区　東　直子

梅園に薩摩紅梅まず咲きて南国らしきあか色
掲ぐ

東区　川合　妙子

介護士さん夜勤お勤めご苦労さん感謝感謝で
手を合わす

西区　木本　紀子

浜垢離の砂の重さにふらつけば夫の手延びる
足元に波

中区　菅沼　祐子

無言館の壁に鎮もり息づける画学生百三十名
の生

北区　鈴木　健示

ハロウインの飾りの棺は小さくてあなたは入
らぬ膝を抱いても

浜北区　すずきとしやす

何かしの道を架けるや西方の洋（うみ）へつづける虹
の花道

南区　尾内　以太

育休の妻と無職の僕そして乳飲み子のいる窓
枠の夜

中区　山本　勝彦

山の気が雲になりゆくさまの見ゆ信州新野道
の駅あり

中区　戸田田鶴子

摩崖仏春の陽光全身に臼杵の町の歴史見つめ
て

中区　伊藤　雅章

敬老の祝いの膳に置かれたる「長生きして
ね」の幼の手紙

浜北区　浜　美乃里

さわやかな少女の挨拶受けし朝笑顔で返す嬉
しき我は

東区　飯田　裕子

割烹着の母さん好きと言いし子月命日はそを
着て墓へ

中区　神谷　淳子

握りたる画鋲の痛み快し膿のごとき倦怠我を
満たせり

南区　由倉　典之

雑草の生きる力とすご技に還暦の我遠く及ば
ず

西区　河合　和子

川底に桜並木を映したる五條の川の瀬音の清
し

北区　藤生　好則

盆鉢でシラタマホシクサ咲かす特技(わざ)広めんと
する絶滅危惧種

南区　ミネルヴァの梟

九時に咲く壜に挿したる露草に明日も咲くか
と萎むまで見る

東区　寒風澤　毅

気が付けば喜怒哀楽を晴雲に置き換えている
蒲神明宮

東区　栗原　惠子

ろう梅が甘き香りで吾を呼ぶ顔近づけて匂い
吸い込む

中区　佐野実佐代

幼子のいたずら書きが風鈴の短冊となり風と
あそべり

中区　飛天　如

身罷りし君が教えてくれた曲今宵は月と聞い
てます

短歌選評

村木道彦

四人の方を本年度浜松市民文芸賞に推す。

嫋やかな文宇の誘ひの紅葉狩夫失ひて幾年を経し
文化の日点字暦を子らは打つ静寂の中の音のかそけき
終戦日被爆の友は教会に平和を祈る眞摯なる背
待ちわびて昏鐘を聞く方広寺塔の上なる月煌煌と
防人の別れ悲しむ歌ふたつ碑（いしぶみ）にあり萬葉の森

一首目「文字の誘いの紅葉狩り」が秀逸。五首それぞれをさりげなく包みこんでいる。大きな骨格の作品である。情景が目に浮かぶよう。

花弁がゴンドラのごと揺れてゐる明けの蓮田に雨蛙のせ
ブナ林を「森の母」とふ国ありて「自然は常に正しい」とゲーテ
「正しい」の語源は「手手（たた）」の形容詞化人と人とが手をとりあふ姿
太宰の著『人間失格』その生を「人間合格」と＊ひさしは言へり　＊井上ひさし
綱を張ると言はれし力士膝痛め幕下で取る泰然として

一首目「花弁が」を「花弁なり」とするやりかたもありますが、いかがでしょうか。

三首目以降に人間と人間性に対する信頼が謳われる。いずれも鋭く踏み出した作者の自身の思索である。

五首目、「泰然として」が全体のしめとして効果的。

夫が植え子が手入れせし杉檜歳月繁りて山の木となる
持ち山の見回りを兼ね蕨摘むこれが最後と山見つめをり
生きている限り歩くぞこの足で杖を突きつつ今日も散歩に
栗飯を届けてくれた子の髪に白きもの見ゆ共に老いたり

四首目「共に老いたり」の想いが、切実な実感をともなって伝わってくるのである。

どの橋も夫の技術の入りており家族で渡る新車に乗りて
東京よりわれを訪ねて友来たる春野の緑を誇りに思う
母植えて百年経たり芍薬は大きく咲いて令和を祝う
この一年赤子の泣き声聞かぬままわが町寂しき師走を迎ふ

三首目「時代」を祝うことの大きさが、堂々と詠まれていて印象的である。

定型俳句

［市民文芸賞］

逢はずしてあやめは花を終えにけり
らつきようの最後の一個剥きにけり
力溜め露になろうとしてゐるの
いもうとはいづこに眠る後の月

南区　堀川千代子

生温い夜風とカフカ盆休
憂きことを苺潰して飲み込めり
甘酒の臓腑にしみて読むホラー
目借時一気飲みするドリンク剤

南区　鈴木やよい

潮騒は恋の歌かも桜貝
大の字の昼寝児の夢宇宙駈け
討死のごとき一家の昼寝かな
仏像にまみゆる旅や合歓の花

北区　野田智恵子

吹かれては転がる蟬の骸かな
時雨くる俄かに騒ぐ野鳥かな
バスターミナル椋鳥（むく）一群の大樹かな
そよと吹く風鈴千の音奏で

中区　二橋　記久

菜の花の光の中に石地蔵
武者人形控へる寅の張子かな
山里のＩＴ企業蕎麦の花
秋夕焼渚の小石二つ三つ

西区
鈴木　和

西を向く魚籃観音放生会
冬めくや舳先に結はふ古タイヤ
牡蠣籠の積まれてをりぬ北雁木
船は西へ遠州灘をからつ風

西区
松本憲資郎

〔入　選〕

中区　糟谷　修子

逝きし父孫にもバトン雛かざり
ミシン踏む母の横顔蝉時雨
母語る父との月日風薫る
とんぼ舞う笑顔忘れし母となり

中区　加藤　雅子

胸襟を開いて語る春の海
むづがりて泣く子の茅の輪くぐりかな
清張の謎を紐解く夜長かな
文殻をまだ捨て切れず暮の秋

南区　神谷知恵子

なんとなく喋りたき午後さくらんぼ
仏壇はいつも全開鰯雲
香と艶と賞でて新米食べ始む
帰路急ぐ橋より眺む冬落暉

中区　川上　勝

天皇（すめらぎ）の歌碑の見下す青田原
龍淵に潜むチャートの層幾重
神島の暁光の中鷹渡る
眼裏に爺さまの所作薺打つ

東区　越川　都

蟻の死を蟻の触れてはゆきにけり

富士山を四股名に童相撲かな

「満月ね」とヨガの先生頬笑み来

大釜に火のがうがうと村祭

西区　佐久間優子

梅白しホットミルクの膜を吹く

湖は夏鳥の眼や展望台

みかん売る門前街の電器店

冬仕度亡き夫の声夫の翳

中区　鈴木みちゑ

木の芽摘みし香パソコンのキー打てば

囀りの混声合唱日燦燦

引佐（いなさ）なる母の生国薬掘る

風花やつなぎてぬくき幼の手

東区　砂間　達也

電線のどこまで続く雪曇り

ランドセル御守り揺るる葱の擬宝

茉莉花や西から雨のにほひせる

夏草や戦車の眠る湖のこと

中区

竹田たみ子

年毎に賀状の増えて趣味増えて
サングラス誰と分からず遠会釈
眠る子も写真に撮られ七五三
セーターの腕まくり上げ献血す

北区

松本　栖枝

梅一輪とどく高さへ肩ぐるま
友逝きて畦の蛙に話しかけ
待ちかねて春という字を書いてみる
主のいぬ家に紫陽花雨の音

南区

中津川久子

褒めすぎたかな風鈴の鳴り止まず
梅雨寒や沙汰のない子の靴磨く
親方の語尾尖らせて日短
「俳人」と太く記すや冷奴

東区

宮澤　秀子

歩みたる昭和平成月おぼろ
城映ゆる白壁の街新茶買ふ
海までの一本道や雲の峰
小鳥来る森の工房ひのきの香

西区

窓の外高層街の雪はげし　縣　裕子

寒暁に甘きコーヒー路地屋台

底冷えや爆撃されしビルの跡

東区

青嵐これより先は一人なり　井出久美子

まほろばの地平見ゆるか秋の蝶

飛鳥野の風につながる芒かな

中区

しあはせは一服の茶や雲の峰　伊藤サト江

平和祈る大切にとぐ今年米

台地の畑風とひかりと懸大根

北区

虹の橋撮る父の背にカメラ向け　伊藤　順子

野あざみに拒まれし指風撫でる

夏風邪にひとりぽっちの秒針（はり）の音

南区

母の日や母へ詫び言独り言　井浪マリヱ

八十路なる幼馴染や猫柳

夕焼の湖面に凛と鳥居立つ

中区

地団駄をふむ吾子の目や青嵐　内山　文子

帰省子の寝顔のそばに小半時

献杯の音頭とる兄外は雪

中区　梅原　栄子

友のごとき夫と見上ぐる今日の月
湖沿ひをゆく一輌車草の絮
師と友と迷ふも楽し大花野

南区　大田　勝子

蕎麦咲きぬ奥天竜の山の畑
月待つや窓辺に夫の影うつり
助産婦の行き交ふ廊下萩の風

中区　大村千鶴子

金色（こんじき）に梅雨満月と木星と
吾の二十才（はたち）教壇にあり敗戦日
もう少し生きられるかな栗おこわ

中区　小楠惠津子

託されし母の硯や筆はじめ
蒲公英の絮ひだまりのケアハウス
夏木立神明宮に紙芝居

南区　小澤　幸一

掻き込みし汁かけ飯や遠花火
逃げ水の中へ齢を捨てに行く
猫通る木犀の花散り敷けば

南区　河合三代子

丸薬を並べて十種夏（なつ）土用
もてなしの合はせ酢香る夏料理
取説の一ページ目や目借時

中区　川上　啓子

からっ風は幼ななじみのようなもの
体を信じ自分信じて去年今年
仕事行くことが終活花辛夷

中区　川島　泰子

川風に揺れる繍線菊村の黙
空青き叡山の里藁塚しづか
海山の恵みほのぼの節料理

東区　北嶋　良平

八ヶ岳初秋の風に微睡みぬ
コーヒーは織部の器終戦日
虫すだく『古事記』の中に浸りけり

南区　すずき

新米の甘さに集う日曜日
古家の軒先灯す椿かな
新涼や行きつ戻りつ影法師

南区　立花百合子

青嵐詩嚢の肥ゆる山路ゆく
連弾の音のふくらむ星月夜
穭田の続く窓辺や一人旅

西区　佐藤　健

小さき手で口いっぱいの雛あられ
好い柄ね囁かれたる初浴衣
奈良井宿家並を濡らす時雨かな

北区

カップ麺へのせる三分青蜜柑　鈴木　健示

パスワード忘れて釣瓶落としかな

ホッチキスの針のぎんいろ冬隣

西区

穏やかな二百十日の稲の花　竹山すず子

盆の月照る久久の我が家かな

盆支度亡き子の好きな花ばかり

中区

松葉二本ふらここに乗り夕黙（ゆうしじま）　舘石　照子

蠍座の赤で胸焼く夏期講座

雑煮餅杵つく兄の昔帯

東区

父は土母に乳の香遠花火　田中美保子

埋火や猛る心の置きどころ

過去を捨て未来を探す秋の浜

東区

危機一発遮断機くぐる燕かな　ストロベリー

向日葵や迷路の先にガキ大将

鈍行の気ままな旅よ夏果つる

中区

めつむりてさえずりのなかあるまゝに　徳澄　英樹

臘梅やしばらくのぼる伽藍跡

暮れのこる橋のたもとの酔芙蓉

東区　根本　文子

晩秋や牧場で飲む濃いミルク
山間の個展賑わう文化の日
冬一番家の近くの習い事

北区　西　周

フルートの高音きらり秋の風
サキソホン体傾げり百合の花
トロンボーン象のいびきか秋の夜

北区　東　直子

香水の控え目がよし美術館
花蜜柑わが抽出に一週間
サングラス背丈伸びたりわが息子

東区　平野　道子

行く秋の明治の手沢英語辞書
ポインセチア地球の裏に日が昇る
重力の及ばぬ世界雪婆

南区　藤田　節子

村人の祈りの道や山清水
三画くじまあるく開く小春かな
冷やかやデータ抜きたるスマートフォン

中区　藤本ち江子

苦の娑婆に九十五年風光る
令和の灯切干大根今日も煮る
別姓の表札二つ夏つばめ

中区
風花やふるさとに過疎すすみけり　山上アサ子

母校いま男女共学衣替え

うそ寒や濃い目のお茶とカステラと

北区
剥落の薬師如来や辛夷咲く　山口　英男

一言で足るる二人や古茶新茶

雲の切れ莢ふつくらと月の豆

西区
彼方此方とつくつく法師賑はしく　浅井　裕子

浜木綿の実終活半ば片付かず

中区
世代越え仏間にひびくかるたとり　池谷　静子

古井戸に石落とす子ら蝉時雨

中区
合歓の花介護施設の友見舞ふ　石井　泰子

見せたしと思ふ伯母なき白椿

北区
誕生日馬の背に乗り夏の朝　伊藤アツ子

日の当る山の広さよつつじ咲く

東区
セロ措いて木魚の和尚仏生会　伊藤　倭夫

秋高し航空ショーへ急ぐバス

南区
柚子風呂や未だに妣にかくし事　伊藤　久子
測量の杭の一打や春隣

中区
天高くクレーン並ぶ名古屋港　伊藤　好子
蔵元の古時計打つ冬に入る

中区
路地裏は子等の遊び場鳳仙花　稲津とし子
秋深し夜は存分に師の句集

浜北区
卓袱台も眼鏡も丸き昭和の日　岩城　悦子
枇杷の実や笑って泣ひて昭和の子

西区
かたばみのさはに灯台への小径　岩崎　芳子
スーパーの不夜城のごと雪の暮

中区
豆ごはん何ごともなきひと日過ぐ　右﨑　容子
話すことなくとも二人新茶汲む

中区
朝まだき青葉若葉に鳥の声　内山　文久
鳥と我心を交はす夏の藪

浜北区
台風一過ポプラの梢揺るぎ無し　浜　美乃里
金木犀まつり舞台の整ひぬ

西区　太田沙知子

ふらここや地球を巡る写真集

聞き上手程良き距離のちゃんちゃんこ

中区　大平　悦子

風呂吹や一日やまぬ雨の音

連翹や国語教師の歯切れよく

北区　大道くにを

木蓮の白きに我を見透され

点滴のゆっくりの間のつばくらめ

中区　大屋　智代

梅雨の朝先ず教え子に葉書書く

東明星西満月のクリスマス

中区　小川　惠子

スキップの髪ふわり揺れさくらんぼ

素のままが好きと言ふ人日輪草

中区　小楠　勝代

朝日さす苫屋に光る氷柱かな

淡紅の合歓咲く庭や主人まつ

中区　小楠　達司

焼きたてのパン待つ日傘クルクルリ

木蓮や真白き雲を吸い込みて

西区　刑部　末松

かき氷水と化したる詰将棋

旗振れる女工夫の汗しとど

南区　尾内　以太

綿菓子をからすうりもて買う末社
自転車のベルはつややか村祭

中区　小野田みさ子

春雷や女ばかりの古き家
ひたすらに箒使うて神の留守

中区　勝田　洋子

太陽はこんな味かもつるし柿
ポケットの中にホタルが光りおり

北区　金子千江子

春雷や予定通りの仕度する
大根が先に旨みを吸いてをり

南区　金子　典子

万緑の力呑み込む山路かな
立ち上がる影のよろめく原爆忌

西区　加茂　智子

古句一句ひとり味はふ夜長かな
夫を待つ木の実のリース置き飾り

中区　河合千代子

手を置けば春の気配の大樹なり
落葉降るすべり台には誰もいず

中区　川合　泰子

涅槃図の歎きに見入る山の寺
断捨離に取り組む婆の長ひる寝

東区　川口八重子

水澄むやラストシーンの浮かびきて
竜淵に潜む吐息の泡ひとつ

浜北区　川島百合子

絵手紙の青墨香る菊日和
母校跡遺跡調査や野分晴

北区　小春

秋雨に濡れて乙女は誰を待つ
食すすむ姑留守の栗御飯

北区　北村友秀

火を吹いて仕掛花火が川渡り
西瓜割る地面たたいて大笑い

東区　切畠正子

啓蟄や下校の子らのはしやぐ声
父と子のキャッチボールや草萌ゆる

北区　一灯

冬の田の向うの藪にかかる月
さかしらな子との句談義冬雲雀

中区　斉藤三重子

雨を呼ぶ蝦蟇の気合の一声に
春菊が鍋を陣取る夕餉かな

中区　佐野朋旦

何もかも空に干したき聖五月
信長の二倍を生きて末枯るる

中区
喧嘩して私の居場所大枯野　澤木　幸子
振り向かぬ大きな背中年用意

西区
胡麻を選る蛍光灯の真下かな　柴田ミドリ
追ひかけて尋ねたきこと盆の月

北区
連れ立ちて信濃の旅や柿すだれ　清水　孜郎
渋抜きの柿の塩あじ母遠し

西区
川床や米寿祝いて共白髪　清水　康成
虫干しや形見の衣結城縞

南区
童らの拾う木の実に愁なし　下位　満雄
俎板に跳ねる魚や冬近し

西区
野の花を結ぶ蜘蛛の巣さゆらぎて　新村みち子
子ら集ひ母に倣ひて梅を干す

北区
木の枝に夫婦雀やからっ風　鈴木うた子
大花火湖上彩る波の上

中区
句座に居て友の溌剌梅雨晴間　鈴木　和子
母の日は鰻と決めて父もゐて

中区
朝寒のバックにそっと葛根湯　鈴木かや子

鯛やすとんと暮れて風呂を焚く

天竜区
盆栽の枇杷の一顆の匂ふ縁　鈴木　利久

長電話金木犀の匂ひくる

中区
重なれる落ち葉踏みしめ知る大樹　鈴木　利定

ときめきを十七文字に天の川

西区
鉛筆を４Ｂにして九月かな　鈴木　智子

しなやかにネールの指の蜜柑むく

西区
ひとり居は付きくる月に話しかけ　鈴木　嘉子

たてかける箒の先の鰯雲

中区
多国語の外人墓地や雁渡し　関野由紀子

数珠玉のあらかた染まり嫁ぎゆく

浜北区
春愁やピアノソナタの昼下がり　竹内オリエ

冬薔薇赤く咲く日々若く生く

西区
一輪車漕ぐ老人や草紅葉　竹平　和枝

留守の間に珍客あまた竈馬かな

北区　鶴見　佳子

赤錆のカマとぎ直す旱梅雨
庭下駄もほんのりぬくみ春近し

中区　手塚　みよ

ゴム長で踏み入る庭に蜈蚣の子
蜘蛛の子や小さきながらに形して

中区　中村つぎ子

下駄飛ばし天気占ふ浴衣の子
しゃがむ子に葭のすき間の風やさし

北区　二橋三千代

鶏頭花翁二人の呵呵大笑
通学の自転車に置く鏡餅

西区　野島　謙司

満載の牡蠣船（かきぶね）朱き橋の下
飛行機雲蜜柑の山の空高く

中区　野田多満子

雪洞に城浮き立つや花の山
あの大戦焼土で見つけた蟻一匹

浜北区　服部　節子

杜鵑草余生楽しむ庭作り
梅雨晴れ間老女気遣い声かく子

中区　林田　昭子

若葉風からくり人形動き出し
暮れ泥む雲一つなき晩夏かな

東区　日比つや子

隕石は星の欠片よ地虫鳴く
底厚きペットボトルやソーダ水

中区　平野　旭

蟠り解けないままで衣替
風薫る背伸の猫の嫋やかさ

中区　深谷とく子

衣川主従偲ばれ星月夜
夜もすがら風鳴り止まぬ寒夜かな

中区　藤本　幸子

湖に波紋広げて漕ぐボート
跳ぶ構へ少し直して雨蛙

北区　牧　元久

野に伏せし子狐照らす月の夜
春雷に硝子戸震へ夜が白む

浜北区　峯村友香里

新入生鉱物図鑑抱えおり
冴ゆる朝督促状を印刷す

北区　宮本　葉子

母の日の届く葉書やちひろの絵
雪誘ふ消炭色の北の空

西区　森下　綾香

琴の音の流るる春の湖畔かな
清秋や家族そろひし伊勢の旅

中区
白菜を剥ぐ母の背や丸くなり　山田　知明

深山にも人里ありて野水仙

西区
ゆつたりと水車の廻る花筏　山本晏規子

虫時雨次第に消ゆる夜の雨

中区
鴨引きてプリンス岬静かなる　和田　有彦

見る聴くも老いの楽しみ紅葉狩

西区
桜咲く令和の心灯(ひ)がともる　渥美　進

南区
冬晴や池の畔ゆく赤い傘　あらききぬ

東区
万歩計共に楽しむ桜並木　井口　絹子

西区
大雨の奉納太鼓や海開き　池田　智子

西区
平成の終(つひ)を惜しめり花月夜　池谷　和廣

北区
病室にかすかに聞きし虫の音　石川　照子

中区
昼下り蚊帳に吾子のねむる顔　伊藤志津子

中区
声もたぬものの声きく時雨かな　伊藤　空

北区
日盛りにタイタンビカス大合唱　伊藤　美代

中区　内田　一郎
文化の日孫の絵本を爺が読み

中区　今駒　隆次
とんぼとぶ何処へ止るか立ちくらみ

南区　太田　静子
沈丁の香りの届く介護部屋

中区　栞　子
鈴虫の音色掻き消す楽太鼓

中区　岡本　蓉子
蝉時雨早朝よりの猛暑かな

中区　加藤貴代美
紫陽花は女心を知る花よ

北区　影山　久恵
高校生突っ切る自転車雷雨中

南区　影山　ふみ
満開のつつじに母の影うつし

中区　金取ミチ子
たそがれて何處にも行けず春惜しむ

西区　川原　弘美
紫苑咲く薄紫は母の色

南区　金原はるゑ
クロスワードパズル楽しむ夜長かな

中区　畔柳　晴康
令和なり卒寿の肩を撫でる藤

中区　かりりん
運動会ゴールテープを切る瞬間

浜北区　紺田みどり
秋の暮祖母と手をつなぎ家路つく

南区　利徳　春花
初夢や一攫千金大振舞

中区　佐藤たえ子
侘助や昔庄屋の長屋門

葉桜となりて静かな並木道　西区　清水よ志江

花里や風に吹かれて涅槃像　中区　不知火

山峡（やまあい）の無人駅舎や夏あかね　中区　白柳ますみ

かたくりや老女ヤッホー叫びおり　北区　鈴木章子

晴詩

をちこちから澄んだ音色や鈴虫の　西区　鈴木秀子

二の腕にやさしき風や稲実る　南区　鈴木由紀子

老鹿の鬱屈横たへる巨体　中区　髙橋常子

新緑のもこもこつつむ栗ヶ岳　中区　髙橋俊彦

舞い降りし旅する蝶や藤袴　中区　髙山紀惠

涼風のスッと抜けたる袂（たもと）かな　中区　竹内定八

初雷やピクニックの子ら逃げ隠れ　西区　竹下勝子

達者やな寒紅をさす誕生日　中区　竹田道広

大丈夫主治医のひとこと鬼は外　中区　竹平安則

縁側に無口な僕と冬の蝿　西区　田中章博

サドル上げ霧深き橋渡りけり　磐田市　田中貞夫

春なのに草樹（くさき）まどろむ春遠し　中区

北区
千年の杉の鼓動や春隣り　田畑　敏昭

北区
ふりかざす鍬に喰込む空ヶ風　辻村　榮市

中区
最年長と紹介されて夏季講座　寺田ひさ子

中区
新春の皆で歌うは童謡唱歌　鴇多　健

中区
老夫婦釣瓶落としに急かるるか　戸田田鶴子

東区
大花火助六寿しは母の味　戸塚　郁代

中区
つくしんぼ置いてきぼりの背なを押す　鳥井　美代

南区
秋祭り息子肩乗せ写真取る　永井　眞澄

中区
身に沁みる早朝の雨冬の薔薇　永田　惠子

北区
お花見は墓地公園にハイチーズ　中村　寿

中区
児らの声響く園庭原爆忌　中森　結香

西区
濁り川真っ直ぐ伸びる半夏かな　野田　俊枝

西区
りすの住む八幡様に若葉風　野中芙美子

中区
息白し白菜を裂く腕まくり　長谷川絹代

西区
日めくりやぶつきらぼうに冬に入る　濱本紀久代

東区
梅漬けて日の丸弁当忘れまじ　藤井　星子

北区
日本酒に秋刀魚のわたの至福かな
藤生　君江

北区
奥座敷を覗きて返る鬼やんま
藤原　孝志

南区
蝉しぐれに乗つ取られたる出世城
古谷　とく

中区
凧揚げや砂塵を上げる男意気
H

中区
敗戦日ラジカセで聞くジャズソング
松江佐千子

中区
母逝きて抜け殻の家水仙花
松下　節子

浜北区
楫を継ぐ旅籠に客の二人かな
松島日出子

浜北区
蟷螂（とうろう）の仏のごとく枯れにけり
松本　重延

東区
二百余年受け継ぐ畑や秋の風
松本ひで子

東区
主なき里山の家百日紅
三宅　弘子

中区
卯の花やチェロの重たき歳となり
宮本　惠司

北区
天竜や丹の色なる初茜
村松　和憲

北区
蝉しぐれラジオ体操帰り道
あ　ひ　る

東区
遠雷や岬の先の捨てた町
守屋三千夫

南区
ただいまと靴も揃えずおでん鍋
山下　京子

中区
どんぐりの坂道転げ子ら駆くる
山下　静子

西区

草を刈る軽鴨の卵はそのままに　横井弥一郎

南区

夕暮れのまさかほろ酔い鰯雲　由倉　典之

中区

線香の煙ぞ立ちて蝉時雨　和久田俊文

南区

山茶花の花びら拾ひままごとに　渡辺きぬ代

定型俳句選評

髙柳克弘

今号から定型俳句の選者を務めます髙柳克弘です。若輩ではありますが、投稿者のみなさんの一句一句と、真摯に向き合っていく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

芭蕉が「俳諧自由」といったとおり、俳句にはこれをやってはいけない、これを詠んではいけない、ということはありません。どんどん、自由に詠んでいただければと思います。ただ、読者に響くか、響かないかの違いはあります。私が選考するときに考えるのは、その一点です。私はみなさんが作った俳句の読者の第一号となって、その表現が、読者にとって面白さや驚きにつながっていくかどうかを、私なりに判断しています。

読者とひとくちにいっても、老若男女、価値観もいろいろですが、できるだけ多くの読者に響くような俳句が、良い俳句ということになるでしょう。読者は、今の時代だけにいるのではありません。市民文芸に掲載され、活字になると言うことは、十年、二十年、もしかしたらもっと先の読者の目にも触れることになります。それも含めて、「できるだけ多くの読者に響くような俳句」を考えています。

では、読者の心をつかむ俳句とは何か。よく言われるのは、読者の脳裏にイメージがはっきり浮かぶように作りなさい、ということ。作者にとっては実際に体験して、よくわかっている情景であっても、読者にとっては、未知の情景です。

古池や蛙飛びこむ水の音　芭蕉

有名なこの句も、蛙が水に飛び込むイメージが、はっきり浮かびますよね。この音を聞いた作者が「のどかだなあ」と思ったか、「さびしいなあ」と思ったかは、書かれていません。そこは読者に想像してもらえればよいのです。というか、想像するのが、読者にとっては楽しいのです。読者の楽しみを奪って、すべて言いたいことを書いてしまうのは、作者の独善です。

今回の投句で、上位に採った句から、情景が鮮明に書かれている句をあげてみましょう。

らっきょうの最後の一個剝きにけり

らっきょうの皮むき、やってみると、なかなか骨が折れます。最後の一個を剝くかたわらには、すでに剝き終えたツヤツヤのらっきょうが笊に盛られているでしょう。この句は、内容としてはらっきょうを剝き終えたということしか言っていませんが、情景がよく浮かぶので、作者の達成感や疲労感といった、句に書かれていないことまで伝わってくるのです。

生温い夜風とカフカ盆休

盆休の、窓を開けて涼をとるのが心地よい頃。もうちょっと涼しい風が吹いてくれればよいのになあ、と思いながら、机上に置いて読むのはフランツ・カフカ。突然虫に変身したり、身に覚えのない裁判を起こされたりといった、奇怪で不安感を書きたてるような世界観に「生温い夜風」はいかにも合っています。

……とはいっても、イメージがはっきりしなくても心に残る句もあるというのが、俳句の面白いところ。「俳句とはこういうものだ」と簡単に定義できない、この謎めいた詩型について、ご一緒に考えていきませんか。

自由律俳句

［市民文芸賞］

インクこぼした夕空へ指きりげんまん　東区　宮本　卓郎

コスモス風を揺らして風編んでる　南区　中津川久子

〔入　選〕

東区　源　次郎

手からぽろり落ちた宵闇の月の欠片
西に三日月駅舎が吐き出す仮面たち
釣瓶がトンと陽を落とし月の艶姿
重くはなかった背に受けた晩秋の風

中区　伊藤千代子

眠れぬ闇に道化師音もなく踊る
立枯れた向日葵に赤トンボ止ると離れる
狂った季節の雨に女寝返りする

天竜区　伊藤　有美

首に掛けてもらって手ぬぐいに残る祖母の温み
更地になった広さに残る家族の時間
今日が昨日になって吹く風の声

南区　尾内　以太

卵を割って銀河のこぼれる音だ
線路はかたく響き　つながる雲と雲と
くだけた水たまりから空へのぼる雨粒

中区　中谷　則子

春雨がつくる水玉細い枝先まで連なり

揺れるバラの枝になりきって尺取虫の芸当

手に一枚のはがき冬の星座と歩く

東区　井手　賀代子

夕日の余韻はさびしすぎる過去の恋

別れの日が来た今夜流星が飛ぶと言う

北区　伊藤　美代

子は育つ昭和なつかし地域ぐるみの家族愛

フジバカマの蜜求めアサギマダラは今年も長旅

浜北区　岩城　悦子

令和改元真っ赤なダリア活けました

露地を出でし蝸牛の人待ち顔

浜北区　浜　美乃里

飯食(めし)うと言ふ女(ひと)ありて侘しい秋よ

醒めた眼で新しき夢を捜してる秋

南区　大庭　拓郎

考える人の形にゴリラの目線

長々と夕陽を浴びて樹は自画像のよう

北区　鈴木　章子

茜色の薔薇ください私の誕生日

弾けて月の舟にのるよ赤い風船

浜北区　竹内オリエ

夏の風受けてきょうは見知らぬ町に居る
きのう金の月、今夜は銀の月空の不思議

南区　中津川久子

火照りひとつ畳みきれない秋日傘
ホチキスのぷちぷち女ごころ埋めてく

東区　根本　文子

年を忘れて神社の餅を拾う秋
雨から虹空想いの世界に蕩ける

東区　宮本　卓郎

逆光に嘘ひとつ白いドレスのドレープ
ふたりの記念日みおくって夏の終わり

南区　村松ヒサ子

すとんと陽が落ちて一日が終わった
落葉だけが嵩を増し昨日と同じ一日が過ぎる

東区　守屋三千夫

寝袋で宇宙の営みを見る山頂
今年も来たとケルンを積む思い

中区　渡辺　憲三

眼下に雲海従え気分昂まる北への旅
夜も更けて独り昭和のレコードの調べ

中区　内山　文久

幼指二本（おさなゆび）　ドングリを掴む

南区　太田　静子
吸み置きのバケツに浮かぶ空蝉よ

中区　小笠原　靖子
中秋の名月仰ぐだれに告げよう

中区　嘉山　春夫
布袋葵隙間狙ってメダカの給餌

中区　ヒメ巴勢里
〝やめろ〟と言ったとたん　拡がる孤独

中区　畔柳　晴康
卒寿過ぎ明日の天気予報で予定替え

中区　髙鳥　謙三
阿修羅様　また来ましたよ　お元気でしたか

中区　鴇多　健
看取りから魔法の言葉で生き返る母

中区　戸田田鶴子
シュレッター色とりどりの遺品の山

南区　中村　淳子
キンモクセイ友の葬儀の供花となる

天竜区　リコリス
よかった日ばかり想い出す年の暮

自由律俳句選評

鶴田育久

選を終えて

予選句として十二句採りました。（○印二次予選句）

○西に三日月駅舎が吐き出す仮面たち
　令和改元真っ赤なダリア活けました
○コスモス風を揺らして風編んでる
　卵を割って銀河のこぼれる音だ
○更地になった広さに残る家族の時間
○手に一枚のはがき冬の星座と歩く
○インクこぼした夕空へ指きりげんまん
　長々と夕陽を浴びて樹は自画像のよう
　弾けて月の舟にのるよ赤い風船
　夜も更けて独り昭和のレコードの調べ
　寝袋で宇宙の営みを見る山頂
　狂った季節の雨に女寝返りする

予選句いずれも甲乙つけがたいものでありましたが、熟慮の末、次の二句を市民文芸賞に推すことにしました。

インクこぼした夕空へ指きりげんまん

インクと云えば一般的には、青か黒ですが、この句の場合は赤いインクでありましょう。真っ赤な夕焼けの下で、指切りげんまんをしている白い指と指、それは、幼い頃の想い出の世界に誘います。夕焼け小焼けはこころのふる里です。何よりも、夕焼けの赤と搦めた小指の白さの対比が印象的です。

コスモス風を揺らして風編んでる

風がコスモスを揺らすのではなく、コスモスが風を揺らしているのです。そんな逆転の発想がこの句を一層詩的なものにしています。そして、その風がひそかに秋を編んでいるとは、どんな風情なのでしょうか。風の色までも見えて来るようです。

次位に

西に三日月駅舎が吐き出す仮面たち

駅舎が吐き出すが利いています。ぞろぞろと帰宅を急いでいる人の無表情な様子を仮面たちと見立てているのが言い得て妙です。

更地になった広さに残る家族の時間

建て替えのために更地にしたものか、そこを立ち退くとでは、その感慨は随分ちがいますが、いずれにせよ、更地になった土地の意外に狭かったことに驚きます。そして、その広さに家族の時間が残るという想いには家族の絆の重さを感じます。

手に一枚のはがき冬の星座と歩く

冬の寒い夜に葉書を出しに行く、それも絵になりますが、ここは、寒々とした冬の星座を一枚の葉書としてその下を歩くとしたい。景に広がりが出て冬空が美しく輝く。

毎回言っていることですが、この欄は自由律俳句です。全句定型句の方は、どうか定型俳句の方へ投句して下さい。

川柳

［市民文芸賞］

やり切れぬ気持ち沈める落とし蓋　南区　鈴木千代見

残り火に重なる未練捨て切れず　東区　竹山惠一郎

走り出す私の中にいるメロス　西区　竹平　和枝

ありがとう明日につなぐ種をまく　東区　内山　敏子

〔入　選〕

南区

伊藤　信吾

母の手が僅かな熱を見逃さず
登校の子らの元気が今日の糧
触診の医師の手温く安堵する
甲子園球児の汗が花咲かす
甲子園汗と涙が染みた土

南区

神村　恭子

二の腕のたるみ気になる老いの波
悪足掻きしてる老いへの恐怖心
目に見えぬサプリの効き目試す日日
一喜一憂サプリで体軋ませる
息終えるまで残したい恋の色

東区

菊川　文江

三叉路の風を見極め出す一歩
負の連鎖断ち切るための刃研ぐ
思惑がはずれて迷う茨道
しがらみが取れて足取り軽い朝
御座成な返事歯車狂わせる

中区

浅井　常義

今日を生き明日に夢の橋を架け
衣装着てピエロ愚直に笑わせる
元気よく進めと暗示掛けた朝
空白に込めた心の一行詩

西区

琴線に触れて涙の過去が透け　飯田　幸子

普段着の母の料理に星三つ

肩書きが取れて名刺の色を変え

連れ添った夫婦の会話味が染み

中区

努力する背中へ温い目が守る　伊熊　靖子

晩学へ燃えて広がる生きる幅

生活の知恵は何彼と母ゆずり

スパイスを効かす話に味がある

東区

焼きいも屋秋を計りにかけて売り　内山　敏子

冗談がほどよく溶けてまあるい灯

つまずいて生きる角度を変えてみる

寝たきりの心の杖となる介護

中区

指先に断ち切りがたい糸がある　鈴木かおる

許したら青空少し高くなる

遠い日にもいちど見たい空がある

初デート繋げない手が宙に浮き

南区　鈴木千代見

復興へ爆ぜてゴーヤの自己主張
錆びついたブランコ風とたわむれる
擦り切れたシャツが私を離さない
強がりを言うしかないと足と腰

西区　髙柳　龍夫

ひとつ鍋沸き立つ湯気に弾む声
初孫のあくびひとつにゆるむ頬
空腹が教えてくれる生きている
ここに今生きる我が身の運の良さ

東区　竹山惠一郎

吐き捨てた言葉拾えず残る悔い
不意を衝く風が持ち去る蟠り
セロファンを被せるほどの隠しごと
赦せない胸の窪みを塞ぐ欝

南区　寺田喜代子

キャッシュレスなぜか不安が付きまとう
ウオーキング今日も元気と手を振って
さしすせそ味の決めてはさじ加減
タピオカがブームに乗って長い列

中区

中村　禎次

老夫婦信頼し合い生きてきた
美しい名も無き花も生きている
ゆがんでる心を直す一人旅
初対面心にかけるサングラス

東区

中村　雅俊

代替り故郷だんだん遠くなる
逢いたさに遠まわりする恋心
人情の温さに触て一人旅
災害の想定外の机上論

南区

牧田　龍司

独り酒今日の出来事猪口が聞く
百薬の長を明日の糧に呑む
胃薬が飲んだ本音を包み込む
ひと呼吸置いた言葉の持つ重み

中区

宮﨑　和子

介護する明るい顔に救われる
鍋の中たっぷり愛を煮込んでる
寄り添ってそっと荷物を軽くする
秋刀魚の目澄んだ青さで自己主張

天竜区　宮澤　正人

定年の延長線にまだ私
逮捕記事オレと氏名が同じヤツ
先取りの未来だろうか過疎の町
山揺らす地割花火のおもてなし

北区　山口　英男

黙々と大地に生きる頬被り
うっかりと口が滑って臍を噛む
他人には無駄と思える汗を積む
許す気になって大きく息を吸う

西区　山田とく子

被災地へきらきら光る若い汗
語らずも児らは見ている大人の背
欠け茶碗泣いて笑った日の記憶
強がりを言っても探す妻の影

中区　足立　和代

おだやかに暮らせる日々に手を合わす
ジレンマに悩み生き抜く道探る
逆風を味方に変える君の道

中区　池田　稔

友に会い青い思い出持ち帰る
悔しさの流す涙に明日が見え
高望みし過ぎ悔しさ抱き締める

中区　内山　文子

時を越え宇宙さまよう塵芥
心眠を成長させるボランティア
世間体適度に許す虚栄心

中区　岡本　蓉子

庭の蕗亡母の味して噛(か)みしめる
野の花と語らいながら今日を生き
失敗も苦労も全部なつかしい

中区　畔柳　晴康

訪ねくる人に笑顔と花活ける
人生も登り下りで老いとなる
名を呼ばれ背筋伸ばしてする返事

中区　小島　松太

一本の道歩むしかないわたし
妻となる日ちょっとうれしい卵焼き
好きだから雲の流れについてゆく

西区　佐野つとめ

染まらない自分の色で咲いている
おはようの元気が届く雨の日も
いい人を途中下車した素のわたし

南区　鈴木　碧

気がつくと君を見ている僕がいる
逢いたいとつぶやく吐息白く消え
正直という単純な難しさ

北区

入院で気が付く妻のありがたさ
違反して安全意識 甦(よみがえ)る
減量にストレスためて不健康

鈴木　勝則

西区

消しゴムが消した屈辱夢に出る
責任を外に求めて見失う
悔やまれる内なる声を聴き洩らし

鈴木　均

西区

登校をやめた机に残るキズ
日々進化人間らしくなる嬰児
アスファルト割って唐松天を指す

竹平　和枝

北区

それなりに選んだ今を生きている
決めるのも引き受けるのも私です
限界も希望も胸の中に棲む

田中　恵子

中区

一合の米研ぎ明日も生きてみる
かたばみのぽんと弾けた欲の皮
物干しにサンバを踊る強い風

寺田　文子

中区

節くれた母の手そっと包み込む
母の味迷いながらの塩加減
ハイテクの流れに乗れずギブアップ

徳田美知子

中区　浜松のよっちゃん

秋香り金木犀の花開く
秋実り土掘り起こしさつまいも

西区　渥美　進

闘牛の気合いばかりが邪魔になる
人生は色々な道いろは坂

中区　荒沢　博

共感の佳句に柔和なお人柄
労作を失意の底へ誤字脱字

北区　市岡ひろみ

さわやかなあなたの笑顔薬です
ひきこもりへ心のカギをプレゼント

北区　伊藤　美代

要注意転ばぬ先の骨密度
老犬も家族のひとり要介護

南区　大庭　拓郎

ぐいぐいと腹巻きをして缶ビール
厚着してクーラーで寝る熱帯夜

東区　木村　民江

小春日和跳んでみたいが杖が邪魔
球根を植えて春へと送る笑み

北区　一灯

スッピンで孫に近づき逃げられる
ノックする音聞き分けてする居留守

中区
言訳は政治家なみと子は笑う
言の葉を呑めど丸くは治まらず

斉藤三重子

中区
涼風(りょうふう)に夏の寝不足取り返し
教えてよ八十路の坂の登りかた

白柳ますみ

中区
フードロス賢く食べて健康に
読み聞かせ我も楽しむ笑い声

鈴木　和子

浜北区
妻の留守自由きままに伸ばす羽
京アニへ思いあふれる献花台

鈴木　覚

北区
脳トレに悪戦苦闘脳疲れ
俺俺(オレオレ)と電話のそばに息子いる

鈴木　民江

中区
春節や経済指数押し上げる
スターマイン人・人・人の大拍手

髙山　紀惠

中区
乗り降りの人に暮らしを垣間見る
振り向けば来た道々に花が咲く

鶴見芙佐子

中区
湯たんぽに問ふ長生きのよしあしを
五時起床老人力をかきたてる

寺田ひさ子

中区
足るを知り歳を重ねて丸く成る　鴇多　健

妻のいやみ笑って合せ引き出しへ

中区
ゴミ仕分け認知機能を試される　戸塚　忠道

終活の粗大ゴミにもある格差

南区
怒っても泣いても研ぐや米二合　中津川久子

風呂敷を小さくしてからこぼれない

東区
愚痴を聞く相手の顔も見えてくる　根本　文子

整えて鏡の笑顔元気出る

中区
怒るより同じ一日笑いたい　名倉　智代

あの頃と同じ笑顔のクラス会

中区
富む人の欲の渇きは底知れず　平野　旭

口開く五月の風を飲む鯉や

南区
生ゴミの回収日にはカラス来る　あゆのつか碧

にくき蚊をつぶし流れるわたしの血

浜北区
年重ね発する言葉丸くなり　馬塚　五朗

病み上がり動けることにまず感謝

東区
プログラム子の出番だけ引くライン　守屋三千夫

今朝の顔笑って見える地蔵様

北区
二重底悪代官も恐れいり　池谷八重子

南区
夕日あび花摘む妻の背の丸さ　どぜう

浜北区
カーナビもフル回転す盆の義理　岩城悦子

中区
今日もまた廻るドタバタ地球号　内山文久

西区
光さすレンブラントの肖像画　遠藤博子

南区
小さき手に触れて元気を貰うなり　太田静子

天竜区
水確保リニア工事の泣き所　太田初恵

中区
あぶないと言った候補が当確に　加藤貴代美

北区
忙しく忘れてしまう悩みごと　加藤典男

中区
イケメンがアベノミクスに呼びこまれ　浜松加藤のじい

中区
故郷を主張している空っ風　金取ミチ子

中区
ふるさとの空に重なる父の顔　嘉山和美

北区
雨あがり車窓のみどり目にしみる　後藤とも

西区
木枯しの動き激しく冬障子　浜名湖人

風鈴や昔風流今訴訟　中区　不知火

浪費癖気付けば家計火の車　中区　鈴木敏子

温暖化溜まった付けが牙を剥く　中区　髙橋紘一

野辺送り姉の慈愛を今更に　中区　髙山功

影法師重なる二人弥生坂　浜北区　竹内オリエ

急かされる木枯し前の冬支度　東区　竹山容子

入れ歯して蓮根噛める音立てて　中区　手塚美誉

泣き笑い目標白寿前を向く　北区　藤生君江

孫走る家族総出の運動会　北区　藤原孝志

AIに支配されるか令和の世　東区　宮澤秀子

勝つために己を捨ててワンチーム　南区　由倉典之

豊作の茄子廻覧と配り行く　中区　米澤寿鶴子

山ほどの指示書残して妻旅行　中区　和久田俊文

川柳選評

今田久帆

今年度は昨年より応募者が一七名減り、四四八句の応募でした。その中で、私の心を捉えた二五句を市民文芸賞予選句として候補に挙げ、熟考した上で、四句を市民文芸賞とさせていただきました。

川柳は五七五が基本です。「朝起きて顔を洗って飯を食う」では、同じ五七五であっても、自分の行動を時系列に説明した文になってしまいます。「朝起きて洗った顔に差す朝日」とすると、朝日に託した自分の思いが表現され、洗った顔と朝日の行間に自分の思いが託され、詩が生まれてきます。川柳は五七五に言葉を削り凝縮する中で、その空間にもっと広い世界が生まれてきます。省略し過ぎると、相手に自分の思いが伝わりませんので、どこまで削って広い世界を表現するのかが鍵になります。

市民文芸予選句

他人には無駄と思える汗を積む

目に見えぬサプリの効き目試す日日

思惑がはずれて迷う茨道

寄り添ってそっと荷物を軽くする

いい人を途中下車した素のわたし

責任を外に求めて見失う

母の手が僅かな熱を見逃さず

妻の留守自由きままに伸ばす羽

かたばみのぽんと弾けた欲の皮

減量にストレスためて不健康

母の味迷いながらの塩加減

ジレンマに悩み生き抜く道探る

先取りの未来だろうか過疎の町

病み上がり動けることにまず感謝

スパイスを効かす話に味がある

独り酒今日の出来事猪口が聞く

初孫のあくびひとつにゆるむ頬

山ほどの指示書残して妻旅行

プログラム子の出番だけ引くライン

小春日和跳んでみたいが杖が邪魔

被災地へきらきら光る若い汗

市民文芸賞

◎やり切れぬ気持ち沈める落とし蓋

やり切れぬ気持ちをそのままにしておくと、思いがフツフツと沸き上がってくる。そんな時に落とし蓋をすると材料がぶつかり合って煮崩れてしまうのを防いでくれるように、心が崩れるのを防いでくれる。落とし蓋が効果的に使われている。

◎残り火に重なる未練捨て切れず

残り火があれば、未練はいつでも燃え上がる可能性がある。未練がいくつも重なると、「いつかは」という思いが芽生え、捨て切れないでいる。残り火と未練を効果的に用いている。

◎走り出す私の中にいるメロス

時に約束など反故にして、自由気ままに生きたいと思うが、自分の中に眠っている正義感が目を覚し、約束を守ろうとする。象徴としての「メロス」がいい。

◎ありがとう明日につなぐ種をまく

「ありがとう」の言葉ひとつで苦労が報われ、明日に向かって、また歩き出そうという気持ちになれる。「明日につなぐ種」がいい。きれいな花が咲き実をつける予感がする。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸　第66集』作品募集要項

一　趣　旨　市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸第66集」を編集・発行します。

二　発　行　浜松市

三　編　集　公益財団法人浜松市文化振興財団　浜松文芸館

四　応募資格　浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)

五　募集部門及び応募原稿

部　門	枚数等(一人)	部　門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(一編)	児童文学	30枚以内(一編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(一編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(一編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

※　原稿用紙はB4判(四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。

※　ワープロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。

六　選　者　選者の氏名は、令和二年七月配布(予定)の「浜松市民文芸第66集」の作品募集要項に記載します。

七　募集期間　**令和二年九月一日(火)から十一月二十日(金)まで。(必着)**

八　応募上の注意

①　応募作品は、本人の創作で**未発表**のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。

②　部門ごとに、規定の**応募票（コピー可）を必ず添付**してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所創造都市・文化振興課、中区まちづくり推進課、市内の協働センター・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。

③　**応募原稿の書き方については、別紙募集要項の「応募原稿の書き方」をご覧ください。**

④　応募時に、選考結果通知のための**返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、84円切手を貼って、**作品に添えて出してください。返信用の封筒は応募作品のジャンルの数に関係なく一通で結構です。

⑤　難読の語、特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。

⑥　応募原稿は必ず**清書したものを提出**してください。

⑦　作品掲載にあたって、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。

⑧　右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。

⑨　応募原稿は、返却いたしません。（必要な方は事前にコピーをおとり願います）

⑩　応募後の、原稿の修正はできません。

九　発　表

選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で令和三年二月初旬までにお知らせします。

十　表　彰

市民文芸賞及び入選の作品は、令和三年三月発行予定の第66集に掲載いたします。

十一　その他

市民文芸賞の方には、令和三年三月の表彰式で賞状と記念品を贈ります。

市民文芸賞及び入選の方には、「浜松市民文芸第66集」を一部贈呈いたします。

購入される場合は、一冊五〇〇円です。

〈提出及びお問い合わせ先〉
浜松文芸館　〒四三〇－〇九一六　浜松市中区早馬町二－一　クリエート浜松内　☎〇五三－四五三－三九三三

キリトリ線

「浜松市民文芸」第66 集応募票（短歌･定型俳句の場合は、部門欄の《旧かな･新かな》のいずれかに◎を）

部門	小説･児童文学･評論･随筆･詩･短歌･定型俳句《旧かな･新かな》･自由律俳句･川柳 （部門に1箇所○をお付けください）	小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙１枚目の右欄外にも、同じように記入してください 題 名	原稿枚数（ページ数） 枚	
ふりがな		年齢　　歳 （令和2年11月20日現在）	男　・　女	
氏　名				
ふりがな		（市外在住の方は必ず記入を）勤務先または通学先		
発表名 ペンネーム		名　称 所在地		
住　所	〒		電　話　番　号	

文芸館使用欄	受付月日	受付番号	

編集後記

ことごとく未踏なりけり冬の星

高柳克弘

これは、平成三十年度浜松市教育文化奨励賞「浜松ゆかりの芸術家」を受賞された高柳克弘氏の俳句です。浜松文芸館では、高柳氏の受賞を記念して、令和元年十一月から令和二年の二月まで『ことごとく未踏～俳人・高柳克弘の世界展』を開催しました。俳句と若手アーティスト（詩・絵画・音楽・映像・演劇等）とのコラボという画期的な取り合わせは、まさに未踏の世界、俳句の可能性や広がりを感じさせる展示になりました。これをご縁に、高柳氏には浜松市民文芸六十五集・定型俳句の部の選者を引き受けていただいた次第です。また、前号六十四集から詩の選者が橋本由紀子先生へ変わりました。詩世界のカリスマ埋田昇二先生の薫陶を受けた橋本先生の選考もまた新鮮です。更に、次号六十六集より、児童文学の部の選者が、那須田稔先生から息子さんの那須田淳先生へと引き継がれます。どんな作品が選ばれ、どんな選評をいただけるのか大変楽しみです。浜松市民文芸は、毎年、進化していきます。皆様、奮ってご応募ください。

さて、今年も、浜松市民文芸第六十五集を、無事、発行することができました。多くの方々のご厚意に支えられ発刊の運びに至りましたことを、心からお礼申し上げます。

応募作品総数二、三三五点、投稿者数延べ五五〇人、一七歳から九十九歳までの幅広い年齢層から投稿いただいているこの浜松市民文芸は、六十五年という歴史はもちろんのこと、質量ともに、私たち浜松市民の宝であり誇りでもあります。

毎年ご投稿くださる方に、Nさんという方がおられました。昨年の十月に九十二歳の生涯を閉じたとご遺族からお手紙をいただきました。Nさんは、「浜松市民文芸に応募することを生き甲斐とし、百歳まで応募し続ける」が口癖だったそうです。随筆の部「第三の人生はケアハウスで」入選、「レモンがご縁」で市民文芸賞、平成二十二年定型俳句の部・市民文芸賞「寒四郎鯉ゆったりと寄り来る」、令和元年、六十四集市民文芸賞受賞「陣取りのひとりに広き花筵」が最後の作品になりました。N様の市民文芸とともに歩まれた文芸作品は、随筆・俳句集「詫び寂びわさび」としてご遺族が一冊の本に編まれ、本館にも届けられました。N様の情熱はもちろんのこと、お母様に寄せるご家族の温かい思いに感動した浜松文芸館です。書くことは生きる証であり、亡くなっても人々の心に明かりをともし続けるのです。いみじくも、芥川龍之介が言った「文学は希望である」を思い出しました。文芸・文学離れが話題になり、ともすれば軽んじられる昨今、この浜松市民文芸の存在は営々なるものでなくてはなりません。

これからも「浜松市民文芸」が、皆様の文芸発表の場として拠り所となるだけでなく、掲載された作品を市民の皆様が読むことにより、少しでも文学や文芸に親しみ楽しんでくれることを切に望みます。

最後に、改めて、「浜松市民文芸」の発行にあたりまして、投稿者・選者・関係機関の皆様方のご理解、ご協力に厚く感謝申し上げます。

浜松文芸館　館長　下石精子

浜松市民文芸　第65集

令和二年三月十四日　発行

発行　浜松市

編集　（公財）浜松市文化振興財団
浜松文芸館
〒四三〇－〇九一六
浜松市中区早馬町二－一
☎〇五三－四五三－三九三三

印刷　杉森印刷株式会社

浜松市民文芸　第六十五集　発行日　令和二年三月十四日　編集・（公財）浜松市文化振興財団 浜松文芸館　浜松市中区早馬町2―1　電話053―453―3933

浜松市民文芸　第65集

浜松市